

## 第9章 最高の州知事——再びの杭州

[第9章その一]

げんゆう  
元祐4年 [1089年]、そしよく蘇軾54歳。

### ■ 【09-1-001】 与范夢得

【解題】4月の終わりにないし5月の初めに、蘇軾は杭州こうに向けて都を發った。同行したのは、次男そたいの蘇迨、三男そかの蘇過、妻おうじゆんしの王閏之、王朝雲おうちよううん、それに秦觀しんてき、胡宗愈こそうゆといった人々であった。長男そまいの蘇邁は地方の小さな官職に就いていた。秦觀しんかんは秦觀 [→作品番号 08-3-026] の弟で、蘇軾のもとで勉強しようと杭州にまでついて行きしばらくそこに留まる。胡宗愈 [→作品番号 08-3-002] は同時期ちんに陳州知事として赴任することになったので一緒に都を出た。出發前に政界の大長老ぶんげんはくの文彦博 [→作品番号 08-2-066] に別れを告げに行くと、杭州では詩はあまり作らない方がよかろうと戒められたと伝えられている。それを守ったからなのか、杭州への道のりで詠まれた詩は伝わっていない。これは范祖禹はんそ [字は淳甫あざなないし夢得じゆんほ] に宛てた手紙。范祖禹はんちんは范鎮 [→作品番号 08-3-067] の甥で、作品番号 08-2-010 で見たように、保守派の分派對立のなかで中立を保っていた。

### 【訳文】

……都の郊外の路を遠く出て、応接に煩わされることもなく、眠ってばかりいます。……来る日も来る日も外に出ないで、ただ舟のなかで静かにしています。鳳団茶を贈ってくださり、格別のお心遣いに感謝いたします。熱さが甚だしく、これにて失礼します。

【補足】 [いろいろな人から餞別をもらったのだろう、船の中でせつせと礼状を書い

ていたようである]

## ■ 【09-1-002】 与陳伝道

【解題】都から杭州までは2カ月余りの旅。陳州で胡宗愈と別れた後に、南京応天府で大恩人の張方平 [→作品番号 08-2-067] に会った。そこに徐州から陳師道 [蘇門六学士の1人] [→作品番号 08-2-041] がやってきたので、同じ船で宿州まで一緒に行った。陳師道はなかなか官職に恵まれず、故郷の徐州で学校の教授をしていた。陳師道は兄の陳師仲 [字は伝道] [→作品番号 06-2-059] の詩集と手紙を携えてきたのだらう、これは陳師仲への手紙。

### 【訳文】

何の取り柄もないこの衰朽の身でありながら、貴君ら御兄弟が私にこつと厚くして下さるのはどのようなことからなのでしょう。数日前に陳師道君とお別れました。徐州からわざわざ宋州[南京応天府]にきてくださり、王子安君も一緒でした。ともに舟に乗り、宿州に至って二人は帰りました。……近頃お作りになった詩を一冊頂戴しました。練達の筆で思いは深く、古の人と並べられほどで、世俗の者が求めるのには合うものではありません。まことに結構です。錢塘[杭州]での私のかつての詩はいずれも率然の作で、筆に任せたものですから、お手を煩わして一つ一つ収録していただくのは、ただ短所をさらすだけとなりましょう。

町の人が利を逐って私の拙文を刊行するのを好むのに私は困らされていて、その版木を壊してしまいたいと思うくらいです。ですから、さらに他の人が刊行するようなことはしてもらいたくないのです。暇な折を得たなら、かつて作った詩文を全て集め、さほど悪くはないものだけを残して、一集にしたいと思っています。貴君が同意して下さるのなら、いずれできるであろうものを謹呈します。いま示して下さったものは、脱誤があるだけでなく、他の人の文も混ざっています。

【補足】 [(1) ここに名の挙がっている王子安おう し あんは、たぶん王適おう てき あざな しりゆう [字は子立] [→作品番号 08-3-039] の一族であるのだろう。王適じょも徐州の人である。(2) この手紙によると、陳師仲ちん しーちゆうが蘇軾そが杭州で詠んだ詩を集めて刊行しようと考えていたようだ。陳師仲は作品番号 06-2-059 で見たように、『超然台』『黄樓』の二集を編集していたので、作品を収集する範囲をさらに拡大しようと計画したのだろう。しかし、蘇軾はそれには同意しなかった。蘇軾は勝手に刊行された粗悪な本が横行しているのに悩まされていたのである]

### ■ 【09-1-003】 与滕達道

【解題】 船は宿州しゆく しから泗州 [→作品番号 07-2-001] へと進み、親友の滕元発とうげんはつ あざな たつ [字は達道] [→作品番号 08-1-044] に宛ててこの手紙を書いた。滕元発は依然として中央に呼ばれることなく、このころに北の重要都市である太原府たいげんの知事に任命された。

### 【訳文】

使いの者が還るのに託しますので、きっとこの手紙は届くであります。日を数えるに、御一行はすでに太原たいげんに到着し、鎮撫のお仕事にも余裕を得て、御佳勝のことと存じます。私はこの月に都を出て、すでに泗州しのあたりに到着しました。淮山わいざんが眼を照らし、ようやく呉の歌や楚の言葉も聞かれるようになってきました。これは貴君の羨むところでありましょう。……

【補足】 [江南こうなんの人々の歌や方言が聞かれるようになって、蘇軾は心弾むものがあったのだろう。かつてなら詩を詠んだに違いないのだが]

### ■ 【09-1-004】 四達齋銘、并引

【解題】 泗州しから、秦觀しんかん、秦觀兄弟の郷里である高郵しんてき こうゆう [→作品番号 07-1-092] に着く

と、そこにはかねてからの友人である趙昶<sup>ちようちよう あざな かい し</sup> [字は晦之] [→作品番号 07-2-069] が知事として赴任していた。蘇軾は趙昶のために四達齋<sup>し たつさい</sup>の銘を作った。銘の部分はよく理解できないままに訳してある。

### 【訳文】

引[序文]

高郵県<sup>こうゆう</sup>知事<sup>ちようちよう</sup>の趙昶は東の庭に書齋を作った。四方に戸が開放されるので、四達齋<sup>し たつさい</sup>の名がある。眉山<sup>び</sup>の蘇軾はそこを過り、この銘を作った。

建物の中に物を納めるのは、外に対して備えようとするからである。怠慢であることも慎重であることも、いずれも盗みに対する戒めとなるであろうが、空洞の内に何も無いのには及ばない。戸を全て開いて、書齋からそのまま四方に達するのは、盗人を撃って盗難をなくす最もたやすい手段である。己に追い払うべき相手がいなければ、守りとして完全である。趙君は無心のままにこの法を得て、書齋から四方に出て、民の迷うところを全て知るのである。

### ■ 【09-1-005】書米元章藏帖

【解題】蘇軾は揚州に到着し、6月12日に米黻<sup>べいふつ</sup> [→作品番号 08-3-054、08-2-050] に会い、米黻が所蔵する書帖にこの文章を書き添えた。米黻は書家、画家、収集家の三冠の王者である。このとき章援<sup>しょうえん</sup> [字は致平] が同行した。作品番号 08-3-007 で触れたように、蘇軾が委員長を務めた科挙の二次試験の合格者である。

### 【訳文】

現代において絶妙な筆使いといえは米黻であるけれども、米黻が所蔵している書は真偽が半々では

なからうかと、かねてから疑っていた。

元祐四年六月十二日、私は章援と一緒に揚州で米黻を訪ねた。

章援が米黻にこのようにいった。

「私は父からこのように聞きました。かつて、あなたは御自身で戸棚の鎖を解いて、中から書を取り出すと、それを両手で掲げて、他の人には一丈余りも遠いところから見させ、近づこうとするととりつけたと。父はそのようなありさまを目撃したということなのですか」。

米黻は笑い、ならばと、我々には、王羲之父子、張旭、懷素といった人たちの書帖を十冊ほど見せてくれた。そして、米黻が普段人に見せるのは、衆人の目に適いそうなものだけだということがわかった。

【補足】〔(1) 米黻は、面と向かってあからさまに物を言う若者がむしろ気に入り、また他ならぬ蘇軾であるから、秘蔵のお宝を特別に見せたのだろう。米黻には、人から借りた書を何食わぬ顔で偽物とすり替えて返したり、船の上で貴重な品を見せられたときにいきなり胸に抱き、「これをくれなければこのまま川に飛び込む」と脅して強奪したりと、奇矯な振る舞いがあったという。それで、他人に見せるときには警戒して十分な距離を保ち、本当に大切な物は見せないようにしていたのだろう。(2) 蘇軾は揚州を出て長江を渡り、20日間ほど江南の地を旅して杭州に至った。10年前に湖州に赴任したときには、作品番号 05-5-038 以下で見たように、数々の詩を詠んだのだが、今回は伝わる詩は一つもない。手紙や他の人の記録から、潤州、常州、蘇州、秀州をたどった形跡がわずかに知れるだけである〕

## ■ 【09-1-006】 杭州謝上表

【解題】7月3日、蘇軾は杭州に着任した。15年ぶりの杭州である〔→作品番号 04-3-076〕。まずはこの表を都に送った。表は2通あり、其の一は皇帝に、其の二は高太

こうたいごう  
皇太后に差し出したもので、前者を読んでおこう。

## 【訳文】

### 其の一

わたし 臣 蘇軾は申し上げます。伏して制書を奉じて、臣は竜図閣學士から杭州知事となりまして、今月三日に着任し終わりました。

わたし 臣は衰えかつ病み、満ちれば溢れて災いとなるといわれる通りにもなろうかと、越州えつに出ることを願いましたところ、杭州を得ることとなりました。これは日ごろの望みに過ぎるものであります。臣 蘇軾は誠に惶れ誠に恐れるものであります。頓首頓首。

伏して念いますに、臣は職を廃され外に出された身から、にわかに朝廷の要職に登り、命の限り働かねばなりませんのに、いまだに万分の一さえ償い終わっておりません。それでいながら、安き pensando 退くのはあってしかるべきことでしょうか。つまるところ、有用性のない木はまともな木材にはならず、病んだ馬は空しく餌を食らうだけということなのであります。よって、外に出ることを願って、残りの歳月を送ろうとしたのであります。これまで要職に就くことを望んだわけでもないのにますます高い地位に登り、閑を求めつつも激務を与えられましたのは、皇帝陛下の剛健中正にして緝熙光明であられますことに伏して遭うことを得たからでしょうか。古の聖天子のような仁と、孔子のような智を具えられた皇帝陛下のもとで、臣は猥りに末技をもって日々講義をさせていただき、凜然たる御威光に間近に接したのであります。古の人が批判をしただけでは何も成就しないといった意味を臣は理解しておらなかったために、陛下がますます学問を深められるときにあたって、にわかに去らねばならなくなりました。こうしたこの意味するところを考えますに、臣は最も窮まったといふべきであります。

陛下の恩遇は、それに耐えることができないほどにますます重いものがあります。雨露のようなわずかな施し物でありまして、臣が初めから選んだものではありません。犬や馬でも主人の恩には報いると申します。臣は身を殺してでもそうせねばならないのであります。臣無任。

【補足】 [作品番号08-3-086にもあったように、蘇軾は越州を希望し、結果として杭州を得たのだった。越州 [紹興] は杭州の南にある古く由緒のある町ではあるが、宋の時代においては杭州に比べていささか見劣りがする。杭州は二度目の赴任になるので、それは難しかろうと越州を挙げたのだろうか。それに対して、高太皇太后が特に蘇軾の心の内を察して杭州を指定したといわれている]

## ■ 【09-1-007】 謁文宣王廟祝文

【解題】 新任の知事は、孔子を祀る文宣王廟で正しい政治を行うと誓うのが慣例であったようで、蘇軾もすぐに廟に詣でてこの文を捧げた。

### 【訳文】

軾以諸生、誤蒙選擢。[私は一介の民でありながらも、誤って官員に選ばれました]

昔自太史、通守此邦。[昔、直史館より出て、この邦の副知事となりました]

今由禁林、出使浙右。[今、翰林学士より出て、浙右 [杭州] の知事となりました]

蒞事之始、祇見儒宮。[任務に就く始めに、この儒学の宮に参りました]

聖神臨之、敢忘夙学。[聖神の前において、かねて学んできたことは決して忘れられません]

尚饗。[お供え申し上げます]

## ■ 【04-3-008】 題王羲之敬和帖

【解題】 7月25日、蘇軾は法惠院を訪れ、この短文を記した。ここは、かつて杭州を離れる直前にも訪れていたところで [→作品番号04-3-072]、そのときに会った言師がすでに亡くなっていた。

## 【訳文】

元祐四年七月二十五日、また法恵院に至ると、言師は亡くなってすでに七年が経っていた。弟子がまだ若いのを見て、惘然と夢を見ているかのようである。

## ■ 【09-1-009】 与錢穆父

【解題】蘇軾が地方に出るに際して最初に希望した越州〔紹興〕には、都で親しくした錢勰〔字は穆父〕が知事として赴任していた〔→作品番号 08-3-032〕。杭州と越州は近く、杭州にいる間に錢勰と頻繁に手紙の行き来があった。これは杭州に着いて最初のもの。

## 【訳文】

杭州までの道中で三郎君〔錢勰の三男〕にお会いし、すぶるお元気でありました。瓜洲〔揚州に属する〕を経由してわざわざ来てくださったのですが、江べりにあっては十分に歡を尽くすことができませんでした。それでも数枚の紙に書いてほしいと求められました。

私は東にきてからは詩を作ることを絶っておりますが、貴君はきっとたくさんお作りになっていることでしょう。それらをお寄せくださらないことはないと思っています。聞くとくころでは、貴君は今年はとつてもよい茶を造られたとか。その絶品をわずかばかりでも分けていただけないでしょうか。弟はついに北扉〔翰林院〕に入りました。はなはだ恐れ多く、辞退すべきものでありました。二人の息子の迨と過はここに来ていて、長男の邁はこの月のうちに交替となりますので、遠からず来ることでしょう。四郎君〔錢勰の四男〕も皆様も、それぞれの方にお手紙を差し上げることほしませんけれど、お元氣のことと存じます。

【補足】〔長男の蘇邁は酸棗県での任〔→作品番号 08-1-049〕を終えると、続けて西安県に赴任することになったので、杭州には来なかった〕

■ 【09-1-010】 次韻秦少章和錢蒙仲

【解題】 上の手紙との前後関係はわからないが、<sup>せんきやう</sup> 錢勰の子の<sup>せんもうちゆう</sup> 錢蒙仲がこのころに<sup>えつ</sup> 越州から訪ねてきた。これは<sup>しんてき</sup> 錢蒙仲と<sup>あざな</sup> 秦覲 [<sup>しょうしょう</sup> 字は少章] [→作品番号 09-1-001] が詠み合った詩に蘇軾が次韻したもの。

【訳文】

<sup>こうなん</sup> ここ江南の地では、  
<sup>みどり</sup> 碧の畦、<sup>あぜ</sup> 黄色の隴、  
稲は丘のように高く伸びあがる。  
毎年の稔りは豊かであるから、  
人々は和やかで情が通じやすい。  
<sup>えつ</sup> 越州では、  
<sup>かんこ</sup> 鑑湖に舟を浮かべれば、  
天の外を行くような思いかし、  
地上から古来ゆかしい<sup>つのぶえ</sup> 角の音が湧き上がる。  
<sup>こう</sup> 杭州では、  
山々は昔のままに故い国を囲んでいるものの、  
<sup>まち</sup> 城は昔の主を失って空しく存在し、  
<sup>おか</sup> 西の陵を打つ<sup>こころ</sup> 潮の意はいまもって穏やかではない。  
<sup>しんてき</sup> 秦覲君と<sup>せんもうちゆう</sup> 錢蒙仲君は二羽の白鷺のようで、  
<sup>かわ</sup> 江を隔ててその純白さを照らし合っている。

【補足】 [(1) これは<sup>えつ</sup> 越州と<sup>こう</sup> 杭州、それに<sup>しんてき</sup> 秦覲と<sup>せんもうちゆう</sup> 錢蒙仲を讃えた詩である。これが都を出てからの最初の詩である。蘇軾の詩のファンとしては、<sup>せいこ</sup> 西湖との再会を感動的に

歌うような作品を期待したくなるころなので、いささか拍子抜けであろう。文彦博ぶんげんはくの戒め [→作品番号 09-1-001] の効果が絶大で、ここまでは詩を作らずにいたのだが、親友の息子と愛弟子の弟が唱和した詩が目の前にあって知らん顔もできず、とうとう禁が破られたのだろう。(2) 冒頭で江南は豊穰こうなんの地であると歌っている。しかし、必ずしもそうではない 現実に蘇軾は着任早々に対処しなければならなかったことをすぐ後に見る。(3) 鑑湖かんこは越州にある有名な湖。(4) 杭州を歌った中ほどの句の原文は「山圀故国城空在」[山は故国を圀やまんで城は空こしく在あり] で、「故国」の語は、五代十国時代ごだいじゅうこくに杭州に都を置いた呉越国ごえつこくの王族の末裔である錢蒙仲のために用いたもので、「昔の主あるじ」のいない城を「空しい」と歌っている。つまり、蘇軾は最初の希望通りに越州に、そして錢勰せんきょうが杭州に赴任していればおさまりがよかったのであろう]

## ■ 【09-1-011】次韻錢越州

【解題】これは錢勰せんきょう [字の穆父あざな ぼく ちち] の詩に次韻したもの。錢蒙仲せんもうちゆうが父の詩を携えてきたのだらう。

### 【訳文】

髯ひげが自慢の都のお役人[錢勰せんきょう]は、超然と群から抜き出でいた。

南に遊びに出たのは、ほかならぬ越州えつの名所雲門寺うんもんじを訪ねるためであった。

思えば、

謫仙たくせん [李白り はく]は玉皇ぎよくこう [天上の最高存在]のそばにいよと仙界に帰り、

老鶴ろうかく [白居易はくきょい]は知事の車に乗って飛び去った。

貴君は、簿書の間で老いるのを悲しみ、

細かい業務はそれぞれの専門職に任せておけばよいと知っている。

私の口にはどうやら棘が生えているのだろうか。

本来持っている性質はどうしようもなく、

貴君のせいで余計なひとことをまたいってしまう……。

【補足】〔(1) 李白も白居易も中枢の人々に嫌われて都から追放されたことがあり、  
銭勰せんきやうになぞらえている。(2) 終わりの部分の原文は「習気因君又一言」〔習気しゅうき君きみに因  
ってまた一言いちごんあり〕で、「習気」は天性の悪い性質。都を出てからずっと口を閉ざし  
ていたけれど、送られてきた詩に誘われてつい余計なひとことが出てしまったという  
のである。作品番号 09-1-009 で見た手紙に答えて、銭勰が詩を送ってきたのなら、次  
韻しないことはありえなかったであろう。こうして、蘇軾は再び杭州こうで数々の詩を詠  
むようになるのだった〕

## ■ 【09-1-012】次自書歸去来兮辞及自作後

【解題】舟で湖州こに属する長興ちやうこう県のあたりを移動する間に記した短文。

### 【訳文】

しばらく小楷しょうかい〔細字の楷書〕を書いていなかった。今日はたまたま長興ちやうこうの舟の中でこの紙こに書いた。

元祐四年八月六日、東坡居士とうぼこじ。

【補足】〔(1) 小楷しょうかいで書いたのは陶淵明とうえんめいの作品である『歸去来兮の辞』〔→作品番号  
06-2-051〕と蘇軾自身の作品で、それが何であるかはわからない。(2) 舟に乗って  
いたのは、たぶん知事として視察に出っていたのだろう〕

## ■ 【09-1-013】去杭十五年、復遊西湖、用欧陽察判韻

【解題】この詩の題は、「杭州こうを去って十五年、また西湖せいこに遊んだ。欧陽察判おうようさつばんの韻を  
用いて詠む」。蘇軾が副知事の任を終えて杭州を離れたのは、熙寧きねい4年〔1071年〕秋で

あったから、実際には18年が経っていた。欧陽察判〔察判は役職名〕はいかなる人か不明。

### 【訳文】

南屏山なんびょうざんの興教寺こうきょうじの金色きんいろの鯽魚じゆぎよとはもとからの知り合い、

またここに来て、欄干らんかんによりかかって、食事しょじの余りあまを与える。

懐かしいこの場に帰って伝説でんせつを教わると、

前世ぜんせいにおいてここで手ずから経典きんてんを写したのを思い出す。

葑まこもが広がり、平らだった湖うみは久しく埋もれてしまっているようだ。

豊年とよとしの歳としを経ていながらも、人の暮らしは寂しげである。

唐たうの高適こうてきは辺境へんけいの地で官職くわんしやくにあったときに、

自分は本来水辺みづべで悠々と一生を送る者であったはずなのに、

と、しみり歌った。

その心を哀れむのは誰なのだろうか。

【補足】〔(1) 冒頭まうとうにある南屏山なんびょうざんの興教寺こうきょうじをかつて訪ねたことは作品番号 04-2-077 で

見ている。南屏山なんびょうざんは杭州こうしゅうの町の南側なんがわにある。町の西側せいがわに西湖せいこがあり、西湖を包むよう

にしてその南から西方せいほうに山地さんちが連なる。南屏山なんびょうざんや呉山ござん、鳳凰山ほうおうざん、靈隱山れいいんざんなど数々の山

の名を第4章ですで見ている。その山地さんちの南側なんがわに錢塘江せんとうかう〔浙江せつこう〕があつて、東シナ

海かいに流れ込んでいる。町の東側とうがわは東シナ海とうしなかいに接する低地ていちである。(2) この詩の歌い出

しは、金色きんいろのフナに餌えさをやりつつ、18年ぶりの西湖せいこを悠然せうぜんと眺めていたという閑適かんてきの

詩であるかのように見えるが、後半はそうではない。マコモが広がって湖面うみが埋もれ

てしまっているありさま、豊作とよさくであったはずなのに暮らしが寂しげなありさま、この

2点にんは現在げんざいこの地ちが直面ちかみしている重大じゅうじやうな問題もんだいを提起ていぎしている。(3) 高適こうてきは李白りはくや杜甫とほ

と同じ時代の人で、若い頃は博徒と交わる任侠の世界に身を置き、50歳を過ぎてから詩を学び、辺境の地に自ら赴いて、格調高い詩を作った。(4) 杭州に再びやってきた蘇軾が西湖を詠んだ最初の詩がこれであるのは、例えば作品番号 04-1-001 で見たような美しい叙景詩を期待する蘇軾ファンにはやや拍子抜けであろうか。しかしながら、この詩は、州知事として赴任した蘇軾の思いの向くところを端的に示しているといえるのではないだろうか]

### ■【09-1-014】与莫同年雨中飲湖上

【解題】蘇軾と同じ年の科挙に合格した莫君陳と、雨の中、西湖のほとりで酒を飲んで、この詩を詠んだ。莫君陳は8月14日まで両浙路の要職にあった。宋代の地方行政は路-州-県の三層構造になっていて、両浙路には杭州の他に、越州、蘇州、潤州、秀州など7州が属していた。杭州の町には両浙路、杭州、錢塘県の庁舎が置かれ、蘇軾はどの役場の人とも交流があった。

#### 【訳文】

ここに到って貴君に逢うのは偶然のなせるところなのだろうか。

夢の中で貴君と向かい合っているかのようだ。

いまやお互いに白髪頭。

私はまた西湖にきて雨の中で一醉することとなった。

湖面に雨が珠のように跳ねるのを見ずにいたこと十五年である。

【補足】[終わりの句には、かつて杭州で詠んでつとに人口に膾炙した「白雨跳珠乱入船」[白雨 跳珠 乱れて 船に入る] という句 [→作品番号 04-1-028] を踏まえたもの。

莫君陳を喜ばすために自己引用をしたのである]

## ■ 【09-1-015】 送子由使契丹

【解題】 弟の蘇轍はなおも都で朝廷の重職にあり、8月16日に遼国<sup>りょうこく</sup> [契丹<sup>きつたん</sup>] 皇帝の誕生日を祝う使者に任命された。蘇轍は弟を送るこの詩を作った。

## 【訳文】

君と僕は、それぞれ雲の彼方、海の彼方から望み合うところに、身を寄せている。

君が遠くに行くからといって、僕はいまさら涙で巾<sup>ハンケチ</sup>を濡らしはしないし、

君は、駅ごとに馬を乗り継ぎ、風雪を凌いで行くことに尻込みをしない。

大切なのは遼国<sup>りょうこく</sup>の連中に我等の文化がいかに優れているかを知らせることだ。

沙漠のなかで、宮中を照らす月を振り返って看くこともあるだろう、

杭州<sup>こう</sup>の春を思っ夢に湖や山を見ることもあるだろう。

扈向<sup>こ</sup>この皇帝に君が何者であるかと問われても、

我が朝廷で第一の人であると正直にいはならない。

【補足】 [(1) 冬に向かう時期に北の国に行くので、「風雪を凌いで」と歌っている。

(2) 訳詩の4行目は原文よりかなり穏やかな言葉を使っている。原文は「要天驕識鳳麟」[天驕<sup>てんきょう</sup>に鳳麟<sup>ほうりん</sup>を識<sup>し</sup>らせることを要<sup>よう</sup>す]で、「天驕」とは「天の下の驕った子供」、すなわち手はずけにくい異民族をいう。「鳳麟」とは、中国の文化を鳳<sup>おおとり</sup>や麒麟<sup>きりん</sup>のような立派な動物に譬えたもの。要するに、ここにはいわゆる中華意識が露骨に現れ出ているのである。(3) 詩の終わりは、蘇轍が朝廷第一の人であることが向<sup>こ</sup>この皇帝にわかってしまったなら、引き留められて帰ってこられなくなってしまうのを恐れるという意味である]

■ 【09-1-016】 同秦仲二子雨中遊宝山

【解題】 8月26日に秦覲<sup>しんてき</sup>と錢蒙仲<sup>せんもうちゅう</sup> [→作品番号 09-1-010] とともに雨の中、西湖<sup>せいこ</sup>のほとりの宝山<sup>ほうざん</sup>で遊んでこの詩を詠んだ。

【訳文】

朝のうちに役人は全て散り散りになり、

私も半日の閑を得たので、二人と同行する。

鶺鴒<sup>かきぎ</sup>が、煙る雨の中で低く、あるいは高く飛び、

山を廻る人が、樹林の間を出たり入ったりする。

【補足】 [昔のお役人は夜明けとともに仕事を始めたので、昼になれば自由に遊ぶようなこともできたのだろう]

■ 【09-1-017】 為法外刺配罪人待罪状

【解題】 州知事は行政の長であるとともに警察・司法の長でもあった。権限が集中しているために判断を誤れば直ちに冤罪を生んでしまうので、良心的な知事はいかにして公正な裁きを下すかに心を砕き、優れた判例を集めた書物が編まれたりもした。蘇軾<sup>こう</sup>は杭州に赴任してまだ日の浅いころに、法に基づかない量刑を行って2人を厳しく断罪した。現代社会においてももしも類似のことをしたならば完全にアウトであるし、当時としても非常に問題のあることだった。法外の裁きをしたことを隠さずに朝廷に報告したのがこの文章である。

【訳文】

元祐四年八月某日、竜図閣<sup>りゅうとくかく</sup>学士朝奉郎知杭州の蘇軾<sup>しこう</sup>は書状をもって申し上げます。

右の臣は杭州に入ってから以来、このようなことがあると聞きました。すなわち、<sup>りょうせつ</sup>両浙諸郡において、近年、民間<sup>ためし</sup>の例として、絹の粗悪品を上等品と偽り、それを朝廷に納付する絹として用意し、その品質を課税係の役人が吟味しようとすると、狡猾な連中が集まって騒ぎ立てて妨害し、結局のところよい絹が納められずに終わってしまうのです。……そのために不足額が去年は九千余貫にもなったのであります。……

<sup>わたし</sup>臣は杭州に着きますと、この弊害を改めようと、絹を受納する役人を指揮して、品質の吟味を厳しく行うこととしました。七月二十七日、<sup>ひやくせい</sup>百姓[民間人]二百余人が受納場所の前<sup>に</sup>きて(吟味を妨害しようと)大きな声で叫び、その勢いに役人たちはたじたとになり、さらには役所にまで入り込んで騒がしく訴えました。<sup>わたし</sup>臣が理をもって諭しましたところ、皆は引き下がって去って行きました。それで<sup>わたし</sup>臣はこの者たちは自分の意思で心を合わせて集まったのではなく、きっと悪だくみをする者がいてそそのかしたのだと知ったのであります。

密かに探究させますと、<sup>じん わ</sup>仁和<sup>ちんこく</sup>県の陳皓から次のような報告がありました。「<sup>がんそん</sup>顔巽の息子<sup>がんしょう</sup>顔章と<sup>がんえき</sup>顔益が納めた五匹の絹は粗悪品でしかも丈が規定よりも短いものでありましたので、これを受け取らずに返したところ、この者たちは数百人を集めて、役人の前で声高に叫び散らし、どしどし押し寄せて威嚇して後に去りました」。

<sup>わたし</sup>臣はただちに人を遣わして顔章、顔益の二人を捕らえ、枷を付けて拘禁しました。すると、その後は人々はよい絹を納め、騒ぎ立てる者は一人もいなくなりました。

顔章、顔益を取り調べたところ、本来二人は絹三十七匹を納めるべきところを、粗悪な品を納め、そのために本州から国に納めるべきものが不足し、そこで別途好い絹を集めなければならなくなり、顔章等はそれを一匹当たり一貫で請け負い、やはり粗悪品を官に納めておりました。……[顔章と顔章、及び父の顔巽がしたことが詳述される]……、(私の判断で)顔巽は刺青をして本州内で牢に入れ、顔章、顔益は刺青をして<sup>じよ</sup>滁州で牢に入れることとしました。父子は奸悪であることは衆人の恐れ憎むところで、下獄の日には土地の人々は喜んだのであります。

謹んで按じますに、顔益、顔章は卑賤の身でありながら、衆人を集め、手を挙げて一呼するだけで数百人がこれに従い、多数の勢いで官吏を脅かして制し、必ず今後とも悪い絹を納めさせようとして、臣が前からの弊害を大いに改めようとするのを受け入れまいとしたのであります。情理ともに社会を蝕む大きな悪で、実に我慢ならぬ者であります。本州は法によって処罰を決めましたが、臣は独り次のように判断したのであります。

「顔章、顔益は代々の兇狡で、土地の人々を暗に支配しています。臂を振るって一声呼ぶだけで数百の者が従います。官吏を揺り動かして、官の仕事を脅かして制し、常の法に従っているとはいえ、その蠹む害は深刻なものがあります。そこですでに刺青をして牢に収監し終わりました」

そして、町や村に示して、今後はさらに絹の品質をごまかすことなく、官に納めるように知らせました。来年にはこれまでの弊害が完全に改まることを願つたのであります。臣は伏してこの書状をもって朝廷の御判断を仰ぐものであります。……臣が法に基づかずに顔章、顔益の二人を罪人としたことをもって、今後の国法を重くされますよう願います。……

【補足】〔(1) 土地の有力者が、地方の行政官を抱き込んだり脅したりして、違法行為ぎりぎりの振る舞いをするのはいつの時代にもあり、中央から派遣された官僚はその扱いに手を焼いた。顔父子は代々官と民間の間に入って狡猾に暴利を貪り〔蘇軾の報告書にはその手口が詳しく記されているのだが、当時の制度に無知な訳者は残念ながら正確に訳出することができない〕、今後も社会に大きな害を為すとして、蘇軾は法の定めるところよりも重い処罰を下した。それは本来してはならないことであつて、上の訳文の終わりで、法を改めることを求めているのは、順序が逆転している。

(2) 朝廷は蘇軾の判決を追認したものの、党派争いからんでこの問題はくすぶり続けることになる。蘇軾を嫌う人々は、当然ながら、この脱法行為をもって蘇軾を非難し、しばらく後になって、蘇軾の裁きは誤りだったとして顔父子は釈放される。法によって救われた顔父子は意を強くし、以前にも増して横暴に振る舞って州政府を困

らせたのだった]

## ■ 【09-1-018】点絳脣

【解題】「己巳重九、蘇堅に和す」との添え書きのある詞。己巳はこの歳の干支、蘇堅〔字は伯固〕は税金に関わる役人として杭州にいた。都で親しくした蘇頌〔→作品番号 08-3-059〕の一族の人である。佳節の宴で人々を喜ばせるための作品で内容は乏しいが、この後、蘇堅の名はしばしば見ることになるので読んでおこう。

### 【訳文】

我輩情鐘、[私たちに情が募ってきて]

古来誰似竜山宴。[かの有名な竜山の宴にも似てきます]

而今楚甸、[いま楚のあたりでは]

戯馬余飛觀。[戯馬台の跡地に樓閣があるだけです]

顧謂佳人、[佳き人たちを見回すと]

不覺秋強半。[いつの間にやら秋も半ばです]

簫声遠、[簫の音が遠のき]

鬢雲吹乱。[風に髪が乱れます]

愁入參差雁。[愁いが飛び去る雁の群れへと入っていきます]

【補足】[前半は、昔から有名な重九の宴の故事を引いて構成していて、たぶん蘇堅のもの詞にもそれらのことが詠まれていたのだろう。なお、戯馬台は作品番号 05-3-056 で見ている。後半は、秋の愁いのイメージを並べたもの]

## ■ 【09-1-019】 浣溪沙

【解題】 同じ9月9日の重陽ちやうようの節句せつこに、越州えつの錢勰せんきやう [字あざなの穆父ぼくふ] にこの詞を贈った。

### 【訳文】

珠たま檜ひのき糸杉冷欲霜、[珠たまのような檜ひのきの葉にも糸いとのような杉のぎの葉にも冷たい霜しもがつころ]

山城歌舞助淒涼。[山やま辺への町まちに聞こえる歌うたが寂さびしさをつのらせませす]

且餐山色飲湖光。[しばらくこの山やまの色いろを食べ、この湖うみの光ひかりを飲のむとしましよ]

共挽朱轡留半日、[とともに朱あかい車くるまに乗のって半はん日じつを過すこし]

強揉青蕊作重陽。[また蕾つぼみの菊きくを無理むりにとつて重陽ちやうようの遊あそびをするのです]

不知明日為誰黃。[明日あしたになつて黄色きいろく咲さいてもう誰たれもいないのです]

## ■ 【09-1-020】 自跋南屏激水偈

【解題】 杭州こうの町まちの南なんにある南屏山なんびやうざんの淨慈寺じやうじを訪まねてこの短文たんぶんを書かいた。

### 【訳文】

水激之高、如所從來。[激せきしい水みづ音ねの高たかさは昔むかしからのこと]

屈伸相報、報尽而止。[音ねは屈くつ伸しんし、その呼よび応おこが尽つきたなら止とむのだらう]

止不先平、於以觀法。[仏法ぶつぽうによれば、止とんだからといつて安やすらかになるのではない]

この偈ぎは、熙寧きねい年ねん間に作つくつて文閣梨ぶんかくりに示ししたものである。それから十六年後じゅうろくねんごに、再またび南屏山なんびやうざんを過すり、  
またこれを書かいて雲玩上座うんがんじやうざに示しす。

元祐げんゆう四年九月。

【補足】 [(1) 訳者は偈の意味が理解できないので、訳文は見ないで原文から正しい意味を汲んでいただきたい。(2) ここに記された二人の僧の詳しいことはわからない]

### ■【09-1-021】次韻答劉景文左蔵

【解題】西湖のほとりに有美堂という有名な建物があつたことは作品番号 04-2-002 などで見ているが、そこで宴会が催されたときに、隣の部屋に劉季孫 [字は景文] が詠んだ詩が掲げてあつたのを見て、蘇軾はそれに次韻した。劉季孫とはこの後深く交際するようになる。

#### 【訳文】

我はもう老いたので、

これまで詩壇において立てていた旗を倒してしまった。

それでも、貴君の佳句を借りて、この良き時に詩を発してみる気になった。

とはいえ、いまの私が知っているのは、

杯の中の物[酒]を空にすることだけで、

そのようなことは若い人々に教えてはいけないのだ。

夜の灯火は早く詩を作るようにと促し、

金色の光はもはや尽きようとしている。

まさに秋のたけなわ、

頭のかぶりものはすでに露でたっぷり湿っている。

好き語とははきものを爬くような心地よさがなければならぬ。

味わいのある語は形容しかたいもの、

心の内で自ずと知れるだけである。

【補足】[結局、「好語」を発し得なかった言い訳をしたというのがこの詩のオチなのだろう]

## ■【09-1-022】座上復借韻送岢嵐軍通判葉朝奉

【解題】有美堂ゆうびどうに人々が集まったのは、葉朝奉ようちようほう [朝奉は官職の名称] という人が岢嵐からん軍 [軍は県と同レベルの行政単位の名称] の通判 [副知事] として遠く離れた北西の地に行くのを見送るためだったようだ。上の詩の韻を借りて、葉朝奉のためにこの詩を作った。

### 【訳文】

雲の間に、貴君を乗せた白い馬と旗印むすが見える。

ここ西湖せいこで酒を酌み交わしたことを忘れないでくれたまえ。

貴君は向こうで、

酔っての夢に、ここ呉山ごさんの道を越えて行くのを見るだろう。

目が覚めると、酒樽の前さかにいるのは異国の婦人と少年である。

あちらで酔えるのは、

無事むじを知らせる夕べの烽火のろしが上がってからのことだ。

春になって雁が帰ってくる時にも、

あちらではまだまだ雪がさかんに降っている。

軍務に就くのは楽しいのかそうでないのか、

概略でもよいかから貴君の心を手紙で知らせてくれたまえ。

## ■【09-1-023】跋劉景文歐公帖

【**解題**】先の詩で見た劉季孫<sup>りゅうきそん</sup> [字は景文<sup>けいぶん</sup>] は歐陽脩<sup>おうようしゅう</sup>の書を集めた冊子<sup>しょ</sup>を持っていた。蘇軾はそれにこの跋文<sup>はくぶん</sup>を書き添えた。

### 【訳文】

此の数十枚の紙<sup>ぶんちゆうこう</sup>は、いずれも文忠公<sup>おうようしゅう</sup> [歐陽脩]の口をついて出てきたことばを、手の動くままに記したものであって、初めから内容を考えて作ったのではない。その文章<sup>ぶんぎ</sup>の采、字画<sup>あざな</sup>のありさまは、どれも自然で、他人の及ばない姿がある。まことに天下<sup>てんか</sup>の奇れた迹<sup>あと</sup>である。

### ■ 【09-1-024】書文忠贈李師琴詩

【**解題**】これも歐陽脩に関わる短文。惟賢<sup>いけん</sup>という僧が演奏する琴<sup>ようけつ</sup>を楊傑<sup>あざな</sup> [字は次公<sup>じこう</sup>]とともに聴いたときのことを記した。楊傑の名はすでに作品番号 07-2-060 で見ていて、このときは両浙路<sup>りょうせつろ</sup>の地方行政官<sup>ちゆう</sup>として杭州<sup>こう</sup>にいた。仏教や道教に通じていて、この後、蘇軾とたびたび詩を詠み合うようになる。

### 【解題】

楊傑<sup>ようけつ</sup>とともに惟賢<sup>いけん</sup>師の琴を聴いた。惟賢師が詩を求めたところ、急なことだったので誰も応じる者がいなかった。

楊傑は、

「昔の人が詩を賦したのは、歌って学ぶためでした。何も新しいものを作らずともよいのではないでしようか」

といて、歐陽脩<sup>おうようしゅう</sup>が李師<sup>りし</sup>に贈った琴<sup>ごん</sup>の詩を誦え、私にその詩を書いて惟賢師に贈るよろこいって。

げんゆう  
元祐四年九月二十一日。

【**補足**】〔(1) 歐陽脩<sup>おうようしゅう</sup>が李師<sup>りし</sup>に贈ったという詩はいま残っていない。(2) 惟賢<sup>いけん</sup>の演奏する琴は、かつて杭州副知事であったときにも聞いていて、そのときに詩を詠んだこ

とが作品番号 06-2-031 其の二に記されている]

## ■ 【09-1-025】 題損之故居

【解題】 熙寧<sup>きねい</sup>6年 [1073年] 9月9日に孤山<sup>こざん</sup>の恵勤<sup>えごん</sup>を訪ねた折の詩を作品番号 04-2-078 として見たが、その詩は、「六月六日、病をもつて家において、独り湖のほとりで遊び、諸寺を訪ね、晩に損之<sup>そんし</sup>に会った。戯れに七言絶句を作つて残した」という題であつたともいう。この短文は、損之が昔住んでいた住まいを訪ねて書いたもの。損之の詳しいことはわからないが、西湖<sup>せいこ</sup>の畔<sup>ほとり</sup>に住む隠者<sup>しよく</sup>で、一説には蜀の人であつたという。

### 【訳文】

元祐<sup>げんゆう</sup>四年十月七日、損之<sup>そんし</sup>の故居に初めて来て、かつての跡を見てまわつた。

陶淵明<sup>とうえんめい</sup>はこのようにいった。

嗟歲月之遂往、[ああ、歲月も遂<sup>ゆ</sup>に往くのである]

悼吾年之不留。[吾が年の留まらないのを悼む<sup>いた</sup>]

損之のような人でさえも留まらないのであるから、我らのような者はなおさらである。

蘇軾書く。

【補足】 [(1) 陶淵明<sup>とうえんめい</sup>のこの句は、『斜川<sup>しゃせん</sup>に遊ぶ』と題した詩の序文にある。斜川の遊びについては作品番号 06-3-018 や 05-5-008 で見ている]

## ■ 【09-1-026】 次韻錢越州見寄

【解題】 越州の錢勰<sup>せんきやう</sup> [字は穆父<sup>あざな</sup>] [→作品番号 09-1-019] から詩が送られてきたので、

それに次韻した。

### 【訳文】

羊の群を射るのに巨大な弩ゆみを使う必要はない、  
 貴君にとっては、小さな州を治めるなど寝ながらでも十分である。  
 昼間も門が閉ざされているのを見て、  
 知事殿は病気なのかと心配するのは無用だ。  
 時に、堂々の賓客が車に乗って出入りしているのである。  
 貴君の方を臨んで頭を搔くと、秋風に無数の白髪が落ちる。  
 夜、眼たまを閉じれば、我が身の内に丹田たんでんは丸かど存在している。  
 波瀾はらんを静めようとするなら、すぐに退けばよいのだ。  
 言葉が多すぎて事に坐すのは私一人だけではない。

【補足】〔(1) この詩は、蘇軾そくも錢勰せんきやうも不本意な情況に置かれていることを歌っているのだらう。(2) 後半にある「閉眼丹田夜自存」〔眼まなこを閉じれば、丹田たんでんは夜よるに自おのずからあら存る〕の句は興味深い。養生の秘訣として、夜中に丹田きに氣を送り込む呼吸法を実践していることを作品番号 06-4-043 ページで見ている。それをずっと続けているのだらう。正しい気に満ちた丹田が自分の内に存在しているということは、自身が正しい生き方をしていることの証になるというのだらう。(3) 詩の終わりの一句、「吾儕われら豈ただひと独たりのみ多言ごんごに坐すのか〕は、反省なのだらうか、開き直りなのだらうか〕

### ■ 【09-1-027】 杭州題名

【解題】 杭州に残された二つの訪問記録。

【訳文】

其の一

げんゆう げんゆう げんゆう げんゆう げんゆう げんゆう げんゆう  
元祐四年十月十七日、曹晦之、晁子莊、徐得之、王元直、秦少章と一緒に来た。時に主僧は皆出ていて、庭戸は寂然とし、しばらくこて徒倚した。  
とうば  
東坡書く。

【補足】[同行の人々の名はいずれも字で記されている。曹晦之と晁子莊は詳しいことはわからない。徐得之は徐大正 [→作品番号 07-2-066 など] で、かつて黄州知事の任にあった徐大受の弟。蘇軾に会うためにわざわざ杭州にきていたのだろうか。王元直は王箴で、すぐ次の項で登場する。秦少章は秦覲で、秦覲の弟である。以上の4人とともに蘇軾がどの寺を訪ねたのかは不明]

其の二

あかざ わらじ なんざん ほくざん  
私は十五年前に藜の杖を手に、芒屨を履いて、南山、北山を歩き来た。その間に棲む魚や鳥とも皆知り合いになり、まして道人で知らない者はいなかった。再び来てみると、惘然として誰もが老いていて、この歳月の流れを恨めしく思うのである。  
しせん  
子瞻書く。

【補足】[三十代後半だった副知事時代に、蘇軾は西湖を囲む山々を縦横に、寺という寺を訪ね尽くすくらいに歩いたのだった]

■ 【09-1-028】 書贈王元直

おうしん あざな げんちやく  
【解題】王箴 [字は元直] に贈った三つの短文が残っている。王箴は蘇軾の妻の王閏之の弟で、王淮奇 [字は慶源] [→作品番号 08-3-019] の甥である。このころに郷

里の眉州青神県から訪ね来て、しばらく杭州に滞在した。なお王箴に与えた手紙を作品番号 06-1-109 で見ている。

## 【訳文】

### 其の一

王箴、字は元直。小名は三老翁で、そのときの字は惇叔といった。

元祐四年十月十八日夜、王箴と酒を飲み、薺菜をつまんで食べ、非常にうまかった。それで蜀の菓菜をしきりに思い出し、しはれ悵然とした。

【補足】[菓菜は蘇軾の好物である郷里の野菜で、特に「元修菜」と名付けたことを作品番号 06-4-024 で見ている]

### 其の二

王箴は拍板[拍子木のような打楽器]を二組贈ってくれた。私のところに音楽を専門とする侍女がいると思っていて、そのような者は初めからいないのを知らなかったのだ。そこでこれを使うとなると、昔々かの傅大士が皇帝の前でこれを叩きながら『金剛経の頌』を唱えたのに付き従うかないだろう。

元祐四年十一月四日夜。

【補足】[(1) 大きな州の知事クラスになると家に歌妓を置くような例をいくつか見えてきた。この文章によるとこのとき蘇軾のところにはそのような女性はいなかったようだ。かつての杭州副知事時代には、王朝雲を身受けして家に引き取るようなこともしたのだが、黄州に流されて以降はそのような派手なことはしなくなったようだ。ただし、この数年後に、数年前には数人の妾がいたと記しているので、詳しいことはわからない。(2) 傅大士は南朝の斉の時代の僧で、皇帝に『金剛経』を講義するよう求められたときに、拍板を叩きながら『金剛経』を讃える四十九の頌歌を唱え、そのま

ま去ってしまった。この故事は注釈家が懸命に探してようやく見つけたもので、蘇軾の博覧強記は恐ろしいものがある]

### 其の三

げんゆう  
元祐四年十一月二十八日、降っていた雨がわずかに雪に変わった。私は寒疾を理由に家にいて、ごろごろして夜に至った。王箴と蜜酒を一杯飲むと、<sup>おうしん みつしゅ</sup> 醺然としてたちまち酔いかまわった。自分で包丁を持って<sup>なすな</sup> 薺青を刻んで<sup>スープ</sup> 羹を作って食べると非常にうまかった。帰郷した後にもこの味を忘れないでくれたまえ。

【補足】 [(1) 蘇軾は新しい土地に赴任すると、秋から冬にかけて体調を崩す傾向があるようで、11 月末ころからしばらく不調が続いた。(2) 蜜酒は蜂蜜を水に溶かして発酵させた酒で、詳しくは作品番号 06-3-044 で見ている。(3) <sup>こう</sup> 黄州に流されていた間に、蘇軾はいろいろと料理を工夫していたが、ここでも自分自身でスープを作っている。州知事でありながら質素な暮らしぶりが偲ばれる短文である]

## ■ 【09-1-029】 王子立墓誌銘

【解題】 蘇轍の娘の婿である王適<sup>おうてき あだな しりゅう</sup> [字は子立] が 10 月 25 日に亡くなった。昨年の秋に王適は感傷的な詩を詠んでいたのは [→作品番号 08-3-039]、自身の運命について何か予感するものがあつたのだろうか。これは、王適の死から 3 年後、故郷の墓地に埋葬された際に蘇軾が記した墓誌銘。なお、蘇轍の娘の婿としては<sup>ぶんむこう</sup> 文努光も亡くなっている [→作品番号 08-1-049]、優秀な若者であると見込んで縁組をしても現実には厳しいものがあつた。

### 【訳文】

しりゅう いみな てき ちょう りんじょう  
 子立の諱は適、趙郡臨城の人である。

私が徐州知事であったとき、王適は徐州で私の学生となった。私は、王適が賢く、立派な文を書き、喜怒を表に出さず、いつも落ち着いているのを知り、「弟の蘇轍に似ている」といった。それで、蘇轍の娘を王適の妻とした。

王適とともにその弟の王適、字は子敏も私に従って呉興[湖州]に行き、二人の学道は日に日に進み、東南の人々は二人を賞賛した。私は呉興で罪人になり、親戚や友人は皆驚いて散り散りになってしまった。ただ王適は去ることなく、私を町の外にまで見送ってくれ、「死生、禍福はいずれも天の定めるところです。公がどうこうできるものではないでしょう」といった。それから王適は町に引き返し、私の家族を南京応天府に連れて行ってくれた。

その後は、蘇轍が流されたのに従って高安[筠州]に行き、さらに績溪に移り、弟と労苦をともした。粗末な家で、詩を賦し、琴を奏し、道を究め、書物を書くこと五年に及び、怨んだり怒ったりするようなことは一度もなかった。

私と弟には六人の男子がいて、皆が王適に従って遊んだ。

学問にはわかるべき学び方があり、人はそれぞれに自重し、遊惰に流れてはならないのだが、王適はまことにきちんとしていた。

元祐四年冬、王適は都から済南に行こうとし、また到着する前に、奉高の駅舎で亡くなった。それは十月二十五日のこと、享年は三十五であった。

曾祖父は王璘、妻は田氏、祖父は王巖、妻は宋氏、父は王正路、妻は李氏。一人の娘がいて、生まれてまだ一年、そして生まれる前の子が一人あった。

文集十五卷があり、礼や服飾に詳しかった。蘇轍はその文章について、「朱弦疏越[質朴で余韻がある]、一唱して三嘆する」と評した。

元祐七年十一月五日、兄の王蘧、字は子開、が臨城の竜門郷両口村にある先祖の墓所の隣に葬った。

その墓誌銘に曰く、

知性以為存、[本性の在り方が大切であって]

不寿非其怨也。[寿命が短いからといって怨んだりしない]

知義以為榮、[義を知ることを榮えとし]

不貴非其羨也。[高い地位を羨んだりしない]

而未能忘於文、[学問を忘れることなく]

則猶有意於伝也。[世に伝わるべき意<sup>こころ</sup>が残された]

嗚呼、百世之後、[ああ、百世の後には]

其姓名与我皆隱顯也。[その姓名も私も消えてしまっても、<sup>あはれ</sup>顯れるべきものがあるのだ]

## ■ 【09-1-030】 哭王子立、次兒子迨韻三首

【解題】 上の墓誌銘に記されているように、王適<sup>おうてき</sup>は蘇軾の息子たちと親しくしていた。  
次男の蘇迨<sup>そたい</sup> [21歳] が王適を哭する詩を詠み、蘇軾が次韻した。

### 【訳文】

其の一

彭城[徐州]で初めて王適君と識り合った。

眼が白く輝き、長くきりっとしていた。

それよりも前、私が密州知事であったときには、

私は王適君とはまだ会ったことがなく、

その優れた言葉を聞くこともなかったのだが、

王適君は、

「夢で密州知事の婿になったと見た。どういことなのだろうか」

と、友人に告げていた。

君子が見る不思議な夢は必ず後に正しい兆してあったと知れるので、  
果たせるかな、王適君は弟の娘の夫となったのだった。

王適君は礼の本質を知るだけでなく、  
失われた詩の伝統を補おうと志していた。

おどろく  
咄咄ばかりにその真髓せまに通り、

世の諸生が並び行くものではなかった。

## 其の二

かん 漢の時代の梁鴻りょうこうには、その高節めどらを慕って娘を娶せようとした人が大勢いた。

もうこう 孟光という見目悪しき女性が、徳ある人でなければ結婚しないといっていると聞き、  
梁鴻は孟光を妻に迎えた、

後に夫婦は山に入り、妻は機はたを織り、夫は詩を詠んで暮らした――。

王適君には梁鴻のような志があったのだが、

漢の大学者の揚雄ようきゆうのように、息子を得ぬ悲しみを同じしたのだった。

天の恵みが王適君に十分に及ばなかった恨みから、

私は長く王適君のことを思い続けている。

息子たちよ、ひどい悲しみ方をしないでほしい、

老いたこの眼は泣いてもう枯れ果ててしまったのだから。

王適君の死を悼む人々は、皆豪傑揃い、

誰も弱々しい感旧の詩を詠んだりしない。

【補足】「豪傑揃い」の具体的な名前として、蘇軾そうていけんは黄庭堅ちやうらい、張耒ちやうほ、晁補之しんかん、秦觀

ちん し どう  
陳師道を挙げている]

其の三

竜が気まぐれで魚に化けてみたら、  
漁師に目を射抜かれてしまった。  
羊がごさかしも虎の皮をかぶってみたら、  
豹と出会ってかたがた震えてしまった。  
竜も羊もたちまち死んでしまい、  
満足できない一生だったと天帝に訴えた。  
天帝がいうには、  
「花は風に吹かれて散る、  
貴人の宴席に落ちて愛でられるのもあれば、  
むさい厠に落ちて糞尿にまじるのもある、  
わしが散り行く先を決めるのではない、  
戯れに四方八方に矢を飛ばして遊んでいるだけなのだ」  
王適君との歳月を顧みるに、  
秋の風に黄色い葉が巻かれている……。

【補足】 [この第三首は、「英雄欺人の語、凡人の知る所でない」との評があって、全体としてわかりにくい。凡人にも及ばない訳者のよく解するものではないので、ひどい「ずっぱ訳」である]

■ 【09-1-031】 与錢穆父

えつ せんきよう あざな ぼく か おうてき  
【解題】 越州知事の錢勰 [字は穆父] [→作品番号 09-1-026] に宛てた手紙。王適の

亡くなったことについて記している。

### 【訳文】

近ごろ家からの報せがありました。王適君おうてきがにわかはろふに奉符で亡くなったとありました。そのためにここ数日はひどい悲しみでいっぱいです。貴君とも縁がありましたのでお知らせします。貴君は王適君のことをよく理解して下さっていましたから、さぞや寂しい思いを抱かれるてまいしょう。弟の蘇轍りようこくはいま遠く遼国に使者として出ています。帰ってきてこのことを聞いたなら、どれほど痛ましく感じますことか、想像に難くありません。王適君には一人の娘がいますが、男児はありません。痛ましい限りです。

多用な中で、そちらからのお使いの者が帰るといっているので、十分に意を尽くせません。

【補足】[蘇轍が遼国[契丹]への使者に任命されたのは8月16日で[→作品番号09-1-015]、実際に出発したのは9月半ばであったようで、王適おうてきが死去した10月25日にはすでに国境近くにまで達していたであろう。王適死去の知らせがいつ蘇軾や蘇轍のもとに届き、この手紙をいつ書いたのかといった詳しいことはわからない]

■【09-1-032】軾始於文登海上、得白石数升、如芡実、可作枕。聞梅丈嗜石、故以遺其子子明学士、子明有詩、次韻

【解題】この詩の題は次の通り。「私は登州の海岸で白い石を拾った。ちょうど芡実おにぼすのようで、枕を作るのによいだろうと、数升ほど拾い集めた。梅丈ばいじょうが石を好むと聞き、その子ばいこうの梅灝副知事に贈った。梅副知事が詩を作ったので、それに次韻した」。

蘇軾が4年前の元豊8年[1085年]の終わりにごく短い期間だけ登州に赴任したことは作品番号07-2-076以下で見ている。その折に海岸で白い小石を拾って持ち帰ったのだろう。梅丈の「丈」は年長者への敬称で、梅灝あざな しめい[字は子明]の父の梅宣義ばいせんぎである。

梅灝きおは熙寧6年[1073年]に科挙に合格したとあるので、蘇軾よりは後輩にあたり、

このとき杭州副知事の任にあった。

### 【訳文】

海の片隅にある風変わりなものを珍重するのは誰なのか。

珊瑚だって贅沢を競うために碎かれてしまったのではとんだ災難である。

私もかつて怪石を仏寺に供え、

そこらにころがるからくたを価値あるものであるかのようにしたことがある。

親に珍しい物を差し上げることが必ずしもよいわけではなく、

親孝行で難しいのは、いかなる顔でそれをするかだと、孔子がいったように、

純心であるのが何より大切なのだ。

世の人は珍しいものという遥か南方からもたらされると思いがただが、

この白い石は東の海辺で拾ったものだ。

学士殿はこれでもって枕を作るのがよいだろう。

昔、黄香という人は、夏の間は母の枕もとで扇ぎ続けたといけれど、

この枕があれば扇を使う労は不要となるだろう。

【補足】〔(1) いろいろな故事を使った機知に富んだ作品として当時に人には面白い詩であったのかもしれないが、現代のわれわれにはわかりにくいので、その大意を汲んで訳した。2点だけ補足しておく。(2) 珊瑚を碎いたとあるのは南朝時代の石崇せきすうの話。大金持ちの石崇は愚物の最高峰として蘇軾はよくその名を引いている〔→作品番号07-1-067など〕。石崇はもう一人の愚か者と贅を競い、相手が自慢する巨大珊瑚を目の前で叩き碎いて仰天させ、何食わぬ顔でそれよりずっと大きな珊瑚を出して、代わりにプレゼントした。(3) 蘇軾が怪石を仏寺に供えたことは、作品番号06-3-040で見ている。そのときに物の価値はどこから生じるのかということ論じていて、この詩

の内容と通じるところがある]

■【09-1-033】文登蓬萊閣下、石壁千丈、為海浪所戰、時有碎裂、淘灑歳久、皆圓熟可愛、土人謂此彈子渦也。取数百枚、以養石菖蒲、且作詩遺垂慈堂老人

【解題】上の詩と同じく、登州の海岸で拾った石にまつわる詩。詩の題は、「登州の蓬萊閣のもとに千丈に連なる石の壁があり、海浪の激突するところとなっている。壁はときに碎かれ、長い年月にわたってもまれ洗われて、円く愛すべき形になる。土地の人はこれを『弾子渦』と呼んでいる。取ってきたのが数百枚あり、これで石菖蒲を育てることにした。詩を作り、垂慈堂老人に贈る」。蘇軾が登州の蓬萊閣を訪れたことは作品番号 07-2-083 で見ている。垂慈堂老人とは、杭州にある千頃広化院の僧の了性で、医学に通じ草書を善くした。

### 【訳文】

蓬萊の海辺に、

玉が並び立つような峰々が、千古の昔より変わることなく連なっている。

峰の根は天を揺るがす波をも捍ぐのだが、

ときに雲骨[峰の岩]が破碎されることもある。

陽侯[波の神]によってとがった角がそぎ落とされると、

石の内に籠っていた陰火が光彩を発するようになる。

累々と重なる弾丸[石]の間にも、

珠と珠との微妙な繋がりを見とることができる。

閻浮[宇宙]とは一つの瀕でしかないのか。

真か妄か、果たしていずれがあるのか。

この石を持ち帰るなら、

私の袖の中に大海があることになろうか。

すい じ びやうろうじん  
垂慈堂老人の眼は、

あお うつむ  
仰ぎ俯くあいだに天地のありようを見てとってしまう。

この石を皿の内に置いたら、

日々、山と海とに對することができであろう。

来年には菖蒲しょうぶの根が張り、

石と石とが結びついてほどこことができなくなるだろう。

そこから蟠桃ばんとう[海に生じる仙果]が生じるかもしれないから、

朝夕に待ち望むがよいだろう。

【補足】 [これらの作品を見ると、蘇軾はかなりの石好きであったことがわかる。蘇軾は自然界の成り立ちや物質の変化に対して理系的考察を巡らせることが時々あり、蓬萊閣ほうらいかくの石の変遷から天地のありようについてある種の科学的インスピレーションを得たのかもしれない]

## ■ 【09-1-034】 六観堂賛

【解題】 上の詩で見た垂慈堂老人こと了性りやうせいはかつて六観堂ろくかんどうを作り、六観堂老人とも称した。これは六観堂に寄せた賛。全て四言の句を並べた韻文で、飛躍のある言葉で、仏教的なものの見方、「六観」について詠んでいる。意味を汲み取るのが難しく、とりあえずそれらしく訳してみた。

### 【訳文】

われ ろくかんびやうろうじん  
我、六観堂老人が衆生を觀るに、

思っても思っても人は人、  
人は昼は心を見ないし、夜はその身を見ない。  
仏はそれを夢のようだという。  
思慮もなく因果のことわりもない。  
夢の中で覚めているようなもの、  
どちらが形でどちらが神こころなのか。  
我、六観堂老人が衆生を観るに、  
いつも疑おそい怖れている、  
泥人形はそうではなく、  
こころの障りになるようなものはない。  
仏はそれを幻のよう、愛や憎しみから永く離れよという。  
画いた餅を見て腹を鳴らしても、  
実際には何も無い。  
我、六観堂老人が衆生を観るに、  
あれを得たりこれを失ったりと止まるところがない、  
それは何によるのか。  
生と死があるからだ。  
仏はそれを泡のようだという。  
泡はもとより何にもならない。  
壊れてしまつたのから何かを生み出すのは、  
仏といえどもできないのだ。  
我、六観堂老人が衆生を観るに、  
いつだって逆立ちしている、

光を無とし、影<sup>ゆう</sup>を有としている。

仏は光は影、影は光といい、

我が仏に合掌する。

己から影を断ち切ろうとして、

日中走りまわったところでどうにもならない。

我、六観堂老人が衆生を観るに、

露と遊んでいるのと同じ、

衣を濡らし、眼を覆ったところで、

見る間に消えてしまう。

仏はそれを露のようたという。

ひとたび照らされると乾いてしまう。

覆われたものはすでに消え、

照らすものもまた空<sup>くう</sup>である。

我、六観堂老人が衆生を観るに、

<sup>こころ</sup>神は自在に通じ、

世界のどこへでも行く。

仏はそれを電光のようたという。

言葉を発すれば意<sup>こころ</sup>に得て、

仏と衆生はすっかり一つになるのだ。

<sup>すいじ どうちやうじん</sup>垂慈堂老人はかのように六観について述べ、

一から六に至り、六は千万を生じ、

かくて無窮となって、乱れることはない。

<sup>とうぼ こじ</sup>私東坡居士には口がない、

だから此の賛は作れない。

### ■ 【09-1-035】 次韻毛滂法曹感雨詩

【解題】毛滂〔字は沢民〕が雨に感じる詩を作り、蘇軾が次韻した。毛滂とはかつて  
 黄州で会っていて〔→作品番号 06-3-077〕、その後、蘇軾が都にいる間に毛滂が上京し  
 て再会し、その後、杭州で官職に就いた。毛滂は毛維瞻〔字は国鎮〕の子で、毛維瞻  
 は蘇轍が筠州に流されたときにその地の知事を務め、蘇轍とさかんに詩を唱和し合っ  
 た。毛維瞻は退官するに際し、息子の毛滂を黄州に遣わして蘇軾に書を求めた。その  
 ことがこの詩の始めと中程に詠み込まれている。

#### 【訳文】

かつて江南の佳公子〔毛滂〕は、  
 私に錦繡の織物をもたらしてくれた、  
 それを手にするに温かくて春のよう、  
 公子の訪れによって寒さのあることを忘れたのだった。  
 いまも貴君は雨を禱る詩を詠むのだが、  
 雨は時に遭えば自ずと降り、  
 降ればたちまちあたりは濛々と潤うのであって、  
 敢えて星の動きから雨の気配を求めるまでもないのだろう。  
 貴君は月の光に照らされ、  
 貴君の影が庭に落ちているであろうから、  
 ならば、李白に倣って、月と影と我との三友の歡びを結ぶがよいだろう。  
 清らかな月の光さえあれば十分であるといえ、

やはり一酔してこそその歓びがあるので、  
私はいつも酒樽が空っぽになっていられないかと恐れている。  
酒がなくても楽しめるものがあるとすれば、  
美しい珠、すなわち人の心を撃つ弾丸のような詩だ。  
ただ私が恐れるのは、  
貴君がはるか上空の雀を撃とうと不用意に弾を発してしまうことだ。  
閑暇の折に、心の奥底に種子を蒔いてじっくりと育てるのがよいだろう。  
世渡りに馴れて、嘘偽りであっても、空腹を満たすためならと、  
食らったりはしないように。  
私はあのかたのときは東の坡たかざりにあって、  
秋の菊を採って夕餉の膳とし、  
近隣の人々のお蔭でどうにか衣服を揃えていた。  
それを私は永らく恥ずかしく思い、  
雪堂せつどうはようやく瓦で覆われたばかりで、  
竹の蓆むしろはあっても葦の蓆はなかった。  
それでも客人があるときには、なけなしの酒を飲み尽くしてしまい、  
笑ってひっくり返るという次第で、  
かくて五年の歳月を安らかに過ごしたのだった。  
貴君は私の弟子というわけではないけれど、  
我が衣鉢をほんのわずかながらも伝えようと思っている。  
貴君の詩は孟郊もうこうや賈島かどうの類ではなく、  
その師の韓愈かんゆのように悠然と流れる大河の勢いがある。  
古い寺で悲しく詩を吟じるなら、

それに応じて雪が漫漫と降り注ぐであろう。

こうして私と詩のやりとりをしたことを、

どうか忘れることなく、遠い将来も思い起こしてほしい。

【補足】〔(1) この詩は、黄州での日々を回顧したり、若い毛滂に向かって訓戒めいたことをいってみたりと、かなりごたごたしている上に、蘇軾の次韻の詩の一つの癖として、故事のてんこ盛りになっていて、かなり理解しにくい。恐らく、この詩の背景に蘇軾と毛滂の間では了解し合える何らかの事柄があつて、毛滂の心に響くところがあつたのだろう。毛滂との交流はこの後も長く続く。(2) 岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳解『蘇東坡詩集』（1927年）はこの詩に対して、「感雨の意義は消滅して余事続出、詩としての感興を求むるに苦しむ、蘇詩を扱ふもの取らざる所以である」と評している。本来は雨を主題にすべきであるのに、それからはずれたことをごちゃごちゃ詠んでいて、蘇軾の選集に入っていないのも当然だということである。そのように酷評されると取返して訳したくなるもので、かなり無理に文脈を整理してこの訳文を作ってみた]

## ■ 【09-1-036】送鄧宗古還郷

【解題】鄧宗古という当時評判になった孝子がいた。成都の近くの簡州の人で、父が亡くなると、墓の近くに廬を結んで朝夕に哭した。そのことが次第に人々に知られ、都にまで伝わり、政界の大長老の范鎮に招かれて上京した。ところが、折悪しく范鎮が亡くなってしまい [→作品番号 08-3-067]、鄧宗古はその恩遇を得ることなく郷里に帰らなければならなくなった。蘇軾は同郷の好ならびに范鎮との縁で、遠く杭州から鄧宗古に送別の詩を送った。蜀の名高い2人の親孝行者を引いて鄧宗古を讃えている。

【訳文】

こうかん せい と きょうし ごかん  
広漢[成都の一地方]に姜詩[後漢の人]がいて、

親孝行であることが村々に聞こえ、

やまいぬ とら せきが  
豺や虎のような赤眉の反乱軍も、

姜詩が、いる村を通るときには乱暴をしなかった。

その村にはいまも泉があるけれど、

孝心に感じて鯉が躍り出るようなことはもはやない。

なんてい り こう  
南鄭[蜀の東側の地]に李邵[後漢の人]という孝子がいて、

星の運行に通じ、

都からお忍びで二人の使者がきたときに、

流れ星を指さして、あらかじめこうなることを知っていたと告げて驚かせた。

李邵はしがない門番として官に仕えることもなく、

襜褕をまといなから、立派な宝玉[名声]を得た。

蜀の地にはすぐれた士が多く、

貴君はまさに姜詩と李邵の二人の後を継ぐ者である。

りんりん ちゅうぶん こうほんちん おひな  
凜凜たる忠文公[范鎮の諡]は世に埋もれた士を探し求め、

樵人や漁夫にも及び、

清らかな川辺で真に美味な水草[鄧宗古]を見つけた。

ところが、歳晩に至ってついにそれを食べることがなかった[范鎮の死をいう]。

はたして水草の心はいかなるものであるのだろうか。

【補足】[泉から鯉が踊り出るとは、姜詩の有名な故事である。姜詩は妻とともに病気の母に仕え、母の好物である魚を得ようと苦勞していたところ、家の近くに泉が湧き出して鯉が飛び出し、それからは毎朝鯉が得られるようになった。こんな話を信じ

る人がいたというのはいまとなっては不思議であるが、二十四孝の一つとして、日本でもよく教訓として引かれた]

### ■【09-1-037】参寥上人初得智果院、会者十六人、分韻武詩、軾得心字

【**解題**】参寥さんりょう [道潜どうせん]の久しぶりの登場。参寥とは廬山ろざんを出て後に別れ [→作品番号07-1-028]、杭州こうに来て再会した。再会はもっと早くに実現していたのだけれど、作品として残っているのはこれが最初である。参寥は10月に孤山こざんにある智果院ちかいんに入ることになり、16人の者が集まって参寥に詩を贈った。それぞれ韻を分けて詩を詠み、蘇軾には「心」の字が割り当てられ、それを「帰心きしん」の語に用いた。

#### 【訳文】

冬になると、

みなぎる水はもとの谷に帰り、飛ぶ雲はもとの山を思うという。

貴僧は家を忘れるべき僧であるのに、

なお帰ることを懐おもう心があるからなのだろうか、

孤山こざんの山あいゆうじゃくりに三間の幽寂ゆうじやくの場を得て、

数歩の地のうちせいしんに清深せいしん [仏教の真理]を蔵することとなった。

金きんを集めたような廬橋らんきょうの塢つづみ、

火を散らしたような楊梅やまももの林、

茶も筍もみな禅味ぜんみがあり、

松も杉もまことほうおんの法音を鳴らす。

雲のかかる崖さんりょうせんに湧く水を参寥泉さんりょうせんと名付けよう、

流れ下る甘い酒のような水は、

山を尋ねる人の心を洗ってくれるだろう。  
貴僧とともに嶺の上へと登るなら、  
老年に達しつつあることを忘れてしまう。  
ひと目の内に江湖を呑み、  
万象は遠い昔からこの湖の内に涵されているのだ。  
願うのは、  
もう一つ小さな部屋を築いてくれまいか、  
そこでざんばら髪となって自在に過ごすのだ。

## ■ 【09-1-038】 異鵲、并叙

【解題】 異れた鵲の詩。序文がある。

### 【訳文】

叙  
熙寧年間[神宗皇帝の治世]に、柯述[字は仲常]は漳州の副知事として飢饉を救い、民衆の信  
頼を得た。柯述が執務する庁舎に二羽の鵲が棲みつき、柯述が州を去るときに鵲もまた見送った。  
漳州の人々は鵲が異れていると感心した。そのことを詩に詠んだ。

昔、我が父は仁と孝を家においても実践した。  
家には五畝の園があり、  
桐の花が咲くころに玄鳳[鳥の名]が集まり、  
鳥と鵲が巢を作り、覗き見て手に取れるほどであった。  
思い出すのは、

群がる雛を親鳥が養うありさまを、私や児童たちが観たこと。

近所の人たちは、これは珍しいと驚き、

老人たちは笑って感心しながらこいつだ。

こそだて  
「いま乳哺のときで、

鳥は、鷹や蛇を非常に恐れます。

人の手足の及ぶところでは、

鷹も蛇も害を加えることはありません。

家の主人が信頼できる人であるのなら、

鳥も近くにたくさん集まってくるのです」

このことから私は、

まことのころ  
中孚化は鳥にも魚にも豚にも及ぶと知ったのだった。

か じゅうつ いにしほ じゅんり  
柯述は古の循吏[誠実な役人]で、

その至誠にふわついたところは一切なく、

しょう  
漳州に臨んでから、生命を全うさせた人民は、

河原の沙のように数え切れないほどであった。

柯述の仁心は人以外にも及び、

かきさぎ  
二羽の鶺鴒がその庁舎に棲みついた。

残念なのは、鶺鴒はものをいうことができなくて、

柯述に向かっていたた喳喳と鳴けただけだった。

善も悪も類をもって応じるとの古いことわざはうそではない、

見るがよい、こくり酷吏[悪辣な役人]には行く先々で、

ほかの雛鳥を食らう鬼車ふくろうが声を合わせて鳴くのである。

【補足】〔(1) 蘇軾の生家の庭に鳥が集まって巣を作っていたことについて、別の文

章では、蘇軾の母の心が鳥にも通じたと記していた [→作品番号 01-2-017]。ここではなぜか母ではなくて父になっている。事実としては、蘇軾が幼少のころは父は放浪の旅に出ることが多く、家のことは母に任せていた。ただ、父の至誠が母を感化し、それが鳥にも及んだと解することもできなくはないのかもしれない。(2) 善には善が応じ、悪には悪が応じるということで、循吏にはカササギ、酷吏にはフクロウが寄り添うといっているのだが、フクロウは最初から悪だと決めつけられている。フクロウを知恵の象徴とする文化もあるのだが。(3) どうしてこの時期に柯述かじゆつを詩に詠んだのだろうか。確かなきっかけは不明だが、すぐ後で見ると、蘇軾はこのとき柯述の事績を継ぐような取り組みをしていた]

### ■ 【09-1-039】次韻詹適宣德小飲異亭

【解題】都ぎよの御史台しだいで任に就いていた詹適せんてきが、何らかの理由で杭州こうに飛ばされたのだろう。西湖せいこを臨むそんでい異亭で蘇軾と酒を酌み交わして詩を詠んだので、それに次韻した。

#### 【訳文】

貴君は、都を追われて南方に流された李白りはくを夢に見たと詩に詠み、

私は、都を追われて帰郷した司馬相如しばそうじょを想う。

貴君も私も三度左遷され、

都から遠く離れたこの地いっそんで一樽をともにする。

ここでは、

川を遡る潮の音が雷のように白昼も轟き、

梅の枝に積もった雪のように黄昏ときにも花が輝く。

帰り行く貴君に降りかかる多情の雨、

それは御史台の軒からしたたり落ちたものだろうか。

【補足】[「川を遡る潮の音」とは、<sup>せんとうこう</sup>銭塘江の名物の<sup>かいしやう</sup>海嘯 [→作品番号 04-1-042 など] である。秋の大潮のときが最も激しく潮が遡り、この年は着任早々で海嘯をゆっくり見物する余裕はなかったようだが、翌年には見て詞を詠んでいる]

## ■ 【09-1-040】東川清糸寄魯冀州、戯贈

【解題】蘇軾が杭州副知事だったときから長い付き合いのある魯有開 [字は元翰] [→作品番号 08-1-038 など] はこのとき冀州知事を務めていた。蘇軾は蜀の東川の特産である絹糸を贈り、この戯れの詩を添えた。

### 【訳文】

東川の鵝溪で産する白い絹糸は氷のように清らかである。

溪の上には千年の藤が枝を交える。

藤は谷底に芽生え、風雪に耐えて歳を経て後に、

たちまち竜のように天へと昇る。

私はただの老いぼれ役人、

骨身にしみる寒さに、

布団にもぐっても背中に棘が刺さるような痛さを覚え、

布を被ることを望むだけだ。

髯自慢の貴君ときたら、

ますます貴く、福祿は川の水のように増すばかりだ。

酔って毛皮をさかさまに著けると、

下からは粋な模様の小袖が現れ出るという伊達男ぶり。

この絹糸はやたらに織ったり切ったりせず、  
そちらの佳<sup>よ</sup>い人の手にお任せしよう。  
遙かに想像するのは、  
清らかな暁に千騎を従えて貴君が出発するありさま、  
老いも若きも町をから<sup>ら</sup>ほし、  
積もった雪の上を静かに歩み行き、  
白い髯の男やら紅い帯の女やらが柳の下に集まると、  
貴君は東川の絹で作った小袖をちらりと見せるのだ。  
貴君の髯は確かに老いはしたけれど、  
町の人々は皆それを愛するのである。

【補足】[魯有開<sup>ろゆうかい</sup>の髯自慢を蘇軾はしばしば詩に詠んでいる]

## ■ 【09-1-041】 乞賑濟浙西七州状

【解題】11月、蘇軾は州知事として朝廷に幾つかの意見書を提出した。高麗国<sup>こうらいこく</sup>からの使者に対して手厚くし過ぎて民衆の大きな負担になっていること [→作品番号 07-2-070]、杭州<sup>こう</sup>周辺で飢饉が迫りつつあること、民衆を労役に駆り出す古い法を復活させたために問題が生じていること [→作品番号 08-1-020] などの諸問題を指摘している。ここでは飢饉対策を朝廷に提議した文書の一部を読んでおこう。表題にある七州とは、杭州<sup>えっ</sup>、越州<sup>しゅう</sup>、秀州<sup>こ</sup>、湖州<sup>じゅん</sup>、潤州<sup>じょう</sup>、常州<sup>こういん</sup>、江陰軍で、蘇軾はこの広範囲な地域の行政に関わる職務に就いていた。なお、具体策の部分は、訳者が当時の社会制度について無知であるために訳すことができないので割愛する。

## 【訳文】

げんゆう

りょうせつせい ろへい ぼ きんかつりゅう と かくがくし ろうほうろう

元祐四年十一月四日、両浙西路兵馬鈐轄竜図閣学士朝奉郎の蘇軾が書状をもって奏します。

せつせい

浙西の七つの州と軍からの報告によると、冬から春にかけて水が多く出たために、早い時期の稲の植え付けができず、五月から六月に及んで水は退きましたが、遅い時期の田植えのときに今度は日照りの害を受け、両者の稲がともに損なわれ、高い場所の稲も低い場所の稲も傷つき、民衆が食べつなぐのが今年は甚だ困難になってきています。今年の米はいま一斗九十銭になろうとしていて、裕福でない民は冬に入ってすでに飢え始めています。両浙の水郷地帯ではもとより麦を植えることが少ないので、来年の収穫は秋を待たなければならぬのですが、果たしてそのときに十分に稔るのかいまは全くわかりません。深く恐れるのは来年の春から夏のころに、飢饉と盗賊の憂いが起こることです。……[以下に、具体的な対応策を列举する]……

かつての熙寧年間の両浙の飢饉を調べてみますと、そのとき米は一斗二百銭にもなって、非常に多くの人が死に、老人たちはそのときのことをいとも涙を流します。いま米はすでに一斗が九十銭に及び、日照りの厳しさの勢いはまたにやまないので、深く憂慮しなければなりません。伏して仁聖の哀憐を望み、早く賑恤を行いますように。……

【補足】[熙寧年間の飢饉とは、蘇軾が杭州副知事時代に経験したことで、飢餓対策のために奔走したことを作品番号 04-2-096 以下で見ている。蘇軾はそのときの経験に基づき、早急の対応が必要であると判断して、朝廷に支援を求めたのである。後で見るように、朝廷もそれなりに対応してはくれたのだが、この後も天候の不順が続き、徐々に災害の傷は深くなってしまふのである]

## ■ 【09-1-042】 怡然以垂雲新茶見餉、報以大竜団、仍戲作小詩

【解題】かつて杭州副知事時代に親しくした僧に宝巖院の清順 [字は怡然] がいた [→作品番号 04-2-044 など]。清順から宝巖院の垂雲亭で栽培した新茶が贈られてきたので、宮中から賜った大竜団の茶をお返しに贈り、この戯れの詩を添えた。

【訳文】

なんとまあ、お供え物がお寺から逆にやってきた。  
この珍しいものは、どこぞのお偉いさんにもさしあげるとしよう。  
これは雀の舌のような細い芽を摘みとった茶。  
そのお返しにするのは、竜がわたかまるような大きな塊の茶。  
貴僧の庵は冬の暁にも暖かいけれど、  
都の建物では春風も冷たく吹いていた。  
いささか貴僧のお教えを請いたいと思うだけで、  
二種のお茶の味比べを望んでいるわけではない。

■ 【09-1-043】次韻王忠玉游虎丘絶句三首

【解題】王瑜おう じゆ [字は忠玉] から『虎丘こ きゆうに遊ぶ』という絶句が送られてきたので、それに次韻した。王瑜は公務で蘇州そに行き、町の外にある虎丘寺こ きゆう じを訪れて詩を詠んだのである。かつて蘇軾そが杭州副知事であったときに、王瑜の伯父である王誨おう かい [字は規甫]が蘇州知事で、虎丘寺において蘇軾と会う段取りになっていたのにドタキャンをするという事件があった [→作品番号 04-3-035]。そのことを踏まえた第一首だけを訳す。

【訳文】

其の一

かの年に私も虎丘寺こ きゆう じで大きな盃こに酒を浮かべたことがあった。  
そのときの老守ろう しゆ [王誨おう かい]は二丘に きゆう [虎丘こ きゆうと閻丘ゑん きゆう]の娛たのしみを得ていた。  
白髪となった私がまたきけると懐かしい人々 [王誨と閻丘]はいなくなってしまう、

ただ桂ねばの木ののむらががりと、小さな山しずかが幽に残りっているだけであった。

【補足】 [閭丘ろきゅうは人の姓で、名は孝終こうしゅうである [→作品番号 04-3-036]]

## ■ 【09-1-044】 和錢四寄其弟蘇

【解題】 詩の題にある錢四せんしは錢勰せんきやう [字の穆父あざな ぼくふ] [→作品番号 09-1-031] のこと。錢勰が弟の錢籛せんわに寄せた詩に和した。恐らく、このとき錢勰が杭州こうにきていて兄の詩を蘇軾に見せたのだろう。

### 【訳文】

私は(遡潮の)波頭に月が湧くの再び見ることになり、

貴君せんきやう [錢勰]は長く留せつこうまって浙江えつ [越州]の春を再び過することになった。

ともに維摩ゆいまの病やまいを作る [仮病]のを得意えいとしているだから、

この東西の二老人 [蘇軾と錢勰]は実に笑わらうべきである。

【補足】 [(1) 維摩ゆいまは釈迦しやかの弟子で、維摩が病気になったときに文殊菩薩もんじゆぼさつが見舞まいに行き、深い内容の問答を交わした。その故事に基づいて、最も話をしたい友を呼び寄せるために仮病を装うことを「維摩ゆいまの病やまいを作る」とこの詩では言い表している。実際にこのころ蘇軾は体調を崩していたようだ。(2) 錢勰せんきやうのいる越州えつは蘇軾のいる杭州こうから見て東南にあるので、「東西の二老人」といったのである]

## ■ 【09-1-045】 故周茂叔先生濂溪

【解題】 現代のわれわれは朱子学しゆしがくの祖しゆとんといえ、周敦頤あざな もしゆく [字は茂叔、号は濂溪れんけい]で、その弟子の程顥ていこう、程頤てい兄弟によって発展・展開しゆきし、朱熹しゆきが大成したと図式的に理解しているのだが、朱熹より 100 年早い蘇軾そくの時代にはむろんそのような認識があるはず

もなく、周敦頤はさほど目立たない儒学者であった。周敦頤は蘇軾が38歳のときに亡くなっていて、直接の交流はなかった。このころに周敦頤の次男の周燾しゅうとう こうと杭州で会ったことから、周敦頤の事績を詳しく知ることになったようだ。これは、周敦頤が廬山ろざんの蓮花峰れんげほうの下に結んだ廬いりの前の谷川れんけい〔濂溪〕について詠んだ詩。周燾は作品番号 08-3-007で触れたように、蘇軾が委員長を務めた科挙の二次試験の合格者である。なお、周敦頤の弟子の程頤と蘇軾が鋭く対立したことは作品番号 08-1-052などで見ている。

### 【訳文】

世俗の人は名めい〔官職の名称〕と実じつ〔官僚の実務的才能〕に眩惑され、

至人しじん〔道を得た人、周敦頤もその一人〕は、名も実もそもそもその有無からして疑う。

世俗の人は怒ると水中の蟹までも憎み、

至人の愛は屋上の鳥にも及ぶ。

周先生のお蔭で、濂溪の水はいまや先生と同じように尊ばれている。

先生はもとより完全な徳を具えられた人で、

清廉にして早々に官職を退かれたのは、その徳のほんの一端でしかない。

わずかな禄米を擲って退隠した陶淵明や、

間違った世に生きるくらいなら餓死するのがよいと山に入った伯夷、叔齊に、

いさかき似るのはたまたまのことである。

先生のことはいつか世に知られるところとなり、

この溪を、先生が名付けたままに濂溪と皆が呼ぶようになった。

先生は我等のような俗人の仲間ではなく、

造物者をも弟子とするような人である。

先生が溪に名を付けた心は、

とうだい りゅうそうげん  
 唐代の柳宗元が南方に流されたときに、

くけい  
 溪を愚溪と名付けたのと同じであったらう。

【補足】〔(1) 柳宗元は、蘇軾が黄州に流されたのと似て、時の権威者に嫌われて南方に追いやられた。そこで深い自省の日々を送って数々の作品を残し、韓愈と並ぶ唐代を代表する名文家と称されるようになった。その作品の一つに『愚溪詩の序』があり、自分の愚かさが溪にまで及んでしまうと記している。「濂」は、かすかな流れ、絶えだえな流れの意味であるから、「愚」と相通じるものがあるともいえようか。周敦頤がかすかな流れと卑下した学問の系譜は、後に朱子学の大河となった。なお、このころ蘇軾は柳宗元への関心を深めていたようで、そのことを記した文章を後に見ることになる。(2) 同じところに、周燾が杭州の天竺靈山教寺に遊んで詠んだ詩に蘇軾が次韻した作品が残っているが、訳者にはその面白味が汲み取れないので訳せない]

## ■ 【09-1-046】次韻子由使契丹至涿州見寄四首

【解題】皇帝の使者として契丹〔遼国〕に派遣された蘇轍は〔→作品番号 09-1-015〕、11月26日に涿州に至り、兄に詩を寄せた。涿州はすでに遼国の領域内で、遠く離れた南の杭州にいる蘇軾が弟のその詩をいつ詠んだのかわからないが〔蘇轍が帰国したと推測される翌年2月以降のことであるのかも知れない〕、それに次韻したこの作品は、あたかもスマホで瞬時に返したかのような内容になっている。弟のもとの詩は、涿州での所感を素直に詠んでいるのに対して、兄の詩は、次韻の詩によくある通り、韻に合わせて故事を引用していて、かなり苦しいこじつけもまざっている。4首のうち2首だけを訳す。

### 【訳文】

其の一

愚かな老人の僕は、

寒さを避けたいばかりにかつて契丹<sup>きつたん</sup>への派遣を辞退したのだが、

弟までも同じようにするわけにはいかなかった。

君はもうすぐ盧竜<sup>ろりゅう</sup>に至って古い塞<sup>とりで</sup>を見るだろうから、

燕国<sup>えんこく</sup>の太子を弔う文章を記して易水<sup>えきすい</sup>に投げ入れるとよい。

【補足】〔(1) 蘇軾<sup>りょうこく</sup>が遼国に派遣されるのを辞退したことは作品番号 08-3-010 で見ている。まさか寒さを理由に断ったわけではないだろう。蘇轍<sup>わか</sup>のもとの詩の第一首の冒頭に「少年病肺不禁寒、命出中朝敢避難」〔少<sup>わか</sup>い年に肺を病んで寒さに不禁<sup>よわ</sup>いのだが、命じられて中朝を出たからには敢えて難を避けるものではない〕と、涿州の冬の厳しさを歌っている。それに対して、南の温暖な杭州<sup>こう</sup>にいる己をやや自嘲的に詠んだのである。なお蘇轍が少年時代に肺を病んだことについては作品番号 06-1-085 で触れている。〕(2) 昔々の戦国時代に、涿州<sup>たく</sup>のあたりにあった燕国<sup>えんこく</sup>は西方の秦国<sup>しんこく</sup>の膨張拡大主義に苦しみに、秦国王〔後の始皇帝<sup>しこうてい</sup>〕を暗殺すべく刺客を送り込んだ。そのとき太子は易水<sup>えきすい</sup>のほとりで悲愴な覚悟の刺客を見送った。蘇軾のこの詩は、よもや弟に遼国王の暗殺を勧めるものでないだろうけれど、穏やかならざる雰囲気がないわけではない〕

其の三

君が毛皮をまとう姿はきつと美しいであろう。

遼国<sup>りょうこく</sup>の出迎えの人は、

しげば我等父子三人の文章について問うとのこと。

あちらの人は知らないのだ、

僕がもう老いて病み、全くの役立たずであることを。

僕はお上に願って鏡湖きやうこのほとりに隠棲することしか考えていないのだ。

【補足】〔(1) 宋と遼間そう りやうには頻繁に使者が行き来し、使者が国境を越えると接待役〔館伴使〕が出迎えて、都にまで案内することになっていた。蘇轍を迎えた館伴使は、しきりに蘇洵そ じゆん、蘇軾、蘇轍の三蘇の詩文について尋ねたという。(2) 鏡湖きやうこ〔鑑湖〕かん こが越州えつにある美しい湖であることは作品番号 09-1-010 ですで見ている〕

## ■ 【09-1-047】 書煮魚羹

【解題】蘇軾が自分で魚を煮て羹スープを作り、仲天貺ちゆうてんきやう、王箴おうしん〔→作品番号 09-1-028〕、秦覲しん〔→作品番号 09-1-016〕に振る舞ったことを記した短文。仲天貺は王箴とともに郷里からきた人物。

### 【訳文】

私は東の坡たかざひにいたころには、自分で鍋かまやらヒヤラきじを使って魚を煮て羹スープを作り、客人たちをもてなした。客人たちで善うまいといわない者はいなかった。それで、口腹の欲を最もたやすく満たしやすくしてくれるのは困窮であると知った。

いま錢塘せんとう こう〔杭州〕の知事となって、水陸の食べ物ちゆうてんきやうがふんだんにある。今日はたまたま仲天貺ちゆうてんきやう、王箴おうしん、秦覲しんてきと食事こういんをすることになり、かつての味の羹を作った。皆が、「この羹は超然として高韻があり、世俗の料理人がとても作れるようなものではありません」といった。

一年は残り少なくなり、集散は思い通りにならず、そのようなかきにあつて、皆で笑い合ったのである。

げんゆう  
元祐四年十一月二十九日。

【補足】〔三人が食べた羹スープの味はかなり微妙であつたのだろう〕

## ■ 【09-1-048】 燈花一首贈王十六

【**解題**】同じころに王箴<sup>おうしん あざな げんちよく</sup>〔字は元直〕に贈った詩。

【**訳文**】

燈火の先に溜まった蠟の花が次第に大きくなった。

立って欠けた月を見に出ると、

斜めになった天の川のかたわらにある。

そうか、瑞草橋<sup>ずいそうきょう</sup>のあたりでは、

この夜に燈火の花を指さしながら、

この老東坡<sup>らうとうば</sup>のことを噂し合っているであろう。

【**補足**】〔瑞草橋は郷里の眉州青神県にある橋である [→作品番号 08-3-019]〕

■ 【09-1-049】題燕文貴山水卷

【**解題**】北宋<sup>ほくそう</sup>の初めのころに燕文貴<sup>えんぶんき</sup>という画師がいた。その画に書き添えた短文。

【**訳文**】

私が錢塘<sup>せんとう とう</sup>〔杭州〕の副知事であったときに、師<sup>し</sup>と方外<sup>ほうがい</sup>の交わりを結び、この一巻を一年以上も借りた。

杭州を去るに当たって、巻の終わりに題を記して返却した。それから十六年になり、師が、「貴君の字は誰かに取られてしまいました」といわれたので、またここに書いたのである。

元祐<sup>げんゆう</sup>四年十二月四日。

【**補足**】〔ここに記されている「師」が誰であるかはわからない。蘇軾<sup>そうしつ</sup>が杭州副知事であったときに蒲宗孟<sup>ほ そうもう</sup>が所蔵する燕文貴<sup>えんぶんき</sup>の画を見て跋文を記しているが [→作品番号 04-2-049]、この「師」が蒲宗孟であるとは考えられない〕

## ■ 【09-1-050】 跋閻右相洪崖仙図巻

【**解説**】<sup>とうだい</sup>唐代の著名な画師である<sup>えんりつほん</sup>閻立本が描いた<sup>こうがい</sup>洪崖という仙人の画に、この文章を添えた。閻立本については作品番号 02-1-002 などで見ている。

【**訳文**】

<sup>こうがい</sup>洪崖先生はどこの人であるかはわからない。姓は<sup>ちやう</sup>張、名は<sup>うん</sup>蘊、字は<sup>あざな</sup>蔵真である。優れた<sup>せうしん</sup>風貌で、閑雅の趣を志し、<sup>かいげん</sup>仙書の秘典から九經、諸史に至るまで通じていないものはなかった。開元年間にすでに千歳であったとい<sup>いしほ</sup>うから、古からの仙人なのだろう。明皇[<sup>めいこう</sup>玄宗皇帝]はその神異を仰ぎ見て、しばしば<sup>みことり</sup>詔をもって招いたのだが、都には赴かずに、<sup>しゅうなんざん</sup>終南山、<sup>たいざん</sup>泰山、<sup>かざん</sup>華山、<sup>せいじやうざん</sup>青城山、<sup>おうおうざん</sup>王屋山に遊んだ。先生は<sup>とうだいし</sup>東大師と<sup>らだいし</sup>羅大師を連れて、いつも<sup>きんたん</sup>金丹華池[<sup>せん</sup>仙界の池]のことを話していた。仙薬の術を得てたやすく作るのだが、他の人はその微妙なところを究められなかった。先生は<sup>うぼう</sup>烏帽を載せ、<sup>こうしやうかつせん</sup>紅蕉葛衫を着て、<sup>うさいたい</sup>烏犀帯を付け、<sup>たんおつか</sup>短鞞靴を履いていた。五人の僕がいて、それぞれ不思議な<sup>きち</sup>姿で、<sup>じゆつ</sup>橘、<sup>そく</sup>朮、<sup>かつ</sup>菟、<sup>せつ</sup>拙と呼んでいた。雪精という<sup>せつせい</sup>白驢がいて、<sup>ほくろ</sup>一日千里を進んだ。また身に随えるものとしては、<sup>はくとうりゅう</sup>白藤笠、<sup>ろくかくおう</sup>六角扇、<sup>ぼくによい</sup>木如意、<sup>こうちくじやう</sup>筇竹杖、<sup>ちやうえい</sup>長盈壺があり、壺はいつも満杯で、自然と流れ出るのだった。白驢に跨り、僕を連れて市中に遊び、<sup>たけなわ</sup>酒酣になると大声で笑った。明皇は詔をもってその姿を描かせ、憧れをもって朝夕にそれを眺めた。

<sup>げんゆう</sup>元祐四年、<sup>とうぼ</sup>東坡蘇軾書く。

## ■ 【09-1-051】 記蘇秀才遺歛硯

【**解説**】<sup>そ きんしゆうさい</sup>蘇軾が使っている硯と墨について記した短文。硯は蘇鈞秀才から譲り受けたもので、蘇鈞がどのような人物であるかは不詳。硯は<sup>きゆう</sup>歙州の石で作られたもので、歙州の硯が珍重されたことは作品番号 07-1-036 で見ている。

【訳文】

蘇<sup>そ</sup> 鈞<sup>きん</sup> 秀<sup>しゅう</sup> 才<sup>さい</sup> は 歙<sup>しやく</sup> 州<sup>しゅう</sup> の 庶<sup>むずめ</sup> 民<sup>みん</sup> の 女<sup>にょ</sup> を 娶<sup>よ</sup> り、歙<sup>しやく</sup> 石<sup>せき</sup> の 佳<sup>よ</sup> い 朶<sup>た</sup> を 手<sup>て</sup> に 入<sup>い</sup> れ る こと が でき た。そ れ で 譲<sup>じやう</sup> ら れ た の が  
こ の 硯<sup>いん</sup> で あ る。絶<sup>じやく</sup> 品<sup>ひん</sup> と い わ け て は な い か、貧<sup>し</sup> 乏<sup>たい</sup> な 士<sup>ふ</sup> 大<sup>だい</sup> 夫<sup>ふう</sup> に と っ て は こ れ が せい ぜ い か の 及<sup>およ</sup> ぶ ところ で  
あ る。そ れ で も、墨<sup>ぼく</sup> を よ く 発<sup>はつ</sup> して 滑<sup>か</sup> っ て 潤<sup>じゆん</sup> い、こ れ 以<sup>い</sup> 上<sup>じやう</sup> に 求<sup>もと</sup> め る べ き も の は な い。物<sup>ぶつ</sup> と して 拔<sup>はつ</sup> 群<sup>ぐん</sup> で あ る な ら、  
そ れ を 貴<sup>き</sup> べ ば よ い の で、世<sup>よ</sup> に 出<sup>で</sup> 回<sup>わ</sup> っ て い る 他<sup>た</sup> の 物<sup>ぶつ</sup> と 精<sup>しやう</sup> 粗<sup>そ</sup> を 比<sup>ひ</sup> べ る の は 意<sup>い</sup> 味<sup>み</sup> が な い。欧<sup>おう</sup> 陽<sup>やう</sup> 公<sup>こう</sup> [欧<sup>おう</sup> 陽<sup>やう</sup> 脩<sup>しゅう</sup>]  
は、瓦<sup>わ</sup> の 破<sup>は</sup> 片<sup>ぺん</sup> で あ っ て も、墨<sup>ぼく</sup> を よ く 発<sup>はつ</sup> す る な ら 文<sup>ぶん</sup> 章<sup>しやう</sup> を 書<sup>か</sup> く の に 十<sup>じゆ</sup> 分<sup>ぶん</sup> 心<sup>しん</sup> 地<sup>ち</sup> よ い と い っ た。ま じ に そ の 通<sup>つう</sup> り で  
あ る。こ の 墨<sup>ぼく</sup> の 方<sup>ほう</sup> は 私<sup>わたくし</sup> の も の で、高<sup>こう</sup> 麗<sup>らい</sup> の 煤<sup>ばい</sup> と 契<sup>きやう</sup> 丹<sup>たん</sup> の 膠<sup>かう</sup> で 作<sup>さく</sup> ら れ た も の だ。

元<sup>げん</sup> 祐<sup>ゆう</sup> 四<sup>し</sup> 年<sup>ねん</sup> 十<sup>じゆ</sup> 二<sup>に</sup> 月<sup>げつ</sup> 二<sup>に</sup> 十<sup>じゆ</sup> 四<sup>し</sup> 日<sup>にち</sup>、東<sup>とう</sup> 坡<sup>ぱ</sup> 居<sup>く</sup> 士<sup>し</sup> 書<sup>か</sup> く。

■ 【09-1-052】 贈南屏謙師、并引

【解題】 南<sup>なん</sup> 屏<sup>びん</sup> 山<sup>さん</sup> の 謙<sup>けん</sup> 師<sup>し</sup> に 贈<sup>く</sup> っ た 詩<sup>し</sup>。短<sup>たん</sup> い 序<sup>しよ</sup> 文<sup>ぶん</sup> が あ る。

【訳文】

引<sup>いん</sup> [序<sup>しよ</sup> 文<sup>ぶん</sup>]

南<sup>なん</sup> 屏<sup>びん</sup> 山<sup>さん</sup> の 謙<sup>けん</sup> 師<sup>し</sup> は 茶<sup>ちや</sup> 事<sup>じ</sup> の 妙<sup>めう</sup> 所<sup>しよ</sup> を 得<sup>とく</sup> た 僧<sup>そう</sup> で、こ の よう に い っ て い る。

「こ れ を 心<sup>しん</sup> に 得<sup>とく</sup> て、そ れ に 手<sup>て</sup> が 応<sup>お</sup> じ る。言<sup>ごん</sup> 葉<sup>えつ</sup> で 伝<sup>でん</sup> え、学<sup>がく</sup> ん で 到<sup>たう</sup> る も の で は な い」

十<sup>じゆ</sup> 二<sup>に</sup> 月<sup>げつ</sup> 二<sup>に</sup> 十<sup>じゆ</sup> 七<sup>しち</sup> 日<sup>にち</sup>、私<sup>わたくし</sup> が 落<sup>らく</sup> 星<sup>せい</sup> 寺<sup>じ</sup> に 遊<sup>ゆ</sup> ぶ と 聞<sup>き</sup> い て、謙<sup>けん</sup> 師<sup>し</sup> は 遠<sup>えん</sup> く から 来<sup>き</sup> て 茶<sup>ちや</sup> を 設<sup>せつ</sup> け て だ さ っ た。そ れ で こ  
の 詩<sup>し</sup> を 贈<sup>く</sup> っ た。

道<sup>だう</sup> 人<sup>じん</sup> [謙<sup>けん</sup> 師<sup>し</sup>] は 暁<sup>せう</sup> に 南<sup>なん</sup> 屏<sup>びん</sup> 山<sup>さん</sup> を 出<sup>で</sup> て、

茶<sup>ちや</sup> 三<sup>さん</sup> 昧<sup>まい</sup> の 手<sup>て</sup> を 見<sup>み</sup> せ て だ さ っ た。

驚<sup>おどろ</sup> く と に、

た ち ま ち 「兔<sup>うさぎ</sup> の 毛<sup>もう</sup> の 斑<sup>まだら</sup>」 の 茶<sup>ちや</sup> 葉<sup>えつ</sup> が 現<sup>あら</sup> れ 出<sup>で</sup> て、

甕がから鵝じしゅ児酒のような茶が汲まれたのだった。

てんだいさん にゅうか  
天台山の「乳花の茶」は世にはもう見られないし、

ろどう  
盧全が七杯飲むと両腋に翼が生えるといった茶はもうないとされていたのだが、

実はここにあったのだ。

どうば ちゃきょう  
東坡先生にはかの『茶経』の続編を作ろうとの気があるので、

きっと老いた謙師の名は不朽のものとなるであろう。

【補足】〔(1)「兔毛斑とまうはん」は優れた茶葉の形状の形容を表す語。「鶯児がじ」は優れた酒の色合いの形容でそれを茶に転用した。「天台てんだいの乳花にゅうか」はよくわからないが、白い泡の浮かぶ茶が天台山でたてられたことがあったのだろう。唐代とうだいの盧全ろどうは茶の効用として、7杯飲むと翼が生えたような気分になるということを詩に詠んでいる〔→作品番号 04-2-078〕。(2) 唐代りくうの陸羽ちやきょうの著作『茶経』は茶について記した偉大な古典としていまも読まれている〕

## 第9章 最高の州知事——再びの杭州

[第9章その二]

げんゆう  
元祐5年 [1090年]、そしよく蘇軾55歳。

### ■ 【09-2-001】 与潘彦明

【こう解題】 ほんへい黄州で親しくした あざな藩丙 [字は彦明] [→作品番号 07-2-078] に送った手紙。

#### 【訳文】

長らくお手紙も差し上げずにおりました。御佳勝でありますことを切に思っております。わたくし老拙は何事もとのまです。かつて治めたところに知事として出て、湖山の楽しみをすぶる得ております。ただし、天災に傷つけられ、民を救うために働き疲れ、せいあん こう齊安[黄州]でのように おおい懐を放って たのし自得する楽しみはありません。貴君や友人諸公とお会いしたいとの思いが募ります。それはいつになりますやら、紙に臨んで もうもろ惘惘としてしまいます。新春であります、万万自重されますように。

### 【09-2-002】 臥病弥月、聞垂雲花開、順闍黎以詩見招、次韻答之

【すいうんてい解題】 この詩の題は、「月をまたがって病に臥せっていた。その間に、垂雲亭の花が開いたと聞いた。じゆんじやり順闍黎が詩で招いてくれたので、それに次韻して答える」。順闍黎 [闍黎は僧侶の尊称] とは ほうごんいん宝巖院の せいじゆん清順である [→作品番号 09-1-042]。

#### 【訳文】

どうじん道人[せいじゆん清順]の心は水に似て、  
あでやか花の妍さに照らされても、どうしん道心が きま凝げられはしない。

この春の半ばに座禅をすと、

清らかなかげ陰は月とともに遷ってゆく。

平生から、不生不滅ふしょうふめつ、あるいは一念の内に新旧が入れ替わるのを知り抜いている。

嫋嫋じょうじょうとして風枝は挙ふうしがり、[やわらかな風に枝があがり]

離離りりとして日萼にちがくは薫かげる。[じわじわと日が萼がくにかげがをつくる]

病中に詩を吟じるのは味わいが少なく、

老いてからの酔いハイテンションは顛テンには至らない。

人々がわざわざ迎えに出なければ、知事が遊びに行かないわけではない、

湖のなかには仙人のような僧がおられるのだから、いつでも行くのである。

【補足】[(1) 読み下し文で示した対句をはさんで、前半は清順のことを、後半は蘇軾自身のことを歌っている。(2) 終わりの部分は、たぶん、清順のもとの詩に蘇軾が花を見にくるのをたかさんの人が待っているといった内容のことが詠まれていて、それへの返事となっているのだろう。蘇軾せいじゆんは杭州副知事時代に、知事と牡丹を見物して帰ってくると、街中の人々が道に出て二人の姿を見物したという詩を詠んでいて [→作品番号 04-1-015]、たぶん、清順のもとの詩はそれを踏まえてもいたのだろう。それで、蘇軾は、人々が待っていてくれなくても清順一人のためにいつでも出掛けたいと思っているのだが、病気のためにやむをえず臥せっていると一言い訳しているのである]

## ■ 【09-2-003】太息一章送秦少章秀才

【解題】前年の4月に都を発しんてきってからずっと一緒だった秦覲あぎな [字は少章しょうしょう] [→作品番号 09-1-047] が郷里に帰ることになり、この文章を記した。途中で「大きく嘆息する」たいそく [太息] という表現があることから、この文章の題は『太息一章』となっている。

## 【訳文】

後漢ごかんの終ゆうわりに、孔融こうじゅうが盛憲せいげん [字は孝章あざな こうしょう]を魏ぎの曹操そうそうに推薦した文章に、

「盛憲はまことに男児の中の雄者であります。議論を得意とする者は誰もが盛憲によって名声を得ております。ところが、現在の若者は先に世に出た者を誹謗することを喜び、盛憲を批判してばかりいます。盛憲は天下に名を重かさげられるべき人物であって、中国の人々は誰もが賞賛する人なのであります」

とある。[盛憲は呉郡ごの太守として名声があり、このころ勢力を拡大しつつあった孫権そんけんに嫌われていた。

孔融は盛憲を救おうと曹操に推薦した。しかし、曹操が迎える前に盛憲は孫権によって殺されてしまう]

私は孔融の文章を読んでここに至ると、いつも書物を置いて大きく嘆息し、

「ああ、英偉奇逸えい い き いつの人物はいつも世俗から受け入れられないものであるのか。いまの世にも孔融や盛憲のような人はいるのだろうか、人を謗ることをもっぱらとする者もやはり腐った草木のように世の中に存在するのだ」

と、つぶやくのである。

昔、私が科挙れい ぶに挑み、礼部の試験らい ぶ [二次試験おうえんしゅう]を受けたときに、欧陽脩は私の答案を見て、

「これは私の弟子が書いたものだ。私はこれを避けなければならないまい」

と、いった。[欧陽脩は自分の弟子を首席にするわけにはいかないと、敢えてその答案を二位にした。

そのために、かえて弟子が首席になってしまった[→作品番号 01-2-012]]

まさにそのころは、士ひとは美辞麗句コビベを剽裂して文章を作り、欧陽脩が文学を改革しようとするのを挙げて非難していた。しかし、数年も経たないうちに、野に満ちていた水が谷に帰るかのように、そうした連中は一人もいなくなった。

同じようなことがまたおこるのだろうか。

私はもはや老い衰え、学問をしなくなり、己を見てまことに不満足である。それでも、天下の人々が私を棄てることなく、ともに文学を盛んにしていこうと思っているのは、いまもってやはり欧陽脩のお蔭なのである。

張耒[字は文潜]、秦觀[字は少遊]の二人は、士大夫の中でも超逸絶塵た者である。私一人がそのようにいうのではなく、何人もの者がこの二人にほとんど及ばないと思っている。しかし、人はかつて聞いたことのないものに接すると驚いてしまい、まともな判断ができなくて、いい加減なことを言いつのる。この二人や私はいつもそした目に遭っている。

歐陽脩はかつてこのようにいった。

「士が良質の金や美しい玉のように、市場できちんと値が定められるものなら、愛憎をもって良し悪しをこちゃこちやったりはしないだろうに」

秦觀の弟の秦觀は私に従って遊ぶこと一年になろうとしている。秦觀の議論は日々進歩し、その見識は用いられるべきものがある。秦觀は両親のもとに帰ろうとして、しかしここから去りかたしている。

ああ、君よ、行くがよい。帰って兄に学ぶがよい。私にはそれに付け加えるものは何もない。

私はこの『太息』の一篇を作り、旅立ちの錢とする。これは家にしまっておき、三年経ったら出して読むがよい。

元祐五年正月二十五日。

【補足】〔(1) この文章には、都で蘇軾が激しい批判にさらされたことが反映しているのだろう。3年後に読むようにと最後にいったのはなぜなのか。少なくともその間は学問に専念せよということなのか、3年もすれば批判の嵐も止むということなのだろうか。(2) 「私はもはや老い衰え、学問をしなくなり」と記したことに関連して、この時期に秦觀が見たとされる興味深いエピソードがある。蘇軾の一代下下の何遜が記した随筆『春渚紀聞』[→作品番号 06-5-027] から引用する]

### 【訳文】

何遜：『春渚紀聞』より

秦觀がこのようにいった。

蘇公〔蘇軾〕はかつて書物を観るみことの楽しみを語っていた。

「夜はいつも真夜中まで書物を読み、ひどく酔って帰ってきたときでも必ず書物を開き、疲れるまで読んでから眠ったものだ。しかし、お上のみことの詔こゝろによって黄州を出て仕事に戻ってからは、一字も観る間がなくなってしまった」

実際に私が公に従って杭州に行っていた間も、公が書物を開くのを一度も見たことがなかった。詩を賦したり文章を書いたりするときに故実を用いるのは、まるで目の前で見ているかのように事柄を熟知していた。それでも、私やその他の者に確かめさせてから人に見せるのだった。

【補足】〔蘇軾が書物を参照することなく故事を引用することは作品番号08-1-053でも見ている〕

## ■【09-2-004】 仲天貺、王元直自眉山来見余錢塘、留半歳、既行、作絶句五首送之

【解題】この詩の題は、「仲天貺と王箴〔字は元直〕は眉山から来て錢塘〔杭州〕で私と会った。留まること半歳で帰ることになったので、絶句五首を作って二人を見送る」。二人が杭州に来ていたことは作品番号09-1-028、09-1-047で見ている。

### 【訳文】

#### 其の一

仲君は豈弟がいていた多学〔柔和で様々なことを学び〕、

王君は清脩寡言〔すっきりとして言葉数が少ない〕。

病後の私はちょっとしたことにも驚いてしまう瘦せた鶴のようで、

時が来たなら大空を飛ぶおおどり鵬のように、はたしてなれるのだろうか。

【補足】〔「病後」とあるのは、先の詩で見たように体調不良が続いていたことを指す〕

## 其の二

海<sup>へり</sup>の縁のここへと貴君らが遠く訪ねくるのを煩わせてしまった。

貴君らと同じ長<sup>ちやうこう</sup>江の源から旅に出て、私はいまそのままになっている。

この数篇の詩を作って見送るのは、

万里の道を手ぶらで帰らせないためだ。

## 其の三

貴君らと秦<sup>しんでき</sup>觀君の三人はともに同じ舟に乗り、

月明かりのもとで高楼の下に停泊するであろう。

そのとき、一人ここに残った私は、

枕もとに潮の音が響くのを聞きながら、

三人の舟<sup>けいこう</sup>が京口に至ったかと遙かに想うのである。

【補足】[仲<sup>ちゆうてんきやう</sup>天<sup>おうしん</sup>貺<sup>しんでき</sup>と王<sup>こう</sup>箴<sup>ちやうこう</sup>は秦<sup>しんでき</sup>觀<sup>ちやうこう</sup>とともに杭州を去るのだろう。京口は大運河と長江の交差するところに位置し、そこから仲天貺と王箴は西に長江を遡り、秦觀は大運河を北上する]

## 其の四

貴君らをもっともっと引き留めたい……、

しかし、貴君らが故郷を出て年をまたいでいることを思わなければならぬ。

犀<sup>あいくるしい</sup>顛<sup>かお</sup>玉<sup>かお</sup>頬の子供らが、

髯<sup>ひげのおとう</sup>舅<sup>おも</sup>を懐<sup>おも</sup>って長く悲しくしているのたもの。

## 其の五

私のために遠くから丁寧な心を寄せてくれるのは、

ずいそうきょう  
瑞草橋のほとりの老人である。

その白髪に紅い帯が映え、

白い濁り酒に新春の光が浮かぶてあろう。

【補足】 [この詩に詠まれている「老人」とは王慶源おうけいげんであると、蘇軾自身の注記がある。眉州青神県び せいしんの瑞草橋ずいそうきょうに隠棲することになった王慶源に蘇軾が紅い帯を贈ったことは作品番号 08-3-019 で見ている]

## ■ 【09-2-005】 寄蔡子華

【解題】 上の詩に見た王箴おうしんに託して郷里さいうらにいる蔡褒あざな [字は子華し か] に寄せた詩。これより 22 年前の熙寧元年 [1068 年] 10 月、父の喪を終えて故郷から都に向けて旅立ったときに、眉州青神県び せいしんの蔡褒は荔樹れいじゆを自ら植えて、「この樹とともに貴君の帰りを待つ」といって、蘇軾を見送った。

### 【訳文】

なつかしい方々が、

私が東へ行くのを見送ってくださったときに、

貴君は手ずから荔子れいしを栽え、

私が帰るのを待つといわれた。

荔子はすでに丹い実をつけるまでになっているだろうけれど、

私の髪は白くなり、なお帰れぬ旅人として江南こうなんの地にいる。

江南の春は尽きようとしていて、

西湖せいこに船を浮かべるなら、水は天に溢れるばかり、

しかし、我が腸はらわたは断たれる——

想いみるのは、

青衣江せい い こう せい しん〔青神県を流れる川〕のほとりの路、

白い魚に紫の筍、

安かろうが高かろうが、とにかく旨いのだからと、

真白い髯ひげの三老人が味わっておられる。

三老人は霜を経た檜ひのきのようになお壮健である。

かつて交遊のあった人たちでいまも存命であるのは誰と誰であろうか。

昔々さいたく、蔡沢さいたくという人は占い師に己の運勢を尋ねたけれど、

蔡沢以上に長生きをしている貴君はもう訊くまでもない。

昔々さいけい、蔡経さいけいという人が心に想ったように、

仙女まこの麻姑まこの長い爪で背中を搔かいてもらうような快感を、

日向の居眠りいみりで味わって過ごすのがよいであろう。

【補足】〔(1)「真白い髯の三老人」とは、さいほう おうけいげん ようそうぶん蔡褒、王慶源、楊宗文であるという。王慶源は前の詩で見ており、楊宗文あざな くん そ〔字は君素〕もまた土地の名士であった。(2) 後半は、いつものように同姓の人の故事を用いて相手のことを歌ったもの〕

## ■ 【09-2-006】 烏夜啼

【解題】「遠く寄せる」との添え書きがある詞。「遠く」とは故郷のことで、上の詩に見た王箴おうしんと仲天賦ちゆうてんきように託して郷里の人々に贈ったのだらう。

### 【訳文】

莫怪帰心甚速、〔故郷に帰ろうとする心が、非常に速くへと行こうとするのを怪しまないでください〕

西湖自有蛾眉。<sup>せいこ</sup> [西湖を見ても私はそこに<sup>が びさん</sup>峨眉 山を見てしまいます]

若見故人須細説、[しも懐かしい方々があれこれ尋ねたなら]

白髮倍当時。[白髪が当時の倍になりましたといってください]

小鄭非常強記、<sup>しょうてい</sup> [小鄭はいつまでも覚えているわけではありません]

二南依旧能詩。<sup>になん</sup> [二南はそれでも昔のように詩を作ることができます]

更有鱸魚堪切膾、[故郷には刺身にして旨い魚がありますか]

児輩莫教知。[そのことはいわない約束にしてください]

【補足】 [後段の訳は自信がない。「小鄭」も「二南」も蘇軾自身を指すと解釈した。昔、鄭述祖<sup>ていじゆつそ</sup>という人は9歳のときに、その父が光州で石に刻んだ文章を記憶し、ずっと後になって自身が光州に赴任してその碑文を見て慟哭した。人々は父を大鄭<sup>だいてい</sup>、息子を小鄭<sup>しょうてい</sup>と呼んだ。蘇軾はその小鄭のように記憶をいつまでも保っておけないとこの詞ではいっているのだろう。かつて杭州には周韶<sup>しゅうしやう</sup>という詩が巧みな歌妓がいて [→ 作品番号 04-2-030]、二南<sup>になん</sup>と号していた。蘇軾は老いても、二南のように歌うことができるとこの詞はいっているのだろう]

■ 【09-2-007】 雪後、便欲与同僚尋春、一病弥月、雑花都尽、独牡丹在爾、劉景文左  
蔵和頌閣黎詩見贈、次韻答之

【解題】 この詩の題は、「雪の後に、同僚とともに春を尋ねようとした。病気で月を越えて臥せていた間に、様々な花は尽きてしまい、牡丹だけがあるのだった。劉季孫<sup>りゅうきそん</sup> [字は景文] が清順<sup>せいじゆん</sup>の詩の韻を使って詩を詠んで贈ってくれたので、それに答える」。劉季孫は作品番号 09-1-023 などで、清順の詩に蘇軾が和した作品は作品番号 09-2-002 で見ている。

## 【訳文】

花が散ってしまい、長い病<sup>やまい</sup>を怨まずにはいられない。  
 残っていた花も、続く雨に泣かされたことであろう。  
 人々は町<sup>から</sup>を空にして花を見に行っただけで、  
 知事のお出ましかなかったので拍子抜けしたに違いない。  
 貴君<sup>りゅうきそん</sup>[劉季孫]の詩は、花が尽きてしまった寂しさを歌っていて、  
 噛めば噛むほど味わい深くなる新鮮な食べ物のような。  
 浅い紫のあの花が争って早く咲いてしまおうが、  
 深い紅のあの花がたちまち色褪せてしまおうが、  
 それぞれに任せておけばよいだろう。  
 なぜなら、天が与えてくれたこの葩<sup>はな</sup>[牡丹]はなお萼<sup>がく</sup>が青くて、  
 国を代表するその色を外に現すのを、  
 白髪頭の人[蘇軾]がくるまで待っていてくれたのだから。  
 酒を用意して詩の將軍[劉季孫]を招こうではないか、  
 私のような腐れ儒者は本当に風雅を知る者ではないのだから。

【補足】[劉季孫のことを將軍と呼んでいるのは、劉季孫が両浙路の兵馬を管理する職にあったことと、父の劉平<sup>りゅうへい</sup>が壮絶な戦死を遂げ、その烈士の氣風を継いでいることによる [次の章でその事績を見る]。この後、頻繁に劉將軍と呼ぶようになる]

## ■ 【09-2-008】病後酔中

【解題】病の癒えた後で酔いに任せて詠んだ戯れの詩。

【訳文】

やまい  
病がいつまでもこの身に居座っていた。

久しぶりに酒を入れると、

頭ぼうぼうの中で蓬蓬と声がするかのようだ。

笑ってしまうのは、

せんとう  
錢塘十万户の民衆を、

かんけ  
官家[皇帝]はなんとまあこんな老書生に預けたのだ。

【補足】 [(1) 杭州こうの中心都市は錢塘せんとう県に属し、州の行政区域全域ではなく町自体を指すときには、蘇軾は多くの場合に錢塘と記している。とはいえ厳密に区別して使っているわけではない。ここで「錢塘十万户」といっているのは、かなり誇張した数字であろう。(2) 「笑ってしまう」とあるのは、都を出て以降、詩を作るのを控えていたはずの人物が吐く言葉とは思えないほどに放縦で、ようやく蘇軾らしくなってきたといえるだろう。一方で、公務にはごく真面目に奮闘中であったことを後に詳しく見る]

■ 【09-2-009】 跋焦千之帖後

【解題】 錢籛せんわ [→作品番号 09-1-044] が所蔵する冊子に記した跋文。それは歐陽脩おうようしゅうの弟子であった焦千之しゅうせんしの手紙を集めたものであった。

【訳文】

おうようしゅう  
歐陽脩が、

焦子皎潔寒泉水、[焦君は皎く潔らかなこと寒の泉の水のようだ]

と、詩に詠んだのは吾が友、焦千子[字は伯強]のことである。

徐無党[字は秦民]は済南の老先生で、錢翕[字は岳仲]は徐無党に師事し、徐無党は焦千子との間でやりとりした手紙を錢翕に示した。

焦千子が亡くなって十年になろうか。これを覽て悵然とする。

元祐五年二月十五日、書く。

【補足】[蘇軾が焦千之のことを「吾が友」といつているのは、杭州副知事だったときに交流があったからで、恵山寺の泉の水を焦千之に所望した詩がある [→作品番号04-1-037]]

## ■【09-2-010】南柯子

【解題】「晩春」という題が付いている詞。春の終わりのイベントとして寒食と清明があり、寒食の間は火を煮炊きに使うことが禁じられ、寒食が明けた清明の朝に最初に使う火を「新火」という。この詞には、そのような春のイベントを迎える歓びが詠まれている。

### 【訳文】

日薄花房綻、[軟らかな日に花がほろびます]

風和麦浪輕。[風はなごやかで、麦の浪が軽やかに動きます]

夜来微雨洗郊垌、[夜に降った小雨が郊外の景色を洗ってくれて]

正是一年春好、[まさに一年のうちの春の好いとき]

近清明。[清明も近いのです]

已改煎茶火、[茶を入れた火を改めて]

猶調入粥餉。[さらに粥を煮ましよう]

使君高会有余清、[知事殿の集まりは清らかで]

此楽無声無味、[この楽しみは声もなく味もなく]

最難名。[最も名付けにくいものなのです]

## ■ 【09-2-011】 次韻劉景文、周次元寒食同遊西湖

【**解説**】 劉季孫 [字は景文] [→作品番号 09-2-007] と周燾 [字は次元] [→作品番号 09-1-045] が寒食の日に西湖に遊んで詠んだ詩に次韻した。

### 【訳文】

柳絮が飛ぶ……

春の最もよい時節が過ぎ去って行く……

瀬を下る船のように、老いは速やかにやってくる。

酒を見て、もう寒食が終わって新火が過ぎたと驚く。

成都では杜甫にゆかりの浣花草堂での行事が行われているであろう。

山西の老将[劉季孫]の詩は誰も敵う者がなく、

洛陽の書生[周燾]の語はさらにあでやかである。

一緒に西湖の北の山に二士を訪ねたなら、

船の舵やら太鼓の音で、

二士の清らかな眠りを妨げしてしまうのではなからうか。

【**補足**】 [(1) この詩に新火が詠まれているので、詩を返したのは寒食が明けた翌日なのだろう。(2) 成都では杜甫がかつて住んでいた浣花草堂で1月2日から4月19日

までの間に様々な行事が行われた。故郷のことを想い、その流れで劉季孫と周燾の出身地を挙げて、二人を褒めている。(3) 終わりの部分は、ともに二士を訪ねようと蘇軾を誘ってきたことへの返事で、その二士とは清順〔→作品番号 09-2-002〕と參寥〔道潜〕〔→作品番号 09-1-037〕であることが次の詩からわかる]

■【09-2-012】連日与王忠玉、張全翁游西湖、訪北山清順、道潜二詩僧、登垂雲亭、飲參寥泉、最後過唐州陳使君夜飲、忠玉有詩、次韻答之

【解題】これは上の詩の続き。詩の題は、「連日、王瑜〔字は忠玉〕、張璣〔字は全翁〕と西湖に遊んで北山の清順と參寥の二人の詩僧を訪ね、垂雲亭に登って參寥泉の水を飲み、最後に唐州知事の陳師錫〔字は伯修〕の家に立ち寄って夜に飲んだ。王瑜が詩を詠み、それに次韻して答えた」。王瑜と張璣は官僚仲間で、垂雲亭は作品番号 09-2-002 で、參寥泉は作品番号 09-1-037 で見ている。陳師錫は唐州知事に任命されたので間もなく杭州を離れるのだろう。上の詩とのつながりからして、清順と參寥のもとには劉季孫も周燾も連れ立って行ったと推測されている。

### 【訳文】

北山は高いといってもそれまでのこと、

千仞もあったところで我が足の下におさまってしまう。

西湖は広いといってもそれまでのこと、

万象もすべてが我が目の内におさまってしまう。

いまは雲が深いけれど、

堤の上にいる人も見えるはずだし、

いまは風が静かであるけれど、

谷の間にこだまする響きが聞こえるはずである。

君も私も誰もが無心に歩くに任せて行くと、

目に竹が見え、

竹の間で詩が鳴るのが聞こえるようになる。

それは二人の僧の声、

その眼の光は湖よりも清らかである。

二人は首を振る間に百篇の詩を作り、

二老<sup>おうゆ ちやうじゆ</sup>[王瑜と張璠]もすくりにその後が続く。

なるほどここは仙界の池であったのか、

二羽<sup>せいじゆん きんりやう</sup>の白鳥[清順と参寥]が養われているのである。

山高いここで路が断たれ、

小さな垂雲亭<sup>すいうんてい</sup>に皆が膝を突き合わせる。

夜になって三尺の井戸<sup>さんりやうせん</sup>[参寥泉]を尋ね、

玉<sup>ぎよく</sup>のような水<sup>かめ</sup>を瓶に半分ほども飲み干す。

明日の朝になると町からは糸管<sup>し かん</sup>[楽器]の音が聞こえてくるだろう。

寒食<sup>かんしょく</sup>のときにも、楽しく歌う者もあれば悲しく哭する者もある。

知事殿<sup>ちん ししやく</sup>[陳師錫]はこの日することもなく座っていると、

招きもしないのに狂客[蘇軾等一行]が、

酒を満たした革袋を携えてやってきて、

啄木鳥<sup>きつつき</sup>のように門をけたたましく叩いたのだった。

この遊びも一瞬の後には過去になり、

覚めていようが夢を見ていようが、

どちらにしても永続することはない。

知事殿よ、

長江を渡って任地に行ってしまう前に、

さらに火を灯しての遊びをしようではないか。

どのような地位よりも楽しく笑うことの方がよいのだ、

百年の栄華を極めたところで、どうせ鬼籍[亡者の名簿]に入ってしまうのだから。

## ■ 【09-2-013】 書参寥詩

【**解題**】上の詩で見たように、寒食の翌日に、蘇軾は人々とともに孤山にある智果院に参寥[道潜]を訪ねた。この文章にはその折にあったことが記されている。

### 【訳文】

私が黄州にいたときに、参寥は呉中[杭州]から来て訪ねてくれ、東の坡に滞在した。

ある日、夢の中で参寥が詩を作るのを見た。目覚めてから覚えていた二句を記した。

寒食清明都過了、[寒食も清明もすべてが過ぎようとしていて]

石泉槐火一時新。[石の泉の水も、槐の枝でおこした火も、みな新しくなる]

それから七年後に私は銭塘[杭州]の知事となり、参寥は初めて西湖の智果院に居を定めた。智果院には泉があり、水は石の間を縫って流れ、甘く冷たく、茶によいものだ。

寒食の翌日、私は客人と舟を湖に泛べ、孤山から参寥に会いに行った。参寥は泉を汲んで火を付け、黄蘗茶を煮てくれた。そのときにはっと夢の詩を思い出し、七年前にいまのことを詠んだのだと知った。客人たち皆驚いた。いろいろな書物に伝わる不思議なことも実は虚語ではないのだらう。

元祐五年二月二十七日。眉山の蘇軾、書く。

【補足】〔(1) 参寥さんりょうが智果院ちかいんに入ることになったのは今年の10月で〔→作品番号09-1-037〕、建物が完成して実際に住まうようになったのはここにある日付の2日前の2月25日であったという。(2) 参寥の詩の二句目に「新」の字があるのは、茶を沸かすための火を、寒食かんしよくの翌日につける最初の火である「新火しんか」と見立てたものであろう。(3) 丹念にこの『自由訳』を読んでこられたなら、ほぼ同じ文章をすでに見ているのを出されるであろう。作品番号06-4-014として訳出した『参寥泉銘さんりょうせんめい』で、それは実はこれより2年後に書いたものである。蘇軾は夢の話が好きで、人々を喜ばせるために二回語り、かつ書いたのだらう〕

## ■ 【09-2-014】 竜井題名

【解題】王瑜おうゆ、張璠ちやうじゆ、周燾しゆうとうとは気が合ったようで、しばしば一緒に行動している。これは西湖せいこの西の風篁嶺ふうかうれいの近くにあった竜井りゆうせいを訪れた記録。竜井には、蘇軾こうが杭州副知事であったころに親交があった弁才大師べんさいだい元浄しげんじやう〔→作品番号04-2-053、06-1-081〕が退居していた。

## 【訳文】

元祐庚午げんゆうこうご、弁才老師べんさいらうしは八十歳になった。僧侶も俗人も一緒になって慶賀し、袈裟千枚を差し上げ、七日間にわたって千人の僧に食事を振る舞った。眉山びざんの蘇軾らくやう、洛陽おうゆの王瑜あんりく、安陸ちやうじゆの張璠きやうこう、九江しゆうとうの周燾きやうめいは郷銘おく〔香りのよい茶〕を餽みそかった。二月晦日みそかに書く。

## ■ 【09-2-015】 竜華題名

【解題】これは少しメンバーを入れ替え、楊傑ようけつ〔→作品番号09-1-024〕が加わって竜華寺りゆうわを訪れた記録。竜華寺りゆうわは杭州の町の南にある山の一つ竜華山りゆうわざんにある寺。

## 【訳文】

蘇軾、王瑜、楊傑、張疇がともに竜華に遊んだ。元祐五年庚午の歳、三月二日、題す。

## ■ 【09-2-016】 題劉景文所歐陽公書

【解題】これは、楊傑 [字は次公] とともに、劉季孫 [字は景文] [→作品番号 09-2-011] の家を訪ねて記したもの。病も全快し、久しぶりの杭州の春を満喫しようとしたのか、蘇軾はしばし西湖畔に遊んでいる。

## 【訳文】

欧陽脩の書をこれまでにいろいろなところで見てきた。十のうち八ないし九まで、官職を厭い、帰隱を願うといったことが記されている。士大夫は進みやすく、退き難いことがよくわかる。後生の者が立身出世に汲汲とするのを戒めるものとなるう。

元祐五年三月八日、たまたま楊傑とともに劉季孫を訪問したところ、劉季孫はこの書を出してきた。私も楊傑も欧陽脩にかつて会ったことがある。楊傑は欧陽脩の抵掌談笑[ユーモアに溢れた話しぶり]を見習っているのだらう、いつも人を感心させるものがある。

【補足】 [劉季孫が欧陽脩の書を所蔵していることは、すでに作品番号 09-1-023 でも見ている]

## ■ 【09-2-017】 題万松嶺恵明院壁

【解題】万松嶺にある恵明院の壁に記した短文。万松嶺は杭州の町の南端にある和寧門の外側の西嶺の上にあつて、道を挟んで松が植えられていたのでこの名があるという。

【訳文】

私が一度ここから去って十七年、<sup>ほうじょう ちやうせい と たんよう ちん ほ し</sup>彭城の張聖途、丹陽の陳輔之と一緒にまたここに来た。

<sup>けいめい いん ぼんえい</sup>恵明院の僧の梵英が屋根を葺いて堂宇を修繕したので、以前よりも堂々として清らかになった。

梵英は非常に香りの高い茶を出してくれた。

「これは新茶でありましょうか」

と、尋ねると、梵英は、

「茶の性として新旧を交えると、香りも味もまたよくなるものでございます」

と、いった。

私はかつて琴についてよく知る者に会ったことがあり、その人は、

「琴は百年くらい経たないと、<sup>どがったせいかく</sup>桐の木にもとの生意が尽きることなく残っています。琴の音の緩急清濁は、桐が雨に撃たれ日光にさらされ寒暑に耐えてきたことと必ず呼応します」

と、いっていた。

琴のこの理は<sup>ことわり</sup>茶とも近いものがあるのではなからうか。それで二つのことを並べてここに記しておく。

【補足】 [(1) ここに記されている<sup>ほうじょう ちやうせい と</sup>彭城の張聖途とは誰なのか。蘇軾が<sup>じよ</sup>徐州知事であったときに親しくした<sup>ちやうてん き あざな せい と</sup>張天驥 [字は聖塗]、すなわち<sup>ほうかくてい</sup>放鶴亭の主人である [→作品番号 05-4-106 など]。蘇軾と 11 年ぶりに会うために<sup>こう</sup>杭州に来たのだろう。彭城 [徐州] からなら都の方が近いのだが、朝廷の高官であったときには会うのが憚れたのだろうか。(2) もう 1 人の同行者は<sup>たんよう ちん ほ</sup>丹陽の陳輔 [字は<sup>ほ し</sup>輔之] で、その人となりは次の文章に記されている。丹陽は<sup>ちやうこう</sup>長江より南の大運河沿いの町で、蘇軾は何度も訪れているから、以前から交流があったのだろう。この 2 人に限らず、杭州知事となった蘇軾のもとにはいろいろな人が頻繁に訪れ、蘇軾の詩文は都にいたときよりも精彩に富んでいる。

(3) 琴に使われる桐について記した文章を作品番号 06-2-031 でも見ている」

## ■ 【09-2-018】 陳輔之不娶

【解題】 上で見た陳輔〔字は輔之〕について記した短文。必ずしも同時期に書かれたものではないが、ついでに掲げておく。

## 【訳文】

九江出身の陳輔には、昔々の廉潔の士である於陵の陳仲之の節操が具わっている。ただし、陳仲之と違って妻を娶らず、子もない。

陳輔はいう、

「それはむしろ私の罪です」

「貴方には養子があるのではなかったのでしょうか」

「います」

「だったら、唐代の元徳秀や元結と同じではありませんか」

陳輔は笑って、

「昔を見たら、賢人はたくさんいます。似たところがあっても自分が賢人であるとは限りません。それにつけても、陶淵明はわけのわからないことをいっています。飢えに耐えながら、昔の賢人を思うと、人を飽かしてくれると……」

陳輔はいまは丹陽の南郭に住んでいる。

【補足】 [(1) これは、蘇軾流の知的ユーモアを味わうべき短文であるのだろうが、訳者は知的レベルが違い過ぎるので、かなりの意識をした。(2) 於陵の陳仲之は『孟子』に出てくる廉潔の士。ただし、人間社会の改良を目指す孟子は、陳仲之のことを蚯蚓のような奴だと批判している。それを引き合いに出して、同姓の陳輔を讃えるというのが蘇軾流のユーモアなのだろう。(3) 陶淵明は、昔の人の優れた言葉を聞

くと、心を満たしてしばし飢えをも忘れられるということをいっている。(4) 陳輔は

たんよう なんかく 丹陽の南郭なんかく しに住んだことから、南郭子と号したという]

■ 【09-2-019】 次韻送張山人歸彭城

【解題】 ちやうさんじん 張山人、ちやうてん き すなわち張天驥 [あざな せい と 字は聖塗] がほうじやう じよ 彭城 [徐州] に帰るのを見送った詩。

【訳文】

羨ましいのは、

繋がれることのない小舟のような貴君の身、

ふかぶか せんとう こう 飄蕩と錢塘[杭州]にやって来て十日ばかりを遊んだ。

水は禅心を洗うためのもの、

貴君の眼はすっかりきよ浄められた。

山は詩筆に供えるためのもの、

貴君の眉はすっかり愁いを帯びたのだった。

雪の中で興に乗じてこちらに来ようとしたのは、

ほんの思い付きであったのだらう。

春が終わって帰ろうとするのは、

もうはっきりとそう思い定めたのである。

私はいつしかはんれい范蠡のように、

官職などは投げ棄てて鮮やかに実業家に転身し、

一万匹の魚を養う池、一千本の橘を植えた林を持つ身にもなりたいと、

思ったりもしているのだが、

はて、どんなものだろうか。

【補足】[最後に<sup>はんれい</sup>范蠡を持ち出したのは唐突な感じがするが、<sup>ちやうてん き</sup>張天驥との間でそのような会話が交わされていたのだろう。范蠡は、<sup>えつおうこうせん</sup>越王勾践に仕えて仇敵の呉を滅ぼしたが、勝者となった越王がすぐに驕った態度を見せるようになったために、越王のもとを去って実業家に転身して大成功した。蘇軾にとって范蠡は気になる人物であったようで、范蠡の生き方に批判的な文章と好意的な文章を記している [→作品番号 01-2-013、02-1-005]。官界でつまらない争いに巻き込まれている蘇軾は、時折、先祖と同じく商人としての人生もあったのではないかと夢想することもあったのだろう。官員であろうが商人であろうが、どちらにしても繋がれない小舟<sup>きょしゅう</sup> [虚舟] の張天驥とは無縁であろう]

## ■ 【09-2-020】 聖散子後叙

【解題】ここまでの一連の詩文だけを見ると、蘇軾はひたすら春の遊びに興じているように思えてしまうのだが、実際には州知事としての仕事に精力的に取り組んでいた。公人として何をしていたのか、その概要を知るために、弟の蘇轍が後になって記した『<sup>ぼうけい し せんたんめい ぼ しめい</sup>亡兄子瞻端明墓誌銘』から関連する箇所を読んでおこう。

### 【訳文】

<sup>そ てつ ぼうけい し せんたんめい ぼ しめい</sup>  
蘇轍：『亡兄子瞻端明墓誌銘』より

<sup>げんゆう こう</sup>  
元祐四年、兄は杭州に着任した。土地の役人や民衆は兄の政治にかねてから馴染みがあったので、何の苦勞もなく治めることができた。

たまたまひどい日照り<sup>とし</sup>の歳に当たり、飢饉と疫病の流行が同時に起こると予測された。兄は朝廷に願って国庫に納めるべき米のうちの三分の一を免じてくれるよう願った。そうすれば米価の高騰を防げると

考えたからだ。また度僧牒<sup>ど そうぢょう</sup>[正式の僧侶であることを国が認める認可状。寺院側はそれを得るためには金銭を納める必要があり、このころは1枚が錢170貫に相当した]を国から百枚得て、米に換えて飢えた者を救おうとした。

明るる年の春になると、常平米<sup>じょうへいまい</sup>[倉庫に蓄えていた米]を放出して米価を下げ、民衆は日照りの苦しみを免れることができた。また、兄は、粥と薬をたくさん用意し、役人とともに医者を派遣し、病人を収容する小屋を作って治療に当たさせた。それで生き延びた者が大勢いた。兄は「杭州は水と陸が接するところで、他の土地よりも疫病で死ぬ者がいつも多い」と考えていて、寄付金二千貫を集め、それに私財から五十両を加えて病院を作り、若干の資金と食糧を蓄えて、いつでも疫病の発生に備えられるようにした。その病院はいまでも続いている。

秋には大雨となり、太湖が氾濫して農地に被害が及んだ。兄は翌年には必ず飢饉がくると予測し、朝廷に、国庫に納める米の半分を免除し、多数の度牒を出してもらえるよう要請した。それによって常平米や備蓄米を買い入れて、翌年には安く売り出せるよう準備しようとしたのである。朝廷は兄の要望の多くに従い、呉越<sup>ごえつ</sup>の民は流散することを免れた。

杭州はもともと川と海であったところで、水に塩分が混じり、人が住める場所が少なかった。唐の時代に知事の李泌<sup>りひつ</sup>が始めて湖の水を町に引いて六つの井戸を作り、人々は十分に水を使えるようになり、それで井戸の周囲に人が集まり住むようになった。次いで、白居易<sup>はくきょい</sup>が西湖を浚い、西湖の水を運河に入れ、運河から田に入れ、一千頃<sup>けい</sup>の農地に灌漑水がゆきわたるようになった。湖には水草が多く生えるので、唐代から錢氏<sup>せん</sup>の呉越国<sup>ごえつこく</sup>の時代にかけては、毎年水草を刈って、湖の水域を確保していた。ところが、近年はそれをしなくなったために、湖はどこも水草で覆われ、水域がほとんどなくなってしまいくらいになった。それで運河に湖からの水が行かなくなり、川から水を入れるようになった。その水には潮とともに上がってくる砂が混濁しているために、運河で船が航行できるようにするには三年に一度は浚渫しなければならず、町にとって大きな負担となっていた。また六つの井戸もほとんど涸れかけてしまっていた。

兄は杭州にくると、茅山ぼうざん えんきうと塩橋の二つの運河を浚渫し、茅山運河にはもつばら川の水を入れ、塩橋運河にはもつばら湖の水を入れるようにした。さらに水門を設けて湖水の流出を少なくし、潮水が町に入らないようにした[これによって砂の堆積が防げるようになった]。また六つの井戸を修復し、民衆は利便を得られるようになった。

兄はあるとき西湖のほとりに行ってじっと観察し、「よし、水草を取り除こう。水草は大量にある。除いたものをどこに置けばよいのか。この湖の大きさは南北三十里、一日で湖を一周するのは難しい。もし取り除いた水草と泥で、湖を南北に貫く堤を作ったならば、水草はなくなり、通行の便もよくなるだろう。呉の人は菱ひしを植え、春には菱を刈り取って一寸の草も残さないという。水草を除いた後に、人を募って菱を植えさせたなら、菱の利も出ると、湖の手入れも行き届き、湖がまた埋もれてしまうようなことはなくなるだろう」といった。

それで、飢饉の救済の後に残った銭と穀物を使い、また朝廷から僧度牒百枚を得て、労働者を集めた。こうして堤ができてあがると、その上に芙蓉や楊柳を植え、画のような景色ができてあがった。杭州の人々はそれを「蘇公堤そこうてい」と名付けた。

【補足】[(1) 蘇軾は赴任してすぐに、翌年の飢饉と疫病に備えなければならないと考え、対応策をまとめて朝廷に提議していた [→作品番号 09-1-041]。蘇軾の基本的な考え方は、実際に被害が生じてから対応したのでは、民衆の害も大きく、国の出費も多くなるので、早くに手を打つことが肝要であるとするものであった。(2) 前回の副知時代に水利事業に取り組んだ経験 [→作品番号 04-2-031] を踏まえて、より大規模な土木事業を計画し速やかに実施した。運河の浚渫は早くも昨年10月に着手している。最後に記されている「蘇公堤そこうてい」は現存し、西湖の美しい景観のシンボルとなっている。

(3) 『墓誌銘』にはさらに以下の二つの事績が記されている。①高麗国こうらいこくとの関係は慎重かつ控え目にすべきであると朝廷に具申した。先年、高麗国の王子の義天ぎてんが杭州を訪問し [→作品番号 07-2-060]、その縁を通じて高麗国側に若干の動きがあった。蘇軾

は高麗国の使者を手厚くもてなすことを批判していた [→作品番号 07-2-070] ように、改革政治が進めていた積極的な外交は危険であると考えていた。②<sup>せんとうこう</sup>钱塘江の河口を南北に横切る航路が物資の輸送に重要な役割を果たしていたが、複雑な潮流によって海底に貯まる土砂が予測できない動きをするために船が座礁する事故が頻繁に起きていた。そこで蘇軾は土地の人々の知恵を結集して、新たな運河を開いてその危険な航路を使わなくてすむような計画を立案した。それはなかなかには壮大な土木事業であったために、蘇軾の在任中に実現するには至らなかった。(4) 上に記されている飢饉対策、疫病救済、土木事業の3点について本章ではこの後より具体的に見てゆくことになる。蘇軾は短期間に数々の施策を打ち出し、その多くを成功させたのには、次のような要因があったと考えられる。①先に副知事として赴任していたことから、杭州について熟知し、社会の各層との人的つながりもすぐに強く確保することができた。一般的に、知事などの高位の官僚は中央から派遣されてせいぜい3年程度しかいないために、土地に長くいる下位の官吏に依拠しなければ何もできず、独自色を出すことが難しかった。②すでにいくつかの地で知事を歴任し、また<sup>こう</sup>黄州流謫の日々も過ごして、地方の実情をよく知り、何が有効な施策でどのように実施すればよいのかを知っていた。③<sup>こうたいこうたいごう</sup>高太皇太后の強いバックアップがあった。蘇軾が朝廷に要望したことは、その多くが例外的に迅速に聞き入れられた。ただし、朝廷としては認めても、間に入る政敵が不誠実な対応をして、事がうまく進まないこともあった]

【**解題**】この項の表題に掲げた<sup>せいさん し こうじょ</sup>『聖散子後叙』は、この春に実施した疫病対策に関係することをほぼ1年後に記したものである。蘇軾は「聖散子」という薬の宣伝文である『聖散子叙』[→作品番号 06-4-025]を先に書いているので、「後叙」というのである。

## 【訳文】

聖散子せいさんしが効果を及ぼす病気が一つではなく、効き目はいろいろである。

去年の春、杭州の民の間で病気がはやり、この薬で全快した者が大勢いた。

用いた薬は上品質のものではなかったのだが、千錢で1日千服分が得られ、千人を救うことができた。

こして数を積み上げていったので、その利は非常に広く及んだ。

人が自分の力でできる範囲で恵みを施そうとすると、そこには限界がある。もしもたくさんの方が力を合わせるなら、よく利を成す人が大勢になって、その行為も長く続く。そこで、誠実な人間りゅうげんいんを楞嚴院に集めて研修を行い、立春の後から薬を施し始め、翌年の春と夏の境目にまで及んだ。それに参加した人の名は本院に送った。

昔、印度の薄拘羅尊者は、訶梨勒かりろく〔薬になる果実〕を一人の病気の比丘びくに施し、その報いを身に受けて、一切の病気にならなかったという。だから、己の力に従って人を助け、大勢の人に薬を施したならば、どれほどの功德があるのかわからないのである。仁のものは惻隱の情であり、それが善をなす因ともなるのだ。

呉郡の陸広秀才りくこうしゅうさいはこの薬の作り方と施し方を智蔵院の禪月大師宝沢ちぞういん ぜんげつだいし ほうたくに倣った。宝沢は土地の僧である。そして、陸広はいまでは都の麦曲巷ばくきょくこうに住んで、この薬を施している。

【補足】〔疫病対策は、安価な薬をたくさん作り、大勢の人を動員して、広くかつ長期的に実施して行くことが大切であると強調しているのは、注目すべきであろう〕

## ■ 【09-2-021】新茶送籤判程朝奉、以饋其母、有詩相謝、次韻答之

【解題】杭州の役場に勤める程之邵こう ていししやう あぎな じゆんげん〔字は遵彦〕に、その母に飲ませるように新茶を贈ったところ、謝礼の詩が届き、それに次韻した。程之邵は評判の親孝行者で、それで特に新茶を贈ったのである。

【訳文】

昔、母が手ずから縫ってくれた官服に感謝する詩を詠んだ人がいた。

昔、他所で馳走になった肉を母のためにと、食べずに持って帰った人がいた。

昔、母の喜ぶ顔を見たいかために公平な裁判に努めた人がいた。

昔、母がいれば貧しくともよく、母が亡くなった後ではどれほどの高禄も要らないといった人がいた。

この茶は、まさにそのような貴君のためのものだ。

いわゆる「試焙<sup>しばい</sup>」という今年最初に火の前<sup>まへ</sup>にきた茶葉で、

お上が近臣に配るために取り置くような絶品である。

貴君を通じて私も母君に奉じるならば、

私と貴君はもはや兄弟のようなもの、

退隠した後に林中で茶を飲み合うときのよき思い出話となるであろう。

■ 【09-2-022】 次韻林子中、王彦祖唱酬

【解題】 林希<sup>りん き</sup> [字は子中<sup>あぎな しちゆう</sup>] [→作品番号 05-5-076] が潤州<sup>じゆん</sup>で王汾<sup>おうふん</sup> [字は彦祖<sup>げん そ</sup>] に寄せた詩に次韻した。王汾は前年末まで南方<sup>めい</sup>の明州の知事を務めていたが中央に召され、旅の途中で潤州知事の林希に会ったのである。

【訳文】

ずっとずっと前からわかっていたはずだった、

人の身などはひとつの漚<sup>あわ</sup>に寄せるようなものたということは。

ところが晩年に及んでみると、

木の葉を落とす風にいまさらながら驚かすにはまられない、

過去、現在、未来の三世の事を論じ合ったのは昨日の夢のよう……。

それでも、なお喜べるのは、

かのときの五人が老年の寒風のなかでもまだこしていられること。

いまも、貴君らの座を雨あか<sup>はくござん</sup>の北固山が囲んでいることだろう。

こちらでは、春も終わろうとして西湖の水の色が空を映し出している。

我等にはかの賀知章<sup>がちしやう</sup>よりも少しは勝るところがあるのだろうか、

老いた眼でもって官界<sup>あか</sup>の紅い塵をまだ見続けていて。

【補足】〔(1) 潤州<sup>じゆん</sup>で詠まれた詩が蘇軾のもとに届いて、次韻した詩が先方に届くまでにどれほどの時間がかかったのかわからないが、この詩は瞬時に行き来したかのよう<sup>じゆん</sup>に詠まれている。(2) この詩の背後にはいくつかの事情がある。「木の葉を落とす風」の句には、「近頃、孫覚<sup>そんかく</sup>、李常<sup>りじやう</sup>が亡くなったと聞いた。それでこの句がある」との蘇軾自身の注がある。孫覚は最後には政敵となったが長い付き合いのあった人〔→作品番号 07-2-002、08-3-046 など〕で2月3日に、李常は黄州流謫<sup>かうしゅうたたく</sup>の時代に深い付き合いのあった人〔→作品番号 08-3-034、06-3-048 など〕で2月2日に亡くなった。(3) 「かのときの五人」については、やはり蘇軾自身の注で、「林希<sup>りんき</sup>、王汾<sup>おうふん</sup>、顧臨<sup>こりん</sup>、胡宗愈<sup>こそう</sup>、蘇軾は一緒に試験<sup>けいとくじ</sup>を景德寺で受け、いまも皆が健在である」と記している。景德寺での試験とは都で行われた科挙の一次試験で、これより34年前のことであった〔このときに最終試験まで合格したのは5人のうちの林希と蘇軾だけだったようだ〕。なお、胡宗愈の名は作品番号 09-1-001 で見ている。(4) 北固山は潤州にある有名な山。(5) 最後に唐代<sup>とうだい</sup>の賀知章<sup>がちしやう</sup>を引き合いに出したのは、賀知章は作品番号 08-3-032 などでも触れたように都を去って故郷に隱棲したのに対して、3人がまだまだ官職にあるのは何たることかと自嘲するのである〕

## ■ 【09-2-023】 寿星院寒碧軒

【**解題**】<sup>ほううんざん</sup>宝雲山の<sup>かつれい</sup>西の<sup>じゅせいいん</sup>葛嶺にある<sup>かんべきけん</sup>寿星院の寒碧軒で詠んだ詩。寒碧とは竹の緑を形容したものであろう。

### 【訳文】

<sup>すがすが</sup>清<sup>そよそよ</sup>清しい風が<sup>そよそよ</sup>蕭蕭と吹いてきて窓の扉を揺らす。

窓の前に長く伸びた竹があり、太さは一尺ばかり。

<sup>ちらちら</sup>紛紛と、<sup>あお</sup>蒼い<sup>むしろ</sup>雪のような粉が竹から落ちて夏の<sup>むしろ</sup>簞に降りかかり、

<sup>さやさや</sup>冉冉と、霧のように竹からの緑の光が人の衣を潤す。

高くに日がのぼると、山の蝉が葉を抱いて鳴き、

人が静かにしていると、<sup>みどり</sup>翠の翼の鳥が林を穿って飛び行く。

この<sup>どうじん</sup>道人は<sup>かんべき</sup>穀物を絶って寒碧[竹]に向かっている。

ならばお尋ねする、

「鶴のように痩せているはずのお方が、

どうして丸々と太っておられるのでしょう」

【**補足**】[最後の句を除くと静寂そのものの詩であるのだが、それだけでは面白味が不足するとでも思ったのか、<sup>かんべきけん</sup>寒碧軒の主の<sup>あるじ</sup>ふくよかな体型をからかうような句を末尾に置いた。それを笑って受け入れてくれる僧であったのだろう。ただし、当時の理想の体型はいまならメタボとして健康指導の対象になるようなものであった]

## ■ 【09-2-024】 西湖寿星院此君軒

【**解題**】同じく<sup>じゅせいいん</sup>寿星院にある<sup>しくんけん</sup>此君軒で詠んだ詩。かつて「<sup>こ</sup>此の<sup>きみ</sup>君」なくしては一日も<sup>しくん</sup>過ごせないと竹を称えた人がいたことから [→作品番号 03-3-016]、「此君」は竹の別

称となった。上の詩と合わせて見ると、寿星院は竹林の中にあったのだろう。

### 【訳文】

しくんけん  
此君軒に横になって聴くのは、

かさかさ  
謾謾と竜の鱗が砕ける音[竹の擦れ合う音のこと]、

此君軒から見下ろすのは、

あおあお ぎよく  
蒼蒼と玉の身が立つ姿[竹が林立するさま]。

かのときに大勢の人を舟に乗せて江海こうかいに連れ去ってしまった人がいたが、

ここにはまだ六千人もの君子[竹のこと]が残っていたのだ。

【補足】[(1) 終わりの部分はある故事を用いて、岩垂憲徳・釈清潭・久保天随  
 訳解『蘇東坡詩集』(1927年)には、この詩に対して、「此この詩しを一読再読三読では其  
 れ何事なにごとを詠えいずるや少すこしも判わからない、国語こくごや漢書かんじょや史記しきを読み、始はじめて解かいすることを得う  
 と記している。ここでは故事について詮索することなく大意を汲んで訳した。(2) 寿  
 星院せいしんの近ちかくに杯泉はいせんという泉いずみがあって、同おなじときにそこで詩を詠えいんでいる。これも「少  
 しも判わからない」ので訳は割愛する]

### ■ 【09-2-025】 観台

【解題】かんだい 観台とは、その上で座禅をして法をみ観る台である。それについて詠んだ詩。  
 上と同じく、これまた「少すこしも判わからない」もので、割愛ばかりするのは芸がないので、  
 難解さを見ていただけるよう、読み下し文だけを添えておく。蘇軾は知識がありすぎ  
 て、それを大量に動員して凝集させないと心に満足を覚えなかったのだろうか。蘇軾  
 は、官界における軌跡とうだいが唐代はくきょいの白居易に似ていることを意識しているのだが [→作品  
 番号 08-2-032]、2人の詩は正反対といってよいくらいに違う。白居易の詩の多くは一

読んで誰もがわかるくらいに平易で、日本での受容を見ても、白居易の詩は平安時代の宮中で優雅に朗読されたのに対し、蘇軾の詩は室町時代の禅僧や江戸時代の漢学者がねじり鉢巻きで研究したのだった。

### 【訳文】

三界無所住、<sup>さんがい す ところ な</sup> [三界に住む所無く]  
一台聊自寧。<sup>いちだい いささ むずか やす</sup> [一台 聊か自ら寧くする]  
塵勞付白骨、<sup>じんろう はくこつ つ</sup> [塵勞 白骨に付き]  
寂照起黃庭。<sup>じやくしょう こうてい おこ</sup> [寂照 黃庭に起る]  
殘磬風中裊、<sup>ざんけい かせ なか よわ</sup> [殘磬 風の中に裊く]  
孤燈雪後青。<sup>ことう ゆき のち あお</sup> [孤燈 雪の後に青し]  
須防童子戲、<sup>すべか ふせ どうじ たわむ</sup> [須らく防ぐべし 童子の戯れを]  
投瓦犯清冷。<sup>かわら どう せいいらい おか</sup> [瓦を投じて清冷を犯す]

### ■ 【09-2-026】 書劉景文所藏王子敬帖

【解題】<sup>りゅう き ぜん あざな けいぶん おうようしゅう しよ</sup> 劉季孫 [字は景文] は、先に歐陽脩の書を所蔵しているのを見たように  
[→作品番号 09-2-016]、書画の収集家で、コレクションのなかに<sup>おうけん し し けい</sup>王献之 [字は子敬]  
の書もあった。それに書き添えた絶句。王献之は王羲之の息子で、やはり書の名手と  
して名高く、ある人が父の書を野の<sup>あひる</sup>鶩に、息子の書を家の<sup>にわとり</sup>雞に譬えたことがよく知  
られていて、この詩の初句はそのことを用いている。

### 【訳文】

家の<sup>にわとり</sup>雞にしても野の<sup>あひる</sup>鶩にしても、

つまるまいたところは俎の上にのぼってしまう。

春のみづ蛭にしても秋も蛇にしても、

つまるところは箱に隠れ潜むのである。

君が家にあるこの二行十二文字は、

唐の李泌とう り ひつが所蔵していた三万巻をも圧倒するだろう。

【補足】〔(1) いささか戯れの詩である。春のみみずも秋の蛇も草書の墨痕の譬えとしてよく用いられる。書についていろいろな譬えをするのを笑うのであろう。(2) 李泌ひつの名は、西湖せい この水を町に供給して井戸を作った人として先に見ている [→作品番号 09-2-020]。その父は二万巻の書を集め、子孫に門の外に出してはならないと戒めたという。(3) 劉季孫りゅう き ぞんは、南朝の宋の時代の宗炳そう へい [字は少文] が描いた一筆書きの画も所蔵していて、蘇軾そ へんはそれを絶句に詠んでいる。「宛転」とか「繁盈えい せい」とか、くねくねと続く筆跡を表す語句を巧みに使って興味深いのだが、訳者は詩の意味をきちんと汲み取ることができない]

## ■ 【09-2-027】江城子

【解題】蘇軾は公務に忙しくても、サービス精神が旺盛で、時にはこのような詞を作ってしまう。短い序文がある。

### 【訳文】

陳直方ちん ちよく ほうの妻の嵇氏けいは錢塘せん とう [杭州]の人である。嵇氏に新しい詞を頼まれ、これを作った。錢塘の人は『陌上花はく じょう かの』を歌うのを好む。ゆるゆるとした曲である。私はかつてこれについて数首の絶句を詠んだ。

【補足】〔(1) 陳直方がどのような人であるのかはわからないという。(2) 『陌上花』の曲についてかつて詠んだという作品は作品番号 04-2-069 で見ている]

玉人家在鳳凰山。<sup>ぎょく</sup> [玉のような人は、<sup>ほうおうざん</sup> 鳳凰山に家があります]

水雲間、[水と雲の間で]

掩門関。[門が閉ざされています]

門外行人、[門の外を行く人]

馬上看弓彎。<sup>きゆうわん</sup> [馬の上に弓彎[美女の脚の比喩]が見えます]

十里春風誰指似。[十里にわたって吹く春風は誰に向かっているのでしょうか]

斜日映、[斜めになった日が]

繡簾斑。<sup>すだれ</sup> [美しい簾にまだらに注ぎます]

多情好事与君還。<sup>よ</sup> [あなたといっしょに、多くの思いと好い事が帰ってくることでしょ]

憫新蹀。[この独り身を哀れんで]

拭余潛。[涙を拭ってくれるのです]

明月空江、[川を明るい月が照らし]

香霧著雲鬟。[香る霧が髪につきます]

陌上花開春尽也。[路傍に花が開くとき春は終わります]

聞旧曲、[かの古い曲を聞いて]

破朱顏。[顔をほころばせるのです]

【補足】 [この詞は、心地よく感情を揺さぶるように言葉が配列されているのがミソで、多様な解釈が可能であるところがおもしろく、散文的に訳すのには適さない。ここでは一つの解釈として、前半は遠くに行った女性が帰ってくるとの期待を歌い、後半はその女性の帰りを待つ男の姿を歌っていると捉えて訳した]

## ■ 【09-2-028】 贈善相程傑

【解題】 相を善く観る程傑という人に贈った詩。

## 【訳文】

心から心へと伝える学は、  
 聖道ではない異学であって、  
 我が身を謀るためにはならない。  
 貴君はこの平和な時代に、  
 貴頭となる人の相を観ることを思っている。  
 かつて、相を見て、  
 「火が走り上る。長くは続かぬ」  
 「急流の中を行く。神仙と遠くない」  
 と、いった人がいた。  
 書物を苦勞して研究して得た要訣ではなく、  
 酔ってのつぶやきのようなものであっても、  
 かえって真理に近いことがある。  
 さて、この私は白居易に似ると人はいいけれど、  
 果たして私の晩年は、  
 「白髪頭で七年間、洛陽の春を遍く賞玩した」  
 と、いった白居易のようになるのか、  
 貴君にしっかりと観てとってほしいものだ。

【補足】 [(1) 冒頭にある「心から心に伝える学」[原文は「心伝しんでんの異学いがく]]とは、普通は仏教のことを指すが、ここでは程傑ていけつの学もやはり立身出世のために役立つもので

はなく、志は別のところにあるといているのであろう。(2) 白居易<sup>はくきょい</sup>は政界を引退してから悠々自適の日々を長く洛陽<sup>らくやう</sup>で送った。ここに引用された句は退隱生活はまだ半ばのころのもの。果たして蘇軾がそこまで白居易に似るのかどうかは第13章で見ることになる]

## ■ 【09-2-029】次韻林子中蒜山亭見寄

【**解説**】潤州知事<sup>じゆん</sup>の林希<sup>りん き</sup> [字は子中<sup>あざな しちゆう</sup>] [→作品番号 09-2-022] が蒜山亭<sup>さんざんてい</sup>で詠んだ詩に次韻した。蒜山<sup>さんざん</sup>は潤州にあつて、蘇軾<sup>きんざん じ</sup>はそこにある金山寺に属する土地に隱棲できないかと仏印禪師<sup>ぶついでんぜん じ</sup> [了元長老<sup>りやうげんちやうろう</sup>] に打診してみたことがあつた [→作品番号 07-1-070]。この詩はそのことを踏まえて作られているようである。

### 【訳文】

昔から、優れた人柄と広い学識がありながらも不遇であつた人は少なくない。

そのような人を憐れむのを理解するのは、

十年もの間、公文書に埋もれて白髪頭になつてしまつた貴君のような人であるのだらう。

それがなぜか江と山に向かつて笑つているのは、

酒をきこしめして顔に赤みを帯びたからなのだらう。

貴君<sup>きくきん</sup>が北固山<sup>ほくこざん</sup>を臨みつつ詩を賦しているのは、

まさか扇を挙げて風とともに退隱しようという心ではないだらう。

かつて蒜山<sup>さんざん</sup>に家を求めそこなつた私を呼び寄せないでくれたまえ、

私が小さな庵を結ぶのは岷峨<sup>びんが しよく</sup> [蜀の二つの名山]のあたりのはずなのだから。

【**補足**】 [この詩に楊傑<sup>やうけつ</sup> [字は次公<sup>あざな じこう</sup>] [→作品番号 09-2-016] が和して蘇軾がさらに和した作品がある。楊傑は仏典に深く通じる人であつたので、それに応じて難しい語句

を用いた詩で難解である。内容的には林希と楊傑に戯れたものらしいことはわかるのだが、訳者には上手に日本語に置き換える能力がないので割愛する]

## ■【09-2-030】次韻劉景文送錢蒙仲三首

【解題】せんもうちゆう 錢蒙仲 [→作品番号 09-1-010] が父である越州知事えつのせんきょう 錢勰のもとに帰るのを見送ったりゆう き ぞん あざな けいぶん 劉季孫 [字は景文] [→作品番号 09-2-026] の詩に次韻した。3首のうち2首を訳す。

### 【訳文】

#### 其の一

天によって閑にさせられてしまった老いた馬は、  
 日が暮れてまだ道が長くても、慌てて先を争うようなことはない——  
 そのようなことを貴君も聞いているだろう。  
 青雲の志を保つ「九子」[せんもうちゆう 錢蒙仲]を送り終わって、  
 私は独りせい こ西湖に舟を浮かべるのである。

【補足】[(1) 前半はせんきょう 錢勰と蘇軾が老いて不本意な境遇にあることを詠んでいるのだろう。(2) 後半はこれから科挙に挑む予定のせんもうちゆう 錢蒙仲について詠んでいる。錢蒙仲のことを「九子」と呼んでいるのは、九人兄弟の末の子だったからである。錢勰に九人の息子がいて、「九子母神の夫」の仇名があることは作品番号 08-3-002 で見ている]

#### 其の二

ちくりん 竹林の七賢人の一人[せんきょう 錢勰]に語を寄せる——  
 貴君も同じ科挙合格者の名簿に載った仲であった。

しかし、王適<sup>おうてき</sup>君は独りぼっちで鬼<sup>もじ</sup>の名簿に入ってしまった。

玉<sup>ぎよく</sup>のようなであったあの人に似る者は世の中にはもうないのだ。

【補足】 [王適<sup>おうてき</sup>が若くして亡くなった悲しみを、蘇軾<sup>そく</sup>は錢勰<sup>せんきやう</sup>宛の手紙に記していた  
[→作品番号 09-1-031]。蘇軾と錢勰は同じ年の科挙で合格した「同年」の友であるけれど、王適はそうした友を持つ前に死んでしまったのである]

## ■ 【09-2-031】 菩提寺南漪堂杜鵑花

【解題】 菩提寺<sup>ぼだいじ</sup>の南漪堂<sup>なんいどう</sup>に咲く杜鵑花<sup>つつじ</sup>を詠んだ詩。菩提寺<sup>ぼだいじ</sup>は錢塘門<sup>せんとうもん</sup>から出て城壁に沿って北に進んだところの寺。錢塘門<sup>せんとうもん</sup>は西湖<sup>せいこ</sup>の北東端に面している。

### 【訳文】

南漪<sup>なんい</sup>の杜鵑花<sup>つつじ</sup>は天下に比べられるものがない。

漢朝<sup>かんちやう</sup>の宮殿<sup>みやう</sup>を飾った紅い<sup>あか</sup>翟翬<sup>しきもの</sup>に似ていようか。

唐代<sup>とうだい</sup>に天下の奇絶といわれた<sup>かくりんじ</sup>鶴林寺<sup>かくりんじ</sup>の杜鵑花は、

兵火に焼かれて一夜の夢となってしまって、

花は仙界に帰ったはずであったのに、

実はここ西湖<sup>せいこ</sup>に帰っていたのだった。

【補足】 [鶴林寺<sup>かくりんじ</sup>の杜鵑花<sup>つつじ</sup>については、季節はずれの9月に訪れた人が、花がないのを残念がると、仙人の殷七七<sup>いんしちしち</sup>が菊の花とともに杜鵑花も満開に咲かせて見せたという伝説がある [→作品番号 04-1-071、04-2-089]。そのことから、「花は仙界に帰ったはずであった」という発想が出てきたのである]

## ■ 【09-2-032】 題楊次公春蘭

【**解説**】楊傑 [字は次公] [→作品番号 09-2-016] が描いた春蘭の画に添えた詩。

【**訳文**】

春蘭は美人[徳において優れた人]に似ていようか。

手折って採るべき花ではなく、

花もまた自身を誰かに献じるのを羞としている。

時に春蘭は風露の香りを放つのだが、

蓬艾に深く覆われて見ることができない。

その真の姿がここに描かれていて、

古の詩文の叙述の足りないところを補ってくれる。

この画に向き合うときには、

衣服と冠を正して身を改めなければいけない。

■ 【09-2-033】 題楊次公蕙

【**解説**】 上の詩に続いて楊傑が描いた蕙 [蘭の一種] に添えた詩。

【**訳文**】

蕙はもとより蘭の一族で、

やはり同ような香気がある。

古く楚の時代の詩には、

風雅を解する人が蕙を腰に帯びたと歌われている。

この画は現実のものではない幻、

真に蕙から感じる香りとして空である。

とすれば、いま微かに馥郁ふくいくと香るのは何なのだろうか、  
「鼻観びかん」によって通じたものであるだろう。

【補足】[前にも記したように楊傑ようけつは仏典に通じた人で、最後の句は、「鼻観びかん」という観想法 [鼻先の息を見つめて冥想に入る] を織り込んで構成されている。要するにこの詩は、画から香りが感じられるということ、難しく表現してみせたものであろう]

## ■ 【09-2-034】次韻曹輔寄壑源試焙新芽

【解題】建州けんしゅうにいる曹輔そうほから、壑源がくげんで今年最初に採れた茶の新芽ほうを焙じたものが贈られてきて、それに詩が添えてあったので次韻して返した。壑源は茶の名産地としていまも名高い建溪けんけいにある。

### 【訳文】

仙山せんざんの靈草れいそう[茶のこと]は行く雲によって潤され、  
香り高い肌をきれいさっぱりと洗われた。  
それだけではまだ装いは整わない、  
貴君が明るい月の光を当てたことで[焙じたことをいう]、  
ここ武林ぶりん[杭州]の春に清らかな風がたたらされたのである。  
氷雪ひょうせつ[茶葉の輝きをいう]のよさを知るにはこちらの心持ちもよくなければならない。  
俗に油をまぶして見栄えをよしたたけの茶などに惑わされてならないのだ。  
この詩は、貴君には笑われてしまう戯れの作、  
よき茶は佳き人に似る、  
私が言いたいのはただそれだけである。

## ■【09-2-035】真覚院有洛花、花時不暇往、四月十八日、与劉景文同往賞枇杷

【解題】この詩の題は、「真覚院には洛花がある。花の時期には行く暇がなかった。四月十八日に劉季孫 [字は景文] とともに行き、枇杷を賞した」。洛花とは牡丹のこと。従来杭州には牡丹がなく、唐代に洛陽から移植したのでこの名があるという。ここでいう枇杷は盧橘のことで、要するに金柑であるという。劉季孫はすでに何度も登場している [→作品番号 09-2-030]。

## 【訳文】

緑が暗くなって、もう夏を迎えた。  
 春の時には行くことができず、紅はさびれてしまった。  
 牡丹は老人の友とする花ではあるまい。  
 盧橘は我が郷里の人のような花だ。  
 山のここに至って街並みは尽き、  
 巖の崖を前にして新たな思いが生じてくる。  
 貴君も覚えていてほしい、  
 年の暮れの寒さのなかにまたきて、  
 雪が盧橘の枝に降りかかるのを見ようではないか。

【補足】〔(1) 昔から蜀の人は柑橘類を好むとされ、蘇軾も黄州において柑橘類を好んで植えていた [→作品番号 06-4-006]。ここでは冬でも葉を落とさない盧橘を、松と同様に志操堅固であると讃えている。(2) この詩の題にある日付と同じ日に、蘇軾は自身が7年前に書いた文章と再会している。作品番号 06-4-062 として見た文章の後ろに、そこでは訳さなかった添え書きがあり、次のように記されていた。「富陽県知事の馮君がかつて黄岡県知事であったときにこの書を段君から得た。元祐五年四月十八

日に復たこれを見た。ときに私は<sup>せんとう こう</sup>銭塘 [杭州] の知事であった」]

### ■ 【09-2-036】 又和劉景文韻

【解題】 上と同じときに<sup>りゅう き ぞん あざな けいぶん</sup>劉季孫 [字は景文] の詩に和したものの。

#### 【訳文】

牡丹を、松と同時に植えて、

春の風に任せて自在に花を開かせた。

(<sup>しんがくいん</sup>真覚院の)壁に詩を記した人を<sup>し</sup>試しに数えてみるがよい、

そのなかで花を見るためでなく来た人は何人いるのかな。

【補足】 [<sup>しんがくいん</sup>真覚院を訪れる人の大半は牡丹が目当てで、季節はずれのいまに<sup>くる</sup>くる人は稀だったのだから]

### ■ 【09-2-037】 題張子野詩集後

【解題】 <sup>こう</sup>杭州副知事時代に親しくした大先輩に<sup>ちようせん あざな し や</sup>張先 [字は子野] がいた [→作品番号 04-2-086、04-3-077 など]。張先は詞を得意としたが、詩も立派であったというのがこの短文である。張先の詩集の後ろに書き添えた。

#### 【訳文】

<sup>ちようせん</sup>張先の詩筆は老妙で、歌詞はその余技でしかない。

『<sup>こ しゅうせい いけい</sup>湖州西溪』という題の詩に、

浮萍破処見山影、[<sup>くさ</sup>浮き萍の破れる処に山の影を見て]

小艇帰時間草声。[小さな艇<sup>ふね</sup>の帰る時に草の声を聞く]

と、ある。

これに和した私の句は、

愁似鰥魚知夜永、[愁<sup>おの</sup>いは鰥きな魚に似て夜の永さを知り]

懶同蝴蝶為春忙。[懶<sup>ものう</sup>さは蝴蝶と同じ春の忙しさを為す]

張先の詩はこのようなものであるから、昔の有名な詩人と並ぶべき人なのである。しかし、世間の人はその歌詞ばかりを賞賛している。

唐<sup>とう</sup>の時代<sup>しゅうほう</sup>に、周昉は人物を画き、どれも神品といってよいものだった。しかし、世間の人は周昉は女性を画いたということだけを知っている。

これは要するに、『論語』にある「徳を好むこと色を好むかこときを見ず」ということなのだろうか。

元祐<sup>げんゆう</sup>五年四月二十一日。

【補足】[最後は『論語』の有名な言葉をわざと少しばかり曲解したジョークなのだろう。世間の人はどうしても色っぽいことの方により強く惹かれてしまい、そちら向きの作品群が強く印象付けられるので、張先も周昉も正しい評価を得ていないといっているのである。ただし、詞よりも詩の方が格が上であるという前提に立っているのは、当時の常識ではあっても、必ずしも首肯できるものではないだろう]

## ■ 【09-2-038】次韻楊次公惠徑山竜井水

【解題】楊傑<sup>ようけつ</sup> [字は次公<sup>あざな じこう</sup>] [→作品番号 09-2-033] が徑山<sup>けいざん</sup>の竜井<sup>りゅうせい</sup>の水に詩を添えて贈ってくれたので、その詩に次韻した。徑山は杭州の近くにあり、かつて蘇軾はその山

を登っている [→作品番号04-1-033など]。竜井の水は眼病に効くと蘇軾自身が注記している。なお、この竜井は作品番号09-2-014にある竜井とは異なる。

### 【訳文】

水時計の水が尽きかけて、もう鶏が鳴き出した。

夜なべ仕事にほとんど疲れ果てる。

私はもとより小さな器、すぐに水が溢れてしまう。

官職を棄ててこの海の外に帰ってきたわけではない。

知事を辞めても水を管理する役人くらいなら務まるかもしれない。

仏教ではすべてが幻で空であると説くように、

我が眼は暗くなって、確かにものはろくに見えない。

それでも、遊び歩くことは自由にてきて、

我が足はまことに軽やかに動く。

貴君りゅうせいは竜井の水をわざわざ遠くから送ってくださったけれど、

どうせ水に関わるのだったら、

昔の名人のように池を真っ黒にするまで書しよの修練に励んだらよいだろうに。

【補足】 [(1) 水と縁のある故事を集めて、知的に愉快である詩を組み立てた作品のようだ。故事を詳しく参照しなくても大意がわかる程度に軽く訳した。原詩を一生懸命に研究すれば、含蓄に富んだ句を深く味わうことができるだろう。(2) 同じ頃に杭州副知事えんこくの袁穀から贈られた薬の謝礼として詠んだ詩があるが、訳者にはまるで理解できないので割愛する]

### ■ 【09-2-039】 杭州乞度牒開西湖状

【**解題**】これは高太皇太后と皇帝に差し出した公文書。西湖再生事業の概要が記されている。

## 【訳文】

元祐五年四月二十九日、竜図閣学士左朝奉郎知杭州の蘇軾、書面をもって奏上いたします。

右の臣は、天下にあるところの陂、湖、河、渠の利、あるいはその廢興成毀[立派に造られたり無残に壊れたりすること]には、みな数[天の定めた運命]があると聞いています。ただ、聖人が国の上にあるときには、利が興り害が除かれ、成りやすく廃され難いのです。

昔、前漢の終わりに翟方進が丞相となってから、汝南の鴻隙陂が始めて決壊し、父老はこれを怨んで、このように歌いました。「陂を壊したのは誰なのか。翟方進だ。我らに豆を食らわし、芋を煮て羹にしろたよ。もともどせ。陂を元通りしろ。これは誰がいうのか。黄色い鶺鴒のお告げだ」。これはどのような歌かといいますと、民心の望むところを天がそれに託して、神[黄色い鶺鴒]を下して父老に告げたものなのです。[鴻隙陂が洪水で決壊したとき、翟方進は、水の溢れた跡に肥沃な土地が現出したことと経費が省けることを理由に堤防は修理しないと決めた。それ以後、土地の人々は灌漑用水を失い、日照りの害に苦しまねばならなかった]

三国時代の呉国の主が孫皓であったときに、呉郡から次のような報告がありました。「臨平湖は漢代の終わりから草が繁って塞がってしまっていました。ところが、いまにわかに湖面が広がりました。長老が言い伝えますには、湖面が開くときに、天下は平安になるということでございます。孫皓これは自身にとつての瑞祥であると思いましたが、実際には晋の武帝によって呉国は平定されてしまったのでした。こうしたことを観ると、陂、湖、河、渠などが長く廃れたりまた開かれたりするのは、国家の興運に関係することなのであります。天道は知り難いものでありまして、民心の望むところのものには天は必ず従うのであります。

杭州に西湖があります。これは人にとつての顔のようなもので、廃してはならないものであります。唐代の

長慶年間に白居易が杭州知事でありましたときに、湖は広く、千余頃の水田を灌漑するだけの水量がありました。錢氏の呉越国のときには、湖を浚う兵士千人を置き、日夜湖を浚っておりまして。宋国が始まってからは、次第に手入れをしなくなり、水が涸れて草が生え、葑が繁茂するようになりました。熙寧年間に私は杭州通判[副知事]となりましたが、そのころはまだ湖のうちで葑があるのは十分の二ないし三だけでありました。それがわずか十六、七年の間に湖の半分を塞いでしまいました。父老がいうには「こ十年で水が浅くなり、葑が合わさって、あたかも雲が空を翳らすようにたちまち満ちてきてしまいました。さらに二十年もしましたら、西湖はなくなってしましましょう」と。もし杭州から西湖がなくなったならば、人から顔を取り去るようなもので、それはもはや人ではないのであります。

臣は愚かで無知ではありますが、西湖を廃してはならない理由を五つ挙げることができます。

(1)天禧年間に、もとの宰相の王欽若が、皇帝の福を祈るために、魚鳥を獲ることを禁じて西湖を放生池とすることを初めて奏上しました。これより毎年四月八日に、郡人数万人が湖のほとりに集まって、百万もの鳥や魚を放ち、西北に向かって頭を下げて、皇帝の千万歳の寿命を祈るようになりました。もし湖が塞がってしまったなら、蛟竜魚鱉[水の生き物]はいずれも涸れた轍の痕で水を求める鮒のようになってしまう。臣はこのようになってしまふの見過ごすことはできません。これが西湖を廃してはならない第一の理由です。

(2)杭州の地はもともとは江や海でありました。流れる水も湧き水も塩辛く、民の住むところはわずかしかなかった。唐代に李泌が初めて西湖の水を引いて六つの井戸を作り、それからは人々は十分な水を得て、そのまわりに村ができて、日に日に増えて、大勢の人が集まって町の暮らしが成り立つこととなりました。いま湖が狭くなり水が浅くなり、六つの井戸は次第に壊れかけています。もし二十年の後に湖が葑の繁茂するだけのところとなってしまったならば、町の人々はまた塩辛い水を飲まなければならなくなり、ひいては町が自ずと消え去ってしましましょう。これが西湖を廃してはならない第二の理由です。

(3)白居易は『西湖石函記』を作り、そこにこのようにあります。「湖の水を放流して田を灌漑し、湖の水

位が一寸下がることに十五頃の田に水を入れることができる。夏には五十頃を灌漑できる。湖の水量を増やすことができるなら、運河を千頃にわたって満たすことができる上に凶作の歳もなくなるだろう。今年運河の水が十分ではなく、農作物の収穫も不足しました。これが西湖を廃してはならない第三の理由です。

(4) 西湖が深く広ければ、運河の水は湖水から十分に取り取ることができます。しかし、湖水が不足すると、せんとうこう銭塘江の潮水を取らなければなりません。潮水には泥や沙が混濁し、それは一石の水に五斗も含まれています。そのために三年もないうちに運河は泥砂で埋まってしまい、兵士や人夫を十万人余りも動員して運河を浚渫しなければなりません。運河は町の中に十余里にわたって続いているので、浚渫時には町中が大騒ぎとなり、泥水が乱暴に撒かれ、町に住む者にとって大きな恵いとなります。これが西湖を廃してはならない第四の理由です。

(5) 天下の内で酒税が多く徴収できる場所として杭州以上のところはありません。一年で二十余万緡びんにも及びます。酒を造るための水は湖から供給されています。もし湖が浅く狭くなってしまったなら、水の需要に応じることができなくなり、人は山の泉にまで汲みに行かなければならなくなります。そうすると一年に二十万人分の労力が必要になるでしょう。これが西湖を廃してはならない第五の理由です。

西湖が次第に廃れて行く有様を見て、湖を廃してはならない五つの理由があることを知っていたながら、しかも臣は特別の御恩を賜る身でありながら、歲月の過ぎるにただ任せていたのでは、知事としての責任を果たしたことに断じてならないのであります。そこで、すでに役人を派遣して湖にある葑を計量させたところ、合計二十五万余丈にも及び、それを除くには二十余万人の労働力を必要とします。一方で、わたし近ごろ臣は、当該地域の饑饉を救うために、特に国庫に送るべき米五十余万石を猶予し、常平米数十万石を放出し、五穀税を緩めていただくことを皇帝陛下、太皇太后陛下に伏してお願い申し上げましたところ、数知れぬ東南の民が生きながらえることができました。特に度牒どちよう三百枚を賜り、杭州だけでも百枚を頂戴しました。臣は謹んで聖意を奉じて饑民救済にそれを使い、差引き銭と米が一万余貫石残りました。そこで臣はこの銭と米で民を募って湖を開くことにし、十万の労働力を得

て今月二十八日までに草を取り除く作業をいたしました。

農民父老はこのことを観て、嘆息してこのようにいいます。「二聖陛下はすでに我等を活かして下さっただけでなく、余った錢や米で、無窮の利を生み出すことをなされた。吾等はどこで仕事を心得、この凶作の歳を乗り切ることができません」。そして泣くのであります。臣は民情がこのようでありますことを知りつつも、いまある錢や米には限りがあり、募った労働力は十分でないために、葑の繁茂した土地はまだかなり残ってしまいました。臣の後に続く者がいなければ、ここでしたことが無に帰してしまいます。それは深く残念であります。ここでさらに度牒百枚が得られましたならば、全てを除去し終わることができて、後に患いを残すことはないのであります。

伏して皇帝陛下、太皇太后陛下にお願い申し上げます。臣が西湖を廃してはならない理由として挙げた五箇条と、利害について御検討(ござり)、特に度牒五十枚を下されますように。別途杭州が得られるであろう度牒五十枚と合わせて百枚となりますので、臣が力を尽きて志を遂げることができるようになるのであります。半年の内に、西湖は唐代のころの姿に戻り、周囲三十里は山の際をもって岸辺とするようになりましょう。農民父老はもとより鳥も魚も聖沢に泳ぎますこと無窮に及ぶのであります。伏して伏してお願い申し上げます。

補足一：現在当該地域は梅雨のさなかりにあり、葑の根が浮動して取り除きやすくなっています。六、七月に及んで大いに雨が降るなら、蔓が伸びて増えることがなくなり、また農民がいつかは八月に葑の根を断つともう出てくるのがなくなります。これはまさに工事を行うによい時期なのであります。そのことを含めて御検討いただければ幸甚であります。

補足二：杭州では去年から運河を浚渫し、西湖の水をそこに注ぐ工事を進めております。それは西湖の葑を除くことと利害が一致します。臣はそうしたことも細々と申し上げて天聴をお煩わせるまでもないと考え、別に書状を作って三省〔門下省、中書省、尚書省〕に具申いたしております。

【補足】〔ここで興味深いのは、土木工事に関する具申でありながら、冒頭に天と君主と民の関係の原理について述べていることだ。皇帝および太皇太后の判断を仰ぐの

で、そのような高所 [われわれにとってはほとんど意味のないところ] から説き起こす必要があったのだろう]

## ■【09-2-040】申三省起請開湖六条状

【解題】上で見た太皇太后と皇帝に差し出した公文書の終わりに、運河に関係する事業については、別途詳細を記して三省 [門下省、中書省、尚書省] に提出すると述べていたが、それがこの文章である。西湖の再生と、運河の効率的な運用、町への淡水供給の三者を一体的、総合的に成し遂げる施策を作り上げたのが、地方行政官としての蘇軾の優れ手腕であったといつてよいだろう。この文書は公共事業の提案書として、現代でも通用するくらいにしっかりとした構成と内容になっている。長文であり、詳細にわたる部分には理解が十分及ばないところもあるので、全体の構成を以下に概観して、ごく一部だけを訳出する。

(1) 西湖と運河をめぐる現在生じている諸問題について、各方面から聞き取った結果を、歴史的経緯を踏まえて整理する。

(2) 唐代の白居易の考察を参考にしつつ、灌漑用水を確保することと運河に水を満たすこととを両立させる方策がまだ見つからないでいた昨年10月の時点から、すでに運河の浚渫を始めて4月に完了し、船の航行が大きく改善されたことを報告する。

(3) 運河が今後も十分に機能を発揮できるようにするには、潮の遡上によって運河に泥砂が貯まってしまふのを防ぐ必要があり、蘇軾がその対策を立案した。鍵となるのは、運河の要所に水門を設けて潮の干満に応じて操作することである。

(4) 蘇軾の案を黄僎に検討させるとともに、蘇軾自身も実地に調査して、成功すると判断し、水門の設置工事を4月20日に開始し、あわせて西湖の水を市中に配る六つの井戸の改修にも着手したことを述べる。

(5) 草が繁茂して狭く浅くなってしまった西湖の湖面を元通りに広げてほしいと土地の人々が訴えている問題を取り上げ、草の駆除に必要な労働力と費用を概算する。

(6) 西湖から草を除いた後で、菱ひしを栽培するようにすれば、湖面の管理が自ずとできて、しかも利益も上がるとする許敦仁きよとんじんの提案について述べる。

(7) 蘇軾は人々と検討した結果、許敦仁の案を妥当であると判断し、草の除去に着手し、現時点で財政的に可能な処置を4月28日までに完了したことを、画を添えて報告する。

(8) 以上の方策の結果として、西湖の湖面が広がり、西湖からの水の供給が改善され、運河の良好な航行が確保されるようになったが、この状態を今後も恒久的に保つための六つの計画を述べる。

(9) 朝廷に対して、この事業を検討し、不足する費用を支給してくれるよう図面を添えてここに願い出ることを述べる。

注目すべきは、蘇軾がさまざまな人の意見を聞いて総合的に判断し、長期的に有効な方策を選択していることだ。さらに、民間の活力を有効に利用しようとしていることも大きな特徴として挙げてよいだろう。ここでは、(8) に述べられている六つの計画のうちで、2番目にある運河の川幅を確保する方策について、ほんの一部分だけを訳出する。なお、蘇軾に工法などを提案した人物のうち蘇堅の名はすでに先品番号 09-1-018 で見ていて、今後も何度か登場する。

## 【訳文】

塩橋運河えんきょうの岸辺しへいには、治平四年じへいに元積中げんせきちゆうが立てた石碑があります。そこには、運河を航行する船を牽く人が使う路を確保するために邪魔な家を取り除いて、どこをどれだけの幅の路にしたといったことが

刻まれています。それから二十余年が経過する間に、両岸の家がその路へと侵入し、その数は数千軒にも及んだために、その家の外側にまた別の路を作らなければならなくなり、結果として運河は年々狭まってしまったのです。……

【補足】[杭州は西湖と錢塘江に挟まれて平地が狭く、都市が発展するにつれて、人家が公共の場にも進出してしまったということが記されている。20年で運河の両岸を人家が埋めてしまうというのは、それだけ杭州の経済成長が顕調であったわけで、その活力を利用することが公共事業を成功させる鍵であると蘇軾は考え、運河の幅を新たに確保し直すにしても、西湖で菱を今後栽培してゆくにしても、民間の力を上手に使おうとした。また、国から度牒どちようを支給してもらってそれをお金に換えて公共事業を実施するという方法は、つまりは宗教界からお金を吸い上げて公共投資に充てるということで、それだけ宗教界に財力があったということなのだろう]

## ■ 【09-2-041】南歌子

【解題】上の文書の提出日は5月5日となっていた。それは端午たんごの節句の当日で、その日、蘇軾はこの詞も作っていた。先に見た張先ちようせんの詩集に書き添えた短文では[→作品番号09-2-037]、あたかも詩は「徳」の側に、詞は「色」の側にあるかのように書いていた。もともと詞は歌妓が歌うもので、男女の情愛がその主題であった。前にも記したように、それを変えて、詞を詩のようにしたのが蘇軾であった[それをよしとする人もいれば、よろしくないとする人もいた]。この詞は男女の愛ではなく、蘇軾の杭州こうへの愛を歌ったものである]

### 【訳文】

其の一

山与歌眉斂、[山とともに歌うなら、<sup>かお あらた</sup>眉が斂まり]

波同醉眼流。[波とともに酔うなら、眼は流れゆきます]

遊人都上十三楼、[ここに遊ぶ人はすべて<sup>じゅうさんろう</sup>十三楼に上るのです]

不羨竹西歌吹、[羨むことはありません、竹西寺で聞<sup>ちくせい</sup>く歌声が]

古揚州。[古<sup>いにしえ</sup>の揚州<sup>よう</sup>を讚えるのを]

菇黍連昌歎、[<sup>ちまき</sup>菇黍と<sup>しょうじ</sup>昌歎を並べ]

瓊彝倒玉舟。[<sup>さかたる</sup>瓊彝と<sup>さかずき</sup>玉舟を倒します]

誰家水調唱歌頭、[どの家<sup>すいちやうかどう</sup>で『水調歌頭』の曲を歌っているのしょうか]

声繞碧山飛去、[声は碧い山をめぐって飛<sup>あお</sup>び去ります]

晚雲留。[そして晩の雲が留まるのです]

【補足】 [(1) <sup>じゅうさんろう</sup>十三楼は<sup>せんとうもん</sup>錢塘門から二里ばかりのところ<sup>せいこ</sup>にあつて、西湖を見下ろす名所であつた。蘇軾はここを好むあまり、ここで執務をしたともいわれている。(2) 竹西寺は揚州郊外にある有名な寺で、蘇軾も何度か立ち寄っている [→作品番号 07-2059 など]。唐代に杜牧が詠んだ「斜陽竹西路、歌吹是揚州」[<sup>しやよう</sup>斜陽<sup>ちくせい</sup>竹西の路、<sup>みち</sup>歌吹<sup>かすい</sup>是揚州] の詩句が有名で、蘇軾のこの詞はこれを踏まえている。揚州は隋の煬帝が惚れ込んだくらいに温暖で風光明媚な都市として天下第一とされていた。蘇軾は、いまや杭州は揚州を羨む必要がないくらいに美しく立派な都市になっているといっているのである。(3) 『水調歌頭』は煬帝が作ったとされる曲で、それがもとになって詞の曲となり、蘇軾もいくつか歌詞を作っている。まさか蘇軾自身の作品を歌う声が聞こえてきたわけではないだろうけれど、杭州は歌声の似合う町であるというのである]

其の二

古岸開青葍、[古い岸<sup>まこも</sup>辺で青い葍<sup>まこも</sup>を切り開き]

新渠走碧流。[新しい渠<sup>みぞ</sup>に碧<sup>あお</sup>い流れが走ります]

会看光満万家楼、[一万軒の家が水の反射に照られます]

記取他年扶病、[いつか思い出して(ださい)、病にありながらも]

入西州。[私がこの町にきたことを]

佳節連梅雨、[端午の節句は梅雨に連なります]

余生寄葉舟。[わが余生は葉のような舟に寄せましょう]

只将菱角与雞頭、[菱<sup>ひし</sup>と雞頭<sup>けいとう</sup>の花ばかりがあつて]

更有月明千頃、[そして明るい月が照らす千頃の水があるので]

一時留。[ここには止留まるのです]

【補足】 [(1) 冒頭で、蘇軾が着手した土木事業が詠まれている。上に見た西湖再生事業によって、湖面に広がった水草が除かれ、新たに水路を整備されるなら、水域が広がり、水も光も杭州の町に溢れるようになるというのである。(2) 原詞の前半の終わりにある「入西州」[西州に入る]の句には説明が必要である。「西州門」は亡くなった人を偲ぶ場所の象徴であることは作品番号 06-4-012 で見ている。つまり、西湖の風光を愛でる人は、自分が死んだ後にも自分のことを思い出してほしいといっているのだろう。事実、今日に至っても西湖に遊ぶ人は蘇軾のことを想うのである]

## ■ 【09-2-042】 与王定国

【解題】 蘇軾が希望した度牒<sup>どちよう</sup>の発行を朝廷は 5 月 28 日に決定し、それによって得た資金<sup>まこも</sup>で葍を取り除いて湖面を開く工事が実施された [→作品番号 09-2-039]。それが順調に進んだことが王鞏<sup>おうきよう</sup> [字は定国<sup>あざな ていこく</sup>] [→作品番号 08-3-075 など] に宛てたこの手紙に記されている。

【訳文】

朝廷より託された一事がありました。杭州の人々は五六十年前から西湖の葑を取り除きたいと考えていました。しかし、そのような志があったのは民間の人間であったために、事業を運営することができませんでした。また、数人の官人が手を着けようとはしたものの事業として成り立つには至りませんでした。私だけがたまたまその要所を得ることができたのです。湖面を開いて一カ月余りとなり、必ず成功する勢いで、官も民も目の上のこぶが取れたように心持ちをよめています。……

【補足】 [この手紙の後半は、意味がきちんと読み取れなかったので割愛した。弟の蘇轍への伝言を頼んでいるようなので、このころ王鞏は都にいたのだろう]

■ 【09-2-043】 書所和回先生詩

【解題】 回先生の詩に和した詩について書いた短文。回先生とは誰なのか。それはここに記されている。

【訳文】

回先生はこのような詩を作った。

西隣已富憂不足、[西隣りでは富んでいるのに不足を憂いている]

東老雖貧樂有余。[東隣りの老人は貧乏だけれどたっぷり楽しみがある]

白酒釀來因好客、[なぜなら、うまい酒ができれば好い客人がくる]

黃金散盡為收書。[金をそっくり使い果たして書物を買っているからだ]

東坡居士はこの詩に和した。

世俗何知貧是病、[世俗の人は貧乏は病のようなものだということを知らない]

神仙可学道之余。[神仙は学ぶべきであつても本来の学問の余りてしかない]

但知白酒留佳客、[よい酒は佳い客人を留めることは知っているけれど]

不問黄公覓素書。[達人に直接問わずにその書物だけを求めるとは……]

熙寧元年八月十九日、ある道人が沈東老のもとを訪ね、酒を飲んだ。石榴の皮で右に示した詩を壁に書き、自ら回山人と称した。沈東老は回山人を送って門を出て、石橋の上に至った。回山人は先に橋を渡って数十歩ほど行くと、そのまま行方がわからなくなった。ある人は「これは呂洞賓先生である」といった。

熙寧七年、私は晋陵[湖州]を通過したときに、沈東老の子の沈偕に会い、沈偕がこのことを話してくれた。ときに沈東老はすでに亡くなって三年が経っていた。そこで、私は右に記したような詩を和した。

それから十六年後、また沈偕に錢塘[杭州]で会ったので、このことを書いた。沈偕の字は君与で、家は代々詩文をよくすることで知られている。

元祐五年五月二十五日、東坡先生書す。

【補足】[ここに書かれている熙寧七年の出来事は作品番号04-3-084としてすでに見ている。沈東老は、湖州帰安県の東林に住む沈思 [字は持正] である。呂洞賓は伝説の仙人]

## ■ 【09-2-044】 減字木蘭花

【解題】この詞には、後人の記した次のような短文が添えられている。「錢塘の西湖には詩僧の清順が住む堤があり、清順はそこを蔵春塢と名付けた。門の前に二本の古い松があり、それぞれに凌霄花が絡みついて上っている。清順はいつもその下で昼

寝をする。蘇軾はこの知事となり、ある日のこと、従者を退けて清順を訪ねた。風が騒がしく松を吹き、清順は落ちた花を指して句を求めた。蘇軾はこの詞を賦した」。清順の名は作品番号 09-2-007 などで見ている。

### 【訳文】

双竜対起。[二匹の竜[二本の松]が向かい合せに立っています]

白甲蒼髯煙雨裏。[白い鱗に蒼い髯が、煙る雨の中にあるかのようです]

疏影微香。[淡い影と微かな香り]

下有幽人昼夢長。[その下で、ゆかしい人が昼の夢を長々と見続けています]

湖風清輒。[湖からの風は清くやわらかです]

双鵲飛來争噪晚。[二羽の鵲が飛んで来て騒ぎ立っています]

翠颯紅輕。<sup>みどり</sup> [翠が揺れて紅が<sup>あか</sup>軽やかに飛びます]

時上凌霄百尺英。<sup>のうぜんかずら</sup> [見れば凌霄の花が百尺にわたって連なっているのです]

### ■ 【09-2-045】 賀新郎

【解題】「夏景」という副題がある詞。蘇軾は「詞を詩にしてしまった」と、一部に批判的な見方もあったなかで、いかにも詞らしい作品である。不遇な美女を花になぞらえて、あるいは逆に花を美女になぞらえて、詠むというのは詞の世界ではごくなじみのある主題である。この詞の美女は一見すると艶めかしいようでいて、西洋のビーナス像のように気品を具えているといえようか。様々な解釈が可能であるところが名作とされる理由でもあるのだろう。寝坊して宴席に遅れてしまった妓女が<sup>ざくろ</sup>石榴の花を差し出しつつ詫びたのに対して座興で詠み与えたという伝説 [ほとんど信じられてい

ない] もあれば、蘇軾自身の境遇を詠んだというわかりやすい説もあり、夢と現実が混然一体となった<sup>そうじ</sup>荘子の哲学を歌ったという小賢しい解釈もある。どの説に依拠するかで訳文は変わってくるだろう。

### 【訳文】

乳燕飛華屋、[わたしは夏の燕、あのお屋敷へと飛んで行きましょう]

悄無人、[静まりかえって人の気配はありません]

桐陰転午、[午後の日差しに、桐の葉影だけが動き]

晚涼新浴、[涼くなった夕方、湯浴みをしたばかりの女性が現れ出ます]

手弄生絹白团扇、[やるせなく動かす真っ白な絹の团扇]

扇手一時似玉、[手もまた玉の<sup>ぎよく</sup>ような白さです]

漸困倚孤眠清熟、[次第にけだるく独り寝入っていきます]

簾外誰來推繡戸、[窓の外に誰かが来て戸を押そうとします]

枉教人、[やめて!]

夢断瑶台曲、[あの人のせっかくの夢が終わってしまいます]

又却是、[ああ、ちがいました]

風敲竹、[風が竹を叩いたのでした]

石榴半吐紅巾蹙、[<sup>ざくろ</sup>石榴がななかば口をあけて縮れた赤いレンケチを吐き出しました]

待浮花、[ほかの浮ついた花やら]

浪蕊都尽、[賑やかなの花やらがすべて終わってから]

伴君幽独、[あの人のためにそっと咲いたのでした]

穠豔一枝細看取、[色濃い枝をじっと細やかに見るなら]

芳心千重似束。[花の心<sup>しん しん</sup>[心と芯をかけている]は千回も折り重なっているではありませんか]

又恐被、[そうでした、すくにも]

秋風驚緑。[秋風が吹き出したら緑の葉だけになってしまうのです]

若待得君来向此、[さあ、あなたもここに来て]

花前对酒不忍触。[花の前でお酒をお飲みなさい、でも花には触らないでね]

共粉涙、[はらはらとあなたの涙とともに]

両簌簌。[花びらも落ちてしまうでしょうから]

### ■ 【09-2-046】次京師韻送表弟程懿叔赴夔州運判

【解題】程之邵<sup>てい ししやう</sup> [字は懿叔<sup>あざな いしゆく</sup>] が蜀の夔州<sup>しよく き</sup>の役人となって任地に赴くことになり、この詩を送った。程之邵は蘇軾<sup>てい しきい</sup>の姉の夫であった程之才<sup>てい しさい</sup>の弟で、かつて蘇軾が都にいたときに、程之邵が泗州知事<sup>し</sup>として赴任するのを見送る詩を作っていた [→作品番号08-3-037]。これはその詩に次韻したもの。なお、杭州<sup>こう</sup>の役場に程之邵<sup>てい ししやう</sup> [字は遵彦<sup>あざな じゆんげん</sup>] がいることを作品番号09-2-021で見ているが、同姓同名の別人である。

### 【訳文】

貴君も叔父も甥も誰もか、

すっかり老いて古ぼけた顔になってしまった。

我等は東の地で知事の職に就いたわけだが、

もとはといえばかの佳き江山<sup>よ</sup>において成長したのだった。

山の松には鮮やかな花は咲かない……

だから髪に挿して飾ることはできない。

我等はいわば松のようなもの……

老いてもなお死なずにいられるのをよしとしよう。

栄枯の間で浮沈することなど笑ってしまえばよいのだ。

私ははなはだ白居易はくきょいに似てきてしまったようだが、

ただ違うのは、白居易は若い二人の女性を近づけていたことだ。

さすがに八十とか九十とかになるより前には官職を去るはずで、

一紀[十二年]ひまの閑ひまくらは持ちたいものである。

貴君もまた進退は不器用な方で、

才能はありながらも、頑なな運命の定めにより左右されている。

譬えるならば、

万斛こくの大きな船が、九つに折れ曲がる水路を行くようなもの。

貴君の兄上むちは最近、仏法を聞き、新たに道を得て、

この世界は大海に浮かぶひとつぶの泡のようなものだと悟ったという。

ならば、歳としの暮れへと向かうこれからの日々に、

故郷の家への道に草木に繁らせないようにはいかかてあろうか。

【補足】[「貴君の兄上」といっているのは程之元ていしげんのことで、程之元については次の短文に記されている。程之元も地方官として出ているので、「我等は東の地で知事の職に就いた」と詠んでいるのである]

## ■ 【09-2-047】 跋送表弟程懿叔赴夔州運判詩後

【解題】蘇軾ていししょうは程之邵に贈った上の詩を書いてその兄の程之元ていしげん [字は徳孺あざな 徳とく 孺じゆ] に送り、それにこの短文を添えた。程之元が楚州知事として赴くときに蘇軾が贈った詩を作品番号 08-1-028 で見ていたが、その後、広南東路こうなんとうろの役人となっていた。広南東路はいまの広東省のあたりで、五嶺ごれいといわれる山岳地帯の南の地域なので、この短文に嶺外れいがいの

地と記されている。

### 【訳文】

時に程之元は嶺外れいがいにあって、たまたま使いの者こうが杭州に来たので、この詩を録して示すことにした。程之元からの手紙には、仏教を学んで悟るところがあると記し、偈げ、頌しょうを十数篇寄せて来ていた。それでこの詩に「新得道あら」[新たに道を得た]の語があるのだ。

### ■ 【09-2-048】 次韻劉景文登介亭

【解題】 劉季孫りゅうきそん [字は景文] [→作品番号 09-2-036] が介亭かいていに登って詠んだ詩に次韻した。介亭は鳳凰山ほうおうざんにあって、北に西湖せいこを、南に錢塘江せんとうこう [浙江せつこう] を見下ろすという。

### 【訳文】

ここ水の国は梅雨が終わったところ、  
老年の身は、この蒸し暑さに苦しめられる。  
高くそびえる介亭かいていは新たに瓦を葺いたばかり、  
そこへと向かうなら、足はすこぶる軽い。  
介亭の脇、横の松の根もとにある井戸は深さ百尺、  
二つのつるべを引き上げるなら、  
浄きよらかな青い水が飛び走る。  
そこに觴さかずきを流す遊びを始めると、  
子どもらがわっと集まってきて、  
腹を抱えて皆で大笑いする。  
涼しい風が吹いてきて、

あたかも風に飛び乗れるような気になる。

そうか、巖いわおのもとに猛々まきしい気が宿っているのだ。

ここは世の内でありながらも、存在の外にある。

だから夏の暑さとも無縁なのだ。

長く歌うと、声は雲へと入り、

弦管の音も追いつけはしない。

北に見る西湖せいこはまことに西施せいしではないか、

煙る樹木は西施の眉と目だ。

南に見る錢塘江せんとうかうに穏やかなときはない、

高い浪は屋上に雪を翻すばかり。

一瞬にして四つの大海を飛び越える伝説の鳥のように、

ああ、百世も速やかに過ぎ去って行く。

遠せん錢氏ごうこくの(呉越国の)時代を追憶し、

この介亭を建てた近き世の知事を思う。

わが生せいは寄よせるが如ごときのみ。

重んじるのは寸暇、一尺ぎやくの玉などは軽んじる。

劉將軍りゅう[劉季孫りゅうきそんのこと]のこの詩のすばらしさは、

掛け軸を飾るために用いるようなものではない。

劉將軍がひとたび手ふるを揮うと千の言葉が溢れ出て、

春の山に色とりどりの鳥を舞わせ、

月の照る谷で猿を悲しく泣かせる。

劉將軍は朝あすは鶉の高鳴きよりも先に起き、

夜は蝸びぐしの声より長く励み続ける。

私は老いても詩を吟じることはなくなっていたのだが、

貴君に頼ってたまには詠み合うとしようか。

よし、この谷を起点として、

いまから遠く見に歩こうではないか。

散策三昧こそは至上の楽しみ、

いわゆる五欲[色、声、香、味、触の欲]などとはおさらばである。

とはいえ、

昔、詩句で劉師服<sup>りゅうしふく</sup>を圧倒した風狂の道士<sup>どうし</sup>には、

私は及ばないのである。

【補足】[(1) 蘇軾は西湖を古の美女の西施にたとえた詩をかつて詠み、すこぶる人口に膾炙した [→作品番号 04-2-009]。この詩の中ほどで蘇軾は、まさにその通りだと、わざとらしく納得してみせたのである。(2) 介亭<sup>かいてい</sup>を建てたのは30年ほど前に杭州知事<sup>こう</sup>であった祖無沢<sup>そむたく</sup>であった。(3) 「吾が生は寄せるが如きのみ」という得意の句が詩の中ほどに置かれている。(4) 最後の部分は、唐の時代<sup>とう</sup>に韓愈<sup>かんゆ</sup>が書いた文章に基づく。劉師服<sup>りゅうしふく</sup>はある風変わりな道士<sup>どうし</sup>と句の詠み合いをしたが、とてもかなわずに降参したという。同じ劉姓の人物を引いて、蘇軾は劉季孫を屈服させることなどできないと歌ったのである。(5) この詩は、次韻の詩につきまとう短所であるところのごたごたした印象は免れないものの、叙景と叙情を兼ね備えた格調高い作品であるといえるだろう]

## ■ 【09-2-049】 袁公濟和劉景文登介亭詩、復次韻答之

【解題】介亭<sup>かいてい</sup>で劉季孫<sup>りゅうきそん</sup>が詠んだ詩に、杭州の副知事<sup>こう</sup>の袁軾<sup>えんこく</sup> [字は公濟] [→作品番号 09-2-038] が次韻したので、蘇軾がそれに和して答えた。

## 【訳文】

私は、酔っての夢に昏昏<sup>こんこん</sup>として墮<sup>お</sup>ちてしまっているような状態ている、  
この六月の蒸し暑さをどうすることもできないのだ。

貴君の詩は、

朝の眠りが十分に足りたところに吹いてくる涼しい風のようなのだ。

貴君は山水に登臨すれば必ず佳句を得る。

介亭<sup>かいてい</sup>から見るなら、

銭塘江は白く輝き、北<sup>せい</sup>に西湖の水を照らし出す。

貴君は、手を袖に入れて独りじと黙っているうちに、

腹の内にすでに詩稿ができてあがっている。

このとき、風雨が過ぎ去り、

藹藹<sup>あいあい</sup>として雲が麓に帰ると、

星はまばら、月はかすか、

炎暑はもはや収まったのだった。

惜しいことに、

清らかなこの光景も、たちまち変化して消滅し、もはや逐<sup>お</sup>うことができない。

しかし、帰ってから、貴君の詩を読むなら、

耿耿<sup>こうこう</sup>としてなおその清らかな光景が目の内に存在するのである。

思えば、貴君とは若いときに、

試験場においてその声価を争ったのだった。

貴君は、水を翻すかのようにして文章を書き、

手を交差させる間に賦を作った。

秋風に雁が飛び立つところに行われたその試験で、

私は貴君の後ろに従って合格した。

その貴君が、

本物の玉ぎよくを玉に献じたにもかかわらず、

石であるとして足切りの刑へんかにされてしまった下和のように、

どうして泣かなければならなかったのか。

貴君なんしんと南新県の道で会ったときに、

貴君は青い衫うわぎに破れた袖を垂らしていた。

こうも大きつまずくことを早くに知っていたなら、

貴君は十年の歳月を(官界に出ようとせず)に読書に使っていたであろう。

漢かんの時代に少しも昇進しないままに老いた馮唐ふうとうを嫌うことはない、

早くに中央召されなからついでには放逐かきされてしまった賈誼ぎよりもまさっているのだから。

今年になって貴君と同僚になり、

旧ふるい好みよしを重ねて続けることとなった。

世間の昇り沈みなどは言うに足りないことだ、

蝸牛かたつむりの左右の角が争う程度のことでしかないのだから。

さあ、ともに湖山あるじの主となって、

川や谷を窮めようではないか。

人が駆けても貴君は争わない、

人から棄てられることこそが我が望むところである。

いつか宮廷の門に官服と冠をひっかけて、

一緒に故郷に帰ろうではないか。

【解題】 [(1) これは蘇軾の気持ちのやさしさが溢れ出た詩である。もとの袁穀えんこくの詩は、蘇軾との古い関係については何も触れていないが、蘇軾のこの詩はもっぱらその

ことを歌っている。(2) 若いときに袁轂と試験場で争ったというのは、都で行われた科挙の一次試験のことだろうか。そのとき袁轂のほうが上位の成績であったのだが、二次試験には合格できず、以来袁轂は苦しい歳月を送らなければならなかった。ただし、一次試験を一緒に受けたと作品番号 09-2-022 に記されていた 5 人に袁轂の名はない。(3) 南新県なんしんで会ったとあるのは、蘇軾こが杭州副知事であったときのことであろう。袁轂は官職を得たものの低い地位にあったのだろう。(4) 現在副知事の地位にまで昇った袁轂とともに仕事をするようになり、官職を辞めるときには一緒にであると蘇軾はこの詩の終わりで約束した。袁轂は後に処州知事しよに昇進している]

### ■ 【09-2-050】葉教授和溇字韻詩、復次韻為戲、記竜井之遊

【解題】この詩の題は、「葉教授しよが溇じよくの字を韻に用いた詩に和した。それにまた次韻して、(劉季孫りゅうきそんが) 竜井りゅうせいに遊んだことを戯れに記した」。葉教授は未詳。「溇の字を韻に用いた詩」とは上に見た介亭かいていでの詩。介亭の詩から延々と次韻のリレーが続いたのである。「溇じよく」の字は上の一連の詩では、もっぱら蒸し暑いという意味で用いられていた。ここでは淡泊の対義語として、飲食の味が濃厚であるとの意味で用いている。詩の題にある竜井りゅうせいは作品番号 09-2-014 で見ていて、西湖の西の風篁嶺せいこ ふうこうれいの近くにあった。風篁嶺の周囲にはいくつかの泉があり、竜井はその最も大きなものであるという。なお「嶺」は日本語でいう「峠」に当たる場所。

### 【訳文】

先生しよ[葉教授ろは魯[孔子を生んだ儒学発祥の地]の儒者の一人、

飲食は清らかで溇こいものは食べない、

いつも空はらわたっぽの腸から匂を吐き出し、

よくよく咀嚼するなら五つの味が全て具わっている。

立派な屋敷で賑やかに音楽<sup>かな</sup>を奏で、

目をぎらつかせているような連中を見かけると、

腹に毒を含んだ冷淡な顔をしているわいと、

急いで走って逃げてしまう。

家に帰ると、瓠<sup>ひさご</sup>の葉を燃やして豆を煮て、

弟子とともに太古の詩を歌う。

それは人を戒め、聖人を讃え、

あるいは、

「功名などは走り行く兎、千人の者が追っても我は知らぬ」

と、うそぶくのである。

先生は我等のような者も受け入れてくださり、

ともに静かに座って、目を閉ざして時を過ごすのである。

高亭<sup>こうてい</sup> [介亭<sup>かいてい</sup>あるいは葉教授をいふか]は岩を積み上げた高みにあって、

木の枝の先に屋根をかけたかのよう、

客人を招くということはないのだが、

我等はいつも定めずに訪れるのである。

雪のような髯<sup>おきな</sup>の叟<sup>りゅう</sup> [劉季孫<sup>きそん</sup>のこと]が、

西の嶺<sup>りゅうせい</sup>に竜井を訪ねたということを知った——

朝日が山に射し込むと、

水<sup>みづ</sup>に涵されたように地上の瓦が輝き、

雲は無限の広がりを見せ、

西湖<sup>せいこ</sup>は夜のあいだも閉ざされることはない。

仏陀が法を説き、仙人が書を読むのにふさわしい竜井の地に、

いおり庵を結ぶ老人べんさいろう[弁才老]がいて、

座禅を組むときには、天魔も畏れて哭き、

善き菩薩が時に集まって、ここに法燈をともし続けている。

吾らは詩や酒に汚された者、

その庵を訪れたく思っても、障りがあるのを恐れる。

願うのは第一義[仏法の最上の教え]を聞くことであって、

山中の食事<sup>に</sup>ありつこうというのではない。

そうだ、官服などは脱いでしまえばよいのだ、

私は子供のころからむしろ妙な衣服を好んだのだから。

【補足】[蘇軾は次韻の名手であるが、さすがに何度も次韻を重ねたせいで並みのやり方では詩を組み立てられないと、超絶的な語彙力を駆使してのH難度の作品としてなんとかものにしたということであろう。訳者如きには難しすぎて大意を汲むことさえままならないのだが、べんさいだい し げんじょう弁才大師元浄 [→作品番号 09-2-014] が登場しているので、ひどく出来の悪い「ずっぱ訳」ながらもここに掲げておく]

## ■【09-2-051】祈雨祝文

【解題】梅雨の後、こう杭州のあたりは雨が降らなかつたようだ。せい こ西湖の工事では手腕を發揮した蘇軾も、干天に対しては神に祈るしかなかった。

### 【訳文】

こう杭州の土地柄は山を負って江を帯び、水は潤沢であっても留まることがありません。雨が降らないことが十日を超えると、農民は憂い顔になります。水が少なくなると舟を挽くためには河を浚渫しなければな

りません。とかく公私に困ることばかりで、そうなるともはや役人たちには救う力がありません。坐視してばかりではいられませんので、ただただ神に助けを求めるのです。民の困窮を憐れみ、役人の無力を赦して、ここにひと降りの雨を賜りますよう、切にお願いいたします。そのお礼を忘れることはありません。

## ■【09-2-052】 鵲橋仙

【解題】七夕に蘇堅<sup>そけん</sup> [字は伯固<sup>あざな かくこ</sup>] [→作品番号 09-1-018] が詠んだ詞に和した。蘇堅の名は運河の改修工事を提案した人としてその名を見ているが [→作品番号 09-2-040]、詩詞の才もあって蘇軾と気が合い、応酬の作が数多く残っている。

### 【訳文】

乗槎<sup>いふな</sup> 帰去、[槎に乗って行きましょう]

成都<sup>せいと</sup> 何在。[成都はどこにあるのでしょうか]

万里<sup>ちやうこう</sup> 江沱<sup>かんすい</sup> 漢漾。[万里の向こう、長江、漢水の遙かな源です]

与君各賦一篇詩、[あなたに差し上げるこの一篇の詩を]

留織女、[織り姫に渡して]

鴛鴦<sup>おしどり</sup> 機上。[鴛鴦の織物に縫い込んでもらいましょう]

還將旧曲、[これは昔作った曲]

重賡新韻、[あなたの新しい曲へのお返しといたします]

須信吾儕天放。[私たちは天から放たれてしまった者なのでしょうか]

人生何処不見嬉、[人生はまったく子供の遊びのようです]

看乞巧、[御覧なさい、七夕の夜に]

朱楼彩舫。[流される飾り舟を]

【補足】[(1) 後半の始まりにある「旧曲」「新韻」の意味するところはよくわからない。かつて2人の間で贈答し合った詩詞を踏まえているのだろうか。(2) 最後の部分は、七夕に飾り付けた舟を川に流す風習があり、その姿を官界に浮遊する自分たちになぞらえて歌ったものであろう]

### ■ 【09-2-053】次韻林子中見寄

【解題】潤州知事の林希<sup>りん き</sup> [字は子中<sup>あざな しちゆう</sup>] [→作品番号 09-2-029] から寄せられた詩に次韻した。

#### 【訳文】

都で詩友となった者たちはいまやいずれもさすらいの身、  
あそこは、痛飲、痛吟する連中に苦しめられたものだ。  
貴君は昔の盛憲<sup>せいけん</sup>と同じ名のある人、  
私<sup>わが</sup>はというと、昔の陶淵明<sup>とうえんめい</sup>と同じ世間とはうまく合わせられない者である。  
かつて私は蒜山<sup>さんざん</sup>に隠れ住む旅人になろうとしたが、  
長江<sup>ちやうこう</sup>には岷江<sup>びんこう</sup>の水が混じっているように、  
私<sup>わが</sup>はいまもって根は蜀<sup>しよく</sup>の人間である。  
西湖<sup>せいこ</sup>では千頃<sup>けい</sup>の葑<sup>まこも</sup>を取り除き終わったから、  
魚がさらに数を増してゆくのを笑って看ることになるだろう。

【補足】[(1) 林希<sup>りん き</sup>になぞらえた盛憲<sup>せいけん</sup>の名は作品番号08-2-067で見ている。(2) 蘇軾<sup>そしつ</sup>が潤州<sup>じゆん</sup>の蒜山<sup>さんざん</sup>に隠棲しようとしたことは作品番号07-1-070や09-2-029で見ている。(3) 最後の結びは西湖<sup>せいこ</sup>に根を張った水草を取り除く工事が終わったことを詠んでいる]

## ■【09-2-054】安州老人食蜜歌

【**解題**】「**異人**」を好む蘇軾らしい詩。詩の題は「**安州老人**が蜜を食することを歌う」。ここにいう安州老人とは、安州出身で**錢塘**に住む**仲殊**という僧で、即興で詩を作るのが巧みで、五穀を断っていつも蜂蜜を食べていた。少し詳しいことが**陸游**の**随筆**『**陸放翁詩話**』に記されているので、それを先に読んでおこう。

### 【訳文】

陸游：『**陸放翁詩話**』より

一族の**陸彦遠**がこのように話していた。

「若い頃に**仲殊長老**を見たことがある。**蘇東坡**は長老のために『**安州老人食蜜歌**』を作った。そのとき、**蘇東坡**は数人連れて長老を訪ねたのだが、食べる物にはどれも蜂蜜が用いられていた。豆腐、**麵筋**、牛乳の類のいずれもが蜂蜜を漬して食べるので、連れの人々の多くは箸を下すことができなかった。ただ**蘇東坡**だけはもとから蜂蜜が好物で、長老とともに満腹するまで食べた。**崇寧**年間に、長老はふいに寺の人々に別れを告げると、方丈の門を閉じ、自ら縊死した。火葬にすると、**五色**の舍利[骨]が数知れず残った」

……[中略]……

陸彦遠はこのようなこともいった。

「**仲殊長老**は若いときは**士人**であった。**遊蕩**にうつつを抜かしてあまりにひどかったので、妻が**羹藪**の中に毒を入れ、長老はほとんど死にかけた。蜂蜜を食べて毒を消した。医者には『次にまた肉を食べると毒が力を発揮して、今度はもう治療できない』といった。長老は家を棄てて僧になった」

……[中略]……

『**呉郡志**』に、「**仲殊**、字は**利利**、**承天寺**の僧。人々は**蜜殊**と呼んでいた。詩に巧みで『**宝月集**』があったが、いまは伝わらない。……[中略]……後に**枇杷**の木の下で**自經**して死んだ……[後略]……

…」とある。

【補足】〔仲殊ちゆうしゆが死んだ崇寧すうねい年間というのは、蘇軾そうが杭州を去ってから十数年後である。陸游りくゆうが生まれたのはそれから20年ほど後であるから、陸游より一世代上の陸彦遠りくげんえん〔原文では族伯父とある〕が仲殊から直接話を聞いたということは十分にありうる。自経じけいしたのは世をはかなんだわけではなく、死ぬべきときが来たと知って自らの意志でこの世と別れたのであろう。なお、陸氏かいけいは会稽えっ〔越州〕の名族である〕

### 【訳文】

安州老人あんしゅうろうじんの心は鉄に似ているのだが、  
 老人には小児の舌が付いているのだらう、  
 五穀を食べずに蜂蜜ばかり食べている。  
 蜜蜂を指して、  
 「これはわしの檀越たんえつ〔施主〕である」  
 と、笑っている。  
 人は蜜の中に詩があることを知らない。  
 千花百草の姿がそこにそっくり含まれている。  
 老人はそれを咀嚼して時にぱっと吐く。  
 世間の愚かな小児のような人々は、  
 蜜に引かれる蜂のようにその詩に集まってくる。  
 蜜〔詩〕には百病を治す薬効がある。  
 俗事に狂奔しているときに、  
 老人の詩を見てふっと笑うなら、  
 百の憂いかさつと消えてしまう。

とうば  
東坡先生は人に対して慎み深い方であるのだが、

果たして幾人が東坡先生の言葉を飲み、

幾人が東坡先生の言葉を嫌うのか。

ちょうど茶を飲んで、甘いとも、苦いとも感じるのに似ているだろうか。

それでも、蜂蜜を食べれば中も端も全てが甘い<sup>あま</sup>のには及ばない。

蜂蜜好きの老人に敢えて「双竜餅」<sup>そうりゅうへい</sup>「茶の名」を差し上げるとしようか。

鏡を見たら、なんと<sup>ふた</sup>「双つの竜の影」<sup>ふた</sup>「安州老人と東坡先生の影」が映っているではないか。

さんご  
三呉の地の六月は暑さのあまり水も湯のようになってしまいが、

老人の心は<sup>そうりゅうせい</sup>「双竜井」<sup>そうりゅうせい</sup>「銘茶の産地の水」のように清冷である。

【補足】〔(1) 蜜と詩、蜜と茶をごちゃごちゃに対比させて楽しく詠んだ詩。(2) 蘇軾が自分自身について、「東坡先生取人廉、幾人相飲幾人嫌。恰似飲茶甘苦雜、不如食蜜中辺甜」<sup>とうばせんせいひとれんといくにんあよろこいくにんきらあたかにちや</sup>「東坡先生人に廉を取る、幾人が相い飲み幾人が嫌う。恰も似たり茶を飲んで甘苦の雑じるに、如ず蜜を食して中辺の甜きに」<sup>のかんくましかみつしよくちゅうへんあま</sup>と詠んでいるところが面白い。この部分には蘇軾自身の注で「仏陀は『吾が言は譬えれば蜜を食らうようなもの。中も辺も皆甘い<sup>はじあま</sup>のである』<sup>ぶつだげん</sup>といった」とある。つまり、蘇軾は、自分は甘みと苦みの混じった言葉を吐いてしまうので、飲む人もいれば嫌う人もいると、そのように自覚していたのである。(3) 終わりのところは三つの「双竜」<sup>そうりゅう</sup>を並べた遊び。(4) 「三呉の地」<sup>さんご</sup>とは呉興、呉郡、会稽、あるいは蘇州、常州、湖州を指す。要するに杭州周辺をおおまかに示す語として蘇軾はよく用いている。(5) この詩を「晩唐の詩の<sup>ばんとう</sup>下流である」と低く評価する向きもあるが、仲殊長老に倣って蜜のように甘い味の詩を作ってみせたのだろう。(6) 蘇軾が蜂蜜好きであったとするのは、<sup>こう</sup>黄州時代に蜂蜜酒を詩に詠んでいること〔→作品番号 06-3-044〕などからきているのだろう〕

## ■ 【09-2-055】次韻錢穆父紫薇花二首

【解題】<sup>せんきやう</sup> 錢勰 [<sup>あざな</sup> 字の穆父] [→作品番号 09-2-030] が詠んだ<sup>さるすべり</sup> 紫薇花の詩に次韻した。蘇軾自身の注によると、<sup>きよはくどう</sup> 虚白堂の前に二株の紫薇花であって、俗に<sup>はくきよい</sup> 白居易が植えたものだといわれていた。錢勰の詩はそれを詠んだもの。虚白堂は西湖の南の<sup>せいこ</sup> 鳳凰山<sup>ほうおうざん</sup> にあった。このときに<sup>えつ</sup> 錢勰は越州にいたから、かつて虚白堂で詠んだ詩があったのだろう。二首のうち第一首を訳す。

## 【訳文】

## 其の一

<sup>きよはくどう</sup> 虚白堂の太く<sup>さるすべり</sup> 大きな紫薇花の木、  
 日が落ちかかるとき、  
 秋の風に吹かれると、斜めに横に花が照らされる。  
 これまでにこの花を幾人が見たのたろうか。  
 それを知るのはこの大地だけ。  
<sup>ぶつ か</sup> 物化[自然の営み]には涯がなく、<sup>せい</sup> 人の生には涯がある。

## ■ 【09-2-056】送張嘉州

【解題】<sup>か</sup> 嘉州知事として赴任する<sup>ちやう</sup> 張姓の人を見送った詩。嘉州は蘇軾の郷里に近く、作品番号 01-1-002 で嘉州を発った際の詩を見ている。張氏はどのような人物であるかは不明で、この詩から<sup>こうなん</sup> 推測するに江南を故郷とするようである。

## 【訳文】

<sup>り はく</sup> 李白は手紙にこう書いた――

「天下の人々は集まるとこのように語り合う。

この世に生まれたからには、

一万戸の州の領主になるより、

韓朝宗かんちょうそう[人を見る目があるとされてい]の面識を得たいと願っている、と」

私は少年のころ、

一万戸の州の領主になることも願わなかったし、

韓朝宗の面識を得たいと願いもしなかった。

本気で願っていたのは、

できれば嘉州か知事となって、

しほしば酒を載せて凌雲寺りょううん じ[嘉州の寺]に遊びに行きたいと。

ところが、無用な虚名にほだされていまや白髪頭となり、

夢の中でのみ竜泓口りゅうおうこう[凌雲寺の裏手の谷]に行くのである。

高官の衣服を身に着けるなど、浮き雲のようにはかないこと、

江山こうざんの内に身を置く時間こそが、手に入れ難いものなのである。

李白は詩にこう詠んだ――

峨眉山月半輪秋、が び[峨眉の山月 半輪の秋]

影入平羌江水流。へいきやう[影は平羌の江水に入って流る]

李白のこの語を理解するのは誰なのか。

貴君は是非とも、

明月楼めいげつろう[嘉州の高楼]に登って月を見るがよい、

そして、万事のうち何が真であるのかを笑って語るがよい、

全ては東巖とうがんの酒[嘉州の地酒]に委ねればよいのだ。

こちらにまた帰ってきたならば、

この老人の好意を避けることなく、

一錢ばかりの酒を飲みかわそうではないか。

【補足】[(1) 李白りはくをさかんに持ち出しているのは、李白も蜀しよくの人だからである。(2) 最後のところは、昔、会稽かいけい [越州えつ] に清廉な太守がいて、人から百錢を贈られたときに、そのうち一錢だけを受け取ったという故事を引いている]

## ■ 【09-2-057】 奏浙西災傷第一状

【解題】杭州知事としての蘇軾の特筆すべき仕事の一つに災害への迅速な対応があった。赴任してまだ日の浅い昨年の11月4日に、気象災害が大飢饉に発展する予兆があるとして、それへの方策を記した書状を朝廷に提出し [→作品番号 09-1-041]、国のバックアップを得て各種施策を実行し、その結果として今年の春には目立った被害を出さずにすんだ。この年も、7月に災害が再び発生する恐れがあると見るや、すぐに動き出した。朝廷に差し出した書状の冒頭の部分を見ておこう。

### 【訳文】

元祐五年七月十五日、竜図閣りゅうと学士左朝奉郎知杭州の蘇軾が書面をもって申し上げます。

臣わたしはこのように聞いております。「事ことはあらかじめすなわ、あらかじめ準備しておくなら成功し、あらかじめ準備しておかないなら失敗する」。これは昔から今も変わらない真理であります。

とりわけ、災害を救い、被災者を援助することでは早さが最も大切です。災害にあった民衆をまだ飢饉に至る前に救うなら、用いる物資は少なくともすみますし、効果は広い範囲に及びます。税の徴収を

緩めたり軽減したり、備蓄されている穀物を売りに出したりするようなことであれば、官にとっては大きく失うものではなく、しかし民衆はお上より大きな恩を賜われるのです。今年はそうすることによって成功しました。もしもすでに民衆が飢餓に陥ってからようやく救済に乗り出したなら、物資をたくさん使っても効果は小さく、官の倉庫を空にし、税収が大幅に落ち込んで、官が苦しみことになりましても、飢えた人々はついには死に至ってしまうのです。熙寧年間にはまさにこのようなことになったのでした[以下、改革政治が進行していた熙寧年間の飢饉について、対応が遅れたために、浙西路だけでも死者が五十万人以上も出たことを述べる]。一方、昨年は浙西路の数郡においてまず水害が起こり、次に干害が発生し、その災害の度合いは熙寧年間と比べても小さくはありませんでした。しかし、二聖[皇帝と太皇太后]の仁智聡明によって、去年の十一月にすくなく御指示が下されたのでした[以下、朝廷の執った方策、実は蘇軾が提案したもの、について述べる]。これして一人の餓死者、流民を出さずにすんだのでした。これは事に先んじて対処したからに他なりません。

これを見れば、「事は予めすれば則ち立ち、予めせざれば則ち廢す」の二者によって、禍福がこれほどまでに決定的に異なることがわかるのであります。

……[以下、再び早くに対策を立てなければならなくなった緊迫した状況にあることを報告し、今回の対応策の概要を述べる]……

【補足】[(1) 上の書状を書いた10日後の7月25日に、蘇軾は短い第二報を朝廷に出している。そこでは、7月21日から23日にかけて嵐があつて、災害はいよいよ差し迫ってきたとして、朝廷に迅速な対応を求めている。しかし、被害が何も出ていないのに蘇軾が一人で騒いでいるとの意見があつて、朝廷は動こうとしなかったもので、9月に宰相の呂大防に向かって急いで対応してほしいと強く訴える手紙を書いている。

(2) 蘇軾が最も恐れるのは、地方が中央の顔色を伺って何事も順調であると偽りの報告をし、どうにも隠しようがないほどの甚大な被害が生じるに及んで、ようやく効果のあまりない手を打つようなことが常態化してしまうことであつた。改革政治が行

われていたときにはまさにそのようなことがあったのを蘇軾は実際に見ていたので、  
 先手先手で対策を実行して行くことの重要性を強く朝廷に訴えたのである。しかし、  
 そうした考えは浸透せず、民衆は折々の自然災害に苦しめられ、社会を不安定化させ  
 る重大な要因である流民の増大を招き、宋は外部からの攻撃だけではなくて、内部か  
 らも崩壊して滅亡へと向かって行ったのだった。(3) なお、細かいことだが、両浙路  
 はかつては東浙路と西浙路に分かれていた。この文章ではもっぱら西浙路について述  
 べている]

## ■ 【09-2-058】南歌子

【解題】8月18日に錢塘江名物の海嘯を觀て、蘇軾〔字は伯固〕〔→作品番号 09-2-052〕の詞に和した。

### 【訳文】

其の一

海上乗槎侶、〔海で槎いばに乗る友といひますと〕

仙人萼緑華。〔仙女の萼がくりよ緑華かでありましよう〕

飛升元不用丹砂、〔仙薬などなくても自在に飛べて〕

住在潮頭来処、〔潮の頭の上いにいて、こちらこにち来たかと思つと〕

渺天涯。〔もう天の涯いにるのです〕

雷輶夫差国、〔雷がこの国にとどろきわたります〕

雲翻海若家。〔海の神の家が雲いにひつり返されたのでしようか〕

坐中安得弄琴牙、〔この潮を見て誰が歌うてるでしようか〕

写取餘声歸向、[潮の声を少しでも写し取れたなら]

水仙詩。[仙人たちに誇れるでしょうね]

【補足】[激しく遡る潮の上に仙女がサーファーのように乗るありさまを空想した戯れの詞。大意をとって訳した。原詞にある「海若」は海の神で、『莊子』には、北海ほっかい若じやくが井の中の蛙に海の話をして通じないと、巨視の哲学を語る寓話がある。また、唐とうの柳宗元りゆうそうげんは、東海若とうかいじやくが仏教について語る寓話を書いていて、蘇軾がそれについて記した文章を後に見ることになる]

## 其の二

苒苒中秋過、[せかせかと中秋が過ぎ]

蕭蕭兩鬢華。[しおしおと髪は白くなります]

寓身化世一塵沙。[この世界に寄せる身はひと粒の砂]

笑看潮来潮去、[潮が来て潮が去るのを笑って見る間に]

了生涯。[生涯を終えてしまうのです]

方士三山路、[道士どうしには仙界への路があり]

漁人一葉家。[漁師にはひとひらの舟があります]

早知身世兩声牙。[早くから世間とはうまくいかないと知っていました]

好伴騎鯨公子、[よし、鯨にまたがる公子りはく[李白]を好敵手として]

賦雄詩。[勇ましい詞を賦すとしましょう]

## ■ 【09-2-059】南昭慶寺題名

【解題】西湖の南にある昭慶寺を訪れた記録。

## 【訳文】

明夫、子方、明弼、康道、嘉甫、子瞻が一緒に南昭慶寺に遊んだ。

庚午八月某日題す。

【補足】[人名は全て字で記されている。明夫は弓允という官員、子方、明弼、康道、嘉甫の本名は不明、子瞻は蘇軾である]

## ■ 【09-2-060】 題張白雲詩

【解題】張翥 [号は白雲] の詩に添えた短文。

## 【訳文】

張翥は西蜀に隠れ住んだ君子で、字を少愚といった。私の父[蘇洵]と交流があり、岷山の下の白雲溪に住み、自身で白雲居士と号した。もともとは世に出て政治に携わる志があったのだが、己を重んじて他人と合わないところがあったために、草野に老いて死ぬことになったのであって、わざと垢まみれになって隠者の名を盗もうとする者ではなかった。

たまたま西湖の静軒に遊んだところ、白雲居士の遺句が記されていた。それを見てその人を懐い、寺の僧にその句を石に刻むよう命じた。

元祐五年九月五日。

【補足】[先に亡くなった范鎮 [→作品番号 09-1-036] が成都知事であったときに張翥を訪ねて詩を贈答し合ったという。杭州にも伝わって蘇軾が石に刻ませたのはどのような詩であったのだろうか]

## ■ 【09-2-061】 与錢穆父

【**解題**】9月9日の重陽ちようようの節句に、越州えつにいる錢勰せんきやう あざな ぼく ふ [字の穆父] [→作品番号 09-2-055] に送った手紙。

【**訳文**】

頂戴するお手紙は数知れず、貴君の動向を日々にお聞きできますのを嬉しく思っています。このごろはいかにお過ごしでしょうか、秋高いころ、必ず御佳勝のことと存じます。はなはた閑であるのではないのでしょうか。私は五鼓ごこ[午前五時ごろ]に起き、日中は何事もなく、永い日中に嘯咏しょうえいの楽しみを得ています。今日は重九ちゆうきゅうで、遠く貴君に一献さしあげましょう。新しい詩がたくさんあるでしょうから、寄せていただければ幸いです。千万国のために自重されますように。

【**補足**】[呑気に遊んで暮らしていると書いているのは、むろん気心の知れた友への戯れである]

■ 【09-2-062】 九日袁公濟有詩、次其韻

【**解題**】同じ日に杭州副知事の袁穀えんこく あざな こうさい [字は公濟] [→作品番号 09-2-049] が詠んだ詩に次韻した。

【**訳文**】

昔からいわれている――

静かに治まっているときには清らかな閑を得ると。

私は恥ずかしく思う――

静かに治めた昔の名知事のほんの端くれにも及ばぬのを。

それでも、

東に向かって酒を挙げて江海に捧げ、

落日に向かって樽さかずきを回らせて湖山に勧めよう。

平生からこもごもの悲歎と親しんでいるのだが、

いつかは公文書の山からこの身を抜き出すことができるのだろうか。

笑って指さすのは西南の方角、

これは帰り行く路だ、

飛び疲れて弱った羽はずっと還りたがっている。

【補足】〔(1) 冒頭の部分は漢かんの時代こうこうの蓋公の「治道は清浄を貴び、民は自ずから安定する」という言葉〔→作品番号 05-2-035〕を踏まえている。(2) 「昔の名知事」と訳したのは、原詩では晋しんの劉惔りゅうたんの名を挙げていて、その政務は「鎮静」と評された。蘇軾は何事もなく静かに治まることを理想としたが、杭州こうに来て以来、災害対策やインフラ整備など忙しく動き回らなければならなかった。上に見た錢勰せんきょうへの手紙では、現実とはかけ離れた自画像を描いてみせたのだった。(3) 西南の方角がどうして帰り行く路なのか、袁穀えんこくの郷里がその方角だからである〕

## ■ 【09-2-063】和公済飲湖上

【解題】上と同じ日に西湖せいこに船を浮かべたようである。袁穀えんこく〔字は公済あざな こうさい〕が湖上で飲んだことを詩に詠み、翌朝になってそれに次韻した。

### 【訳文】

昨夜は酔って帰り、そのまま寝てしまった。

枕辺で鳴る雨の音に、暁の夢から覚める。

貴君の詩を読み、

一艘の舟に乗って再び湖に漕ぎ出そうかという気分になってくる。

青い山が朝日に染まる雲をまとうのが見えるであろう。

老人といえども興趣は浅くはない、

また一緒に飲んでくれたまえ。

そして、太鼓を叩いて貴君と歌おうではないか、

豊年の楽しさを。

千人万人を呼んで、

倉庫に蓄えてある米を全部食べさせてしまうのだ。

【補足】[災害対策に心を砕く蘇軾は、豊作のおかげでもはや不要になった備蓄米を放出することを夢想しているのである]

## ■【09-2-064】点絳脣

【解題】同じく重陽ちやうようの節句せつこに蘇堅そけん [字は伯固あざなはくこ] [→作品番号 09-2-058] と詩詞の贈答をした。これは、昨年の重陽の節句に蘇堅が詠んだ詞 [→作品番号 09-1-018] の韻をそのまま用いて作ったもの。

### 【訳文】

不用悲秋、[秋を悲しむのはよししょう]

今年身健還高宴。[今年は元気に宴席にいられるのですから]

江村海甸、[川も村も海も町も]

総ぶつだ作空花観。[総ては仏陀のいう通り空中の花のようなものなのであります]

尚想横汾、[想い見るのは、かのときの漢かんの武帝ぶていが]

蘭菊紛相半。[蘭と菊が乱れ咲くのを歌ったありさま]

楼船遠、[その武帝を乗せた船は遠くに消え]

白雲飛乱、[白い雲とともに乱れ飛ぶ雁が]

空有年年雁。[去り行くまに一年一年が空しくなるのです]

【補足】[同じ重陽に蘇堅の詩に和した作もあるが、面白味が理解できないので割愛する]

## ■ 【09-2-065】書朱象先画後

【解題】<sup>しゅぞうせん</sup>朱象先の画に記した短文。朱象先は蘇軾と同じ時代の人で、山水画に巧みで、<sup>せいこいんし</sup>西湖隱士と号した。

### 【訳文】

<sup>しょうりょう</sup>松陵の人である<sup>しゅぞうせん</sup>朱象先は、立派な文章家であるけれど科擧の試験を受ける気はさらさらなく、善い画を描けけれどそれを売る気はさらさらない。朱象先はこのようにいう。

「文章は吾が心を十分に書き表すことができたならそれでよく、画は吾が意に<sup>おもい</sup>適えばそれでよい」

<sup>どう</sup>唐の時代の<sup>えんりつほん</sup>閻立本はもとより文学で身を進めたい[経世の学で国家枢要に地位に昇りたい]と考えたので、世間から画師として見られるのを取じた。ある人は、このことをもって朱象先の考え方はおかしいというのだが、私はそうは思わない。

<sup>しん</sup>晋の時代に、<sup>たいきょくでん</sup>皇城の太極殿が完成すると、<sup>しゃあん</sup>謝安は、正面に掲げる額<sup>がく</sup>の文字を<sup>おうけんし</sup>王献之<sup>おうぎし</sup>の<sup>い たん</sup>子で書の名手であり、<sup>ぎ</sup>国の重職にあった]に書かせようとした。王献之は<sup>りょうんたい</sup>韋誕の故事[三国時代の魏の大臣であった<sup>りょうんたい</sup>韋誕は能書家として知られ、凌雲台が完成した折に、額に題字を書くよう皇帝に命じられた。額はすでに大工が誤って高所に釘で打ち付けてしまっていたので、韋誕は長い梯子の先に登って文字を書かなければならず、恐ろしさの余り、地上に降り立ったときには髪が真っ白になっていた。そして子供らに、「書などは決して学んではならない」といった]を引いて、次のようにいって断った。「韋

誕は魏の大臣でありましたから、そもそもこのようなことはなかったはずですが。もしも事実であったならば、魏の徳のなさが知れてしまいます」。閻立本にもしも王献之の気節の高さがあつたなら、誰が敢えて画師として閻立本を使つたろうか。

やはり晋の時代に、阮瞻は琴を巧みに弾き、身分の高い人でも低い人でも、老人でも若者で、聴きたいという者があればそのために弾いてやった。その音色は、心と自然が融合し合い、誰がそこにいるかなど関係なかった。妻の兄の潘嶽のために弾くときは、夜中になるまで弾き続けても嫌がることなかった。それで、人々は阮瞻は榮辱とは無縁であると知った。

いま朱象先は世に求めることは何も無い。王公貴人も朱象先に画を描いてもらうことはできない。もしも朱象先が衣を解いて絵筆を持つようなことがあつたならば、私も人と争つてその傍らに座りたいと思うのである。

元祐五年九月十八日、東坡居士書く。

【補足】[閻立本が画師としてのみ世間から評価されるのを嫌つたことは作品番号 02-1-002で見ている。士大夫が勉学に励んで科挙を目指すのは、単に立身出世を求めているのではなく、儒学の本筋として世に役立ててこそ学問の価値があると考えからである。その意味では、最初に朱象先を批判したある人の意見が正しいのだが、蘇軾はこの文章で阮瞻や朱象先はより高い境地にあるとしている。なお、阮瞻の故事は作品番号 06-2-031 でも見ている]

## ■ 【09-2-066】 介亭餞楊傑次公

【解題】楊傑 [字は次公] [→作品番号 09-2-038] が都に行くことになり、介亭 [→作品番号 09-2-049] で送別の宴を開いた。

### 【訳文】

かご とうざんもん  
 籃輿に乗って街の西、登山門から出る。

よし、我が友とともに、仙人の住む村を尋ねようではないか、

かいてい ユートピア  
 介亭のある山の下には、桃花源への路があるといわれているのだから。

あしだ  
 先の朝には、山に登ろうと蠟屐を履いたところで

黒い雲から盆を傾けるようにして雨が降り落ちてきたのだった。

今朝は、千里の広さに積み上がった霧が巻き上がるうとしていて、

ふうこうれい  
 風篋嶺の画のような姿が見え隠れしている。

霧に当たるとその熱を受けて病のもとになるというが、

そんなことを畏れるものではない。

おいし  
 貴君は無為子と号する在家の僧、

せいざん  
 青山とは長く兄弟の間柄である。

峰々を登り尽くし、その先に何かがあるのか、

せいこ  
 天の鏡のような西湖、

せんとうこう  
 大地を呑み込むような錢塘江。

高いところから臨み見て、手を振るって感謝する、

こうじゅう こうじゅう よ  
 「好住、好住」[この住み好きとこ]

この言葉を、清らかな風が一万の谷へと伝えてくれる。

聴くがよい、

風が谷を回り、響き答えてくれるのを。

私もこの風のように、

貴君の声にいつでもどこでも応じるであろう……

## ■ 【09-2-067】 謝吳山水神五龍三廟祝文

【**解題**】<sup>せいこ</sup>西湖の改修工事が完了し、9月のある日、西湖の神を祀った「<sup>ごさんすいじん ごりゆう</sup>吳山水神五竜  
<sup>さんびょう</sup>三廟」に酒食を供えて感謝した。そのときに神に告げた文。

【**訳文**】

西湖埋塞、積歳之患。<sup>せいこ</sup>〔西湖は埋もれて塞がり、長年の患いとなっていました〕  
坐閱百吏、熟視而嘆。<sup>せいこ</sup>〔大勢の役人はそれを見て嘆くばかりでありました〕  
惟愚無知、妄謂非難。<sup>せいこ</sup>〔私は愚かにも、難しくはあるまいと妄りにいってしまいました〕  
禱於有神、陰假其便。<sup>かげ</sup>〔私は神様に、陰ながら助けてくださいと、祈りました〕  
不愆於素、鹹出幽贊。<sup>かげ</sup>〔神様はお怒りにならずに、そっと手を差し伸べてくださいました〕  
大堤雲橫、老葑席卷。<sup>せいこ</sup>〔大きな堤が雲へと伸びて行き、茂った草はなくなりました〕  
歷時未幾、功已過半。<sup>せいこ</sup>〔さほど時間のかからないうちに半分以上もできました〕  
嗣事告終、来哲所繕。<sup>せいこ</sup>〔工事の終了を告げましたなら、後に来る賢人がそれを繕うでしょう〕  
神卒相之、罔拂民願。<sup>せいこ</sup>〔神様のお助けによって、これからも民の願いを無にこしないでください〕  
肴酒之報、我愧不腆。<sup>せいこ</sup>〔食べ物や酒のお供えが十分でないのを恥ずかしく思います〕  
尚饗。<sup>せいこ</sup>〔それでも召し上がってください〕

■ 【09-2-068】 贈劉景文

【**解題**】<sup>りゅう き ぞん あざな けいぶん</sup>劉季孫 [字は景文] [→作品番号 09-2-050] に贈った詩。

【**訳文**】

<sup>はす</sup>荷の花は尽き、  
雨を受ける葉の広がりもすてになくなった。  
<sup>きく</sup>菊の花は残れ、

なお霜おごに傲る茎は立っている。

君は記憶して払い、

一年で最も好よい光景を、

まさく橙だいだいの実が黄で、橘たちばなの実が緑の時のこのいま。

【補足】 [これは初冬の賛歌である。秋から冬に向かうころは、中国でも日本でも寂しさを歌うのが伝統的な価値観であった。蘇軾はここに一年の内でも特によい光景があるとしたのである。しかも、柑橘類好きしよくの蜀の人らしく、「橙だいだいは黄、橘たちばなは緑」という微妙な一時期を切り出している。蘇軾が非常に鋭い感覚を持った天性の詩人であることがわかる。杭州知事の時代の佳作としてよく引かれる詩であるので、原文と読み下し文を掲げておこう]

荷尽はすつ已すて無あめ擎さき雨蓋がい、[荷尽きて已に雨に擎ぐるの蓋は無く]

菊残きくくず猶な有しも傲おご霜枝えだ。[菊残れて猶お霜に傲る枝は有る]

一年好景君須記いちねん こうけい きみすべか き、[一年の好景 君須らく記すべし]

最是橙黄橘绿時もっと こ だいだい き たちばな みどり とき。[最も是れ 橙は黄 橘は緑の時]

【補足】 [(1) 同じころに劉季孫りゅうきそんが琴を聴いて詠んだ詩に和しているが、何が面白いのか理解できないので割愛する。(2) これらの作とは関係ないが、このころにあったとされる三つのエピソードを、先にも引用した何籙かえんの隨筆『春渚紀聞』[→作品番号09-2-003] から読んでおきたい。事実か眉唾物かの判定は確定していないようだ]

## 【訳文】

何籙かえん しゆんしよ きぶん:『春渚紀聞』より

銭塘の顔幾せんとう がん き あざな き せい【字は幾聖】は、才能ある人物ではあったが振る舞いが自由気ままで、毎日酒を飲んで

ばかりいた。東坡先生[蘇軾]が杭州知事になったときに、科挙の一次試験が行われ、顔幾は土地の金持ちの子である劉君と入れ替わって、密かに試験場に入り込んだ。顔幾は首席で合格したのだが、ほかの受験生が訴訟を起し、顔幾は獄に下された。顔幾はしばらく酒が飲めなかったので、こっそり獄吏に一首の詩を言つけて外の酒友達に渡そうとした。その詩は、「亀不靈兮禍有胎、刀從林甫笑中来。憂惶囚繫二十日、辜負醺酣三百盃。病鶴雖甘低羽翼、罪竜尤欲望風雷。諸豪俱是知心友、誰遣尊罍向北開」[詳しい意味は読み取れないが、要するに、獄に繋がれて二十日の間、病んだ鶴、捕まった竜のようにになっているので、誰か酒を差し入れてくれ、ということであろう]。獄吏はその詩を東坡先生のところに持って行った。先生はそれを読んで取り調べを緩し、たまたま恩赦があつて放免となった。それから数年後のある日、顔幾は西湖の寺で酔い潰れ、起きてから壁に、

白日尊中短、[白日も酒樽の中では短いけれど]

青山枕上高。[青い山は枕よりも高い]

と、書いて、数日で死んだのだった。

【補足】[替え玉受験の罪がどれほど重いのか知らないが、蘇軾は諧謔を好み、自身も獄中で詩を詠んだ経験があるので、顔幾を赦してやる気になったというのはありえない話ではないだろう]

何遜：[春渚紀聞]より

東坡先生[蘇軾]が杭州知事であったときに、綾絹の代金二万銭を払わずにいると訴えられた者がいた。公はこの者を呼んで問いたすと、「私の家は扇を作る仕事しておりまして、たまたま父が死んだことに加えて、この春からずっと雨が続いて気候が寒いために作ったものが売れません。決して借金を踏み倒したわけではないのです」。公はしばらくじっと見つめ、こいつは。「よろしい。そなたが作った扇を

持って来なさい。私が売れるようにしてやろう。すぐに扇が届くと、公は絹で作られた二十の扇を取り上げ、裁判用の筆を持ち、行書、草書をしたため、それに木や竹や石の画を描き添えて、またたく間に仕上げた。それを渡し、「持って外に行き、これで借金を払いなさい」といった。その者は扇を抱え、泣きながら礼をいって出て行った。役所の門を出た途端に、好事家が争って求め、一つの扇が一貫で売れ、立ちどころに全部がなくなった。後から来た者は買えなかったのをいつまでも残念がった。そして借金は残らず返せたのだった。一郡の者は感心し、泣く者さえもあった。

【補足】[すでに見たように、蘇軾<sup>しよ</sup>の書や画はよい値で売れたので、少々の借金なら簡単に返済できたであろう]

かえん しゆんしよ きぶん  
何蘧:『春渚紀聞』より

とうば げんゆう こう  
東坡先生[蘇軾]は元祐年間に杭州知事となった。知事の仕事を始めたばかりのころに、税の徴収をする部署の者が、なんけん  
南劍州において科擧の一次試験に合格して都に上ろうとしていた呉味道<sup>こみどう</sup>という者を捕らえた。呉味道は大きな荷を持ち、荷は封印がしてあって、「京師蘇侍郎宅宛」[蘇轍のこと]と記され、差出人が蘇軾になっていたのだが、それが偽りであることが露見したのだった。公はすぐに呉味道を呼び、その荷の中は何であるのかと尋問した。呉味道は恐れ入って縮こまり、「わたしはこの秋に忝々郷里の推薦を頂戴し、都に受験に行くことになりました。郷里の人々が錢を集め、都に行くための費用を工面してくださいました。それを絹に換えましたところ、二百匹になりました。しかし、道中の行く先々で税金がかかるのを計算しますと、都に着くまでに半分以上もなくなってしまいます。心竊かに考えますに、いま天下で最も名が重んじられ、また士を愛すること知られているお方と申しましたら、あなた様と弟様です。たとえ嘘が露見しましても、きっと同情して下さるであろうと、あなた様のお名前をお借りして封印したのでございます。まさか先生がこの地に来られているとは知りませんで、偽りが知れてしまいました。わたしの罪は実に逃れ難いものですが、どうかどうかお許いただけませんか。公は  
じつと視ていたが、笑って書記を呼ぶと、もとの宛名書きに換えて、自分で「東京竹竿巷蘇侍郎宅」<sup>とうけいらくかんこうきやう しよらうたく</sup>

書き、合わせて弟への手紙を一通したため呉味道に渡し、「これより都に行かれなさい。来年はきっと合格されましょう。そしたらまたこちらにお越しなされよ」。呉味道は何度も礼をいって杭州を去った。翌年、呉味道は上位の成績で合格した。呉味道が蘇軾のへの謝礼に記した文章はよい内容の立派なものだったので蘇軾は感心し、帰郷する途中の呉味道を数日間杭州に留めて歓待した。

【補足】〔(1) 一つ前のエピソードでも、蘇軾は罪人をじっと見て〔原文は熟視〕から判断を下している。その人物を見定めて処分を決めたのだらう。蘇軾にはそれだけの眼力があったという話ではあるのだが、知事の主観的な判断で事が決まってしまうのは一般的にはかなり危険なことであろう。(2) 呉味道は都に着くまでに半分以上が税金として取られてしまうといっていた。通行税がそれだけ大きかったのだらう。官員が携える物、あるいは送る物は無税であったから、呉味道は今回のような偽りを思い付いたのだが、それは自分のためというよりは、自分を都に送り出そうと郷里の人が一生懸命に集めてくれたお金を無駄にしたくないという一心からだったのだらう。

(3) 以上の三つのエピソードはいかにも蘇軾らしいと思わせるところがあってはなはだ愉快なのだが、それだけに疑わしくもある。しかしながら、『春渚紀聞』の信頼性は作り話と断じるほどには低くなく、これらと同じ時期に何遜の父が蘇軾に会っていることも記されている]

何遜：『春渚紀聞』より

東坡先生が杭州知事であったときに、我が父〔何去非〕は武学博士として徐州の学校の教授を務めていた。

父が姑蘇〔蘇州〕に行くと、先生は舟を遣わして杭州に迎えてくれた。父は杭州に数日間泊まり、劉季孫とともに西湖に舟を浮かべた。

酒酌のとき、蘇軾は湖山を顧みてすこぶる興味が湧いたのであろう、父と語り合って話は神宗皇帝

の時代に及んだ。蘇軾は早くに神宗皇帝に厚く遇せられことを語り、今日左遷に似たような状況でここにいることを嘆いた。

しばらくして、先生は劉季孫に向かっていった。

「私が今日なお保ってられる余生は、すべて先帝からの賜物であります」

劉季孫はその訳を尋ねた。

「私が都の獄に繋がれましたときに、取り調べが行われ、その一部始終がお上に奏上されておりました。それたある日のこと、日暮れの太鼓が鳴り終わって寝に就こうとしますと、不意に一人の男が獄の中に入ってきました。その男は箱を地に置き、それを枕にして横になりました。(新しい罪人が来たのだろうと、気にも留めずに眠ると)真夜中過ぎに、私は眠りの中で体を揺すられ、『学士殿、お慶びなさいませ』と続けていう声かしました。私はおもむろに寝返り、そっと問うと、『安心してよお休みなさいませ』といって、先の男は箱を抱えて出て行きました。後になってわかりましたのは、<sup>じょたん</sup>舒亶等はお上の前で私を懸命に非難して必ず死罪にしようとしていました。しかし、先帝は初めから私が無罪であることを御存知でありましたので、密かに一人の宦官を遣わせて、獄中での私の振る舞いを観察させたのでした。たまたま私が雷のような鼾をかいて寝ておりましたので、宦官はすぐにお上にこのことをお知らせしましたところ、お上は『<sup>ちん</sup>朕の思った通り、蘇軾の胸の内には何も無いのだ』とおっしゃったのです。それで、私を(死罪にはせず)に<sup>こ</sup>黄州に流すよう命じられたのです。実に先帝の<sup>おもいやり</sup>怒によるものなのであります。臣下として何をもって万分の一でも報いることができましょうか」

後に私が父から聞いたのでは、かつて<sup>ちやうだいきやう</sup>張大亨と語ったときに、張大亨はこのようにいった。「蘇公が黄州から<sup>じょ</sup>汝州に移ることになり、そのことをお上に感謝する蘇公の礼状が届くと、先帝はそれを御覧になって、まわりの者に『蘇軾は真に奇才である』とおっしゃられました。しかし、蘇公を恨む者がいて、蘇公の礼状には朝廷の処置を怨望する語句が含まれていると奏上しました。先帝は驚かれて、『何を言い出すのか』と、問いたたされ、ある者がその個所を指摘すると、先帝はおもむろに、『朕はもとより蘇軾の衷心から出た言葉であるのを知っている。他意などは一切ない』と、おっしゃったので、もはや蘇公を誇

る声はなくなりました」。

【補足】〔(1) 何去非<sup>かきよひ</sup>は昨年初めに蘇軾<sup>そく</sup>の推薦を得て徐州<sup>じょ</sup>の学校の教授になっていた。(2) 都の獄で蘇軾の身に何があったのかは作品番号05-5-091以下に記したが、これはまた別のエピソードである。蘇軾本人が語ったのであるから事実であったと即断するわけにはいかないだろう。蘇軾には人を喜ばせようとして話を盛る傾向があるし、何去非が息子に語ったときにも、さらには何遠<sup>かえん</sup>が文章化したときにも潤色した可能性がある。そういうことがあるにしても、蘇軾は、神宗皇帝<sup>しんそう</sup>は自分のことを正しく理解してくれていたと、心の底から信じていたのは間違いない。(3) 蘇軾が黄州から汝州に移されることになった謝礼の文章は作品番号06-5-014で見ている。蘇軾は何をどのように書いても、いろいろと難癖を付ける者がいたのだ。(4) 張大亨<sup>ちやうだいきやう</sup>〔字は嘉父<sup>あざな か ふ</sup>〕は蘇軾より遅く官界に入った者〕

## ■ 【09-2-069】 題蔡君謨詩草

【解題】錢世雄<sup>せんせいゆう</sup>〔字は濟明<sup>あざな せいみん</sup>〕〔→作品番号06-4-092〕が所蔵する蔡襄<sup>さいじやう</sup>〔字は君謨<sup>くんぼ</sup>〕〔→作品番号07-2-050〕の詩巻にこの一文を書き添えた。

### 【訳文】

これは蔡襄の『夢の中』の詩である。真跡が錢世雄君の家にある。実に力強い筆力である。

げんゆう  
元祐五年十月四日。

【補足】〔(1) 錢世雄<sup>せんせいゆう</sup>は蘇州で官職に就いていたので〔→作品番号06-4-092〕、何かの用事で杭州<sup>こう</sup>にきたのだろうか。それとも任地が杭州に移ったのだろうか。いずれにしても、このころに蘇軾と厚い親交を結んでいた形跡はなく、後に錢世雄の存在が大きくなることを予感させるものはない。(2) 蔡襄は宋代一の書家であると蘇軾はかねて

から記していて、その筆力の強さをここで再確認している。なお、この『夢の中』の詩の真跡を、蘇軾はかつて杭州副知事であったときにも見ていた。そのときは、当時の知事であった陳襄ちんじょうの屋敷の小閣の壁に掲げてあって、蔡襄の詩の後ろにそれに和した二首が書き添えられていた。銭世雄が持っていたのはそれと同じものだったのかどうかはわからない]

## ■ 【09-2-070】 陶淵明

【**解題**】これは陶淵明とうえんめいに物申すという詩。蘇軾自身の短い添え書きがある。

### 【訳文】

ある人がいった。

「東坡とうばのこの詩は陶淵明とうえんめいに反駁したものである」

これは理解の足りない言い方である。むしろ、互いに引き合って新たな意味を作ろうとするものなのである。ここに述べたのは陶淵明の考えを決して否定するものではない。

げんゆう  
元祐五年十月。

【**補足**】「反駁したのか、新たな意味を引き出したのか、それを判断するには陶淵明とうえんめいが何をいったのかを見ておかないとならない。もとの作品は『形影神』という題の詩で、「形」は肉体、「影」は文字通りのシャドウでありまた生命力の象徴、「神」は精神で、その三者の間答を詩にしたものである」

### 【訳文】

とうえんめい けいえいしん  
陶淵明：『形影神』

序

世の中の人は、貴賤賢愚を問わず、あくせく人生を惜しむ者ばかりだ。これはひどい惑いだ。そこで、形かたちと影かげにその苦しみを語らせ、神しん[精神]が自然の道理を論じて二者の苦しみを釈とくということをしてみた。好事の君子諸君はどうか私の意図を読み取っていただきたい。

形が影に贈る

天地長不没、[天地は永遠になくならない]  
山川無改時。[山や川は姿を変えることがない]  
草木得常理、[草や木には不変ことわりの理がある]  
霜露榮悴之。[霜や露にあうことで栄えたりしぼんだりしている]  
謂人最靈智、[人は最も尊く知恵があるとされているけれど]  
独復不如茲。[人だけが異なっている]  
適見在世中、[たまたまこの世に存在したかと思うと]  
奄去靡歸期。[たちまち去ってしまっって帰ってこない]  
奚覺無一人、[一人がいなくなったところで気づかれないし]  
親識豈相思。[親しくしていた者も思い出したりない]  
但余平生物、[ただ普段使っていたものが残っていて]  
挙目情淒瀟。[それを見ると悲しくなることくらいはある]  
我無騰化術、[仙人になる術が得られなければ]  
必爾不復疑。[必ずこのようになるのは疑いようがない]  
願君取吾言、[君 [= 影]はどうか私のいうことを汲み取ってくれたまえ]  
得酒莫苟辞。[つまりは、酒があるときには辞退しないのがよいのだ]

影が形に答える

存生不可言、[ずっと生きながらえるのたなどとはいふことさえてきない]

衛生每苦拙。[生きていることをとにかく守るだけでいつも苦しんでいる]

誠願遊昆華、[仙人の世界に遊ぶことを本当に願っているのだが]

邈然茲道絶。[そこへの道はぼんやりと途絶えている]

与子相遇来、[形である君と出会ってから]

未嘗異悲悦。[悲しみも喜びもずっと一緒だった]

鵝蔭若暫乖、[ものの蔭に憩うときは形と影は離れるようだけれど]

止日終不別。[日差しのもとでは別れることはない]

此同既難常、[このまま永久に一緒というわけにはいかなくて]

黯爾俱時滅。[残念なことに時がくればともに減ってしまうのだ]

身没名亦尽、[身が消えれば名も消える]

念之五情熱。[それを思ふと、気持ちが熱くたかぶる]

立善有遺愛、[善行をなすと子孫に恵みがあるというから]

胡為不自竭。[せいぜい一所懸命に頑張るべきなのだろう]

酒雲能消憂、[酒は憂いを消してくれるとはいへ]

方此詎不劣。[そいうまともな努力には劣るであろう]

神しんがと釈とく

大鈞無私力、[大自然の力を自分だけのものにはできない]

万理自森著。[万物に共通する理ことわりが現れ出ただけである]

人為三才中、[人が天、地、人の中央にあるとされるのは]

豈不以我故。[人には私しん[=神]が具わっているからではないのか]

与君雖異物、[私[=神]と君たち[=形と影]とは物としては異なるのだが]

生而相依附。[生まれてからずっと依存し合ってきた]

結托善惡同、[一緒になって善いも悪いもともにしてきているのだから]

安得不相語。[君らと語らずにいるわけにはいかないだろう]

三皇大聖人、[太古の三人の大聖人だって]

今復在何処。[いまはどこにもいないし]

彭祖寿永年、<sup>ちやうせい</sup>[長生の術を得たという彭祖だって]

欲留不得住。[この世にとどまろうとしてもできなかった]

老少同一死、[若く死んでも老いて死んでも死は一つ]

賢愚無復数。[賢人も愚人もこの世には帰ってこられない]

日醉或能忘、[日々に酔っていたらそうしたことを忘れられるのかもかもしれないか]

将非促齡具。[酒は結局は寿命を縮めるものではなからう]

立善常所欣、[景がいろいろな善を行うのはよいものではあっても]

誰當為汝誉。[君のこともいつまでも誉めてくれるわけではない]

甚念傷吾生、[善をなそうと激しく思うのは自分の命を傷つけることにもなるので]

正宜委運去。[巡りあわせに任せるくらいでよいのではないか]

縦浪大化中、<sup>たふらい</sup>[大きな変化の中を縦浪]

不喜亦不懼。[喜ぶこともなく恐れることもなく]

応尽便須尽、[ちょうど終わるときがきたら終わる]

無復独多慮。[そういうことでよいのだと、あまり考えすぎずにはいられないか]

【補足】[この作品は、廬山<sup>ろざん</sup>の高僧慧遠<sup>えおん</sup> [→作品番号 07-1-022] の「形は尽きるとも神  
[精神、靈魂] は不滅である」という論に触発されて作ったものであるという。深い  
含意のある詩で、上の訳文は浅い一解釈でしかない。蘇軾は杭州<sup>こう</sup>に来てから数多くの  
僧と語る機会を得てこの議論を思い起こし、そこに一石を投じようとの詩を詠んだ

のだろうか]

【訳文】

とうえんめい 陶淵明先生は神と形は異なるものたといふ、

私はそうは思わない。

人[形あるものの代表]と天[神的な存在の代表]は異なるものなのか、

そうではあるまい。

天、地、人に限らず、ありとあらゆるものは、

異なると見えて異なるものではないのであろう。

高いところへと引いて行くなら、空にかかる天界の星となるし、

それを天から散らして低くに置けなら、山や川になるのではないだろうか。

太古の三人の大聖人は死んだといふけれど、

いま私の眼前にはありありと存在している。

ほうそ 彭祖は八百年の長寿を得たといったところで、

永久ではないのだから短命であるのと変わりはない。

つかの間のうっとりとした酔い心地は、

花に宿る露の一瞬の輝きと同じ、

酒があるなら酔えばよいし、

酒がないなら泉の水を飲めばよい。

善を立てて誉れを求めるのもよいのだからけれど、

飢えたらやはり涎よだれをすすするしかないのだ。

巡り合わせに任せたとこでやはり憂いは生じるので、

憂いが去ると生き返ったような心地になるものなのだ。

大きな変化のなかを縦浪たなばうのは、  
まさに造物者の為すがままということになるのだろうか。  
ちょうど終わるときがきたなら終わるのであって、  
わざわざそのようなことを言葉にしていまでもないのだ。

【補足】〔陶淵明とうえんめいは神しんは不滅であるという説に反駁するために、形と影を持ち出し、異なるその三者は結局は一緒に滅びるのだといったのに対し、蘇軾は神も形も影も全ては同じであるとまとめ、さらに乱暴にも滅びるとか滅びないとかもないとした。蘇軾のこのような見方からも、あらゆるものを一つに融合そうだいさせて理解しようとする宋代の思想の傾向を読み取ることができるだろう〕

## ■ 【09-2-071】 故竜図閣学士滕公墓誌銘

【解題】10月24日、蘇軾と旧くから交流があった滕元発とうげんはつ あざな たつどう〔字は達道〕〔→作品番号07-2-051〕が亡くなった。71歳だった。これは亡くなってから2年近く後に、張方平ちやうほうへいに代わって執筆した墓誌銘。張方平は滕元発と姻戚関係にあつて墓誌銘の執筆を依頼されたのだが、蘇軾に代筆を託した。ここでは墓誌銘の序文にあたる最初の5分の1ほどを読んでおこう。

### 【訳文】

神宗皇帝しんそうは天下に臨み始めると、政治に熱心に励むとともに、天下に優れた人を出すよう求め、英偉で度量の大きな人を得ようとした。滕公は先帝に仕えたもののまだ十分に用いられておらず、その姓名は朝廷の名簿に載せられたまま放置されていた。神宗皇帝はそれを知って滕公を召し、その姿が颯爽さつそうとしているのを見て、天下が治まりあるいは乱れる理由を尋ねた。滕公はすぐに答えた。「治乱の道は黑白はくはくないしは東西のようなもので、それが色を変えたり方向を変えたりするのは、朋党ほうとうの乱れにより

ます」。皇帝が「そなたは君子の党と小人の党にいらっているのか」と尋ねると、「君子が党を作ることはありません。譬えていうなら、纏わりつくのは必ず蔓草で、松や柏ではありません。朝廷に朋党がないなら、中程度の君主であっても問題は起こりません。そうではなく、朋党があるのなら、君主が聖人であってもよく治めることはできません」。皇帝は大きく嘆息して、「天下の名言である」といった。

かくて滕公は神宗皇帝に用いられ、幾つかの職を経て翰林学士かんりんがくしとなった。滕公は疏達そえんふぎ不疑[おおらかで率直]で、皇帝の前で事を論じるときも、家の中で子が父に語るように言葉を飾ることなく胸の内にあることをそのままに出した。皇帝は滕公が誠実さを尽しているを知って、事の大小によらず、他の人がよく述べられないことについていつも滕公に尋ねた。ときには夜中に書面を下して問うこともあり、使者が何度も行き来して滕公がそのたびに即答することもあった。

政治を執る者たち[王安石を中心とする人々]が新法を作ろうとしたとき、天下の議論が沸騰し、滕公の言葉を皇帝が信じることを恐れ、事を構えて滕公を謗った。皇帝が滕公を疑うことはなかったものの、滕公は朝廷に外に出され、鄆州うんの知事となった。その後、定州、青州、南都、齊州、鄧州と移り、それでも滕公を用いようとする皇帝の心はまだ衰えていなかった。たまたま滕公の妻の親類に法を犯した不届き者がいて、小人どもはこれを理由に滕公を非難し、必ず殺してしまおうとした。皇帝は罪のないことを知っていたので、池州知事に移され、さらに蔡州さいに移動することになって安州あんに改められ、その任を終えると朝廷に戻ることになった。しかし、都に至って皇帝に会う前に、滕公を嫌う左右の者が飛語を流し、筠州いんに左遷されることとなった。士大夫は滕公の生命に及ぶかも知れないと非常に危ぶんだのだが、滕公が自若として談笑し、「天は私が直であることを知っている。皇帝は私が忠であることを知っている。私に憂うべきことはない」といった。そして自分の潔白を記して皇帝に差し出し、皇帝はそれを見てはつきりと理解し、滕公は湖州知事ことなった。そして再び用いようとしたのだが、皇帝は亡くなってしまった。滕公は皇帝の遺詔を読むと、氣絶してしまい、しばらくして蘇ると、「ああ、私には自分の力を尽くすところがなくなくなった」といった。

今上陛下が即位し、滕公は蘇州、揚州の知事を歴任し、竜図閣直学士りゅうとくかくちくしとなって鄆州知事うんとなり、さ

らに真定、河東に移って国境地帯を凜然と治め、その威光は西北に輝いて名將と呼ばれた。ところが監察として派遣された宦官が滕公は病気で職務に耐えられないと偽りの報告をし、許州に移されることになった。御史が滕公は辺境をみごとに治め、病気ではないといったので、滕公は河東に留まるよみよへの詔が下された。滕公はすでに老い、七十一歳となっていて、淮南に移ることを求めた。皇帝はやむをえず、竜図閣学士のまま揚州知事にすることを決めたのだが、滕公はまた揚州に着かないうちに亡くなった。元祐五年十月二十四日であった。

【補足】〔(1) 滕元発は蘇軾より 16 歳上であったが、中央で用いられたのは蘇軾と大差なく、その後の官歴も似ている。神宗皇帝は滕元発が優れて有能であることを知りながらも、改革政治を進めるために朝廷の外に出し、いつか時がきたならば再び用いるつもりでいたとするのは蘇軾とそっくりである。そして、保守派が政権に戻ったにもかかわらず、保守派内の争いで地方に出ていなければならなかったのも蘇軾と同じである。(2) 最初に滕元発が、政治が乱れる原因は朋党ほうとうの乱れにあると答えたのは、臣下の者が徒党を組まないことが皇帝独裁主義を貫徹するための必要条件であると考えられていたからである。皇帝と人民の間に立つ官僚は、皇帝による統治を貫徹するために働くべき存在であって、官僚同士が横につながって余計なことをしてはならないのである。実際に党派が形成されて政治が乱れたことはたびたびあった。党派を組むのは小人で、君子は党派を組むことがないとは歐陽脩の有名なテーゼで、かつて范仲淹はんちゆうえんを弁護するときに高らかに主張したものだった。滕元発が神宗皇帝の前で朋党の弊害を述べた後に、改革派と保守派の争い、そして保守派内の争いといった政治の乱れが生じ、滕元発も蘇軾も非難合戦の渦の中に巻き込まれてしまったのである。(3) 滕元発が自分の潔白を記して皇帝に差し出したという文章は実は蘇軾が代筆したもので、その全文を作品番号 06-5-003 で読んでいる〕

## ■ 【09-2-072】 膝達道挽詞二首

【解題】<sup>とうげんはつ あざな たつどう</sup> 膝元発 [字は達道] の死を悼んだ詩。これは死後あまり時間を置かずに詠まれたもの。第1首は、膝元発が非常に優れた人物であったことを歌い、第2首は、蘇軾との関係を歌っている。内容的に上の墓誌銘と重なるところが多い。

## 【訳文】

## 其の一

先帝は早くから<sup>とうこう</sup>膝公のことを、

私心のない第一の人であると知っていた。

膝公は、詩や礼における現代の将軍であり、

<sup>かん</sup>漢の最盛期の大臣と並ぶべき人であった。

大きな材は用いるのが難しいとされるが、

時節がきて少しばかりは力を出すことができた。

<sup>はんちゆうえん</sup>范仲淹の風烈がまさにそこにあるかのようで、

<sup>そんべん</sup>孫沔の優れた手本が新たになったかのようであった。

ところが、辺境を治める策も、宰相となるべき身も、

空しく捨て置かれることとなってしまった。

膝公に仕えた旧い人々は、

墓の石を悲しい涙で濡らすのである。

【補足】<sup>はんちゆうえん そんべん</sup> [途中で范仲淹と孫沔の名を挙げたことについて、<sup>とうげんはつ</sup>蘇軾自身の注で、膝元発は若い頃にこの2人の名臣の教えを受けたと記している]

## 其の二

うんぼう ちょうこう  
雲夢から長江へと雨が降り注ぎ、

はんざん  
樊山の木から葉が落ちる秋に、

とうこう  
滕公は自分はきっと流されるであろうと占った。

そのとき私は牛を飼って土に生きようとしていた。

いなかぐらし  
ともに江湖の楽しみを持ちながらも、

耕しつつ天下のことをなお憂っていたのだった。

じょう  
私は常州で老いを送ろうと決め、

きんざん  
滕公と金山でともに遊んだのだった。

不遇にあっても滕公は威風堂々としていたのだが、

歳月の過ぎゆく速さには驚かすばかりはない。

こうべ こく  
私は頭を回らせて、歌いかつ哭し、哭しかつ歌う、

この挽歌は意味のある言葉にならない。

【補足】[詩の始めは、<sup>こう</sup>黄州に流された蘇軾を<sup>とうげんはつ</sup>滕元発が訪ねたころのことを歌っている。中ほどは滕元発が<sup>こ</sup>湖州知事で蘇軾がその助力も得て<sup>じょう</sup>常州に退隱の地を得たころのことを歌っている]

## ■ 【09-2-073】 記温公論茶墨

【解題】ある日のちょっとしたできごとを記した短文。

### 【訳文】

しばこう  
司馬光がかいつてこのようにいった。

「茶と墨とはまことに相い反するものです。茶は白くなろうとし、墨は黒くなろうとします。茶は重くなろうとし、墨は軽くなろうとします。茶は新しくなろうとし、墨は古くなろうとします」



を笑ったのだらう。(2) 名を列挙された4人は官員仲間のようだ。いずれも字で、醇あざな 老じゆんは錢藻せんそう、全翁ぜんおうは張璠ちやうじゆ、元之げんしは姓名不詳とんふ、敦夫こうりんは侯臨であるという。(3) 茶を出した南屏寺なんびやうじの謙師けんしは作品番号 09-1-052 で登場している]

## ■ 【09-2-074】 題和張子野見寄詩後

【解題】 かつて張先ちやうせん [字は子野あざな しや] [→作品番号 09-2-037] に寄せた詩 [→作品番号 05-1-068] を書いて、その後ろにこの短文を添えた。張先の詩を書いたのは誰かの求めに応じたのだらう。

### 【訳文】

私こうはかつて杭州副知事であったときに、初めて寿星院じゆせいゐんに入り、悵然として以前にここで遊んだような気がした。後に密州知事みつとなり、張先ちやうせんが詩を寄せてきたので、そのことを詠んだ詩で答えた。

げん ゆう  
元祐五年十一月二十九日

【補足】 [張先ちやうせんに寄せたもとの詩 [→作品番号 05-1-068] ではとくに寿星院じゆせいゐんの名は挙げしていない。寿星院については作品番号 09-2-023 で見ていて、杭州副知事時代の寿星院の詩としては作品番号 04-2-082 がある]

## ■ 【09-2-075】 送程之邵簽判赴闕

【解題】 杭州の役場に勤める程之邵てい ししやう [字は遵彦あざな じゆんげん] [→作品番号 09-2-021] が都に行くことになり、その送別の詩。

### 【訳文】

天下第一の宝とされるべきものでも、

その価値を見出す者がいなければ世に知られることはない。

珍宝<sup>やこう たま</sup>の夜光の珠も、自らを献上するわけではないし、

名馬<sup>めん き</sup>の天驕も、その良さを自分で知るわけではない。

狐の毛も五穀の皮だってそうなのだ。

まことに賢人であるのは前の知事<sup>ゆうはくつう</sup>[熊伯通]で、

貴君<sup>すむれ</sup>が奇ていると見て幕府に招いたのだった。

花のない草木は識<sup>し</sup>られにくいもの、

前知事はそれを得ただけでなく、

自分だけのものにして、

貴君をここに残してくれて、

私を助け、私の衰えを支えるようにしてくれたのだ。

二年の間、貴君と膝を付き合わせて語った。

ここに、長く挨拶を交わし合って貴君は去って行く。

私はいう、

「林が深いところには猛獣が潜み、

岸が改まったところからは竜が移り行く。

かくて(竜のように)貴君が去ってしまったなら、

(猛獣に囲まれている)私は誰を頼りとしたらよいのか。

貴君を失った後はただ悲しむしかない」

ああ、もう私情を抱くべきときではないのだ。

貴君は最上級の器の質を備えている、

都の宮殿にこそ置くべきものである。

貴君よ、行くがよい、

きっとまた会うことがあるだろう。

【補足】〔(1) 蘇軾はよほど程之邵が気に入ったのだろう、この詩で絶賛している。

(2) 長男の蘇邁はこのころに杭州を經由して新たな任地、雄州へと向かった。(3) 杭州に来て以来、頻繁に手紙や詩の往還があった錢勰 [字の穆父] [→作品番号 09-2-061] は越州を離れ、新たな任地、瀛州へと向かうことになった]

## ■ 【09-2-076】 書林道人論琴棋

【解題】蘇軾は西湖の西にある靈隱山のあたりを巡り、小靈隱の峰に住む林道人と出会った。そのことを記した短文。

### 【訳文】

元祐五年十二月一日、小靈隱に遊び、林道人が琴や碁について論じるのを聞いた。極めて妙理に通じている。私はこの二技には通じていないけれど、理をもって判断するに、そのいっていることは信であると知ったのである。

杜甫は画を論じて詩にこのように詠んだ。

更覚良工心独苦。[更に覚える良工は心独り苦しむと]

意を用いることの妙をこのように知る者はなかなかいない。それがまさに独り苦しむ理由であるのだろう。

【補足】〔(1) 琴棋書画は昔から士大夫の嗜むべきものとされていた。蘇軾は、詩も書も画も根本は一つであるとししばしばいっている。林道人の話から琴も碁も同じであると理解したのだろう。(2) ここに引用されている杜甫の句は、『題李尊師松樹障子歌』という詩にある。李道士が描いたばかりの松の樹の画を杜甫のもとに持ってきた

ときに、その画の印象を詠んだ詩で、該当の部分は、「已知仙客意相親、更覺良工心  
 独苦」[仙客 [=李道士] が親しくしてくれる心が知れ、さらには、良工は独り心を  
 苦しめることがわかった] という対句になっている。杜甫もまた独り心を苦しめつつ  
 も、その詩は当時の人々にはあまり理解されなかった]

## ■ 【09-2077】 送李陶通直赴清溪

【解題】 李陶 [字は唐夫] が清溪县に赴く途中で杭州に立ち寄ったのでこの送別の詩  
 を贈った。李陶は朝廷の高官であった李大臨の子。

### 【訳文】

忠文公、文正公の二大老、

蘇、李、宋の三舎人、

その方々と親しく交わってきた賢子弟——

その貴君をここに見るのはまことに喜ばしい。

貴君はいう、

これから赴くのは風塵の少ないところ、と。

勢利[出世や利益]に関心の薄い貴君にふさわしいではないか。

ここを去って溪山の内に入るなら、

新たな句を工夫して生み出すであろう。

あえて西湖にしばらく留まってくれたので、

銭塘の人々は、小麒麟がここにいると初めて知ったのである。

【補足】 [(1) 「二大老」とは司馬光、范鎮、「三舎人」とは蘇頌、李大臨、宋敏求で  
 あるという。いずれも天下に知られた名士である。李大臨の子である李陶は、父親の

縁でこうした人々を子供のころから知っていたのであろう。(2) この詩によると、李陶が清溪県せいけいに行くのは恐らく意に染まないとこがあったのだらう。(3) 小麒麟しょうきりんとはいわゆる「麒麟児」、将来が期待される若者である]

## ■ 【09-2-078】 与范純夫

【解題】 都ほんこいる范祖禹あざな じゅん ぶ [字は純夫] [→作品番号 05-4-058、08-2-010] に宛てた手紙。

### 【訳文】

私は衰えと病やまいに日々侵され、使いの者や客人が次々に来て、しかも高麗国こうらいこくの人がまた至るといありさま、公私ともに多忙の余り疲労し、ほとんど堪えることができません。連年の災害の中にあつては、別に小さな町を願い出て移って行くわけにもまいりません。来年の食糧欠乏の憂いは、まだ救済の術がなく、譴責の罪を受けるのを待つ以外にありません。李陶君一行は恙なく任地へと向かって行きました。杭州こうの江山のよさに酔い、故郷のことも忘れ、なかなか発とうとしませんでした。

【補足】 [(1) 高麗国こうらいこくの使者が来るに当たり、その接待のための費用は、使者が通る道沿いの諸州が負担することになっていた。蘇軾や蘇轍らが強く朝廷に働きかけた結果、その負担はかなり軽減された。(2) 手紙の終わりの部分で、前の詩に見た李陶りとうについて触れている。范祖禹は「二大老」の范鎮はんちんの甥であるので、李陶とは近い関係にあったのだらう]

## ■ 【09-2-079】 六一泉銘

【解題】 蘇軾こうが杭州に着任した後で、西湖の孤山の山中で一つの泉が湧き出した。蘇軾はそれを「六一泉」と名付け、この銘を書いた。ある考証によれば12月8日のことであるという。

## 【訳文】

欧陽公[欧陽脩]は老いて自ら六一居士と称した。

私はかつて杭州の副知事に任命されたとき、潁州で欧陽公に会ってから南に向かった。公はこのようにいった。

「西湖の僧の恵勤は非常に学問に通じ、詩に優れている。私はかつて『山中之楽』と題する三章からなる韻文を作って恵勤に贈ったことがある。子が民を治める合間に、湖山においてともに楽しむ人を求めようとして得られなかったならば、恵勤のもとに行くよいだろう」

私は杭州に着任して三日目に孤山に恵勤を訪ねた。互いに手をとるようにして、古来の人物を論じた。恵勤はいった。

「欧陽公は天の人でありますな。地上の人は欧陽公がたまたま人間世界にしばし身を寓しているお姿を見ているだけで、雲に乗り風を馭して五嶽を巡り滄海を飛び越えていることを知らないのです。この邦の人は欧陽公があれからもう来られないのを残念に思っています。欧陽公は八方を自在に極められるのに、どうしてここには来られないでしょうか。江山の優れた風光には持ち主がいせんけれど、その奇麗秀絶の気はよく文を作る者が用いるためにあるのです。私はこの西湖は欧陽公の机の上にある一つの置き物であるように思っております」

恵勤の語ることは幻怪ではあっても、その理としては実にしかるべきである。

翌年、欧陽公は亡くなり、私は恵勤の僧舎で哭した。

それから十八年、私は杭州知事となり、恵勤は亡くなって久しい時間が経っていた。恵勤の旧居を訪ねると、弟子の二仲がいて、欧陽公と恵勤の姿を画にして、生きているかのように仕えていた。僧舎のあたりにももとは泉などはなかったのだが、私が訪ねる数カ月足らず前に、講堂の後ろで泉が湧き出し、盛んに溢れて孤山の麓へと流れるようになった。水は非常に澄んでいてなおかつ甘い。巖を鑿って石を架けてそこに石室を作った。二仲は私にいった。

「我が師は、あなたさまが来られると聞いて、その苦勞をねぎらうためにこの泉を出されたのでしょうか。何かお言葉をいただけますでしょうか」

そこで恵勤がかって語ったことを思い出し、その意を推して泉に六一泉と名付け、この銘を作る。

泉が出るのは、歐陽公の亡くなった地から数千里のところ。亡くなってから十八年。ここに六一の名を付けるのは、いかにもおかしなことではある。

しかし、君子の余沢は五世に及ぶといい、その人を得たときには、百世にも伝わる。ために孤山に登って呉越の方を望んで『山中之楽』を歌い、この水を飲むがよい。歐陽公の遺風がはっきりと残っているとわかるであろう。それが泉となってここに湧き出ているのである。

【補足】[蘇軾が前回杭州に赴任する途中に、潁州で歐陽脩に会ったことは作品番号 03-4-024 で、杭州に到着して 3 日目に孤山に恵勤と恵思を訪ねたことは作品番号 04-1-001 で、歐陽脩の死を恵勤と恵思のもとで哭したことは作品番号 04-1-058 でそれぞれ見ている。なお、泉に作られた石室は後に東坡庵と呼ばれるようになったという]

■ 【09-2-080】元祐五年十二月十二日、同景文、義伯、聖塗、次元、伯固、蒙仲遊七宝寺、題竹上

【解題】「元祐五年十二月十二日」と日付が明示されている。七宝寺に遊んで竹を詩に詠んだ。蘇軾と同行したのは、劉季孫 [字は景文]、未詳の人物 [字は義伯]、張天驥 [字は聖塗]、周燾 [字は次元]、蘇堅 [字は伯固]、錢蒙仲である。未詳の人物以外は本章においてすでにその名を見ているが、興味を引くのは張天驥で、作品番号 09-2-019 で郷里に帰ったのを見ていて、なぜかまた杭州に来ていたようだ。ただし、詩の題にある日付が誤っているのかもしれない。

## 【訳文】

根を結ぶことでは(竹も)他の木々と異なるところはない、

ただ林から独りだけ高く飛び出るのだ。

孤高たのといたのものは恃たのむべきものではない、

年の終わりなるなら、寒風に侵されてしまうのだから。

【補足】[普段は竹を讃える蘇軾は、ここでは孤高たのを恃たのむことを危ぶんでいる。教訓臭ちゆうてん きのする詩であるとして評判は芳しくないが、張天驥ちゆうてん きの名があるので訳出した]

■【09-2-081】 弁才老師退居竜井、不復出入。余往見之。嘗出至風篁嶺。左右驚曰、遠公復過虎溪矣。弁才笑曰、杜子美不云乎、与子成二老、来往亦風流。因作亭嶺上、名之曰過溪、亦曰二老、謹次弁才韻賦詩一首

【解題】長い詩の題は次の通り。「弁才老師は竜井べんさいろう し りゅうせいに退居し、そこからはもはや出なくなつた。私が竜井いおりに行つて老師ふうこうれいに会つたところ、老師は廬から出て風篁嶺にまで来てしまった。人々は驚き、『慧遠え おん様がなんと虎溪こけいを過こぎされてしまいました』といつた。弁才老師は笑つて、『杜甫と ほの詩に〈与子あなた成二老ふたりともろじん、来往亦風流な〉[子と二老と成つて、来往するのゆききも亦風流またふうりゆうである]』というのがありましたな。(記念に)風篁嶺に亭あずまやでも作つて過溪かけいと名付けますか、それとも二老と名付けますか』といつた。老師が詩を詠んだので私は謹んで次韻べんさいだい しげんじゆうした」。弁才大師元浄べんさいだい しげんじゆうが竜井に退居していたことは作品番号 09-2-014 で見ている。廬山ろざんの高僧慧遠え おんが陶淵明等と話に夢中になつて、普段は決して超えることのない虎溪こけいの橋を渡つてしまったという故事は作品番号 07-1-026 で見ている。蘇軾と話しなが風篁嶺にまで来てしまった弁才を慧遠になぞらえたのである。杜甫と ほの句は『贊上人さんしやうにんに寄せる』という題の詩にある。弁才はこの詩を引用して、これからもたびたび来るようにと、蘇軾に親愛の情を示したのである。

【訳文】

日と月は車の軸のように回り続け、  
いまも昔もいわゆる「一つの丘の貉」、どのみち変わり続けるのである。  
ただこの鶴のような外貌の老人[弁才]だけは、  
常に凜として、秋がくることも知らずにいる。  
往くも去るも自由無礙で、  
人間界も天界も争って引き留めようとしても無駄である。  
去るときには、竜が山から出るように、池に雷雨が注ぐ騒ぎとなり、  
来るときには、珠が海に帰るように、魚も亀も争って出迎えるのである。  
この生ははしはしとこなりと寄寓するだけのもので、  
常に恐れるのは浮ついた名がまつわることである。  
私は陶淵明になぞらえられてもとても及ばないのを恥ずかしく思い、  
師は慧遠よりも優れているのであろうと思う。  
私を送って師は虎溪[風篁嶺]を通り過ぎてしまい、  
溪の水までも、もしも驚いて逆流でもしようものなら、  
二人の老人の遊びを山の人々も長く忘れずにいてくれるだろう。  
とはいえ、大千世界はもとよりの高僧の掌の内にあるのだから、  
虎溪を超えようか超えまいか、  
そもそも離別の憂いなどありはしないのだ。

【補足】[このころに弁才から硯を贈られて詠んだという詩が伝わっている。それについて、岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳解『蘇東坡詩集』（1927年）は、「余は断言する公の詩ではない」と記している。断言する根拠が訳者には理解できないが、その

判定を尊重して割愛する]

## ■ 【09-2-082】 寄題梅宣義園亭

【解題】 杭州副知事の梅灝 [字は子明] が故郷の呉郡 [蘇州] に帰ることになり、その父の梅宣義の園亭に寄せる詩を作った。

### 【訳文】

漢の時代に、梅子真是職を辞すと、  
 妻子を棄て、呉の町の中に身を隠した。  
 その子孫である御父上[梅宣義]もまた呉の町に隠れ、  
 十年の間、惜しまず力を注ぎ込んで、  
 五畝の庭園を立派に造られた。  
 始めは子のために橘を育て、  
 いまでは孫のための桐も成長してきている。  
 清らかな池の眺めは虎丘をも圧倒し、  
 珍しい石は太湖の鼇頭山を持ってきたかのようだ。  
 町の人々は身分の上下に関係なくその門を叩き、  
 庭園の内で、琴が好きな者は存分に奏で、  
 酒が好きな者は樽を空にして飲む。  
 私は放浪の人間、家は西南の隅[蜀のこと]にある。  
 崩れた廬はいまもまだあるだろうけれど、  
 小さな庭は誰も手入れをしていない。  
 羨ましいのは、貴君が御父上のもとに帰って行こうとしていること、

御父上の御恩にはまたまた報いることはできていない。

幸いにも貴君は我が僚友として愛すべき人物であり、  
長く兄弟のようでありたいと思うほどだ。

いつか西に帰郷する際に貴君のもとを訪れたならば、  
瓶が空になるまで私に飲ませてくれるだろうね。

【補足】〔(1) 冒頭<sup>かん</sup>に漢<sup>ばい し しん</sup>の時代の梅子真の名を挙げたのは、同姓の人の故事を巧みに引いてくる蘇軾の得意の手法。(2) 虎丘<sup>こ きゅう</sup>も太湖<sup>たい こ</sup>の鼈頭山<sup>げんとうさん</sup>も呉郡<sup>ご</sup>の近くの名所で、虎丘については作品番号 09-1-043 でも見ている〕

## ■ 【09-2-083】 舎幡帖一首

【解題】蘇軾の祖母史氏<sup>し</sup>の名は作品番号 01-2-001 の年譜で見ているが、その祖母の遺品がこのときまで蘇軾のもとに伝えられていた。

### 【訳文】

我が祖母史氏<sup>し</sup>には二枚<sup>しゅうはん</sup>の繡幡<sup>しゅうはん</sup>〔刺繡を施した旗〕があった。幡<sup>はた</sup>には「長寿王菩薩<sup>ちやうじゅおうぼさつ</sup>」、「消災障菩薩<sup>しょうさいしょうぼさつ</sup>」の文字がある。

祖母が亡くなって三十余年の間、我が父は祖母を慕い、老いに至ってもその思いは衰えなかった。祖母の忌日には必ずこの幡を捧げて泣いた。

いまや父が亡くなって二十四年となった。私はこの幡を宝として家に置いていた。それが父の遺した意志であるとはいえ、祖母の本来の願いは誠に仏に帰すことであると考え、これを金山<sup>きんざん</sup>に喜捨し、祖母の冥福<sup>し</sup>の資とするものである。

【補足】〔庶民は、仏教の難しい教義はともかくとして、長寿を授け災厄を消してくれることを期待して菩薩を信仰した。金山<sup>きんざん</sup>は蘇軾が何度も訪れている有名な寺で、そ

こに遺品を寄付することで、死後の世界における祖母の幸福の足しにしようとした]

### ■ 【09-2-084】 与王慶源之子

【解題】 郷里から来ていた王箴おうしんがこの年の初めに帰ったことを作品番号 09-2-004 で見ているが、王箴の伯父おうしんの王淮奇おうわいき [字は慶源あざな けいげん] [→作品番号 08-3-019] がこの年の終わり頃に亡くなった。これは、それから 1 年ほど後に、王淮奇の子に宛てて書いた手紙である。

#### 【訳文】

私は昨年、宣義叔丈せん ぎしやくじょう [王慶源おうけいげん] が逝去されたと聞き、お悔やみのお手紙をお送りしましたが、届いたでしょうか。それ以降は多忙のために暇いとまがなく、さらには仕事が定めなく入ってきたために、長らくお尋ねすることもないままとなってしまう、慙愧の念に堪えません。叔丈は昔、学問と振る舞いをもって郷里にその名が高く知られ、しかしながら場屋じょうおく [科挙の試験場] においては齡長けて後によりやく少し遂げることができただけで、顕著な功績を挙げるには至りませんでした。そのために、弟や子が学問に励んで、なお我が一族に志を遂げようとする心があるのを顕揚するのを望んでおられました。その思いに応えられますようお願いしてこのお手紙を記した次第です。

【補足】 [王淮奇おうわいきが晩年に至ってようやく小さな官職を得たことは作品番号 08-3-019 で見ている]

■ 【09-2-085】 熙寧中、軾通守此郡。除夜、直都庁、囚繫皆滿、日暮不得返舍。因題一詩於壁、今二十年矣。衰病之余、復忝郡寄、再經除夜、庭事蕭然、三園皆空。蓋同僚之力、非拙朽所致、因和前篇呈公濟濟、子侔二通守

【解題】 大晦日に詠んだ詩。長い題は次の通り。「熙寧年間に私はこの杭州き かい こうの副知事

となり、大晦日の夜にも庁舎に詰めていた。獄は繋がれた囚人でいっぱい、日が暮れても私は宿舎に帰ることができなかった。それで一篇の詩を作って壁に書いた。それからおよそ二十年が経ち、衰病の身でありながらも、かたじけなくも再び杭州に来て、この大晦日の夜を迎えた。庁舎は静かで、三つの獄舎はどれも空である。これは同僚の力であって、拙く朽ちた私のしたことではない。そこで昔の詩に和して、袁轂えんこく [字は公済あざな こうさい] と子侔しぼうの二人の副知事に示す。20年が経ったとあるのは正確には19年である。副知事のうち袁轂は作品番号 09-2-063 などその名を見ている。2人目の子侔とあるのが子明しめいの書き誤りであるなら、先に見た梅灝ばいこうのことである。副知事時代の  
大晦日に詠んだ詩は作品番号 04-1-092 ページとしてすでに訳出しているが、ここに再掲する。

## 【訳文】

### 前の詩

大晦日には早くに家に帰りたいものだ。  
しかし、公務があって役所に留まらなければならない。  
筆を持ち、書類に向かって不意に涙がこぼれる。  
衰れてはなかるうか、ここに繋がれている囚人たちは、  
法の網に落ちるのを取心とも思わず、  
たただた食うためにしてしまったのだ。  
私だって食うために、わずかな給与が恋しくて、  
ぐずぐずと故郷に帰れずにいるのだ。  
どちらが賢くてどちらが愚かということはない、  
同じ食うためにしているだけなのだ。

せめて正月の間だけでも、  
 囚人たちを家に帰してやりたい……。  
 昔のそのようなことを実行した立派な人々に恥じるばかりだ。

### 今の詩

あれから山や川はもとのままで変わらないが、  
 歳月は<sup>い</sup>逝くばかりで留まることがない。  
 百年も、一度俯して仰ぎ見るまでの間のこと、  
 木火土金水の五行が替わるかわる盛んになったり衰えたりする。  
 同僚の二人の副知事は、  
 漢の時代の名太守に肩を並べるほどで、  
 その徳業は昔の人に差じるものではない。  
 老いて鈍いこの大守なんぞは、  
 嘯き<sup>うなず</sup>諾いて、とかく休んでさえいれればよいようにしてくれている。  
 この二十年の我がことを思うと、  
 出るも<sup>お</sup>処るも人が謀ったものではない。  
 歯が抜けよ<sup>か</sup>が髪が白くなる<sup>か</sup>が、  
 それは天に任せておけばよい、  
 傷んだり壊れたりしたものは修復できないのだから。

## 第9章 最高の州知事——再びの杭州

### [第9章その三]

げんゆう  
元祐6年 [1091年]、蘇軾56歳。

#### ■ 【09-3-001】 与水陸通長老

【**解題**】蘇州にある報恩寺の水陸禅院には蘇軾が成都から招いた通長老がいた [→作品番号 04-2-100、05-1-017]。杭州から通長老に送った手紙が数通残っている。その一部を読んでおこう。

#### 【訳文】

(1)お贈りくださった茶は極めて上質の品で、はなはだ感激しております。近ごろ五台山で長松[葉草]が得られ、中風に非常に效々といひます。俗に文殊菩薩がある僧に示されて初めて識られるようになったとか。それを少しばかり、並びに人参四両をお納めいたします。この二品をほんの少しだけ甘草と合わせて豆腐に載せて食べると佳いものです。

【**補足**】 [この手紙は前年に送ったものであると推測される。あんかけ豆腐のような薬膳のレシピが記されている]

(2)お示くださった石刻の件、浙中の好事家たちはよくそのようなことをします。御老人[通長老]もまたそうでありましたか。……[茶を贈ってくれた謝礼を述べる]……大覚禪師が正月一日に遷化されました。きっとお聞き及びでありましょう。悵悼の意が増すのを共にしたいと思ひます。大覚禪師のために先に『宸奎閣記』を作りました。多忙の中にあつてここに録することははしませんが、きつとどこからか伝えられてお目に触れることもあるでしょう。

【補足】[この手紙はこの年の初めのうちに送ったもの。最初の部分は、蘇軾の詩文を石に刻んで水陸禪院すいりくぜんいんに置きたいと通長老つうちょうろうが提案したことへの答えであるようで、蘇軾は乗り気ではない。後半には、大覚禪師だいかくぜんじが亡くなったことが書かれていて、次の項で詳しく見る]

## ■ 【09-3-002】宸奎閣碑

【解題】1月1日に亡くなったと上に手紙に記してあった大覚禪師だいかくぜんじ懷璉かいれんは、蘇軾の父の蘇洵そじゆんに国宝級の画をプレゼントした人である [→作品番号 02-1-002、04-2-052]。そのとき懷璉は都の浄因禪院じょういんぜんいんにいたが、その後、四明しめい [現在の寧波市ねいはしに含まれる]にある広利寺こうりじに移った。蘇軾は杭州知事として赴任すると、懷璉のために広利寺にある宸奎閣けいかくの銘を作った。これは懷璉がまだ存命中の作品である。

## 【訳文】

廬山ろざんの僧懷璉かいれんは皇祐年間こうゆうに仁宗皇帝じんそうの詔みことりによって都の十方浄因禪院じっぽうじょういんぜんいんに住まうこととなった。皇帝は懷璉を宮中に召して仏法の大意を尋ねた。懷璉の応答は皇帝の心に適い、だいかくぜんじ「大覚禪師」の号が与えられた。このとき北中国の仏教者は名や相の議論めい そう、あるいは因果を説くばかりで、優れた知性を持った人々はそれを詰まらないものと軽んじ、仏教は外国の愚かしい教えたど非難していた。懷璉だけはその妙所こうし ろうしから孔子や老子の思想と合致するところを取り出し、その言文は真理を表して、その振る舞いは峻厳かつ自在であったので、士大夫は喜んで懷璉のもとに訪れるようになった。官の仕事が休みの日には、懷璉が起きてまだ顔を洗わないうちに、扉の外に訪れた士大夫の脱いだ履物がずらりと並ぶほどであった。仁宗皇帝は師弟の関係をとらずに自ずと懷璉みちから道を得た。仁宗皇帝は懷璉はを頌める詩十七篇を作って贈った。

至和年間しわに懷璉は山に帰ることを願い出た。皇帝は「山は即ち如如体である。いったいどこに帰るの

か]「法の前では山にいても都にいても同じであるといった意味か」といって許さなかった。治平年間に懐璉は再び強く乞い、英宗皇帝は都に留めておくことはできないとみて、好きなところに行ってよいとの詔を下した。懐璉は長江を渡り、しばらく金山に留まり、西湖に遊び、ついに四明にある阿育王山広利寺に入った。四明の人々は力を出し合って大閣を建て、仁宗皇帝が賜った頌詩をそこに納め、「宸奎」の文字をその上に掲げた。ときに都では宝文閣を建てたばかりで、仁宗皇帝の頌詩の副本を広利寺に求めてそちらにも納めた。そして広利寺においては一年に一人の僧を得度するよう命じた。

懐璉が山に帰って[広利寺に入って]二十三年、八十三歳のときに臣が杭州知事になると、懐璉の弟子がきてこのように告げた。「宸奎閣にはいまだに銘がありません。あなたは仁宗皇帝にお仕えし、吾が師とも旧からの交流があります。きつと辞退なさいませんでしょう」

臣が謹んで考えるに、昔から君主で仏教を知る者といえば必ず漢の明帝、梁の武帝が挙げられ、二人は常に口に仏典を唱え、仏陀の像を壁に掲げていた。しかし、漢の明帝は「明」というよりは疑い深く、梁の武帝は「武」というよりは軟弱であった。名ばかりで実を失い、また仏の教えからいっては遠いものがあつた。恭しくも仁宗皇帝は在位四十二年の間、僧尼をやたらと増やすこともなく、むやみと寺廟を立派にすることもなく、亡なられたときには天下の人々はその仁を深く思つたのであつた。まことに仏教の心法を得た古今一人の皇帝であつた。

懐璉は世の外に出た僧であり、非常に厳しく規律を守つてこられた。皇帝がかつて竜腦鉢盂[貴重な香木で作つた鉢]を賜ると、懐璉は持ってきた使者に対して、これを焚くよう指示し、「吾が法として、襪褌の衣を着、瓦や鉄の器で食べる。この鉢は法に非ざるものである」といった。使者は帰つてそのように申し上げると、皇帝はそれを褒めしほし嘆息した。

銘に曰く、

巍巍仁皇、体合自然。神耀得道、非有師伝。維道人璉、逍遙自在。禅律並行、不相留礙。於穆頌詩、我既其文。惟仏与仏、乃識其真。咨爾東南、山君海王。時節来朝、以謹其蔵。

【補足】〔(1) 銘は訳し難いので原文をそのまま掲げる。いつか意味を理解できるよ

うになったら訳文を補いたい。(2) 蘇軾だいかくぜん じは大覚禅師の訃報を聞くと、その死を悼む祭文を作った。これも訳者の理解が及ばないので割愛する]

### ■ 【09-3-003】 竜井題名

【**解題**】 弁才大師べんさいだい し元浄げんじょうのいる竜井りゅうせいを訪れた記録 [→作品番号 09-2-014、09-2-081]。

#### 【訳文】

蘇軾せんきょう、錢勰こうこうちよ、江公著りゅうよう、柳雍りゅうせいがともに竜井べんさいだい しで弁才大師にお目にかかった。

元祐六年正月七日

【**補足**】 [同行した人々のうち、錢勰 [字の穆父] は越州を離れて新たな任地の瀛州へと向かう途中 [→作品番号 09-2-075] で、江公著 [字は晦叔] は吉州知事として赴任する前に、それぞれ杭州こうにきていた。柳雍りゅうようがどのような人物あるのかわからない]

### ■ 【09-3-004】 臨江仙

【**解題**】 錢勰 [字の穆父] は杭州こうを発つ前にしばし人々との交流を楽しんだようで、表忠観ひょうちゅうかんの院主である錢道士 [名は自然] [→作品番号 05-3-066] と会い、そこに蘇軾は一篇の詩を添えて酒の差し入れをした。その詩はなかなか面倒な故事の引き方をし  
ていて訳者の手に負えないので割愛し、錢勰を見送ったこの詞を読んでおこう。

#### 【訳文】

一別都門三改火、[都の門で別れてから、寒食かんじよく しん かの新火も三回目となります]

天涯踢尽紅塵。[天の涯で、浮世の塵を踏み尽したのです]

依然一笑作春温。[変わらずに笑い合えば春の温もりが生じます]

無波真古井、[古い井戸には波が立たたず]

有節是秋筠、[秋の竹にはしっかりとした節があるといひます]

惆悵孤帆連夜發、[悲しいことに、今度の夜にぽつんと帆が出て行きます]

送行淡月微雲。[見送るのは淡い月とほのかな雲]

尊前不用翠眉顰。[酒の前で眉を顰めるのはよしましょう]

人生如逆旅、[人生は旅の宿のようなもの]

我亦是行人。[私もまた旅人なのです]

【補足】[蘇軾と錢勰は同じころに都を出て足掛け 3 年になる。それで、寒食を終えて最初につける火、新火を見るのも 3 回になると歌っている。ただし、正確には蘇軾が杭州にきてから新火を見たのはまだ 1 回だけで、間もなく 2 回目を見るはずであった]

## ■ 【09-3-005】 送江公著知吉州

【解題】やはり竜井に同行した江公著 [字は晦叔] のために詠んだ送別の詩。江公著は吉州知事に任命される前は、一時的に官職を離れて郷里の桐廬県 [杭州に属している] に帰郷していたのだろう。

### 【訳文】

貴君は三呉の千の山水を歩き尽くしたけれど、

なお故郷の桐廬こそが清く美しいという。

桐廬は、濁った世には狂奴と称された高士 [後漢の嚴光] が隠れただけでなく、

平穏な時代には佳き公子 [江公著] を生んだのだ。

貴君は初めに刑獄の役人となり、  
 後に都に召され、さらに重職を担うかというときに、  
 郷里の川で汚れた耳を洗うこととなった。  
 しかし、大工の名人は良木を決して棄てることはなく、  
 名馬は千里を走れるか試されずにいることはない。  
 官舎に親を迎え入れるには、行き先としてよい場所を選ぶべきであるが、  
ちようこう  
 長江の南の地を得たのだから喜ばしいではないか。  
きち  
 吉州は繁華の地、  
 白い米を満載した船が一万の帆柱を連ね、  
 紅く化粧した女性が三千の指で音楽を演奏する。  
 そうなると、公文書に埋もれる貴君も、  
 閑を得たときには、「人生は行楽あるのみ」ということもきっと思うであろう。

## ■【09-3-006】漁家傲

【解題】こうこうちよ 江公著 あざな [字は晦叔] かいしゆく に贈った送別の詞。

### 【訳文】

送客帰来燈火尽。[あなたを見送って帰ると、灯火はすでに尽きています]  
 西楼淡月涼生暈。[西の楼閣から見えるのは暈をかぶった淡い月]  
 明日潮来無定準。[明日になって潮がきたならあなたはどこへ行ってしまうのでしょうか]  
 潮来穩。[潮が穩やかにきてくれたなら]  
 舟横渡口重城近。[舟は町の近くの渡し場で横たわったままでいて……]

江水似知孤客恨、[一人旅ゆ<sup>かわ</sup>あなたの心を知るのは江の水だけ]

南風為解佳人愠。[わたしのわたかまりを解いてくれるのは南の風だけ]

莫学时流軽久困。[時流に乗っておかしなことになったりませんように]

頻寄問。[きっとお手紙を寄せてください]

錢塘江上須忠信。[錢塘の江のほとり<sup>まごころ</sup>にあるのはきっと忠信なのですから]

## ■ 【09-3-007】 与葉淳老、侯敦夫張秉道同相視新河、秉道有詩、次韻二首

【**解題**】蘇軾はなかなかの土木好きで、次の事業計画を練り始めていた。錢塘江<sup>せんとうこう</sup>の出口にはたえず形を変える砂州<sup>ふざん</sup> [浮山] があり、河口付近を南北に横切ろうとする船が座礁する事故が頻繁に起きていた [→作品番号 09-2-020]。葉温叟 [字は淳老]、侯臨 [字は敦夫]、張弼 [字は秉道] の 3 人が、新しい運河を掘削して船を上流に迂回させることを提案し、蘇軾はその 3 人とともに現地を視察した。張弼が詩を作ったのでそれに次韻した。2 首のうち 1 首を訳す。

### 【訳文】

#### 其の一

誰もが知るように、

かつて呉越王が元帥府の前に兵士を並べ、

暴れる浪頭に向かつて千の矢を射てより、

今に至るまで錢塘江は静まり、

鳳凰山<sup>ほうおうざん</sup>から一箭を放ったような大道の左右<sup>こう</sup>へと杭州の街が広がった。

私は西湖<sup>せいこ</sup>を浚渫して元の姿に戻し、

街から西南に見渡す限り<sup>あお</sup>の碧い水が広がるようになった。

いままに、<sup>ふざん</sup>浮山の危険を克服し、  
 千の船が、夜でも南に北に自在に行き来できるようしようとしている。  
 上中下の三策が提案されて議論し、  
 ここに決断するなら、あとは私が計画をまとめるだけである。  
 ところが、この私は老病の身、  
 帰郷しようと思いつつここに寄せているだけなのだ。  
 功名はもとより幻のようなもの、私が得られるものではない。  
 笑ってしまうのは、私はいつも蛇足を描いてばかりいて、  
 鶏の骨を食らうような無駄なことを思ってしまう。  
 困ったことに、どうやら諸君等の嗜好にも迂闊なところがあり、  
 私の詩をやたらと喜んだりしてくれる。  
 世間における私の仕事はほぼ終わって帰るばかり、  
 あとのことは若い人たちにどうにかしてもらわなければならない。  
 私はというと洞霄宮<sup>どうしやうきやう</sup>[杭州にある道観]に隠れて、  
 仙薬の調合でもしていようかと思っている。

【補足】[(1) この詩を見ると、新たな土木事業に対して蘇軾はそれほど積極的ではないようにも見えるのだが、それはあくまでも詩の趣向としてそのように歌ったままで、新運河建設の計画提案書をきちんと取りまとめて3月初めに朝廷に提出する。(2) 続く第二首では、さまざまな故事を引用して大土木工事に挑む心構えと、提案者3人への期待を歌っている。故事をきちんと踏まえた訳文を作るのはかなり煩瑣な作業になるので割愛する]

■ 【09-3-008】次韻劉景文路分上元

【**解題**】1月15日の上元節じょうげんせつに、袁轂えんこく [字は公済こうさい] [→作品番号 09-2-085]、劉季孫りゅうきそん  
[字は景文けいぶん] [→作品番号 09-2-080]、法惠長老ほうえちやうろうらが集まり、蘇軾は人々を楽しませる  
ために二首の詞を披露した。それは座を盛り上げるために口当たりのよい語句を並べ  
ただけのものなので訳は割愛し、劉季孫が詠んだ詩に和したこの作品を読んでおこう。  
上元節の夜に華やかに灯籠を飾ることはすでに見ていて、杭州こうでも華やかな年中行事  
となっていた [→作品番号 04-2-005]。

### 【訳文】

輝く灯籠は困難であった歳を終わらせ、  
澄んだ満月が天空に掛かっている。  
三呉さんごの地は季節の行事を重んじ、  
至るところの街筋で歌いかつ舞っている。  
冬至から幾日になるのかというと、  
もう一百五に至ろうとしていて、  
指を折って数える日ごとに、楽しいことが続く。  
今宵は雲が掃われ、  
目の極まるきよところ、天はどこまでも浄らかである。  
喜び遊んで誰もが帰るのを忘れ、  
近頃見ないくらいに人が充満している。  
竹竿の先に丸い灯籠を付けて振り回せば、  
光が水を掛けあかのように四方に飛び散る。  
我等も、老いて子供に返る譬えの通り、  
家に帰ってからも銅鑼や太鼓を叩いてはしゃぐのである。

年の暮れから糸を添えるようにして日が少しずつ長くなり、

新たな年のいまは雪も消えて春となった。

いつか貴君とは九江城で、

二人の漁父となって一緒に釣りをしようではないか。

【補足】〔(1) 冒頭に「困難な歳を終わらせ」とあるのは、気象災害が食糧危機に発展しつつあるなかでの願望である。(2) 「竹竿の先に丸い燈籠」と訳した部分の原文は「飛毬互明滅、激水相吞吐」〔飛毬互いに明滅し、激水相い吞吐す〕で、毬のような燈籠を、投げるか竿の先に付けるかして、水を潜らせる光景を歌っているという解釈も可能であろう。(3) 最後の「九江城云々」は唐突な終わり方で、何のことかさっぱりわからないだろうと、蘇軾自身が注を付記している。それには「私は廬山に住まいを得たいと思ったことがあり、劉季孫は近頃江州に住まいを買った」とある。蘇軾は、詩の終わりに置くべき「父」という韻を使うのに「漁父」とすればよいと思いつき、両地点からほど近い九江城〔潯陽〕で落ち合って釣りでもしようという句をひねり出したのだ】

## ■ 【09-3-009】法穎

【解題】この年の上元節にあったことを数年後に記した文章。

### 【訳文】

法穎沙弥は參寥の弟子である。七、八歳のときから師に仕え、すでに成人のようであった。

上元の夜に、私が寺で燈籠を見て楽しんでいると、法穎が一人の男の肩に乗って見物していた。私

が、  
「出家児もまた燈籠を見たいですかね」

という、法穎はさっと顔色を変え、身を容れるところがないようなありさまになり、経文を唱えつつ去って行った。

これより法穎は遊びに出ることがなくなった。

あれからもう六、七年となり、後には参寥つを嗣ぐ僧になるであろう。

【補足】[このとき法穎はまだ少年で、体が小さかったのだろう。蘇軾はからかい気味に「出家児チュウチアール」と呼びかけた[大人の僧なら「出家人チュウチアールン」である]。蘇軾の一言が法穎にとって熱いお灸となったのだった]

## ■ 【09-3-010】浣溪沙

【解題】梅庭老が潞州の学官として赴任するのを見送った詞。梅庭老の詳しいことはわからない。

### 【訳文】

門外東風雪灑裾、[いま、門の外は春の風なのに、裾には雪がそそがれます]

山頭回首望三呉。[あちらでは、山の上に登り、三呉さんごの地へと首を向けることでしょう]

不応弾鋏為無魚。[魚さえも食えないと、不遇を嘆くようなことはしないでください]

上党従来天下脊、[上党じょうとう〔潞州のあたり〕は昔から天下の背骨といわれています]

先生元是古之儒。[先生いんしよは古の儒者のようなお方]

時平不用魯連書。[高い節義の持ち主は平和なときには用いられたくないのです]

【補足】[学官は低い地位で、梅庭老ばいていろとしては不満だったのだろう。蘇軾はいくつかの故事を引いて、慰めかつ励ましている]

## ■ 【09-3-011】 浣溪沙

【解題】これも送別も詞。新運河建設を提案していた葉温叟<sup>ようおんそう</sup> [字は淳老<sup>あざな じゆんろう</sup>] [→作品番号 09-3-007] は、都に召されて2月に杭州を去った。蘇軾と葉温叟は同じ年の科挙に合格したいわゆる「同年」であった。

## 【訳文】

陽羨姑蘇已買田、[私は陽羨<sup>ようせん</sup>に、貴君<sup>ききみ</sup>は姑蘇<sup>こそ</sup> [蘇州] にすでに田を買っています]

相逢誰信是前縁。[こして逢ったのも前世からの縁によるものなのでしょう]

莫教便唱水如天。[月の光は変わらないのに、かの人はいないと嘆くのはよしましょう]

我作洞霄君作守、[私が道士<sup>どうし</sup>の住まいを作ったなら、貴君<sup>あまじ</sup>はその主です]

白頭相對故依然。[白髪頭<sup>はくとう</sup>にはなっても昔のまま向き合おうではありませんか]

西湖知有幾同年。[西湖もさすがにここまで仲の良い同年<sup>どうねん</sup>は知らないでしょう]

【補足】[蘇軾<sup>ようせん</sup>が陽羨に土地を得たことは作品番号 07-2-041 などで見ている]

## ■ 【09-3-012】 与王定国

【解題】王鞏<sup>おうきやう</sup> [字は定国<sup>あざな ていこく</sup>] [→作品番号 09-2-042] への手紙。王鞏は蘇轍の推薦を得て、1月18日に、宿州知事に任命された。そのことを知って蘇軾はこの手紙を送った。

## 【訳文】

邸報<sup>ていはう</sup> [官報] を見ると貴君<sup>ききみ</sup>が符離<sup>ふり</sup> [宿州] の知事に任命されたとあり、さらに告讞<sup>こくし</sup> [辞令] を見て、喜びに堪えません。これくらいのことには貴君にとっては慶賀するに足るものありません。それでも、善士が少々

の汚点や挫折があったところで、いつまでも埋もれているものではないことを喜ぶのです。こうして才能ある者が用いられるのは国家にとっての喜びでもあります。

### ■【09-3-013】次韻楊公濟奉議梅花十首

【解題】新たに杭州副知事となった楊蟠〔字は公濟〕が梅の花に寄せる十首の詩を詠んだのでそれに次韻した。梅を主題に一時期に多数の詩を作ると、さすがの蘇軾といえども味わいの薄い作品が混じってしまうので、十首のうちから四首だけを訳す。

#### 【訳文】

##### 其の一

梅の梢で春の色がわずかに動き始めた。

造化の作意は南側の枝により多く注がれるのだろうか。

月明かりのない夜に不意に出逢ったのは、

もしかして梅の花の神女だったのだろうか。

##### 其の三

黒髪豊かな少年が春を尋ねてから湖畔に返り、

万松嶺ばんしょうれいのあたりでひと枝開きました、という。

木には老いても霜に耐える根があるので、

再びかの人〔蘇軾〕が来るのを見ることができたのである。

##### 其の六

貴君は知つていよう、早く散るのは、先に開いた花であると。

だから、新しい詩を次々に作って花をせかしたりしないでくれたまえ。

嶺の北の枝は最も思いやりがあるのだらう、

寒さをこらえて花を散らさずに知事殿[蘇軾]が来るのを待っていてくれるだから。

#### 其の八

冬の雀は声ばかり騒かしくて、凍りついたかのように高くは飛べない。

林を低くめぐってまだ花のない枝をついばんでいる。

雀こそ実は風流の心が深いのである。

燕はいくら情愛深いといっても、得手の季節には梅の花はもうないのだから。

### ■【09-3-014】再和楊公濟梅花十絶

【解題】楊蟠<sup>ようはん</sup> [字は公濟<sup>あざな こうさい</sup>] の梅の花に寄せる十首の詩にもう一度次韻した。上と同じ並びの4首を訳す。

#### 【訳文】

##### 其の一

一つの枝に花が開くと風物はもう和やかになる。

千の林を見尽くしてもまだ多すぎるということはない。

この執着心が消えるのなら、花びらが衣に落ちてようが気にならなくなり、

梅の花の神女も私に対して知らん顔をするだらうに。

##### 其の三

髪が白くなり故郷の家を想いつつも、千里離れたところをめぐっている。

小さな家が水面に臨んでいるのは花のためであろう。  
きっと千首の詩を作るべきなのだ。  
何しろ思いが次々に湧いてきているのだから。

其の六

霜降る朝に、まだ開かないと恨んではならない。  
時が進めば頭の白さも増えて行くのだから。  
ようやく咲いた一つの花が風に揺れているのは、  
あたかも美しい人が西の軒端で月を待っているかのようだ。

其の八

湖面を見ていて、花が片片と飛ぶのに驚かされる。  
酒の前において、最も花がたくさんついた枝が吹き折られてしまう。  
この春の風は本当は何を思っているのだろうか。  
細やかに降る雨の中で梅の実が黄色く熟して行くのが、じつは苦手なのだ。

■ 【09-3-015】 謝関景仁送紅梅栽二首

【解題】 官員仲間の関景仁かんけいじんが紅梅を植えてくれたのでその謝礼の詩。

【訳文】

其の一

紅梅のよい香りとは、毎年のように巡り合わせが悪い。  
川べりでは、枝を垂れてもう咲き出そうとしているとか。

ありがたいことに、貴君は思いやりがあるお人、  
根もやさしく掘り出して春をここに届けてくださった。

## 其の二

貴君はいわれる、  
「あなたのために、南堂なんどうと向かい合わせに植えました、  
きつとそのうち実をつけるようになりましょう、  
梅酒の酸っぱさは多くの人の口には合わないでしょうけれど、  
知事殿は風味のわかるお方、眉を顰めてお飲みあれ」

■【09-3-016】遊宝雲寺、得唐彦猷為杭州日送客舟中手書一絶句、雲山雨霏微不满空、  
画船来往疾輕鴻。誰知独臥朱簾裏、一榻無塵四面風。明日、送彦猷之子垌赴鄂州、舟  
中遇微雨、感歎前事、因和其韻、作兩首送之、且歸其書唐氏

【解題】長い詩の題は次の通り。「宝雲寺ほううんじに遊んだところ、唐詢とうじゆんが杭州知事であった  
ときに、客人を送って舟の中で手ずから書いた一首の絶句を得た。その詩は『山雨霏さんう微び空そらに満た  
ず、画船がせん来往らいおう輕けい鴻こうより疾はやし。誰か知らんだれし 独臥どくが 朱簾しゆれんの裏うち、一榻いっとう 塵ちり無く 四面しめんの風かぜ』。  
翌日、唐詢とうけいの子の唐垌がくが鄂州に赴くの見送ったところ、舟で小雨に会い、先の詩の  
心がわかった。それでその韻に和して二首を作って送別の詩とし、合わせて唐詢しよの書  
を唐の家に帰した。唐詢あざな [字は彦猷げんゆう] は仁宗皇帝時代の官僚で、その子の唐垌じんそう [字  
は林夫りんふ] とは蘇軾はかねてから交流があった [→作品番号 07-1-104 など]。

## 【訳文】

其の一

二人の妙手[唐詢とその弟]を失ってから、天下の筆法は空しくすたれてしまった。  
しかし、雲海に鴻が群れて戯れるような貴君[唐垌]の書に、すぐに驚かされたのだった。  
御父上のすばらしい詩を我が家の囊の中に納めておくようなことはしない。  
これを見れば、貴君の筆法は御父上を受け継ぐものなのだと人はいうだろう。

其の二

出处、栄枯、そんなものは一笑すれば空となる。  
十年などは、春の燕と秋の鴻が入れ替わる間のこと。  
まさか白髪頭となった私が、杭州の運河で、  
かのときに人を見送ったのと同じ風に吹かれるとは。

■ 【09-3-017】 次韻曹子方運判雪中同遊西湖

【解題】曹輔[字は子方]と雪の降る西湖に遊び、曹輔が詩を詠んだので、それに次韻した。曹輔は官員仲間で、地方官の任を終えて杭州に帰ってきたところだった。

【訳文】

詞の源水が濺濺と波の上に広がる。  
清らかに唱える声が山並みに満ちてゆく。  
雪がいくら積もっても、貴君の句の高みにまでは及ばないし、  
湖がいくら広くても、貴君の句に誘われた心はそれよりも遠く及んでゆく。  
雲をまとう山は、淡く化粧をした美人の眉のよう、  
山から流れる水は、碧く澄んだ美人の眼のようだ。

酒樽の前にある肴は新しい詩だけ、

とすると、我等は書物の間にいて紙を食しらう書魚しと同じなのだ。

## ■【09-3-018】次韻仲殊雪中遊西湖二首

【解題】蜂蜜好きの僧である仲殊ちゆうしゆ [→作品番号 09-2-054] と雪の降る西湖せいこに遊び、仲殊が詩を詠んだので、それに次韻した。

### 【訳文】

#### 其の一

夜半に夢から覚めると、

竹や葦の音が騒がしい。

続いて、絃が凍てついて折れるような音、

夜更けを報せる太鼓とどとに、

繰り返し激しさが増す

一曲[風雪の音]が終わったのは夜の明け方、

楼閣が雪に覆われて玉のように輝き聳えている。

二三の友人を思い起こし、

筆を降ろして、囊[手紙]を飛ばすことにする。

ちくりん  
竹林の会[風雅の集まり]をしようと、

鳥のように身を軽化して行こうというのである。

秀句が出るのは寒さと飢えのうちにあるとき、

困窮してこそ詩は絶妙の境地に達するという。

ならば、禅老[仲殊ちゆうしゆ]は何をしているのかと問えば、

笑って一筋の煙が昇るのを指すだけだろ。

私は物をいわずして互いに微笑み合える相手を求める、

その眼差しに応じてくれるのは誰なのだろうか。

【補足】 [前夜の雪から始まって、仲殊と西湖に遊んだ経緯を詠んでいる]

## 其の二

宝雲寺には楼閣が並んで千もの門がある。

林は静かで騒ぐ一羽の鳥もない。

門戸を閉ざし、風が地上の雪を掃わないようにする。

簾を巻くと、軒に月が射すかと疑われる。

西湖を見渡せば、

水光激濼として猶お碧を浮べ、[水辺はまだ明るく青い]

山色空濛として已に昏を斂める。[山はすでに暗いたそがれの色である]

晋の恵休のような仲殊の句を得て、

晋の謝安の子が雪を塩や柳絮に譬えたのは実に陳腐であると知れた。

【補足】 [途中、読み下し文を掲げたところは、蘇軾が副知事時代に詠んで最も人口に膾炙した次の絶句 [→作品番号 04-2-009] からサビの部分そのまま引用している。懐かしの名曲を当の歌手が歌えば誰もが喜ぶように、蘇軾自身が名詩を引けば拍手喝采となる。蘇軾の旺盛なサービス精神のなせるわざである]

水光激濼晴方好、[水光激濼として晴は方に好]

山色空濛雨亦奇。[山色空濛として雨も亦た奇なり]

欲把西湖比西子、[西湖と把って西子に比せんと欲するなら]

淡妝濃抹総相宜。たんしょうのうまつ す あ よ [淡妝濃抹総べて相い宜し]

【補足】〔(1) 詩の終わりの部分は晋しんの時代の故事を引いて仲殊ちゆうしゆを褒めたもの。謝安しゃあんは、息子が降る雪を塩に、その妹が柳絮に譬えたのを見て、妹の方を褒めた。仲殊の詩の前ではどちらも陳腐であるといったのである。(2) 仲殊はこの後、間もなく蘇州そに行ったようだ]

### ■ 【09-3-019】次韻參寥詠雪

【解題】さんりょう 參寥 [→作品番号 09-2-013] が雪を詠んだ詩に次韻した。

#### 【訳文】

朝になると、そこらじゅうに白い毛氈もうせんが鋪きつめられていて、  
 楼閣も山も川もことごとくが一つになっている。  
 全てが輝く銀と白い玉、  
 この優れものはいったい誰が置いたのだろうか。

【補足】〔この訳文がごく詰らないのは、岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳解『蘇東坡詩集』(1927年)に、「公の集中に在って最下位に在るもの」と評される作品であるため、訳者のせいばかりではない]

### ■ 【09-3-020】与錢穆父

【解題】こう 先に杭州を発って旅の途中にある錢勰せんきょう [字の穆父あざな ぼくふ] [→作品番号 09-3-004] に送った手紙。

### 【訳文】

先の日に、米黻<sup>べいふつ</sup>君のために『石鐘山<sup>せきしょうざん</sup>の硯<sup>すずり</sup>の銘<sup>めい</sup>』を作りました。その硯は非常に珍しいもので、湖口<sup>ここう</sup>の石鐘山の近くで得られたものです。

その銘は、

有盗不禦、探奇発瑰。[盗人がきて、まんまと珍しい物を掘り出した]

攘於彭蠡、斫鐘取追。<sup>ほうれい こ</sup>[彭蠡湖で盗んだので、鐘を叩いて追いかけられた]

有米楚狂、即盜之隱。<sup>べい</sup>[米君はもどから頭がつかしな盗人の隠者である]

因山作硯、其詞如隕。[山から出てきたのはこの硯、くだらないのはこの言葉]

<sup>よう</sup>揚州を過る際には米黻君に会って、この硯を見たいと求めたらよろしいでしょう。

【補足】[(1) 蘇軾<sup>こう</sup>は杭州に赴任する途中で米黻<sup>べいふつ</sup>に会っていて [→作品番号 09-1-005]、そのときにこの銘を作ったのだろう。この銘は、米黻が書画の類に眼がなく、欲しいと思ったら時には強奪するのも厭わないくらいであるのを笑いの種とした諧謔の作である。(2) なお蘇軾は7年前に石鐘山<sup>せきしょうざん</sup>に行っているの [→作品番号07-1-029]、硯を蘇軾自身が盗んできたのなら、この銘のおもしろさはさらに増すのだが、そういうことではないのだろう]

### ■ 【09-3-021】題所書東海若後

【解題】柳宗元<sup>りゅうそうげん</sup>の作品『東海若<sup>とうかいじやく</sup>』を筆を執って書き、この短文を添えた。『東海若』は東の海の神様が庄子<sup>そうじ</sup>の哲学や仏教について語る寓話。

### 【訳文】

柳宗元りゅうそうげんが作った『東海若とうかいじやく』の一篇を書いて石に刻み、浄住院じょうじゅういんの無量寿仏堂むりょうじゅぶつどうに置きたいものだと長らく思っていた。

元祐六年二月九日、海陵かいりょうの曹輔そうほ、開封かいほうの劉季孫りゅうきそん、永嘉えいかの侯臨こうりんとともにその堂に集まり、ついに『東海若』を書いて僧に遺し、これによって石に刻むようになった。

【補足】[ここに名を挙げてある曹輔そうほは作品番号 09-3-017 で、劉季孫りゅうきそんは作品番号 09-3-008 など、侯臨こうりんは作品番号 09-2-073 で見ている。]

## ■ 【09-3-022】二魚説

【解題】蘇軾りゅうそうげんはこのころ柳宗元への関心を強めていたようで、柳宗元の作品に触発されて、河豚かぶと烏賊いかの寓話を作っている。

### 【訳文】

序  
私は柳宗元りゅうそうげんの『三戒さんかい』を読み、これを受した。そのかたわら、世間のありさまを嘆いてやたらに怒った人が後に悔いを招いたり、過ちを覆い隠そうとしてかえって失敗したりするのを見てきた。  
杭州こうに来て水辺の人から二つの話を聞いた。それは以上のことと通じるものがあつた。そこで『二魚にぎょの説せつ』を作つた。これは柳宗元を継ぐとするものではなく、自分への戒めとするのである。

【補足】[唐とうの柳宗元りゅうそうげんの『三戒さんかい』は鹿と驢馬と鼠を主人公にしたイソップ物語のような寓話である]

### 河豚かぶの説

河の魚でその名を豚とんといふものがいた。橋の間を泳いでいて、柱にぶつかった。それより遠くに行けないので、ぶつかった柱に腹を立てた。頬を膨らませ、怒りて腹をいっぱいにした。そのために腹がぱんぱん

になって、河豚は浮かび上がり、そのまま動けなくなりました。鳶が飛んできてそれを攫<sup>さら</sup>い、その腹を裂いて食べた。

この話からわかるのは：河豚は泳ぐのを好み、止まることを知らなかった。そして、泳いでいて柱にぶつかったのが自分の失敗であるとは思わずに、やたらに怒った。結果として腹を裂かれて死んでしまった。なんと悲しいことではないか。

### い か 鳥賊の説

海の魚でその名を鳥賊<sup>うぞく</sup>というものがいた。鳥賊はよく泡を吹く。岸边で海鳥<sup>うみがらす</sup>が遊んでいた。鳥賊は自分が見つけられてしまうのを恐れ、泡を吹いて体を覆った。海鳥はそれを見て、そこに鳥賊がいると察し、それを攫<sup>さら</sup>った。

この話からわかるのは：鳥賊は自分を覆って命を全うさせることだけを知っていて、覆えばかえって疑われることになるのを知らなかった。ああ、悲しいではないか。

【補足】[序文で、「自分への戒めとする」と書いた意味は明らかであろう]

## ■ 【09-3-023】 櫻筍、并叙

【解題】櫻櫚<sup>しゅろ</sup> [棕櫚] は初夏の頃に、葉の間から穂状に垂れる花の房を出して、小さな多数の黄色い花を咲かせる。その蕾は食用になるということがこの詩の序文に記されている。

### 【訳文】

叙  
櫻筍<sup>そうじゅん</sup> [シュロの花の房]の形は魚のようである。これを剖<sup>さ</sup>けなかに魚の子[卵]のようなものがあって、味は筍<sup>たけのこ</sup>のようで、苦いけれど甘い芳<sup>かほ</sup>りもある。蜀人<sup>しよくじん</sup>はこれを仏に供え、僧ははなはだ珍重する。しかし、南

方の人はそのようなことを知らない。椶筍は膚蟲<sup>ひもろう</sup>〔シュロの葉〕の中に生じるが、花が膨らむ前の一月から二月の間に剥ぎ取らなければならない。それを過ぎると苦みと渋みとで食べられない。これを取っても木には害にならず、食べるのにはよろしい。食べるためにはよく煮るの必要があり、それも筍とほぼ同じで、蜂蜜で煮たり酢に浸したりすると千里の外に飛んで行ってしまぐらいのうまさである。今これを殊長<sup>しゅちやう</sup>老<sup>らう</sup>に贈る。

【補足】〔殊長老とは蜂蜜好きの仲殊のことであろう。以下の詩は、魚の卵のようだという一粒一粒<sup>もくぎよ</sup>を木魚に譬えて詠んでいる〕

貴僧に贈るこれは三百の木魚<sup>もくぎよ</sup>、

中にあるのは、鶯鳥の雛のように黄色で、魚の卵のように旨いもの。

椶櫚<sup>しゅろ</sup>の葉は夜叉<sup>やしや</sup>の髪<sup>かみ</sup>だとか……

その夜叉が己の癭<sup>こぶ</sup>を割いて甘みを分けてくれたのだ。

筍<sup>たけのこ</sup>は竜の孫を包み込んだものだとか……

その竜がまた頭を出さずに旨さを与えてくれるのだ。

よろしければ野菜と一緒に食べられよ、

山林で無駄に散らせるのはもったいない。

どして木魚なんぞを食べているのかと聞かれたなら、

「煮ても鳴かないものでありますから」と答えるとよい。

【補足】〔これは戯れの詩で、最後の部分はかなりひねったオチになっているようで、よくはわからないが、次のようないくつかの事柄を踏まえているのだろう。①僧であるから魚は食べてはいけない。②木魚に譬えた椶櫚<sup>しゅろ</sup>の蕾<sup>もくぎよ</sup>なら食べても構わない。③木魚は叩けば鳴るが、煮たのでは鳴らない。④『荘子<sup>そうじ</sup>』に、二羽の雁のうち鳴かない方が煮て食べられてしまったという寓話がある〔普通は、下手に才覚を示すとひどい目

に遭うということ戒めるのだが、この寓話は才能がなくてもやはりひどい目に遭うという皮肉をいっている]。まさにそれと同じで、鳴らない木魚である棕櫚の蕾は食べられてしまう。⑤以上のようなことを合わせ見るとなんとなくおかしいということなのだろう]

## ■ 【09-3-024】 辞免翰林学士承旨

【解題】1月28日、蘇軾を元通り翰林学士知制誥かんりんがくしちせいこう [→作品番号 08-1-053] として都に召還するとの詔書が到着した。再び皇帝の近くに仕えることになるので、本来は光栄なことであるのだが、蘇軾はすぐにこの文書を朝廷に提出して辞退を申し出た。

### 【訳文】

右の臣はわたし 今月二十八日に敕書を頂戴しました。臣を翰林学士承旨左朝奉郎知制誥かんりんがくしちせいこう にするとのこと、詔書が到着した日に公務の引き継ぎを行い、駟馬を使って速やかに都に向かえとありましたので、臣はその日のうちに公務の引き継ぎを行いました。

伏して念いますに、臣は近頃、両眼ともによく見えなくなり、左の臂が不調でありますので、朝廷に入りますのを堅く辞退し、どこかの郡において任に就くのを願うものであります。できれば静かに退いて衰えた身を少しく養いたく思っております。杭州に参りまして二年になりますが、一事も成し遂げたものはなく、我が才能は限りがあってこれ以上にはなりません。一方で病は減るところか増えるばかりです。ただ東南の地は連年の災害を被っておりますので、敢えて退職を乞うのではなくて別の郡を求めるものであります。仁聖のお恩憐を賜ることがあって、もを通りの地方官にしていただけなら、新たな寵愛を加えてくださることとなりましょう。朝廷の公議に課題があることは存じておりますが、衰病のために前に進むことができません。その上、朝廷からの報せを拝見しますに、臣の弟の蘇轍が尚書右丞しやうしやうじやう [副宰相] になるとのことありますから、兄弟が揃って朝廷に並ぶようなことは避けるべきでありまして、私の家が繁栄し過

ざるのを実に恐れなければなりません。これでは御恩によって身を誤り、必ず安らかなところにはおられなくなるであらう。

伏して聖慈を望み、<sup>わたれ</sup>臣を一郡の知事に任命してくださいますように。多くは申しません。<sup>わたれ</sup>臣はこれより杭州を發ちます。宿州、泗州の間で新たな御指示を頂戴したいと思います。謹んで教旨への御返事を申し上げます。

【補足】[蘇軾は派閥抗争に巻き込まれてしまうのがわかっているのに、都には行きたくなかったのである。それでも皇帝の命令を受けながら<sup>こう</sup>杭州にこのまま留まっていることはできないので、旅立ちに向けて動き出した]

## ■【09-3-025】送小本禪師赴法雲

【解題】同じ頃に都に召された僧がいた。これは、都の<sup>ほううん じ</sup>法雲寺に赴く<sup>しょうほんぜん じ</sup>小本禪師を見送った詩。小本禪師とは<sup>こう じょう じ ぜんほん</sup>杭州の浄慈寺の善本であるという。善本はもとは儒学を学んで都で科挙の試験を受けたのだが、<sup>け こんきょう</sup>華嚴經を読んで思うところがあって仏門に入り、<sup>えんしょうぜん じ そうほん</sup>浄慈寺の円照禪師宗本の弟子となった。それで宗本を大本、善本を小本というようになった。都の<sup>ほうしゅうぜん じ</sup>法雲寺の法秀禪師が亡くなり、その後継者として善本が呼ばれて、<sup>だいつうぜん</sup>大通禪師の号を皇帝から与えられた。

### 【訳文】

形を天地の間に寄せているからには、  
出るも<sup>お</sup>処るも必ず役目というものがあるのだらう。  
安らかに過こして何もすることがないのなら、  
百年の一生は何によって全うさせられるのか。  
山林に隠棲しても憂患はあるだらう、

朝廷で政治を見るのも戯れの劇を演じるのと同じだろう。

私はまだ帰休できずにいるのだから、

師もまた安逸に過ごすわけにはいかないのではなからうか。

王城には豪傑が満ち溢れ、

黒だ白だの議論が尽きることがない。

仏法の第一義が何かと皇帝に問われて、

だるまだいし 達磨大師と同じように「識しらない」と師も答えるのだろうか。

師が都に来ることを何にたとえたらよいか、

青い大空に掛かる一つの月か。

人の身は浮かぶ雲のようなもの、

南か北に行くだけとは限らない。

山を出たらもとより無心、

雨を降らせたなら帰るのである。

せいこ 西湖との旧こからの約束があるのだから、

いつかの年にきつとまた錫杖をこの林に掛けることになるだろう。

## ■【09-3-026】南歌子

【解題】上の詩で見たしょうほんぜんじ 小本禅師 [ だいつうぜんじ 大通禅師 ] との間にあつたとされる楽しいエピソード。真偽のほどは、作り話であると 100 パーセント言い切るのにはわずかにためらいがあるというレベルであるようだ。そうだい えこう 宋代の恵洪の随筆『れいさいやわ 冷斎夜話』に「とうぼ こう 東坡が杭州知事であつたとき、せいこ 西湖にいない日はなかつた。あるとき妓女を連れて大通禅師に会いに行った。大通禅師の顔に怒りの色が浮かんたのを見て、東坡は詞を作って妓女に歌わせた」としてこの詞が記されている。

## 【訳文】

師唱誰家曲、[師は誰の家の曲を唱えておられるのでしょうか]

宗風嗣阿誰。[そちらの教えは誰から継がれたのでしょうか]

借君拍板与門槌、[拍子を取る板と槌をお貸くださいませ]

我也逢場作戲、[私も戯れの説法くらいならしてさしあげます]

莫相疑。[ちゃんといたしますとも]

溪女方偷眼、[谷川で女が見初めたからといって]

山僧莫眨眉。[山のお坊さま、眉をひそめませんように]

卻愁弥勒下生遲、[百千万億劫ごうの後に世界は空になると、弥勒菩薩みろくぼさつはおっしやいましたっけ]

不見老婆三五、[そのときになってこの老婆にも若く美しいときがあったと]

少年時。[嘆いても遅いのですよ]

【補足】 [(1) 終わりの3行は意味が掴めないので、思い付きの「ずっぱ訳」である。

(2) この詞は蘇軾が作ったとみなしても絶対に誤りとはいえないのかもしれないが、ついでに蘇軾が作ったとみなす勇気を持ち合わせている人は恐らく誰もいないという詞を見ておこう。そんなものでも蘇軾の真作であると一部で信じられていたのは、世人が抱く蘇軾のイメージにぴったりだからなのだろう。明代みんだいには蘇軾やその妹 [実在しない] が活躍する小説が作られ、庶民はむしろそちらの方から蘇軾を知ったのだった。ここに訳すのはやはり明代の余永麟よえいりんの随筆『北窓瑣語ほくそうきご』に記されているもの]

## 【訳文】

余永麟：『北窓瑣語』

杭州の靈隱寺の僧の了然は妓女の李秀奴に恋をし、通い続けて衣鉢をすっかりはたいてしまった。李秀奴は関係を絶ったが、了然の恋の迷いはやまなかった。ある夜、了然は酔いに乗じて李秀奴のところに行った。李秀奴が中に入れようとしなかったので、了然は怒って李秀奴を殴った。李秀奴は撃たれて死んでしまった。事件は役所に知らされ、時の知事は蘇軾であった。了然は獄に送られ、取り調べを受けた。了然の体には刺青があり、「但願生同極楽国、免教今世苦相思」[ただ願うのは一緒に極楽に生まれ、この世での恋の苦しみから免れること]とあった。蘇軾は判決を詞で言い渡した。

這個秃奴、[この秃め]

修行忒煞、[てたらめな修行をしおって]

靈山頂上空持戒。[靈山の頂上で戒律をためこしてしまった]

一從迷恋玉樓人、[色里の女にひとたび血迷ってからは]

鶉衣百結渾無奈。[衣はぼろぼろのすってん]

毒手傷人、[その毒の手で人を傷つけ]

花容粉碎、[花をこなごなにしてしまった]

空空色色今何在。[空即是色云々と唱えたのは何だったのだ]

臂間刺道苦相思、[恋の苦しみなんぞと刺青をしおったからには]

這回還了相思債。[ここはもはや恋の償いをしてもらえない]

了然は直ちに斬られた。

## ■ 【09-3-027】 朱照僧

【解題】 こちらは上の破戒坊主と違い、いたって真面目な小坊主について記した短文。

## 【訳文】

朱しゆ氏の子の名を照しょう僧そうという。幼わかくして父を喪い、その母の尹いん氏は息子を出家させることを願ねがひ、守素しゆそを師とした。守素さんりようは参寥さんりようの弟子である。照僧せうそうは九歳、振る舞いは大人おとなのようで、『赤壁せきへきの賦』を誦よして、鶴つるのようにからりとした声こゑを響ひびかせる。十年も経たないうちにその名が四方しやうほうに聞きこえるようになるだろう。照僧せうそうは参寥さんりようの法孫ほふそんであり、東坡とうぱ門下の僧でもある。

【補足】[蘇軾そせきの『赤壁せきへきの賦』[→作品番号 06-3-057] を誦よんじて唱となえることができるので、我が門下生もんげしやうだといっているのだ]

## ■ 【09-3-028】 鐘守素

【解題】上の文でその名を記された守素しゆそについての短文。

## 【訳文】

参寥さんりようのもとにいる行者しやうじやの鍾守素しゆしゆそは参寥さんりように仕えて幾年にもなるが、いまだに過失かじつがあるのを見ない。私はそつとその行動を見守みまもって察さつするに、高遠こうえんの者を慕こゝろう意いがあるようである。参寥さんりようがいうには、「秦觀しんかん様は、交友関係のある三十人に十貫じゅうくわんずつ出してもらって度牒どちやうを買い、人を出家させようと考かんがえておられます」と。私は人の善行ぜんぎやうを喜び、参寥さんりようは人に対して不善ふぜんをしない。それでこれを書いて守素しゆそに与たまへるものである。

【補足】[これはつまり、秦觀しんかんが集める資金しんかんによって守素しゆそを出家得度しゆそさせる仲立ちを買かって出たということであるのだから。正式せいしの僧尼しゆにになるには朝廷てうていが出す認可状しんかじやうである度牒どちやうがなければならぬ。朝廷てうていは一枚の紙しを出だすだけで大金たいきんに化けるわけで、蘇軾そせきはその仕組しぐみみを使って様々さまざまな公共事業こうきぎやうを展開てんぱんする資金しんかんを得たのだった]

## ■ 【09-3-029】 阿弥陀仏頌

【解題】蘇軾は阿弥陀あみだぶつ仏を賛美する歌を作った。序文だけを訳す。

### 【訳文】

杭州こうの僧の円照えんしやうりつし律師は西方極楽世界の阿弥陀あみだぶつ仏に帰依するよう遍く人々に勧めている。眉山びざんの蘇軾の亡き母の程氏ていの遺品たまに珮かんざしの付いた簪かんざしがあり、職人に命じてそれに仏画を描き、もって父母の冥福を祈ることにした。慎んで再拝稽首してこの頌歌を献じるものである。

【補足】[円照えんしやうりつし律師に母の遺品を寄進して両親の冥福を祈ったのである。宋そうという時代は、思想的には何でもオーケーで、仏教も禅だろうが阿弥陀あみだ信仰だろうがその境目は特になし、阿弥陀あみだ仏に冥福を祈るのは、先祖が冥界で安楽に過ごせるように子孫が捧げものをするという中国の伝統的な死生観と合致してもいる]

## ■ 【09-3-030】 与某宣徳書

【解題】宣徳郎せんとくろうという官階にある某氏姓名は不明に与えた手紙。蘇軾が疫病対策として病院びやうぼう [病坊] を作ったことは作品番号 09-2-020 で見たが、某氏が贈ってくれたお金を病院の運営費に充てようというのがこの手紙の内容。某氏はなかなか裕福な人であったのだろう。

### 【訳文】

お使いの方から金五両、銀一百五十両を受け取りました。  
私が黄州こうから汝州じょへと移ったときにも 贍はなむけとして厚く御支援いただきましたが、その当時は飢えと寒さと隣り合わせでありましたので、辞退はいたしませんでした。いまは忝も陛下にお仕えする身で、暮らし向きもかつかつというわけではありませんので、果たしてこのたびの御厚意はお受けしてもよろしいものやら、

どうなのでありますか。しかしながら、せっかくのお気持ちを無にするのは恐らく朋友の義に背くことになりましょう。私はちょうど杭州から移るところでありますので、あなたさまのお心は病坊びょうぼうに寄付させていただきますと思います。病坊は私が杭州在任中に設置したもので、いま軌道に乗りつつあります。一年間の収入は米千斛こくでありまして、それほど多くの人を救えるものではありません。あなたさまの御援助で田を買ひ、困窮する民衆を養いたいと思います。このことは国家の施策を推して行くものであるとともに、あなたさまの福寿を増し、引いては私の榮さかともなりましょう。きっと御同意くださることと思ひ、感謝の念に堪えません。どうかこのことをお胸の内にお納めくださいますようお願いいたします。

### ■ 【09-3-031】 次韻曹子方竜山真覚院瑞香花

【解題】曹輔そう ほう [字は子方あざな しほう] [→作品番号 09-3-017] が竜山真覚院りゅうざんしんかくいんに咲く瑞香花ずいこう かのを見て詠んだ詩に次韻した。瑞香花とはジンチョウゲであるという。

#### 【訳文】

浅い紫ひろに幽やかな香りが結ばれているこの花、  
 ぼつんと雲が浮かぶ高い峰からきたという。  
 木を見ただけでは奥底に香りがあることわからない、  
 花の色もまことに淡い、  
 その意こころはことに深いものがある。  
 峰から寺の庭に移し植えられ、  
 いつしか寺の林で第一とされる存在になった。  
 この香気は名臣の腰に帯びられるのにふさわしく、  
 花びらは天女の襟に散り落ちるのにふさわしい。  
 貴君は風霜に堪える節義を具え、

その耳は歌笑の音には冷淡であるが、  
ひとたび蘭らんや蕙けいの本性とも一致するこの花に出逢うと、  
鉄石の心もさすがに揺り動かされてしまい、  
暖かい日には花のもとに酒を置いて愛で、  
花を養うための日陰を作ろうと心を配り、  
曇り空になっただけで、雨が花を傷付けるのではとすぐに恐れるのである。  
色鮮やかな雲は散り散りになりやすいとか、  
鳥が鳴くのは花が散りゆくのを憂うからだとか、  
そのようなことを聞くだけで、  
貴君はもう明日の朝には花の散った跡だけとなるのを心配する。  
だったら、画に描いて残そうと試してみてもどうであろうか。

## ■ 【09-3-032】 次韻劉景文西湖席上

【**解題**】西湖せいこのほとりに人々が集まり、劉季孫りゅうきそん [字は景文あざな けいぶん] [→作品番号 09-3-008]

が詩を詠み、蘇軾が次韻した。蘇軾が杭州を発つ日が迫りつつあった。

### 【訳文】

二人の長身の老人りゅうきそん [劉季孫と蘇軾]が立つのは、  
西湖せいこを囲む二つの峰のよう。

二人の詩が響き合うのは、  
古代の楽器の大呂たいりょと黄鐘こうしょうのよう。

貴君は、常に都を守った魏ぎの劉楨りゅうていのようにこの杭州の地に残る。

私は、晋しんの陸雲りくうんのような貴君の文才を、遠くから想い見るようになる。

我が白髪は、貴君もまた似たようなものであるのを憐れみ、  
 かの山は、私がまたここでともに遊ぶのを許してくれるであろうか。  
 我が官は昔でいえばすでに六百石を越えているので、  
 自分のもとより六百石以上を求めはしないのだと、  
 政治の乱れを見て郷里に帰った漢の邴曼容へいまんように恥じねばならない。

### ■ 【09-3-033】 次前韻答馬忠玉

【解題】上の劉季孫りゅうきそんの詩に、やはり官員仲間である馬ば▲かん あざな ちゆうぎよく [字は忠玉、▲は王+威]  
 が次韻して、蘇軾がさらに次韻した。

#### 【訳文】

浪打つおお巨きな山麓から峰の連なりが立ち上がる、  
 かねてからの善の積み重ねによって自ずと幸いおどりが集まってきているのだ。  
 よって貴君の子等しやれいうんはかの謝靈運と同じくおどりいずれも鳳で、  
 貴君の兄弟はかの荀爽じゆんそうと同じくいずれも竜である。  
 我等はこうして会い、雲が飛ぶようにそれぞれに別れる。  
 詩の仲間であるから。しほし酒を携えてともに行こうではないか。  
 西湖せいこはまさに西子せいしに似ている——  
 ここを去る貴君のために悲しげな顔かたちを容ゆるづっているではないか。

【補足】[(1) 前半は馬忠玉ばちゆうぎよくを褒めちぎっている。どうやら馬忠玉も杭州こうを去るようである。(2) この詩でも、蘇軾自身の有名な句「欲把西湖比西子」[西湖せいこと把とって西子せいに比ひせんと欲ほつするなら] [→作品番号 09-3-018] を引用している]

## ■ 【09-3-034】 木蘭花令

【解題】 上と同じく馬▲<sup>ば かん</sup> [字は忠玉、▲は王+咸]<sup>あざな ちゆうぎよく</sup> に贈った詞。やはり馬忠玉が先に詠んでそれに和したものの。

### 【訳文】

知君仙骨無寒暑、[あなたは暑さも寒さも知らない仙人のような人]

千載相逢猶旦暮。[千年の歲月も、朝から夕刻までのようなもの]

故将別語惱佳人、[別れの言葉で佳き人を悲しませるまでもなく]

欲看梨花枝上雨。[梨の花に注ぐ雨を見ようではありませんか]

落花已逐回風去、[落ちた花はもう風に吹かれて行ってしまいました]

花本無心鶯自訴。[花はもとより無心、鶯が代わりに鳴いています]

明朝歸路下塘西、[明日の朝は私は私は杭州の西の道を帰って行きます]

不見鶯啼花落處。[花が落ち鶯が鳴くこを見ることはもうないのです]

## ■ 【09-3-035】 答水陸通長老

【解題】 蘇州の水陸禪院にいる通長老 [→作品番号 09-3-001] に宛てた手紙。いよいよ都に向かって発つ直前に記したのだらう。

### 【訳文】

……先日、にわか<sup>さんりん</sup>に禁林[朝廷]に召還されることになり、格別に思うところがあり、免じて地方知事にしてくださるようすでに願っていますが、ともあれ辞令に従ってただちに都へと発たねばなりません。人生は紛紛と苦勞が多いもので、帰る宿がどこにあるのかいまだに知れません。手紙を前に嘆いてばかり

います。いつお会いできますやら、人々のために重々御自愛されますように。出発が迫り紛然としておりますので、文の乱れをどうぞお許しください。

### ■【09-3-036】与弁才禪師

【解題】<sup>べんさいだい し げんじょう</sup>弁才大師元浄 [→作品番号 09-3-003] に宛てた手紙。

#### 【訳文】

……衰病の身で、功名を挙げようという気持ちはもはやなく、ここを去ってしほの歳月を勉め、も退居する便宜を得られたならば、<sup>じょう</sup>すくに常州の住いに帰ります。諸僧、諸聖に祈って早くに帰ることができれば幸いです。これは切なる思いですが、他の人にはお知らせしませんように、虚偽となつてはいけませんので。出発が迫り、慌ただい中、これにて失礼いたします。

【補足】[省略した手紙の前半部分には、石に刻む文字のことなど<sup>べんさいだい し</sup>弁才大師との間で進められていた幾つかのことについて記している。全ての始末をつけるだけの時間はなかったのだろう]

■【09-3-037】予去杭十六年而復来、留二年而去。平生自覚出处老少、麤似楽天、雖才名相遠、而安分寡求、亦庶幾焉。三月六日、来別南北山諸道人、而下天竺惠浄師以醜石贈行、作三絶句

【解題】長い詩の題は次の通り。「私は<sup>こう</sup>杭州を去って十六年、再び来て留まること二年、そして去ることになった。平生から年齢を重ねての履歴は<sup>はくきょい</sup>ほぼ白居易<sup>はくらくてん</sup> [白楽天] に似ると自分でも思う。才名は遠く及ばないにしても、<sup>ぶん</sup>分に安んじて求めるものが少ないのはかなり近いであろう。三月六日、杭州の南北の山の諸僧と別れ、<sup>げてんじく</sup>下天竺の<sup>え</sup>惠浄師<sup>じょう し</sup>が醜怪な石を贈ってくれた。三首の絶句を作る」。蘇軾は<sup>びんゆう</sup>元祐4年7月3日に杭州

に着任し、去ったのは元祐6年3月15日ごろであったから、2年には満たない。ここでもまた白居易との類似を意識している。

### 【訳文】

#### 其の一

かの年には衫も鬢も青青としていた私に、  
きつとまた来られましよう、無理にもいって、  
別れの情を慰めてくれたのだった。  
いま髪は衰えてこれ以上には白くならない、  
だから、次に向かい合って語るのは、  
来世でなのだろう。

【補足】[杭州に二度目の任を得られたのは望外の幸いで、さすがに三度目はありえないと覚悟して来世でと詠んだのだろう]

#### 其の二

出处はそっくり白居易に似ているようだ。  
衰えて朽ちたこの身を昔の賢人に比べるわけではないけれど、  
白居易と同じ官を辞めて洛陽に行くのなら、  
閑居することお二十年の歳月があることになろうか。

【補足】[白居易が洛陽に隠居して7年の間に洛陽の春を遍く見たと歌ったことは作品番号09-2-028で、また蘇軾が白居易を見習って官職を退いて12年間くらいの閑な時間を持ちたいものだと希望したことは作品番号09-2-046でそれぞれ見ている]

## 其の三

白居易は、

「杭州にあること六百日、山に入ること十二回」と歌った。

私も前例に倣って杭州にあるのはまぼ六百日、

しかし、山に入ったのは数限りがない。

白居易は二つの石を持って行き、

私は天竺山てんじくさんの一つの峰えじょう[恵浄が贈ってくれた石]を持って行こうとしている。

行く先々でそれを植えて、杭州の雲を湧かせようと思う。

【補足】[石のことを雲根うんこんという。だからそれを植えて杭州と同じ風光を育てようというのである]

### ■ 【09-3-038】 参寥泉銘、并叙

【解題】蘇軾こは杭州を去る前の3月6日に参寥さんりょうに会いに行き、新たに湧き出した泉を参寥泉さんりょうせんと名付けて銘を作った。その序文はすでに作品番号06-4-014で見ているが、ここにもう一度掲げておこう。

#### 【訳文】

叙

私は黄州謫居こうしゅうたくきょとなったとき、参寥さんりょうは(杭州から)数千里の道も遠いとせずこに黄州にまで来てくれた。年を越えて滞在し、ともに武昌ぶしやうの西山せいざんに遊んだ。私は夢の中で参寥とともに詩を賦し、そのなかで「寒食かんしょく清明せいめい」、「石泉槐火せきせんかい」の句があった。語としてははなはだ美しいけれども、その意味するところはわからなかった。

それから七年後に、私は知事として杭州こに赴任すると、そこに参寥さんりょうがいた。翌年、参寥は智果寺ちかじの

精舎に入り、さらにあくる年に新たな居所を作った。ちょうど私は寒食の日に杭州を去ることになったので、そのことを告げに参寥のもとを訪ねた。

精舎の下には石の間から湧き出る古い泉があった。この月、石を鑿<sup>うが</sup>ったところ、泉がまた湧き、水がよりいっそう澄んでいた。参寥は新茶を摘み、泉の水を沸かしてそれに注いだ。私は笑っていた。

「これは九年前に見た夢そのままだ」

一同はみなひどく驚いた。

運命を知らせる何かがあっても、その意味はなかなかわからないものだ。

この泉を参寥泉<sup>さんりょうせん</sup>と名付け、銘を作った。

在天雨露、在地江湖。皆我四大、滋相所濡。

偉哉参寥、彈指八極。退守斯泉、一謙四益。

余晚聞道、夢幻是身。真即是夢、夢即是真。

石泉槐火、九年而信。夫求何神、実弊女神。

【補足】 [(1) 銘の部分は訳すのが難しいの原文をそのまま掲げておく。参寥<sup>さんりょう</sup>の徳を讃え、仏教の教理と夢の不思議とを緩やかに結び付けたものである。(2) これとほとんど同じ文章を作品番号 09-2-013 で見ている。杭州<sup>こう</sup>を去る前に参寥に会いに行き、折しもまた寒食<sup>かんしょく</sup>が巡り来る時期であったので、再び同じパフォーマンスをしてみせたのだろうか。智果院<sup>ちかいん</sup>の泉を参寥泉<sup>さんりょうせん</sup>と名付けたのはもっと前のことなのに、ここでは新たに石の間から泉が湧き出したように書いている。不審な点はあるものの、これ以後、参寥泉は杭州を訪れる文人墨客が必ず足を運ぶ名所となった。なおこの年の清明節は3月14日であった]

## ■ 【09-3-039】 八声甘州

【解題】蘇軾<sup>さんりょう</sup>は参寥との別れに際してこの詞を遺した。

【訳文】

有情風、[情のある風が]

万里卷潮来、[万里の向こうから潮を巻きつつやって来ます]

無情送潮歸。<sup>こころ</sup>[情のない風が潮を送りつつ帰ってしまいます]

問錢塘江上、[問いかけましょうか、<sup>せんとうこう</sup>錢塘江の川べりで]

西興浦口、[西興<sup>せいこう</sup>の船着き場で]

幾度斜暉。[日は幾度斜めになったのかと]

不用思量今古、[考えるのはやめましょう、今だ昔とどか]

俯仰昔人非。[うなずく間にも人は過去のものになってしまうとか]

誰似東坡老、[なんと東坡<sup>とうば</sup>老人は]

白首忘機。<sup>きしん</sup>[白髪に至って機心[計算高い心]を忘れてしまったのです]

記取西湖西畔、[覚えておいてください、西湖の西のあたり]

正春山好处、[まさに春の山<sup>よ</sup>の好いところを]

空翠煙霏。<sup>みどり</sup>[翠の山裾にかすみかただよいます]

算詩人相得、[仲のよい詩人を挙げてみても]

如我与君稀。[私とあなたのようなのは希でありましょう]

約他年東還海道、[いつか東の海辺に帰ってくと約束します]

願謝公、[心からの願いで]

雅志莫相違。<sup>みやび</sup>[この雅な志を違えることはないのです]

西州路、[杭州から外に通じる路で]

不応回首、[首を回らせつつ]

為我沾衣。[私が戻ってこない と泣かせるようなことはしませんから]

【補足】〔(1) 最後の部分は晋の時代の謝安と羊曇の故事を踏まえている。謝安は国家の重鎮として都を離れられなかったが、いつか故郷の会稽 [越州] に帰りたいと思っていた。会稽は杭州こうに近く、同じく海に近いので、再び杭州に戻りたいとの蘇軾の思いを謝安の願いに重ねたのである。謝安にかわいがられていた羊曇は、謝安が亡くなってその葬列が歩んで行った都の西州路せいしゅうろに来ると、いつも謝安のことを思って泣いた [→作品番号 06-4-012]。参寥を羊曇にたぐえて、しかし自分は必ず杭州に帰ってくるから、参寥を泣かせるようなことはしないとிட்டのである。果たして蘇軾は杭州にまた来ることができたのか、それはこれから見ることになる。(2) 蘇軾は都に呼び戻され、わずか 2 年足らずで杭州を去った。短い在任期間であったけれども、いまなお残る土木事業を成し遂げ、災害の対応に奔走した。宋代の官僚機構においては、知事が土地に深く根を下ろすことがないよう、4 年以内に移動させられてしまうのだが、蘇軾自身も土地の人々ももっと長く杭州にいてほしかったと思ったであろう]

## 第9章 原文

詩のテキストは孔凡礼点校『蘇軾詩集』（1982年）に、賦のテキストは李之亮箋注『蘇軾文集編年箋注』（2011年）に準拠し、その他の散文類は省略する。

- 【09-1-001】 与范夢得
  
- 【09-1-002】 与陳伝道
  
- 【09-1-003】 与滕達道
  
- 【09-1-004】 四達齋銘、并引
  
- 【09-1-005】 書米元章藏帖
  
- 【09-1-006】 杭州謝上表
  
- 【09-1-007】 謁文宣王廟祝文
  
- 【09-1-008】 題王羲之敬和帖
  
- 【09-1-009】 与錢穆父

■ 【09-1-010】 次韻秦少章和錢蒙仲

碧畦黃隴稻如京、歲美人和易得情。  
鑑裏移舟天外思、地中鳴角古來聲。  
山圍故國城空在、潮打西陵意未平。  
二子有如雙白鷺、隔江相照雪衣明。

■ 【09-1-011】 次韻錢越州

髯尹超然定逸群、南遊端為訪雲門。  
謫仙歸侍玉皇案、老鶴來乘刺史轡。  
已覺簿書哀老子、故知籩豆有司存。  
年來齒頰生荊棘、習氣因君又一言。

■ 【09-1-012】 次自書歸去來兮辭及自作後

■ 【09-1-013】 去杭十五年、復遊西湖、用歐陽察判韻

我識南屏金鯽魚、重來拊檻散齋余。  
還從旧社得心印、似省前生覓手書。  
葑合平湖久蕪漫、人經豐歲尚雕疏。  
誰憐寂寞高常侍、老去狂歌憶孟諸。

■ 【09-1-014】 与莫同年雨中飲湖上

到處相逢是偶然、夢中相對各華顛。  
還來一醉西湖雨、不見跳珠十五年。

■ 【09-1-015】 送子由使契丹

雲海相望寄此身、那因遠適更沾巾。  
不辭駟騎凌風雪、要使天驕識鳳麟。  
沙漠回看清禁月、湖山応夢武林春。  
单于若問君家世、莫道中朝第一人。

■ 【09-1-016】 秦仲二子雨中遊宝山

平明已報百吏散、半日来陪二子閑。  
立鵲低昂煙雨裏、行人出沒樹林間。

■ 【09-1-017】 為法外刺配罪人待罪狀

■ 【09-1-018】 点絳脣

己巳重九和蘇堅  
我輩情鐘、  
古來誰似竜山宴。  
而今楚甸、  
戲馬余飛觀。  
  
顧謂佳人、  
不覺秋強半。  
簫声遠、

鬢雲吹亂。

愁入參差雁。

■ 【09-1-019】 浣溪沙

珠檜系杉冷欲霜、

山城歌舞助淒涼。

且餐山色飲湖光。

共挽朱轡留半日、

強揉青蕊作重陽。

不知明日為誰黃。

■ 【09-1-020】 自跋南屏激水偈

■ 【09-1-021】 次韻答劉景文左藏

我老詩壇仆鼓旗、借君佳句發良時。

但空賀監杯中物、莫示孫郎帳下兒。

夜燭催詩金燼落、秋芳壓帽露華滋。

故忘好語如爬癢、有味難名只自知。

■ 【09-1-022】 座上復借韻送岢嵐軍通判葉朝奉

雲間踏白看纏旗、莫忘西湖把酒時。

夢裏吳山連越嶠、樽前羌婦雜胡兒。

夕烽過後人初醉、春雁來時雪未滋。  
為問從軍真樂否、書來粗遣故人知。

■ 【09-1-023】 跋劉景文歐公帖

■ 【09-1-024】 書文忠贈李師琴詩

■ 【09-1-025】 題損之故居

■ 【09-1-026】 次韻錢越州見寄

莫將牛弩射羊群、臥治何妨昼掩門。  
稍喜使君無疾病、時因送客見車轡。  
搔頭白髮秋無數、閉眼丹田夜自存。  
欲息波瀾須引去、吾儕豈獨坐多言。

■ 【09-1-027】 杭州題名

■ 【09-1-028】 書贈王元直

■ 【09-1-029】 王子立墓誌銘

■ 【09-1-030】 哭王子立、次兒子迨韻三首

其一

彭城初識子、照眼白而長。  
異夢成先兆、清言得未嘗。  
豈惟知禮意、遂欲補詩亡。  
咄咄真相逼、諸生敢雁行。

其二

非無伯鸞志、独有子雲悲。  
恨子非天合、猶能使我思。  
兒曹莫淒慟、老眼欲枯萎。  
会哭皆豪傑、誰為感旧詩。

其三

童困嘗魚服、羊儂或虎蒙。  
恩恩成鬼錄、憤憤到天公。  
偶落藩牆上、同遊羿彀中。  
回看十年事、黃葉卷秋風。

■ 【09-1-031】 与錢穆父

■ 【09-1-032】 軾始於文登海上、得白石數升、如芡實、可作枕。聞梅丈嗜石、故以遺其子  
子明學士、子明有詩、次韻  
海隅荒怪有誰珍、零落珊瑚泣季倫。  
法供坐令微物重、色難歸致孝心純。

只疑蕙苳來交趾、未信蠙珠出泗浜。  
願子聚為江夏枕、不勞麾扇自寧親。

■【09-1-033】文登蓬萊閣下、石壁千丈、為海浪所戰、時有碎裂、淘灑歲久、皆圓熟可愛、土人謂此彈子渦也。取數百枚、以養石菖蒲、且作詩遺垂慈堂老人

蓬萊海上峰、玉立色不改。  
孤根捍滔天、雲骨有破碎。  
陽侯殺廉角、陰火發光彩。  
累累彈丸間、瑣細成珠琲。  
閻浮一漚耳、真妄果安在。  
我持此石歸、袖中有東海。  
垂慈老人眼、俯仰了大塊。  
置之盆盎中、日與山海對。  
明年菖蒲根、連絡不可解。  
倘有蟠桃生、旦暮猶可待。

■【09-1-034】六觀堂贊

■【09-1-035】次韻毛滂法曹感雨詩

江南佳公子、遺我錦繡端。  
攬之溫如春、公子焉得寒。  
興雨自有時、膚寸便濛濛。  
斂藏以自潤、牛斗何足干。

空庭月与影、強結三友歡。  
我豈不足歟、要此清团团。  
所歡在一醉、常恐樽中乾。  
捨酒尚可樂、明珠如彈丸。  
但恐千仞雀、慙慙發虛彈。  
迨子閑暇時、種子田中丹。  
一朝涉世故、空腹容欺謾。  
我頃在東坡、秋菊為夕餐。  
永愧坡間人、布褐為我完。  
雪堂初覆瓦、上簞無下莞。  
時時亦設客、每醉筒輒殫。  
一笑便傾倒、五年得輕安。  
公子豈我徒、衣鉢傳一篋。  
定非郊与島、筆勢江河寬。  
悲吟古寺中、穿帷雪漫漫。  
他年記此味、芋火对嬾殘。

■ 【09-1-036】 送鄧宗古還鄉

広漢有姜子、孝弟行里閭。  
赤眉雖豺虎、弛兵過其墟。  
至今空清泉、無復双鯉魚。  
南鄭有李郃、得妙甘公書。  
夜坐指流星、驚倒兩使車。

抱關不肯仕、布褐蒙璠璣。  
西南固多士、君得二子余。  
凜凜忠文公、搜士及樵漁。  
澗谿有幽討、蘋芷真嘉蔬。  
歲晚終不食、心惻當何如。

■ 【09-1-037】 參寥上人初得智果院、會者十六人、分韻賦詩、軾得心字

漲水返旧壑、飛雲思故岑。  
念君忘家客、亦有懷歸心。  
三間得幽寂、數步藏清深。  
攢金盧橘塢、散火楊梅林。  
茶筍盡禪味、松杉真法音。  
雲崖有淺井、玉醴常半尋。  
遂名參寥泉、可濯幽人襟。  
相携橫嶺上、未覺衰年侵。  
一眼吞江湖、万象涵古今。  
願君更小築、歲晚解我簪。

■ 【09-1-038】 異鵲、并叙

叙  
熙寧中、柯侯仲常、通守漳州、以救飢得民。有二鵲、棲其庀事、訖侯之去、鵲亦送之、漳人異焉。為賦此詩。

昔我先君子、仁孝行於家。  
家有五畝園、幺鳳集桐花。  
是時烏与鵲、巢巖可俯拏。  
憶我与諸兒、飼食觀群呀。  
里人驚瑞異、野老笑而嗟。  
云此方乳哺、甚畏鳶与蛇。  
手足之所及、二物不敢加。  
主人若可信、衆鳥不我遐。  
故知中孚化、可及魚与豨。  
柯侯古循吏、悃悞真無華。  
臨漳所全活、数等江干沙。  
仁心格異族、兩鵲棲其衙。  
但恨不能言、相对空楂楂。  
善惡以類応、古語良非誇。  
君看彼酷吏、所至号鬼車。

■ 【09-1-039】 次韻詹適宣德小飲巽亭

君方夢謫仙、我亦弔文園。  
江上同三黜、天涯又一樽。  
濤雷殷白昼、梅雪耿黄昏。  
歸去多情雨、応隨御史軒。

■ 【09-1-040】 東川清系寄魯冀州、戲贈

鵝溪清系清如水、上有千歲交枝藤。  
 藤生谷底飽風雪、歲晚忽作竜蛇升。  
 嗟我雖為老侍從、骨寒只愛布与繒。  
 牀頭錦衾未還客、坐覺芒刺在背膺。  
 豈如髯卿晚乃貴、福祿正似川方增。  
 醉中倒著紫綺裘、下有半臂出縹綾。  
 封題不敢妄裁剪、刀尺自有佳人能。  
 遙知千騎出清曉、積雪未放遊塵興。  
 白鬚紅帶柳糸下、老弱空巷人相登。  
 但放奇紋出領袖、吾髯雖老無人憎。

■ 【09-1-041】 乞賑濟浙西七州狀

■ 【09-1-042】 怡然以垂雲新茶見餉、報以大竜団、仍戲作小詩

妙供來香積、珍烹具太官。  
 揀芽分雀舌、賜茗出竜団。  
 曉日雲庵暖、春風浴殿寒。  
 聊將試道眼、莫作兩般看。

■ 【09-1-043】 次韻王忠玉游虎丘絕句三首

其一

当年大白此相浮、老守娛賓得二丘。  
 白髮重来故人尽、空余叢桂小山幽。

其二

青蓋紅旗映玉山、新詩小草落玄泉。  
風流使者人爭看、知有真娘立道邊。

其三

舞衫歌扇轉頭空、只有青山杳靄中。  
莫共語王鬪百草、使君未敢借驚鴻。

■ 【09-1-044】 和錢四寄其弟翬

再見濤頭湧玉輪、煩君久駐浙江春。  
年來綵作維摩病、堪笑東西二老人。

■ 【09-1-045】 故周茂叔先生濂溪

世俗眩名實、至人疑有無。  
怒移水中蟹、愛及屋上烏。  
坐令此溪水、名與先生俱。  
先生本全德、廉退乃一隅。  
因拋彭沢米、偶似西山夫。  
遂即世所知、以為溪之呼。  
先生豈我輩、造物乃其徒。  
忘同柳州柳、聊使愚溪愚。

■ 【09-1-046】 次韻子由使契丹至涿州見寄四首

其一

老人癡鈍已逃寒、子復辭行理亦難。  
要到盧竜看古塞、投文易水弔燕丹。

其二

胡羊代馬得安眠、窮髮之南共一天。  
又見子卿持漢節、遙知遺老泣山前。

其三

氈毳年來亦甚都、時時缺舌問三蘇。  
那知老病渾無用、欲問君王乞鏡湖。

其四

始憶庚寅降屈原、旋看蠟鳳戲僧虔。  
隨翁万里心如鉄、此子何勞為買田。

■ 【09-1-047】 書煮魚羹

■ 【09-1-048】 燈火一首贈王十六

金粟釵頭次第多、起看欠月帶斜河。  
懸知瑞草橋邊夜、笑指燈花說老坡。

■ 【09-1-049】 題燕文貴山水卷

■ 【09-1-050】 跋閻右相洪崖仙図卷

■ 【09-1-051】 記蘇秀才遺歎硯

■ 【09-1-052】 南屏謙師、并引

引

南屏謙師妙於茶事、自云、得之於心、忘之於手、非可以言伝学到者。十月二十七日、聞軾游落星、遠來設茶、作此詩贈之

道人曉出南屏山、來試点茶三昧手。

忽驚午盞兔毛斑、打作春甕鵝兒酒。

天台乳花世不見、玉川風腋今安有。

先生有意統茶經、会使老謙名不朽。

■ 【09-2-001】 与潘彦明

■ 【09-2-002】 臥病弥月、聞垂雲花開、順闍黎以詩見招、次韻答之

道人心似水、不礙照花妍。

宴座春強半、清陰月屢遷。

平生無起滅、一念有陳鮮。

嫋嫋風枝拳、離離日萼薦。

病吟終少味、老醉不成顛。

向必遨頭出、湖中有散仙。

■ 【09-2-003】 太息一章送秦少章秀才

■ 【09-2-004】 仲天貺、王元直自眉山來見余錢塘、留半歲、既行、作絕句五首送之

其一

仲君豈弟多學、王子清脩寡言。

病後空驚鶴瘦、時來或作鸚鵡。

其二

海角煩君遠訪、江源與我同來。

剩作數詩相送、莫教萬里空回。

其三

三人一旦同行、留下高齋月明。

遙想扁舟京口、尚余孤枕潮聲。

其四

更欲留君久住、念君去國弥年。

空使犀顛玉頰、長懷髯舅淒然。

其五

為予遠致殷勤、瑞草橋邊老人。

紅帶雅宜華髮、白醪光泛新春。

■ 【09-2-005】 寄蔡子華

故人送我東來時、手栽荔子待我歸。

荔子已丹吾髮白、猶作江南未歸客。

江南春盡水如天、腸斷西湖春水船。

想見青衣江畔路、白魚紫筍不論錢。

霜髯三老如霜檜、旧交零落今誰在。

莫從唐拳問封侯、但遣麻姑更爬背。

■ 【09-2-006】 烏夜啼

莫怪歸心甚速、

西湖自有蛾眉。

若見故人須細說、

白髮倍當時。

小鄭非常強記、

二南依旧能詩。

更有鱸魚堪切膾、

兒輩莫教知。

■ 【09-2-007】 雪後、便欲與同僚尋春、一病弥月、雜花都盡、獨牡丹在爾、劉景文左藏和

順闍黎詩見贈、次韻答之  
殘花怨久病、剩雨泣余妍。  
不見双旌出、空令九陌遷。  
知君苦寂寞、妙語嚼芳鮮。  
淺紫從争發、深紅任蚤薦。  
天葩尚青萼、国色待華顛。  
載酒邀詩將、臞儒不是仙。

■ 【09-2-008】 病後醉中

病為兀兀安身物、酒作蓬蓬入腦声。  
堪笑錢塘十万户、官家付与老書生。

■ 【09-2-009】 跋焦千之帖後

■ 【09-2-010】 南柯子

日薄花房綻、  
風和麥浪輕。  
夜來微雨洗郊坰、  
正是一年春好、  
近清明。

已改煎茶火、  
猶調入粥餈。

使君高会有余清、  
此樂無声無味、  
最難名。

■【09-2-011】次韻劉景文、周次元寒食同遊西湖

絮飛春減不成年、老境同乘下瀨船。  
藍尾忽驚新火後、遨頭要及浣花前。  
山西老将詩無敵、洛下書生語更妍。  
共向北山尋二士、画橈鼉鼓聒清眠。

■【09-2-012】連日与王忠玉、張全翁游西湖、訪北山清順、道潜二詩僧、登垂雲亭、飲參

寥泉、最後過唐州陳使君夜飲、忠玉有詩、次韻答之

北山非自高、千仞付我足。  
西湖亦何有、万象生我目。  
雲深人在塢、風靜響忘谷。  
与君皆無心、信步行看竹。  
竹間逢詩鳴、眼色奪湖淥。  
百篇成俯仰、二老相追逐。  
故応千頃池、養此一双鶻。  
山高路已断、亭小膝屢促。  
夜尋三尺井、渴飲半甌玉。  
明朝闌糸管、寒食雜歌哭。  
使君坐無聊、狂客來不速。

載酒有鷗夷、扣門非啄木。  
浮蛆灑金盃、翠羽出華屋。  
須臾便陳迹、覺夢那可統。  
及君未渡江、過我勤秉燭。  
一笑換人爵、百年終鬼錄。

■ 【09-2-013】 書參寥詩

■ 【09-2-014】 竜井題名

■ 【09-2-015】 竜華題名

■ 【09-2-016】 題劉景文所歐陽公書

■ 【09-2-017】 題万松嶺惠明院壁

■ 【09-2-018】 陳輔之不娶

■ 【09-2-019】 次韻送張山人歸彭城

羨君飄蕩一虛舟、來作錢塘十日游。  
水洗禪心都眼淨、山供詩筆綵眉愁。  
雪中乘興真聊爾、春盡思歸却罷休。  
何日五湖從范蠡、種魚万尾橘千頭。

■ 【09-2-020】 聖散子後敘

■ 【09-2-021】 新茶送簽判程朝奉、以饋其母、有詩相謝、次韻答之

縫衣付与溧陽尉、舍肉懷歸潁谷封。  
聞道平反供一笑、會須難老待千鐘。  
火前試焙分新勝、雪裏頭綱輟賜竈。  
從此升堂是兄弟、一甌林下記相逢。

■ 【09-2-022】 次韻林子中、王彥祖唱酬

早知身寄一漚中、晚節尤驚落木風。  
昨夢已論三世事、歲寒猶喜五人同。  
雨余北固山圍座、春尽西湖水映空。  
差勝四明狂監在、更將老眼犯塵紅。

■ 【09-2-023】 壽星院寒碧軒

清風肅肅搖窓扉、窓前修竹一尺圍。  
紛紛蒼雪落夏簟、冉冉綠霧沾人衣。  
日高山蟬抱葉響、人靜翠羽穿林飛。  
道人絕粒對寒碧、為問鶴骨何緣肥。

■ 【09-2-024】 西湖壽星院此君軒

臥聽謾謾碎竈鱗、俯看蒼蒼立玉身。

一舸鷗夷江海去、尚余君子六千人。

■ 【09-2-025】 觀台

三界無所住、一台聊自寧。

塵勞付白骨、寂照起黃庭。

殘磬風中嫋、孤燈雪後青。

須防童子戲、投瓦犯清泠。

■ 【09-2-026】 書劉景文所藏王子敬帖

家雞野鷺同登俎、春蚓秋蛇總入奩。

君家兩行十二字、氣壓鄴侯三萬籤。

■ 【09-2-027】 江城子

玉人家在鳳凰山。

水雲間、

掩門闌。

門外行人、

馬上看弓彎。

十里春風誰指似。

斜日映、

繡簾斑。

多情好事与君還。

憫新鰥。

拭余漣。

明月空江、

香霧著雲鬟。

陌上花開春盡也。

聞旧曲、

破朱顏。

■ 【09-2-028】贈善相程傑

心伝異學不謀身、自要清時閱摺紳。

火色上騰雖有數、急流勇退豈無人。

書中苦覓元非訣、醉裏微言却近真。

我似樂天君記取、華顛賞遍洛陽春。

■ 【09-2-029】次韻林子中蒜山亭見寄

奇逸多聞老敬通、何人慷慨解憐翁。

十年簿領催衰白、一笑江山發醉紅。

聞道賦詩臨北固、未忘舉扇向西風。

叩頭莫喚無家客、歸掃岷峨一畝宮。

■ 【09-2-030】次韻劉景文送錢蒙仲三首

其一

誰識天閑老驥、不爭日暮長途。

送尽青雲九子、歸去扁舟五湖。

其二

寄語竹林社友、同書桂籍天倫。

王郎独為鬼録、世間無此玉人。

其三

五字古原春草、千金漢殿長門。

經緯尚余三策、典刑留与諸孫。

■ 【09-2-031】 菩提寺南漪堂杜鵑花

南漪杜鵑天下無、披香殿上紅氍毹。

鶴林兵火真一夢、不歸閬苑歸西湖。

■ 【09-2-032】 題楊次公春蘭

春蘭如美人、不采羞自獻。

時間風露香、蓬艾深不見。

丹青写真色、欲補離騷伝。

对之如靈均、冠佩不敢燕。

■ 【09-2-033】 題楊次公蕙

蕙本蘭之族、依然臭味同。

曾為水仙佩、相識楚辭中。

幻色雖非實、真香亦竟空。  
云何起微馥、鼻觀已先通。

■ 【09-2-034】次韻曹輔寄壑源試焙新芽

仙山靈草濕行雲、洗遍香肌粉未勻。  
明月來投玉川子、清風吹破武林春。  
要知冰雪心腸好、不是膏油首面新。  
戲作小詩君一笑、從來佳茗似佳人。

■ 【09-2-035】真覺院有洛花、花時不暇往、四月十八日、與劉景文同往賞枇杷

綠暗初迎夏、紅殘不及春。  
魏花非老伴、盧橘是鄉人。  
井落依山盡、巖崖發興新。  
歲寒君記取、松雪看蒼鱗。

■ 【09-2-036】又和劉景文韻

牡丹松檜一時栽、付與春風自在開。  
試問壁間題字客、幾人不為看花來。

■ 【09-2-037】題張子野詩集後

■ 【09-2-038】次韻楊次公惠徑山竈井水

漏盡雞鳴厭夜行、年來小器溢瓶罍。

棄官縱未歸東海、罷郡猶堪作水衡。  
幻色將空眼先暗、勝遊無礙脚殊輕。  
空煩遠致竟淵水、寧復臨池似伯英。

■ 【09-2-039】 杭州乞度牒開西湖狀

■ 【09-2-040】 申三省起請開湖六條狀

■ 【09-2-041】 南歌子

其一

山与歌眉斂、  
波同醉眼流。  
遊人都上十三樓、  
不羨竹西歌吹、  
古揚州。

菇黍連昌歎、  
瓊彝倒玉舟。  
誰家水調唱歌頭、  
声繞碧山飛去、  
晚雲留。

其二

古岸開青葢、  
新渠走碧流。  
會看光滿萬家樓、  
記取他年扶病、  
入西州。

佳節連梅雨、  
余生寄葉舟。  
只將菱角與雞頭、  
更有月明千頃、  
一時留。

■ 【09-2-042】 與王定國

■ 【09-2-043】 書所和回先生詩

■ 【09-2-044】 減字木蘭花

雙童對起。  
白甲蒼髯煙雨裏。  
疏影微香。  
下有幽人昼夢長。

湖風清輒。

双鵲飛來爭噪晚。  
翠颺紅輕。  
時上凌霄百尺英。

■ 【09-2-045】 賀新郎

乳燕飛華屋、  
悄無人、  
桐陰轉午、  
晚涼新浴。  
手弄生綃白团扇、  
扇手一時似玉。  
漸困倚孤眠清熟。  
簾外誰來推繡戶、  
枉教人、  
夢斷瑤台曲。  
又却是、  
風敲竹。

石榴半吐紅巾蹙。  
待浮花、  
浪蕊都盡、  
伴君幽獨。  
穠豔一枝細看取、

芳心千重似束。

又恐被、

秋風驚綠。

若待得君來向此、

花前對酒不忍觸。

共粉淚、

兩簌簌。

■ 【09-2-046】次京師韻送表弟程懿叔赴夔州運判

與子甥舅氏、摧頹各蒼顏。

並為東諸侯、長此佳江山。

寒松無時花、安得插髻鬟。

惟將老不死、一笑榮枯間。

我甚似樂天、但無素與蠻。

掛冠及未耄、當獲一紀閑。

子亦拙進取、才高命堅頑。

譬如萬斛舟、行此九折灣。

仲氏新得道、一漚目塵寰。

歲晚家鄉路、莫遣生榛菅。

■ 【09-2-047】跋送表弟程懿叔赴夔州運判詩後

■ 【09-2-048】次韻劉景文登介亭

沢国梅雨余、衰年困蒸溽。  
 高堂磨新塼、頗覺利腰足。  
 松根百尺井、兩綆飛淨淥。  
 流觴聚兒童、一笑為捧腹。  
 清風信可御、剛氣在巖麓。  
 始知共此世、物外無三伏。  
 長歌入雲去、不待絃管逐。  
 西湖真西子、煙樹点眉目。  
 濤江少醞籍、高浪翻雪屋。  
 俛仰拊四海、百世飛鳥速。  
 遠追錢氏余、近弔祖侯躅。  
 吾生如寄耳、寸晷輕尺玉。  
 誰似劉將軍、逸韻謝辺幅。  
 千言一揮手、五車不再誦。  
 春巖彩雞舞、月峽哀猿哭。  
 朝先啼鳩起、暮与寒螿統。  
 我老廢吟哦、頼君時擊觸。  
 從今事遠覽、発軻此幽谷。  
 清游得三昧、至樂謝五欲。  
 莫作狂道士、氣压劉師服。

■ 【09-2-049】 袁公濟和劉景文登介亭詩、復次韻答之

昏昏墮醉夢、奈此六月溽。

君詩如清風、吹我朝睡足。  
登臨得佳句、江白照湖淥。  
袖手独不言、默稿已在腹。  
是時風雨過、藹藹雲歸麓。  
疏星帶微月、金火爭見伏。  
惜哉此清景、變滅不可逐。  
歸來讀君詩、耿耿猶在目。  
却思少年日、聲價爭場屋。  
文如翻水成、賦作叉手速。  
秋風起鴻雁、我亦繼華躅。  
那知君躑躅、独泣荆山玉。  
相見南新道、青衫垂破幅。  
早知事大繆、恨不十年讀。  
莫嫌馮唐老、終勝賈誼哭。  
今年復為僚、旧好許重統。  
升沈何足道、等是蠻与觸。  
共為湖山主、出入窮澗谷。  
衆馳君不爭、人棄我所欲。  
何時神武門、相約掛冠服。

■ 【09-2-050】 葉教授和溥字韻詩、復次韻為戲、記竜井之遊

先生魯諸儒、飲食清不溥。  
空腸出秀句、吟嚼五味足。

華堂鬪糸管、眸子漲春渌。  
 先生疾走避、面冷毒在腹。  
 歸來煮瓠葉、弟子歌旱麓。  
 聲淫及靈台、中有麀鹿伏。  
 功名一走免、何用千人逐。  
 故宍容我輩、清坐時閉目。  
 高亭石排衙、木杪掛飛屋。  
 我來無時節、客亦不待速。  
 似聞雪髯叟、西嶺訪遺躅。  
 朝陽入潭洞、金碧涵水玉。  
 泉扉夜不扃、雲袂本無幅。  
 慈皇付寶偈、神侶得幽誦。  
 訥庵有老人、宴坐天魔哭。  
 時來獻纓絡、法供燈相續。  
 吾儕詩酒污、欲往無乃觸。  
 齋廚費晨炊、車騎滿山谷。  
 願聞第一義、鉢飯非所欲。  
 便投切雲冠、予幼好奇服。

■ 【09-2-051】 祈雨祝文

■ 【09-2-052】 鵲橋仙

乘槎歸去、

成都何在。

万里江沱漢漾。

与君各賦一篇詩、

留織女、

駕鳶機上。

還將旧曲、

重賡新韻、

須信吾儕天放。

人生何處不兒嬉、

看乞巧、

朱樓彩舫。

■ 【09-2-053】 次韻林子中見寄

飄零洛社數遺民、詩酒当年困惡賓。

元亮本無適俗韻、孝章要是有名人。

蒜山小隱雖為客、江水西來亦帶岷。

卷却西湖千頃葑、笑看魚尾更莘莘。

■ 【09-2-054】 安州老人食蜜歌

安州老人心似鉄、老人心肝小兒舌。

不食五穀惟食蜜、笑指蜜蜂作檀越。

蜜中有詩人不知、千花百草爭含姿。

老人咀嚼時一吐、還引世間癡小兒。  
小兒得詩如得蜜、蜜中有藥治百疾。  
正当狂走捉風時、一笑看詩百憂失。  
東坡先生取人廉、幾人相歡幾人嫌。  
恰似飲茶甘苦雜、不如食蜜中辺甜。  
因君寄与双竜餅、鏡空一照双竜影。  
三吳六月水如湯、老人心似双竜井。

■ 【09-2-055】 次韻錢穆父紫薇花二首

其一

虛白堂前合抱花、秋風落日照橫斜。  
閱人此地知多少、物化無涯生有涯。  
〈(虛白堂前紫薇兩株、俗雲樂天所種。〉

其二

折得芳蕤兩眼花、題詩相報字傾斜。  
篋中尚有糸綸句、坐覺天光照海涯。  
獨坐黃昏誰是伴、紫薇花對紫薇郎。

■ 【09-2-056】 送張嘉州

少年不願万户侯、亦不願識韓荊州。  
頗願身為漢嘉守、載酒時作凌雲遊。  
虛名無用今白首、夢中却到竜泓口。

浮雲軒冕何足言、惟有江山難入手。  
峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流。  
謫仙此語誰解道、請君見月時登樓。  
笑談万事真何有、一時付与東巖酒。  
歸來還受一大錢、好意莫違黃髮叟。

■ 【09-2-057】 奏浙西災傷第一狀

■ 【09-2-058】 南歌子

其一

海上乘槎侶、  
仙人萼綠華。  
飛升元不用丹砂、  
住在潮頭來處、  
渺天涯。

雷輓夫差國、  
雲翻海若家。  
坐中安得弄琴牙、  
寫取餘聲歸向、  
水仙誇。

其二

苒苒中秋過、  
蕭蕭兩鬢華。  
寓身化世一塵沙。  
笑看潮來潮去、  
了生涯。

方士三山路、  
漁人一葉家。  
早知身世兩聲牙。  
好伴騎鯨公子、  
賦雄誇。

■ 【09-2-059】 南昭慶寺題名

■ 【09-2-060】 題張白雲詩

■ 【09-2-061】 与錢穆父

■ 【09-2-062】 九日袁公濟有詩、次其韻

古來靜治得清閑、我愧真常也一班。  
拳酒東榮挹江海、回樽落日勸湖山。  
平生傾蓋悲歎裏、早晚抽身簿領間。  
笑指西南是歸路、倦飛弱羽久知還。

■ 【09-2-063】 和公濟飲湖上

昨夜醉歸還獨寢、曉來宿雨鳴孤枕。  
扁舟小棹截湖來、正見青山駁雲錦。  
須知老人興不淺、莫學公榮不共飲。  
與君歌鼓棗豐年、喚取千夫食陳廩。

■ 【09-2-064】 點絳脣

不用悲秋、  
今年身健還高宴。  
江村海甸、  
總作空花觀。

尚想橫汾、  
蘭菊紛相半。  
樓船遠、  
白雲飛亂、  
空有年年雁。

■ 【09-2-065】 書朱象先畫後

■ 【09-2-066】 介亭餞楊傑次公

籃輿西出登山門、嘉與我友尋仙村。

丹青明滅風篁嶺、環珮空響桃花源。  
前朝欲上已蠟屐、黑雲白雨如傾盆。  
今晨積霧卷千里、豈畏觸熱生病根。  
在家頭陀無為子、久与青山為弟昆。  
孤峰尽处亦何有、西湖鏡天江抹坤。  
臨高麾手謝好住、清風万壑伝其言。  
風回響答君聽取、我亦到处隨君軒。

■ 【09-2-067】 謝吳山水神五竜三廟祝文

■ 【09-2-068】 贈劉景文

荷尽已無擎雨蓋、菊殘猶有傲霜枝。  
一年好景君須記、最是橙黃橘綠時。

■ 【09-2-069】 題蔡君謨詩草

■ 【09-2-070】 問淵明

子知神非形、何復異人天。  
豈惟三才中、所在靡不然。  
我引而高之、則為日星懸。  
我散而卑之、寧非山与川。  
三皇雖云没、至今在我前。  
八百要有終、彭祖非永年。

皇皇謀一醉、發此露槿妍。  
有酒不辭醉、無酒欺飲泉。  
立善求我譽、飢人食饑涎。  
委運憂傷生、憂去生亦還。  
縱浪大化中、正為化所纏。  
忘盡便須盡、寧復事此言。

■ 【09-2-071】 故竜岡閣學士滕公墓誌銘

■ 【09-2-072】 滕達道挽詞二首

其一

先帝知公早、虛懷第一人。  
至今詩禮將、獨數武宣臣。  
材大雖難用、時來亦少信。  
高平風烈在、威敏典刑新。  
空試乘邊策、寧留相漢身。  
淒涼旧部曲、淚濕冢前麟。

其二

雲夢連江雨、樊山落木秋。  
公方占賈鵬、我正買龔牛。  
共有江湖樂、俱懷畎畝憂。  
荆溪欲歸老、浮玉偶同遊。

骯髒儀刑在、驚呼歲月遒。

回頭雜歌哭、挽語不成謳。

■ 【09-2-073】 記温公論茶墨

■ 【09-2-074】 題和張子野見寄詩後

■ 【09-2-075】 送程之邵簽判赴關

夜光不自獻、天驥良難知。

從來一狐腋、或出五羖皮。

賢哉江東守、收此幕中奇。

無華豈易識、既得不自隨。

留君望此府、助我憐其衰。

二年促膝語、一旦長揖辭。

林深伏猛在、岸改潛珍移。

去此當安從、失君徒自悲。

念君瑚璉質、当今台閣宜。

去矣会有合、豈常懷其私。

■ 【09-2-076】 書林道人論琴棋

■ 【09-2-077】 送李陶通直赴清溪

忠文文正二大老、蘇李広平三舍人。

喜見通家賢子弟、自言得邑少風塵。  
從來勢利關心薄、此去溪山琢句新。  
肯向西湖留數月、錢塘初識小麒麟。

■ 【09-2-078】 与范純夫

■ 【09-2-079】 六一泉銘

■ 【09-2-080】 元祐五年十二月十二日、同景文、義伯、聖途、次元、伯固、蒙仲遊七宝寺、  
題竹上

結根豈殊衆、修柯獨出林。  
孤高不可恃、歲晚霜風侵。

■ 【09-2-081】 弁才老師退居竜井、不復出入。余往見之。嘗出至風篁嶺。左右驚曰、遠公復過虎溪矣。弁才笑曰、杜子美不云乎、与子成二老、来往亦風流。因作亭嶺上、名之曰過溪、亦曰二老、謹次弁才韻賦詩一首

日月轉双轂、古今同一丘。  
惟此鶴骨老、凜然不知秋。  
去住兩無礙、人天爭挽留。  
去如竜出山、雷雨卷潭湫。  
來如珠還浦、魚鱉爭駢頭。  
此生暫寄寓、常恐名實浮。  
我比陶令愧、師為遠公優。

送我還過溪、溪水当逆流。  
聊使此山人、永記二老遊。  
大千在掌握、寧有離別憂。

■ 【09-2-082】 寄題梅宣義園亭

仙人子真後、還隱吳市門。  
不惜十年力、治此五畝園。  
初期橘為奴、漸見桐有孫。  
清池压丘虎、異石來湖鼃。  
敲門無貴賤、遂性各琴樽。  
我本放浪人、家寄西南坤。  
敝廬雖尚在、小圃誰當樊。  
羨君欲歸去、奈此未報恩。  
愛子幸僚友、久要疑弟昆。  
明年過君西、飲我空瓶盆。

■ 【09-2-083】 舍幡帖一首

■ 【09-2-084】 与王慶源之子

■ 【09-2-085】 熙寧中、軾通守此郡。除夜、直都厅、囚繫皆滿、日暮不得返舍。因題一詩於壁、今二十年矣。衰病之余、復忝郡寄、再經除夜、庭事蕭然、三園皆空。蓋同僚之力、非拙朽所致、因和前篇呈公濟濟、子侔二通守

前詩

除日当早歸、官事乃見留。  
執筆對之泣、哀此繫中囚。  
小人嘗糗糧、墮網不知羞。  
我亦恋薄祿、因循失歸休。  
不須論賢愚、均是為食謀。  
誰能暫縱遣、悶默愧前修。

今詩

山川不改旧、歲月逝肯留。  
百年一俯仰、五勝更王囚。  
同僚比岑范、德業前人羞。  
坐令老鈍守、嘯諾獲少休。  
却思二十年、出處非人謀。  
齒髮付天公、欠壞不可修。

■ 【09-3-001】 与水陸通長老

■ 【09-3-002】 宸奎閣碑

■ 【09-3-003】 竜井題名

■ 【09-3-004】 臨江仙

一別都門三改火、

天涯蹋盡紅塵。

依然一笑作春溫。

無波真古井、

有節是秋筠、

惆悵孤帆連夜發、

送行淡月微雲。

尊前不用翠眉顰。

人生如逆旅、

我亦是行人。

■ 【09-3-005】 送江公著知吉州

三吳行盡千山水、猶道桐廬更清美。

豈惟濁世隱狂奴、時平亦出佳公子。

初冠惠文誦城旦、晚入奉常陪劍履。

方將華省起彈冠、忽憶釣台歸洗耳。

未忘良木棄大匠、要使名駒試千里。

奉親官舍當有枳、得郡江南差可喜。

白粲連檣一萬艘、紅粧執樂三千指。

簿書期會得余閑、亦念人生行樂耳。

■ 【09-3-006】 漁家傲

送客歸來燈火盡。

西樓淡月涼生暈。

明日潮來無定準。

潮來穩。

舟橫渡口重城近。

江水似知孤客恨、

南風為解佳人慍。

莫學時流輕久困。

頻寄問。

錢塘江上須忠信。

■ 【09-3-007】 與葉淳老、侯敦夫、張秉道同相視新河秉道有詩、次韻二首

其一

君不見元帥府前羅萬戟、濤頭未順千弩射。

至今鳳凰山下路、長借一箭開兩翼。

我鑿西湖還舊觀、一眼已盡西南碧。

又將回奪浮山險、千艘夜下無南北。

坐陳三策本人謀、惟留一諾待我畫。

老病思歸真暫寓、功名如幻終何得。

從來自笑画蛇足、此事何殊食雞肋。

憐君嗜好更迂闊、得我新詩喜折屐。

江湖羸了我徑歸、余事後來當潤色。  
 一庵閑臥洞霄宮、并有丹砂水長赤。

## 其二

荊溪父老愁三害、下斬長蛟本無賴。  
 平生倔強韓退之、文字猶為鱷魚戒。  
 石門之役萬金耳、首鼠不為吾已隘。  
 江湖開塞古有數、兩鵠飛來告成壞。  
 勸農使者非常人、一言已破黎民駭。  
 上饒使君更超軼、坐睨浮山如累塊。  
 髯張乃我結襪生、詩酒淋漓出狂怪。  
 我作水衡生作丞、他日歸朝同此拜。

## ■ 【09-3-008】次韻劉景文路分上元

華燈闕艱歲、冷月掛空府。  
 三吳重時節、九陌自歌舞。  
 雲從月幾望、遂至一百五。  
 嘉辰可屈指、樂事相繼武。  
 今宵掃雲陣、極目淨天宇。  
 嬉遊各忘歸、闐咽頃未睹。  
 飛毬互明滅、激水相吞吐。  
 老去反兒童、歸來尚饒鼓。  
 新年消暗雪、旧歲添糸縷。

何時九江城、相對兩漁父。

■ 【09-3-009】 法穎

■ 【09-3-010】 浣溪沙

門外東風雪灑裾、

山頭回首望三吳。

不忝彈鋏為無魚。

上党從來天下脊、

先生元是古之儒。

時平不用魯連書。

■ 【09-3-011】 浣溪沙

陽羨姑蘇已買田、

相逢誰信是前緣。

莫教便唱水如天。

我作洞霄君作守、

白頭相對故依然。

西湖知有幾同年。

■ 【09-3-012】 与王定国

■ 【09-3-013】 次韻楊公濟奉議梅花十首

其一

梅梢春色弄微和、作意南枝剪刻多。

月黑林間逢綺袂、霸陵醉尉誤誰何。

其二

相逢月下是瑤台、藉草清樽連夜開。

明日酒醒忘滿地、空令飢鶴啄莓苔。

其三

綠髮尋春湖畔回、万松嶺上一枝開。

而今縱老霜根在、得見劉郎又独來。

其四

月地雲階漫一樽、玉奴終不負東昏。

臨春結綺荒荆棘、誰信幽香是返魂。

其五

日出冰澌散水花、野梅官柳漸欹斜。

西郊欲就詩人飲、黃四娘東子美家。

其六

君知早落坐先開、莫著新詩句句催。  
嶺北霜枝最多思、忍寒留待使君來。

其七

冰盤未薦含酸子、雪嶺先看耐凍枝。  
忘笑春風木芍藥、豐肌弱骨要人醫。

其八

寒雀喧喧凍不飛、繞林空啁未開枝。  
多情好與風流伴、不到雙雙燕詩時。

其九

鮫綃剪碎玉簪輕、檀暈粧成雪月明。  
肯伴老人春一醉、懸知欲落更多情。

其十

綺裙練帔玉川家、肝膽清新冷不邪。  
穠李爭春猶棄此、更教踏雪看梅花。

■ 【09-3-014】再和楊公濟梅花十絕

其一

一枝風物便清和、看盡千林未覺多。  
結習已空從著袂、不須天女問云何。

其二

天教桃李作輿台、故遣寒梅第一開。  
憑仗幽人収艾納、国香和雨入青苔。

其三

白髮思家万里回、小軒臨水為花開。  
故応剩作詩千首、知是多情得得来。

其四

人去殘英滿酒樽、不堪細雨湿黄昏。  
夜寒那得穿花蝶、知是風流楚客魂。

其五

春入西湖到处花、裙腰芳草抱山斜。  
盈盈解佩臨煙浦、脉脉当壚傍酒家。

其六

莫向霜晨怨未開、白頭朝夕自相催。  
斬新一朵含風露、恰似西廂待月来。

其七

洗尽鉛華見雪肌、要将真色鬪生枝。

檀心已作竜涎吐、玉頰何勞懶隨医。

其八

湖面初驚片片飛、樽前吹折最繁枝。  
何人会得春風意、怕見梅黃雨細時。

其九

長恨漫天柳絮輕、只將飛舞占清明。  
寒梅似与春相避、未解無私造物情。

其十

北客南來豈是家、醉看參月半橫斜。  
他年欲識吳姬面、秉燭三更對此花。

■ 【09-3-015】謝闕景仁送紅梅栽二首

其一

年年芳信負紅梅、江畔垂垂又欲開。  
珍重多情闕令尹、直和根撥送春來。

其二

為君栽向南堂下、記取他年著子時。  
酸醜不堪調衆口、使君風味好攢眉。

■ 【09-3-016】 遊宝雲寺、得唐彦猷為杭州日送客舟中手書一絕句、雲山雨霏微不滿空、  
画船来往疾輕鴻。誰知独臥朱簾裏、一榻無塵四面風。明日、送彦猷之子垌赴鄂州、舟中遇  
微雨、感歎前事、因和其韻、作兩首送之、且歸其書唐氏

其一

二妙凋零筆法空、忽驚雲海戲群鴻。  
清詩不敢私囊篋、人道黃門有父風。

其二

出處榮枯一笑空、十年社燕与秋鴻。  
誰知白首長河路、還臥當時送客風。

■ 【09-3-017】 次韻曹子方運判雪中同遊西湖

詞源灑灑波頭展、清唱一声巖谷滿。  
未容雪積句先高、豈独湖開心自遠。  
雲山已作歌眉淺、山下碧流清似眼。  
樽前侑酒只新詩、何異書魚餐蠹簡。

■ 【09-3-018】 次韻仲殊雪中遊西湖二首

其一

夜半幽夢覺、稍聞竹葦聲。  
起繞凍折弦、為鼓一再行。  
曲終天自明、玉樓已崢嶸。  
有懷二三子、落筆先飛霰。

共為竹林会、身与孤鴻輕。  
秀語出寒餓、身窮詩乃亨。  
禪老復何為、笑指孤烟生。  
我独念粲者、誰与予目成。

其二

宝雲樓閣闌千門、林静初無一鳥喧。  
閉戶莫教風掃地、卷簾疑有月臨軒。  
水光瀲灩猶浮碧、山色空濛已斂昏。  
乞得湯休奇絕句、始知塩絮是陳言。

■ 【09-3-019】 次韻參寥詠雪

朝来处处白氈鋪、樓閣山川尽一如。  
總是爛銀并白玉、不知奇貨有誰居。

■ 【09-3-020】 与錢穆父

■ 【09-3-021】 題所書東海若後

■ 【09-3-022】 二魚說

■ 【09-3-023】 榷筍、并叙

叙

椶筍、状如魚、剖之得魚子、味如苦筍而加甘芳。蜀人以饌仏、僧甚貴之、而南方不知也。筍生膚蠹中、蓋花之方孕者、正二月間、可剥取、過此、苦澁不可食矣。取之無害於木、而宜於飲食、法当蒸熟、所施略与筍同、蜜煮酢浸、可致千里外。今以餉殊長老。

贈君木魚三百尾、中有鵝黃子魚子。

夜叉剖瘦欲分甘、籜竜蔵頭敢言美。

願随蔬果得自用、勿使山林空老死。

問君何事食木魚、烹不能鳴固其理。

#### ■ 【09-3-024】 辞免翰林学士承旨

#### ■ 【09-3-025】 送小本禪師赴法雲

寓形天宇間、出处会有役。

澹然都無管、百年何由畢。

山林等憂患、軒冕亦戲劇。

我未即歸休、師寧便安逸。

王城滿豪傑、議論紛黑白。

聖諦第一義、対面誰不識。

師来亦何事、孤月掛空碧。

是身如浮雲、安可限南北。

出岫本無心、既雨歸亦得。

珠泉有旧約、何年挂瓶錫。

■ 【09-3-026】 南歌子

師唱誰家曲、  
宗風嗣阿誰。  
借君拍板与門槌、  
我也逢場作戲、  
莫相疑。

溪女方偷眼、  
山僧莫貶眉。  
卻愁弥勒下生遲、  
不見老婆三五、  
少年時。

■ 【09-3-027】 朱照僧

■ 【09-3-028】 鐘守素

■ 【09-3-029】 阿弥陀仏頌

■ 【09-3-030】 与某宣德書

■ 【09-3-031】 次韻曹子方菴山真覺院瑞香花

幽香結淺紫、来自孤雲岑。

骨香不自知、色浅意殊深。  
 移栽青蓮宇、遂冠薔蔔林。  
 紉為楚臣珮、散落天女襟。  
 君持風霜節、耳冷歌笑音。  
 一逢蘭蕙質、稍回鉄石心。  
 置酒要妍暖、養花須晏陰。  
 及此陰晴間、恐致慳嗇霖。  
 彩雲知易散、鸚鵡憂先吟。  
 明朝便陳跡、試著丹青臨。

■ 【09-3-032】 次韻劉景文西湖席上

二老長身屹兩峰、常撞大呂宍黃鐘。  
 將辭鄴下劉公幹、却見雲間陸士竜。  
 白髮憐君略相似、青山許我定相從。  
 我今官已六百石、慚愧当年邴曼容。

■ 【09-3-033】 次前韻答馬忠玉

坡陀巨麓起連峰、積累当年慶自鐘。  
 靈運子孫俱得鳳、慈明兄弟孰非竜。  
 河梁會作看雲別、詩社何妨載酒從。  
 祇有西湖似西子、故宍宛轉為君容。

■ 【09-3-034】 木蘭花令

知君仙骨無寒暑、  
千載相逢猶旦暮。  
故將別語惱佳人、  
欲看梨花枝上雨。

落花已逐回風去、  
花本無心鶯自訴。  
明朝歸路下塘西、  
不見鶯啼花落處。

■ 【09-3-035】 答水陸通長老

■ 【09-3-036】 与弁才禪師

■ 【09-3-037】 予去杭十六年而復來、留二年而去。平生自覺出處老少、麤似樂天、雖才名相遠、而安分寡求、亦庶幾焉。三月六日、來別南北山諸道人、而下天竺惠淨師以醜石贈行、作三絕句

其一

當年衫鬢兩青青、強說重臨慰別情。  
衰髮祇今無可白、故應相對話來生。

其二

出處依稀似樂天、敢將衰朽較前賢。

便從洛社休官去、猶有閑居二十年。

其三

在郡依前六百日、山中不記幾回来。

還將天竺一峰去、欲把雲根到处栽。

■ 【09-3-038】 参寥泉銘

■ 【09-3-039】 八声甘州